朝酌川河川改修工事に伴う

タテチョウ遺跡発掘調査報告書

－Ⅱ－

昭和62年3月

木部河川課
育委員会

朝酌川河川改修工事に伴う

タテチョウ遺跡発掘調査報告書

— II —

昭和62年3月

島根県土木部河川課
島根県教育委員会

はじめに

タテチョウ遺跡は松江市西川津町に所在する弥生時代遺跡として古くから知られた遺跡です。本遺跡は出雲地方の弥生文化を解明する上でたいへん貴重な遺跡ではありますが，傍らを流れる一級河川朝酌川の度重なる氾濫を防ぐため河川改修工事を実施することになりました。それに伴い島根県教育委員会は県土木部の依頼を受け昭和52年度から発掘調査を行なってきましたが，本書は昭和59年度，60年度の２ヶ年にわたる調査結果をとりまとめたものであります。

今回の調査では大量の土器とともに弥生時代の木製品がかなりの量出土したことが大きな成果でありました。御存知のように有機質の遺物は当遺跡のような低湿地に立地する遺跡でなければ残存していないため，従来島根県では木製品の発見は多くありませんでした。本遺跡の北1.5kmにある西川津遺跡でも近年の発掘で大量の木製品が出土しましたが，今後この２つの遺跡から出土した木製品その他を充分研究することによって出雲地方の弥生文化のありかたが一層具体的になることと考えます。

本書は多岐におよぶ出土遺物について充分検討できず，また不備な点も少なからずありますが，本書を通して島根県の埋蔵文化財を理解していただく上で一助となれば幸いです。

なお，発掘調査，本書の刊行にあたりましては各方面から多大なる御支援，御協力をいただきました。衷心よりお礼を申し上げます。

昭和62年３月

島根県教育委員会

教育長　栗　栖　理　知

例　　言

1．本書は，昭和59年度，60年度の２ヶ年にわたって島根県教育委員会が島根県土木部の委託を受けて実施した，朝酌(あさくみ)川の河川改修工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2．今回は島根県松江市西川津(にしかわつちょう)町大字橋本(はしもと)字竪町(たてちょう)1363-1番地ほかを発掘した。

3．昭和59年度の調査については計画変更に伴う体制の不備から，松江市立女子高校昌子寛光氏の協力を得た。

4．調査組織は次のとおりである。

調査指導　山本清（島根大学名誉教授）　町田章（奈良国立文化財研究所）　吉田恵二（国学院大学助教授）　田中義昭（島根大学教授）　渡辺貞幸（同助教授）　三浦清（同教授）　大西郁夫（同）　林正久（同助教授）　勝部正郊（島根県文化財保護審議会委員）　金子浩昌（早稲田大学講師）　敬称略　順不同

事務局　美多秀定　熊谷正弘（文化課長）　永瀬忠治　安達富治　蓮田法暲（文化課々長補佐）矢内高太郎（文化係長）永塚太郎（埋蔵文化財第１係長　吉川正（文化係主事）　山根徳久　落部章二（財務課主事）

調査員　石井悠（埋蔵文化財第２係長）　宮沢明久　川原和人（同文化財保護主事）　足立克己（同主事）　大国真二（同兼主事）　柳浦俊一　長嶺康典（島根県教育文化財団）　昌子寛光（松江市立女子高校教諭）

調査補助員　原俊二（国学院大学卒業生）　林健亮（別府大学々生）

遺物整理　佐々木ひとみ　柳浦純子　内部陽子　瀬田明子　鈴政泰子　青木紀子　堀江五十鈴　難波純子　松浦加代子　中島伸治

なお，上記のほかに次の方々から有益な指導，助言を受けた。記して感謝する。（敬称略順不同）

黒崎直（文化庁）　花谷浩（奈良国立文化財研究所）　山口譲二（福岡市埋蔵文化財センター）　中島直幸（唐津市教育委員会）　中原斎（鳥取県教育文化財団）　小原貴樹　杉谷愛象（米子市教育委員会）

5．挿図中の方位は国土調査法による第Ⅲ座標系Ｘ軸の方向を指す。したがって，磁北より7°12′，真北より0°32′東の方向を示す。

6. 出土遺物については挿図番号と図版中の番号とが一致するよう考慮した。縮尺は基本的に土器実測図が4分の1，木製品実測図が6分の1，石器実測図10分の7，土器写真3分の1，木製品写真4分の1，石器写真1分の1，獣骨2分の1としたが，大型品，小型品については任意とした。縮率は挿図，図版中に示す。

7. 掲載図面は大国，長嶺，原，中島，林，柳浦が作成し，瀬田，堀江，難波が浄書した。写真は長嶺，柳浦が撮影したが，獣骨・骨角器の写真は金子浩昌氏による。

8. 本書の執筆は担当者の集団討議をもとに第Ⅰ章～Ⅳ章，第Ⅴ章1，5，第Ⅸ章を柳浦，第Ⅴ章2を長嶺，同3を大国，柳浦，同4を柳浦，同6を原，柳浦が担当し，第Ⅵ章を金子浩昌氏，第Ⅶ章を大西郁夫・渡辺正巳氏，第Ⅷ章を林正久・三浦清氏にお願いした。

9. 巻末の英文要旨は松浦加代子による訳である。

10. 本書の編集は石井，川原の協力を得て柳浦が行なった。

本 文 目 次

Ⅰ. 調査に至る経緯 …… 1

Ⅱ. 遺跡の位置と歴史的環境 …… 2

Ⅲ. 調査の経過 …… 4

Ⅳ. 遺跡の概要 …… 7

Ⅴ. 出土遺物 …… 9

(1) 縄文土器 …… 9

(2) 弥生土器 …… 26

(3) 土師器 …… 96

(4) 石器 …… 131

(5) 土製品 …… 142

(6) 木製品 …… 144

Ⅵ. タテチョウ第2次調査出土動物遺存体(金子浩昌) …… 200

Ⅶ. タテチョウ遺跡(85)の花粉分析(大西郁夫・渡邊正巳) …… 219

Ⅷ. タテチョウ遺跡のテフラと遺物包含層の年代(三浦清，林正久) …… 224

Ⅸ. 総括 …… 231

English Summary …… 235

挿 図 目 次

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 2・3
第２図　調査区配置図 …… 4・5
第３図　調査区全体図 …… 5
第４図　タテチョウ遺跡土層図 …… 6・7
第５図　縄文土器実測図(1) …… 10
第６図　縄文土器実測図(2) …… 11
第７図　縄文土器実測図(3) …… 13
第８図　縄文土器実測図(4) …… 14
第９図　縄文土器実測図(5) …… 15
第10図　縄文土器実測図(6) …… 16
第11図　縄文土器実測図(7) …… 17
第12図　弥生土器実測図(1) …… 30
第13図　弥生土器実測図(2) …… 31
第14図　弥生土器実測図(3) …… 32
第15図　弥生土器実測図(4) …… 33
第16図　弥生土器実測図(5) …… 34
第17図　弥生土器実測図(6) …… 35
第18図　弥生土器実測図(7) …… 36
第19図　弥生土器実測図(8) …… 37
第20図　弥生土器実測図(9) …… 38
第21図　弥生土器実測図(10) …… 39
第22図　弥生土器実測図(11) …… 46
第23図　弥生土器実測図(12) …… 47
第24図　弥生土器実測図(13) …… 48
第25図　弥生土器実測図(14) …… 49
第26図　弥生土器実測図(15) …… 50
第27図　弥生土器実測図(16) …… 51
第28図　弥生土器実測図(17) …… 52
第29図　弥生土器実測図(18) …… 53
第30図　弥生土器実測図(19) …… 54
第31図　弥生土器実測図(20) …… 55

第32図　弥生土器実測図(21) …… 56
第33図　弥生土器実測図(22) …… 59
第34図　弥生土器実測図(23) …… 60
第35図　弥生土器実測図(24) …… 61
第36図　土師器実測図(1) …… 97
第37図　土師器実測図(2) …… 98
第38図　土師器実測図(3) …… 100
第39図　土師器実測図(4) …… 101
第40図　土師器実測図(5) …… 104
第41図　土師器実測図(6) …… 106
第42図　土師器実測図(7) …… 107
第43図　土師器実測図(8) …… 110
第44図　土師器実測図(9) …… 111
第45図　土師器甕分類模式図 …… 113
第46図　石器実測図(1) …… 134
第47図　石器実測図(2) …… 135
第48図　石器実測図(3) …… 136
第49図　石器実測図(4) …… 137
第50図　石器実測図(5) …… 138
第51図　石器実測図(6) …… 139
第52図　土製品実測図 …… 143
第53図　木製品実測図(1) …… 149
第54図　木製品実測図(2) …… 150
第55図　木製品実測図(3) …… 151
第56図　木製品実測図(4) …… 152
第57図　木製品実測図(5) …… 153
第58図　木製品実測図(6) …… 154
第59図　木製品実測図(7) …… 155
第60図　木製品実測図(8) …… 156
第61図　木製品実測図(9) …… 157
第62図　木製品実測図(10) …… 158
第63図　木製品実測図(11) …… 159
第64図　木製品実測図(12) …… 160
第65図　木製品実測図(13) …… 161

第66図　木製品実測図(14) …… 162
第67図　木製品実測図(15) …… 163
第68図　木製品実測図(16) …… 164
第69図　木製品実測図(17) …… 169
第70図　木製品実測図(18) …… 170
第71図　木製品実測図(19) …… 171
第72図　木製品実測図(20) …… 172
第73図　木製品実測図(21) …… 173
第74図　木製品実測図(22) …… 174
第75図　木製品実測図(23) …… 175
第76図　木製品実測図(24) …… 176
第77図　木製品実測図(25) …… 177
第78図　木製品実測図(26) …… 178
第79図　木製品実測図(27) …… 179
第80図　木製品実測図(28) …… 180
Ⅵタテチョウ遺跡第２次調査出土動物遺存体
脳髄を摘出するために頭頂部に穿孔されたシカ♀の頭骨 …… 207
骨角加工品 …… 211
Ⅶタテチョウ遺跡(85)の花粉分析
タテチョウ遺跡の地点図 …… 219
タテチョウ遺跡(85)の花粉ダイアグラム …… 220・221
タテチョウ遺跡の地層と花粉帯の対比 …… 222
Ⅷタテチョウ遺跡のテフラと遺物包含層の年代
タテチョウ遺跡の柱状図と試料のガラス含有量 …… 224
タテチョウ遺跡泥層中の火山ガラスの化学成分変化 …… 225
タテチョウ遺跡泥層中の火山ガラスの化学成分変化 …… 225
タテチョウ遺跡泥層中の火山ガラスの化学成分変化 …… 226
タテチョウ遺跡泥層中の火山ガラスの化学成分変化 …… 226
山陰周辺でみられる姶良Tn火山灰(AT)の火山ガラスの化学成分変化 …… 227
山陰周辺でみられる姶良Tn火山灰(AT)の火山ガラスの化学成分変化 …… 227
山陰周辺でみられるアカホヤ火山灰(Ah)の火山ガラスの化学成分変化 …… 228
山陰周辺でみられるアカホヤ火山灰(Ah)の火山ガラスの化学成分変化 …… 228
遺物含有層とテフラの関係 …… 229

図 版 目 次

図版１－１　遺跡遠景(北から)
図版１－２　遺跡近景(南から)
図版２－１　第10層発掘後の状況(南から)
図版２－２　完掘後の状況(南から)
図版３－１　土層堆積状況(第１～第９層)
図版３－２　土層堆積状況(第10～12層)
図版４－１　第10層流木群検出状況
図版４－２　弥生土器出土状況(第10層)
図版５－１　土師器出土状況(第10層)
図版５－２　木製品出土状況(第12層)
図版６－１　獣骨出土状況(イノシシ，第11層)
図版６－２　発掘調査風景
図版７－１　縄文土器
図版７－２　縄文土器
図版８－１　縄文土器
図版８－２　縄文土器
図版９－１　縄文土器
図版９－２　縄文土器
図版10－１　弥生土器
図版10－２　弥生土器
図版11－１　弥生土器
図版11－２　弥生土器
図版12　弥生土器
図版13－１　弥生土器
図版13－２　弥生土器
図版14－１　弥生土器
図版14－２　弥生土器
図版15－１　弥生土器
図版15－２　弥生土器
図版16－１　弥生土器
図版16－２　弥生土器
図版17　弥生土器
図版18　弥生土器
図版19　弥生土器
図版20－１　弥生土器
図版20－２　弥生土器
図版21　弥生土器
図版22　弥生土器
図版23　弥生土器
図版24　弥生土器
図版25－１　弥生土器
図版25－２　弥生土器
図版26　弥生土器
図版27－１　弥生土器
図版27－２　弥生土器
図版28－１　弥生土器
図版28－２　弥生土器
図版29－１　弥生土器
図版29－２　弥生土器
図版30－１　弥生土器
図版30－２　弥生土器
図版31　弥生土器
図版32－１　弥生土器
図版32－２　弥生土器
図版33－１　弥生土器
図版33－２　弥生土器
図版34－１　土師器
図版34－２　土師器
図版35－１　土師器
図版35－２　土師器
図版36－１　土師器
図版36－２　土師器
図版37－１　土師器
図版37－２　土師器

図版38　土師器
図版39　土師器
図版40　土師器
図版41　土師器
図版42　土師器
図版43－1　石鏃
図版43－2　石器
図版44－1　管玉・包庁状石器・有孔円板
図版44－2　楔形石器
図版45－1　剝片，石核
図版45－2　板状，石製品
図版46－1　石器，土製品
図版46－2　土錘
図版47　広鍬
図版48　広鍬
図版49　広鍬
図版50　広鍬
図版51　広鍬成品細部
図版52　広鍬未成品
図版53　広鍬未成品
図版54　広鍬未成品
図版55－1　広鍬未成品
図版55－2　広鍬未成品細部
図版56　丸鍬
図版57　丸鍬未成品
図版58　丸鍬未成品
図版59　丸鍬未成品および隆起部加工痕
図版60　諸手鍬，又鍬，鋤
図版61　諸手鍬，えぶり状木製品
図版62－1　鍬
図版62－2　鋤
図版63　鋤，横槌細部
図版64－1　鋤
図版64－2　横槌
図版65　槽
図版66　杓子，木製品
図版67－1　鉤状木製品及び上端細部
図版67－2　木製容器，スプーン状木製品及び継手細部
図版68　木製品
図版69　木製品
図版70　棒状木製品，同上端細部
図版71－1　棒状木製品上部加工痕
図版71－2　板状木製品
図版72－1　木製品
図版72－2　木製品
図版73　木製品
図版74　木製品
図版75　木製品
図版76　木製品
図版77－1　魚・鳥獣類
図版77－2　獣骨
図版78－1　イヌ頭骨
図版79－1　イヌ四肢骨(1)
図版79－1　イヌ四肢骨(2)
図版80　イノシシ
図版81　イノシシ
図版82　イノシシ
図版83－1　イノシシ
図版83－2　イノシシ
図版84　ニホンジカ
図版85　ニホンジカ
図版86　ニホンジカ
図版87－1　ニホンジカ
図版87－2　ニホンジカ
図版88－1　ヒト
図版88－2　骨角製品

I．調査に至る経緯

タテチョウ遺跡は，松江市の東北方から宍道湖に流れる朝酌川沿いにあり，昭和９年に朝酌川で行なわれた堰と水門を造る工事の際，多くの土器が出土したことによりその存在が確認された。その後，昭和24年に至って山本清氏によって一部試掘が行なわれ，本遺跡が弥生時代を中心として古墳時代にも及ぶ複合遺跡であることが判明した。当時，山陰地方では類例の少なかった前期弥生土器が出土したことで特に注目された。

ところが，朝酌川の氾濫を防ぐため，昭和47年度から河積拡大の河川改修計画が企画された。島根県教育委員会では昭和49年に県土木部の依頼を受け11月５日から16日にかけて工事予定地内における遺跡の範囲を確認するため予備調査を行なった。その結果，遺跡の広がりは少なくとも南北300mに及んでいることが確認された。

一方，松江市教育委員会は市立案の松江圏都市計画の予定地内に当るタテチョウ遺跡の西側部分について昭和49年11月11日から30日まで試掘調査を行ない，12月３日から昭和50年２月28日まで発掘調査を行なった。

昭和52年に至って県教委と県土木部は河川改修工事予定地内に存在する本遺跡の取扱いについて協議を重ね，上記の試掘結果に基いて400㎡の調査区を４箇所，計1,600㎡について事前に発掘調査を実施することになった。調査は同年10月から53年３月にかけて行なわれた。この調査では弥生土器を中心に縄文時代から中世に至るまでの多量の遺物，自然遺物が出土した。県下では低湿地における本格的な調査はこれが初めてであり，低湿地遺跡の内容を知らしめた遺跡として注目された。

その後，発掘調査は休止していたが，昭和58年７月に県土木部が河川改修工事予定地の取得を完了したため県教委と県土木部は再度協議を行ない，前回調査の第Ｉ調査区の南に隣接する部分を取り急ぎ調査することになった。折りしも松江市立第二中学校の移転および「松江圏都市計画事業北部土地区画整理事業」に伴い，調査区付近に橋梁架設計画が決定した。松江市立第二中学校の移転を昭和61年４月までに完了しそれまでに通学路を整備してほしいという地元住民の陳情もあり，県土木部から早急に調査するよう依頼があった。両者の協議の結果，昭和59年度と昭和60年度の２箇年にわたって調査を実施することとなった。発掘調査は，昭和59年度は昭和59年４月25日から同年12月17日までの約８ケ月，昭和60年度は昭和60年４月19日から６月８日までの約２ケ月，計約１年を要した。なお，今回の調査区と北に接した橋梁架設部分については松江市の事業であるため松江市教育委員会が同年５月28日から８月31日にかけて発掘調査を行なった。そのため，同一遺跡でありながら２つの調査主体が同時に発掘調査を行なうという変則的な調査となった。

今回の発掘調査で出土した遺物は土器を中心に木製品，石器などが多数出土し，これらの整理および発掘調査の整理は昭和60年７月から昭和62年３月までの約２年を費した。

Ⅱ．遺跡の位置と歴史的環境

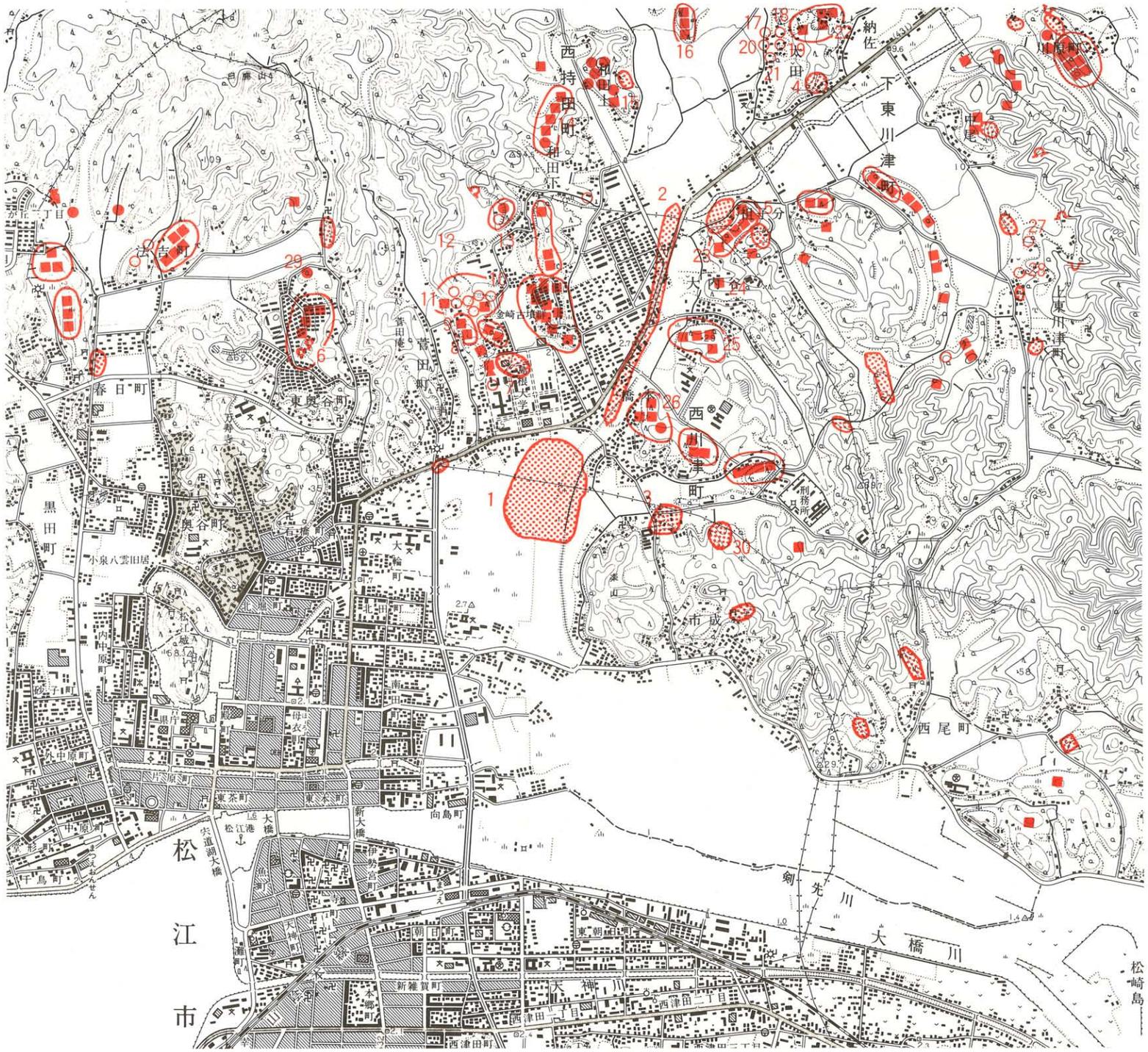
タテチョウ遺跡は，松江市西川津町大字橋本字竪町（たてちょう）ほかに所在する。ここは松江市街地東端にあたり，東に和久羅山，北に澄水山，大平山，御嶽山，真山などを臨む位置にある。遺跡は澄水山麓に源を発する朝酌川沿いの沖積地に立地し，正確な範囲は確認されていないが南北約300m程の拡がりを持つと考えられる。

この付近は古墳を中心として多くの遺跡が存在するが，現在のところ旧石器時代の遺跡はまだ発見されていない。縄文時代の遺跡としては，西川津遺跡，金崎遺跡などが知られている。西川津遺跡はタテチョウ遺跡の北約1.5㎞に位置し，昭和55年度から４ケ年にわたって発掘調査が行なわれ，縄文土器，弥生土器，木製品，石器などが多量に出土した。縄文時代の遺物としては前期および晩期の土器などが多く出土したが，少数ながら早期末の繊維土器などが存在するのが注目される。タテチョウ遺跡でもわずかながら繊維土器が出土しており，当地域では少なくとも縄文時代早期末には人々が生活を営んでいたことがわかる。両遺跡とも縄文時代前期後半から中期にかけての土器はほとんど出土しておらず，後期から晩期にかけて次第に土器の量が多くなるようである。

弥生時代の遺跡としては，西川津遺跡，貝崎遺跡，橋本遺跡などがある。いずれも朝酌川沿いの水田や丘陵裾部に立地する遺跡である。このうち発掘調査が行なわれた西川津遺跡では前期から中期にかけての弥生土器，木製品，石器，骨角器など豊富な遺物が出土し，当地方の弥生文化を知る上で貴重な遺跡である。ただ本遺跡との関連については不明な点が多く，今後の調査が期待される。

古墳時代の遺跡としては，国指定史跡金崎古墳などを初め，丘陵上には多くの古墳が築かれている。典型的な前期古墳は今のところ確認されていないが，下東川津町道仙古墳群が比較的古い様相の古墳とされている。

中期になると丘陵上にかなりの数の古墳が築造される。これらは一辺20m未満の方墳がほとんどで，比較的大規模なものとしては大源１号墳（円墳径約37m），宮垣古墳群（円墳径30m），金崎古墳群，薬師山古墳，菅田丘古墳（前方後方墳　長さ約30m）などが知られる。また，これらは中期でもやや新しい様相の古墳が多く，前半期に遡る古墳は山崎古墳（方墳　一辺19m）などが知られる程度でほとんどは須恵器出現期頃の古墳とされる。このうち最も著名な古墳は金崎１号墳である。この古墳は全長35mの前方後方墳で，幅広の竪穴式石室を内蔵し，副葬品も豊富で滑石製異形子持勾玉，碧玉製勾玉，同棗玉，同管玉，ガラス玉，滑石製小玉などの玉類，仿製内行花文鏡，金



1．タテチョウ遺跡
2．西川津遺跡
3．橋本遺跡
4．納佐遺跡
5．貝崎遺跡
6．ひのさん山古墳群
7．薬師山古墳
8．菅田丘古墳
9．小丸山古墳
10．宮田古墳群
11．浜弓古墳
12．土浜弓古墳
13．金崎古墳群
14．宮垣古墳群
15．太源古墳
16．小丸山古墳群
17．佐々木浅市宅古墳
18．佐々木亮畑中古墳
19．野津真宅前古墳
20．加美古墳
21．加佐奈子古墳
22．道仙古墳群
23．貝崎古墳群
24．古屋敷古墳
25．空山古墳群
26．馬込山古墳群
27．葉佐馬古墳
28．西宗寺古墳
29．岡田薬師山古墳
30．堤廻遺跡

（1：25,000）

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡

環，直刀，須恵器などの優品が出土している。

後期古墳では東持田町佐々木亮宅畑中古墳，同野津真宅前古墳，同加佐奈子古墳，同佐々木浅市宅裏古墳，同加美古墳，上東川津町西宗寺古墳などいわゆる石棺式石室を持つ古墳が築かれる。持田・川津地区では以上のような石棺式石室が集中している地域であるが，整正のものはほとんどなく，石棺式石室亜流とされるものが多い。このほか坂本町薄井原古墳は片袖横穴式石室を内蔵する全長50mの前方後方墳で，この地方の後期古墳としては最大級の古墳として注目される。また，小規模ではあるが東奥谷町岡田薬師山古墳（方墳　一辺約12m），垣の内古墳も横穴式石室を内蔵している。岡田薬師山古墳の横穴式石室は中国山地山間部に多いとされる無袖式の石室で，平野部ではほかに同様な石室は確認されていない。

出雲地方は古墳時代後期には横穴墓が多く作られるという特色がみられるが，本遺跡周辺では横穴墓は，穴の口横穴墓群，鍛治屋谷横穴墓群などが知られる程度である。この付近は横穴墓より横穴式石室が盛行した地域であろうか。

このほか古墳時代の集落遺跡としては西川津町堤廻遺跡，同柴遺跡がある。いずれも丘陵斜面に丘地する集落跡で，堤廻遺跡は18棟，柴遺跡は２棟の竪穴住居跡が確認されている。

律令時代の遺跡は，須恵器などが散布する遺跡は多いもののそのほとんどは実態が不明で，瓦などが出土した坂本町坊床廃寺は性格のわかる数少ない遺跡の一つである。天平５年に勘造された『出雲国風土記』によると，本遺跡の周辺は「島根郡山口郷」に比定され，ここは島根郡家から秋鹿郡家に至る道すじに当っていたようである。前回のタテチョウ遺跡の発掘調査では第Ⅲ調査区から「驛」の墨書須恵器を始め奈良～平安時代にかけての須恵器，土師器がまとまって出土していることが注目される。

タテチョウ遺跡は概ね以上のような歴史的環境を持つ川津，持田平野の一角に営まれている。

◆ 参考文献

島根県教育委員会『タテチョウ遺跡発掘調査報告書』Ⅰ　1979
島根県教育委員会『西川津遺跡発掘調査報告書』Ⅰ　1980
松江市教育委員会『山崎古墳』　1984
松江市教育委員会『柴古墳群』　1985
山本　清　　『山陰古墳文化の研究』　1971
加藤義成　　『校注出雲国風土記』　1965

Ⅲ．調査の経過

今回は，昭和52年の発掘調査時に第Ⅰ調査区と呼ばれた部分の南に隣接した地点について発掘調査を行なった。

調査に当っては東西の座標軸χ＝－57.645と，南北の座標軸y＝82.170の交点を基準点とし，これらを基準として調査区全域に一辺10mの方眼を組みグリットの単位とした。また上述の東西座標軸をＮ０とし，北に向かってＮ１，Ｎ２……Ｎ９，N10，南北座標軸をＥ０とし東に向かってＥ１，Ｅ２，……Ｅ６，Ｅ７と呼び，各方眼の東北の交点をグリット名とした（第３図）。

調査は前回の調査を参考にし，遺物包含層に至るまでの約１ｍ（第１層～第８層）を重機で掘削し，それ以下の層を手掘りすることにした。重機掘削は昭和59年５月14日から土層を観察しながら行ない，それが完了した６月７日から人力により精査，発掘を開始した。

重機掘削後の観察によると，前回の調査で包含層とされた暗灰色砂礫層（第８層－今回の調査では第９層と呼ぶ）が調査区北西のＮ９Ｅ３区付近に限られることがわかった。この層からは前回の調査同様土器細片が多く縄文時代から古墳時代の遺物が混在していた。

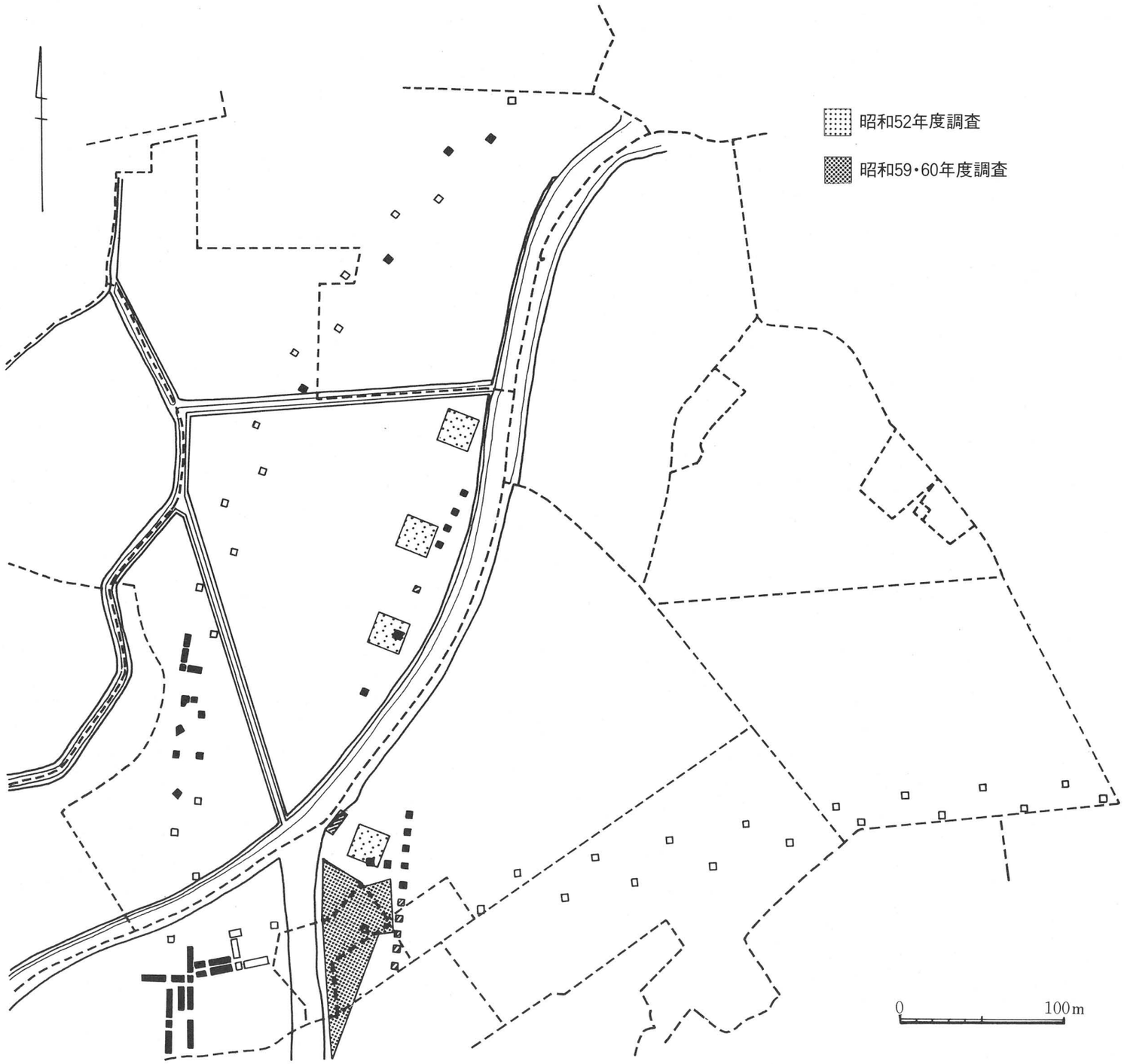
第９層の下層は青灰色細砂層（第10層－前回では９層）が調査区のほぼ全面に堆積していた。この層には完形品が多く包含されており，木製品の残存状態の良好のものも多かった。第10層除去後でも遺構は検出できなかったため，遺物は一応出土状態を記録した上で取り上げた。

第10層除去後８月31日から前回の調査では無遺物層とされた青灰色粘質土層（第11層），青灰色細砂層（第12層）の調査を行なった。当初はこれらの層は無遺物層と考えていたが，弥生土器完形品，木製品など量はやや少ないものの残存状態の良好な遺物を包含することが判明した。この層でも遺構は検出できず，これらの遺物は遺構に伴うものではないと判断した。そのため遺物は層を確認した上でとり上げた。

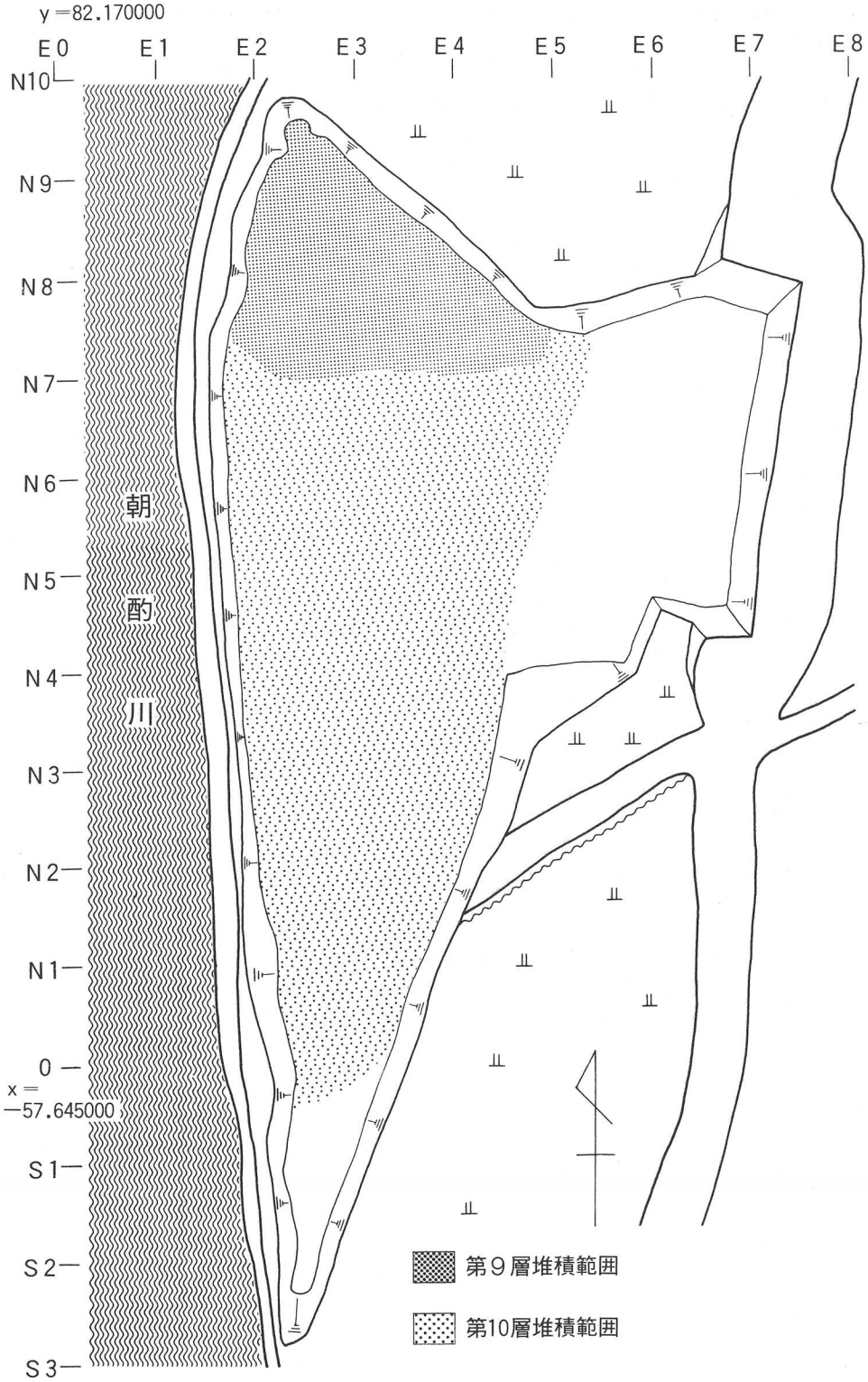
第12層は標高－1.3mの深さにあり，湧水も多く調査は難渋したが，木製農耕具，弥生土器，土師器の完形品など，従来県内ではあまり出土していなかった資料を比較的良好な状態で得られたことは成果であった。昭和59年12月17日，以下の層に遺物が含まれないことを確認し昭和59年度の調査を終了した。

昭和60年度は昭和59年度調査区の南に接した地点の調査を行なった。調査の方法は昭和59年度と同じ方法を取り，北から順に第10層～12層の調査を行なった。この調査区ではいずれの層からもほとんど遺物は出土せず，遺跡の南限に近いことが予想された。

昭和60年度は調査区が約370m²と狭い上，遺物の出土が少なかったことから，調査期間は４月19日

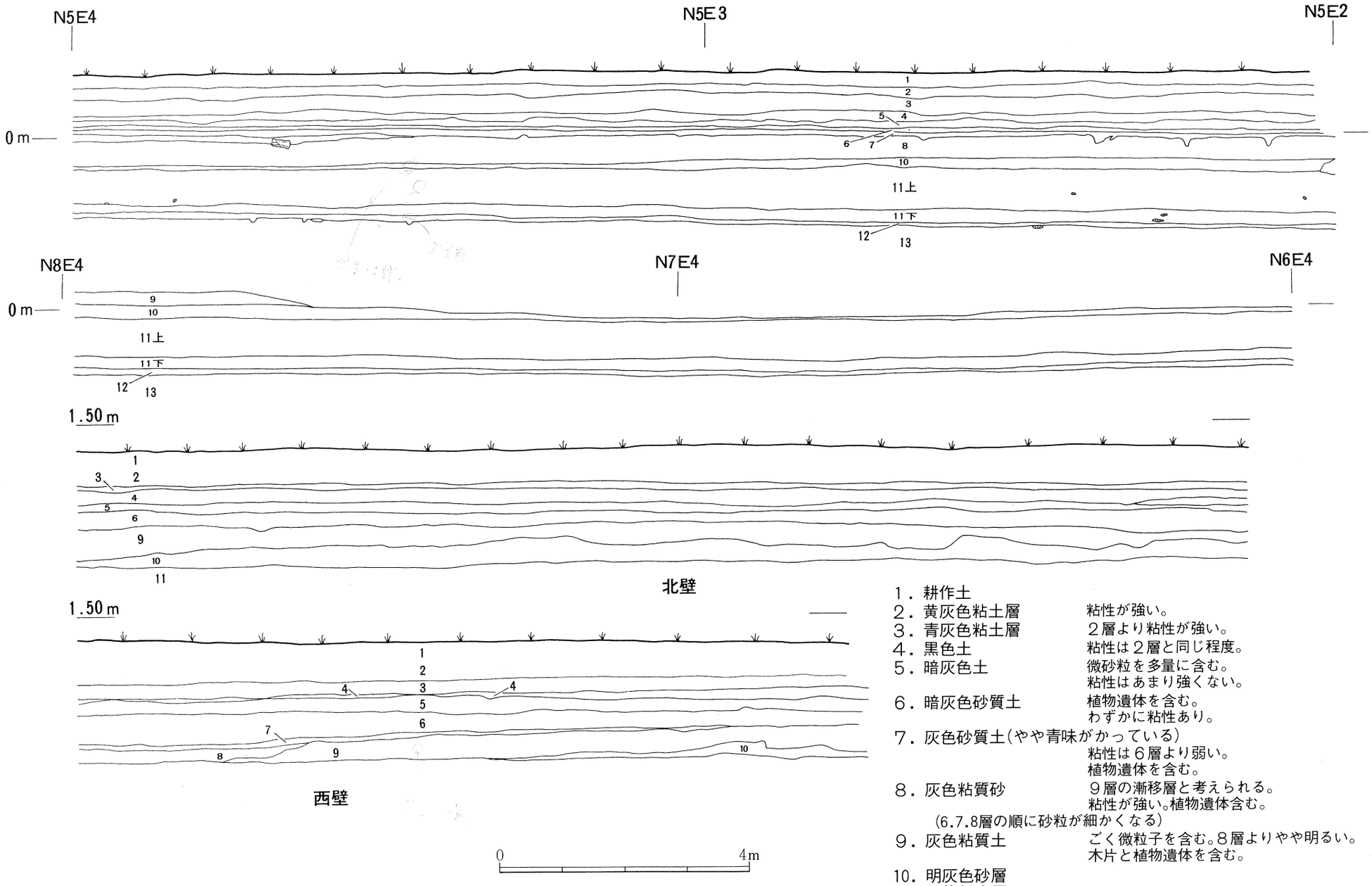


第2図 調 査 区 配 置 図


y＝82.170000
E0
E1
E2
E3
E4
E5
E6
E7
E8
N10
N9
N8
N7
N6
N5
N4
N3
N2
N1
0
x＝
−57.645000
S1
S2
S3
朝
酌
川
第９層堆積範囲
第10層堆積範囲

第３図　調査区全体図

～6月8日と短期間で終了した。出土した遺物については，調査後昭和60年，61年度の約1年6ケ月間をかけ島根県教育庁文化課分室において整理作業を行なった。なお，出土した獣骨，骨角器については金子浩昌氏に，花粉分析については大西郁夫氏に，地形復元については林正久，三浦清氏に依頼した。



1．耕作土
2．黄灰色粘土層　粘性が強い。
3．青灰色粘土層　２層より粘性が強い。
4．黒色土　粘性は２層と同じ程度。
5．暗灰色土　微砂粒を多量に含む。粘性はあまり強くない。
6．暗灰色砂質土　植物遺体を含む。わずかに粘性あり。
7．灰色砂質土(やや青味がかっている)　粘性は６層より弱い。植物遺体を含む。
8．灰色粘質砂　９層の漸移層と考えられる。粘性が強い。植物遺体含む。
(6.7.8層の順に砂粒が細かくなる)
9．灰色粘質土　ごく微粒子を含む。８層よりやや明るい。木片と植物遺体を含む。
10．明灰色砂層
遺物包含層
11．(上層)青灰色粘土
11．(下層)青灰色粘土　やや茶色味。貝殻混る。
12．青灰色細砂
13．灰茶色粘土　貝殻多く混る。

第４図　土　　層　　図

Ⅳ. 遺跡の概要

今回の調査は昭和52年度第Ⅰ調査区の南側に隣接する地点で行なった。ここは蛇行している朝酌川の水量を調節するために取り付けられた運河との分岐点東側に当っている。この付近は現在水田となっており地表面の標高は約１ｍの低地である。

今回の調査で確認された遺物包含層は明灰色砂層（８層），暗褐色砂礫層（９層），白灰色細砂層（10層），灰色粘質土（11層上層），灰色粘質土－ヤマトシジミの死貝を含む（11層下層），青灰色砂層（12層）の６層で，９層上面の標高０ｍ前後，12層下面での標高は－1.3mであった（第４図，図版３）。８層より上層の１～７層（厚さ約1.5m）には遺物は包含されていなかった。また８層では遺物の出土は少なく，遺物のほとんどは９層から12層に包含されていた。今回の調査でも遺構は確認できず，出土遺物は横転したり倒立した状態で出土したものもかなりあり，原位置を保っていると考えられるものは認められなかった。また各層とも調査区の北部に遺物が多く南部では少ないという傾向がみられた。

もっとも多く遺物が出土したのは第９層であった。この層は昭和52年度の調査で第８層とした層で，小礫と粗い砂の混合層で黄褐色を呈している。この層から出土した遺物は弥生土器が中心で，縄文土器，土師器，石器，獣骨，木製品などと混在した状態で出土した。これらの遺物はいずれも細片で全面摩滅しており，朝酌川によって上流から流入，再堆積したものと考えられる。第９層は今回の調査では調査区の北部Ｎ９Ｅ３，Ｎ８Ｅ３，Ｎ８Ｅ４グリットのみで確認され，調査区東部および南部では確認されなかった（第３図）。なおＮ９Ｅ３，Ｎ９Ｅ４付近で自然木や木製品が５箇所に集中していた。これも河川によって流されてきたもののように窺われた（図版４）。

第10層は青灰色細砂層で，厚さ約10cmの薄く堆積した層である。昭和52年度の調査で９層とした層である。この層も縄文土器，弥生土器，土師器，木製品，獣骨などが混在して出土したが，石器はほとんど出土していない。この層から出土した土器は小片のものもあるが，完形またはそれに近いものも多い。また，土師器の出土が多く，弥生土器の多い第９層とは様相が異る。この層は比較的広い範囲に堆積していたが，東および南に向うに従って次第に薄くなり，東はＮ６ライン付近では全く認められなかった（第３図）。

第11層は灰色粘質土で約70cmの厚さで堆積していた。昭和52年度の調査で10層とした層である。下部ではヤマトシジミの死貝が含まれているため，一応上部の死貝を含まない層を11層上層，死貝を含む層を11層下層とした。11層上層は約60cm堆積し縄文土器，弥生土器，木製品，獣骨などが出土しており，土師器片もわずかながら出土している。全体に出土量は少なく，図示できた土器は13

点にすぎない。11層下層は約10㎝堆積し縄文土器，弥生土器，木製品，獣骨が出土し１点ながら布目瓦片が出土している。弥生土器はすべて前期・中期のもので後期の土器は出土していない。

11層から出土した土器，木製品は摩滅しているものの完形またはそれに近いものが多い。これらは，出土状態に一定の方向性は窺えないが，この層から出土した土器の大多数は出土時の状態で地表に近い面（第10層側の面）が摩滅し，その反対側の面（第12層側の面）はほとんど摩滅がみられない，という特徴が窺える。11層は上層，下層とも調査区全域にみられ，ほぼ水平に堆積している。

第12層は厚さ約10㎝の薄く堆積した青灰色砂層で，第10層とよく似た層である。遺物の出土量はやや少ないが，縄文土器，弥生土器，獣骨，木製品などが出土している。弥生土器は前期のものが多く，中期の土器は少ない。この層も調査区全域にみられ，ほぼ水平に堆積している。

以上の第９～12層は，第９，10層の堆積範囲が限られるものの，いずれも水平に堆積しており，層序に乱れは認められなかった。このことから第９～12層は弥生時代から古墳時代にかけて順に自然堆積したものと思われる。各層に包含された土器も第12層では弥生時代前期の土器が多く，上層の９・10層では古墳時代中頃の土師器が多く出土するという傾向があり，各層の堆積年代が窺える。ただ，11層下層から布目瓦片が１点出土しており，この層が奈良時代以降に堆積した可能性も考えられる。しかし上述の層位の状態や各層の土器包含状態の傾向をみると，第９～12層は弥生時代から古墳時代にかけて堆積した乱れのない層である，という感は払拭できない。

調査の結果，今回の調査区では遺構は認められず，出土した遺物は再堆積のものである可能性が強いと思われた。今回の調査区は昭和52年度調査の第１調査区とよく似た状態であったが，前回の調査で無遺物層とされた第10層以下（今回調査では第11層，12層）にも遺物が包含されていることがわかった。遺物の平面的な分布をみると調査区北部からの出土が多く南部では遺物は少なくなるという傾向がみられる。このことから今回の調査区は遺跡の南限に近い位置ではないかと想像される。また，第10～12層から出土土器のうち完形に近い土器も多いことから遠隔地からの流入とは考えられず，本調査区の北側のさほど遠くない地点に集落跡が存在することが予想される。今回得られた遺物はその集落跡から流入再堆積したものではなかろうか。

V. 出 土 遺 物

1. 縄 文 土 器（第5図～第11図　図版7～9）

縄文土器は約200点出土し，そのうち図示したのは117点である。ほとんどが9層からの出土で弥生土器，土師器などと混在していた。これらはすべて破片で，全形を窺えるものはわずかである。今回出土した縄文土器は早期，早期末～前期初頭，後期，晩期の時期であるが，早期末～前期初頭と晩期のものが最も多い。

早・前期（第5～6図・第7図1～9　図版7，8）

繊維土器（第5図1～7，9　図版7）　繊維を含むやや厚手の土器である。繊維土器は表裏とも縄文が施されるもの（3，5），表面に縄文，裏面にナデが施されるもの（6，7），表裏とも条痕が施されるもの（4），表裏ともナデが施されるもの（1，2）がある。文様が施されていないものがほとんどだが，1の口縁部直下には二枚貝の刺突文が施されている。9は表面は縄文，内面は条痕およびナデが施されている。

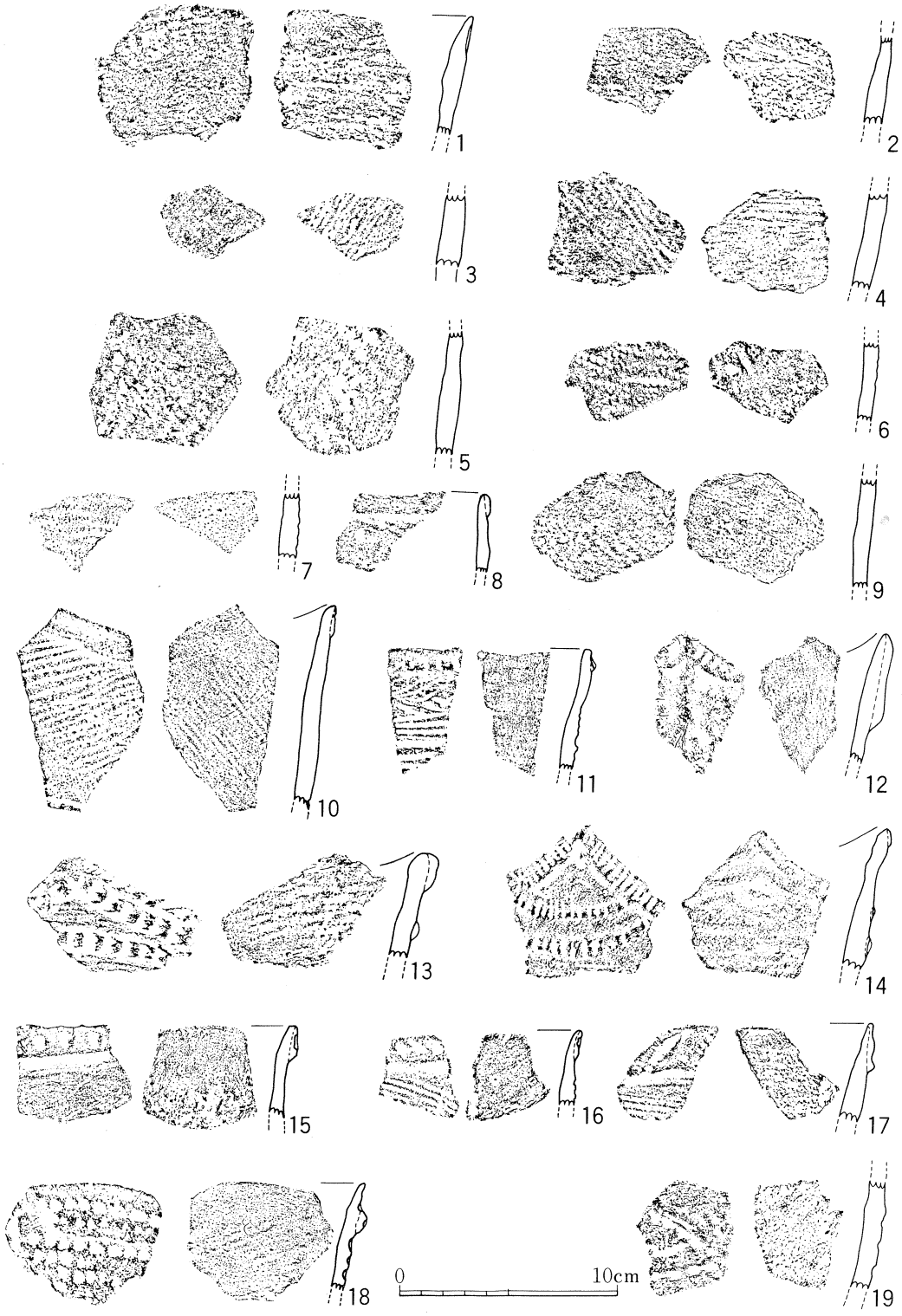
隆帯文・刺突文土器（第5図8・10～19・第6図1～15　図版7）　有文のものと無文のものとがある。これらは条痕地のものがほとんどで，ナデ調整を施したものもある。早期の土器に比べると薄手のものが多く，焼成も良好なものが多い。文様が施されるものは24点出土している。大きく条痕文または沈線文の土器，隆帯文と刺突文を組み合わせた土器，刺突文または押引き文の土器の3類に分類できる。

第5図10は条痕文土器，11は沈線文土器である。ともに直口気味で口縁端部に隆帯を貼り付けた波状口縁である。10は斜方向に条痕文が施され，11は隆帯に刻目文，隆帯下に斜格子状沈線文，さらにその下に平行沈線文が施されている。内面の調整はともに条痕調整である。

第5図12～19は主に口縁端部または直下に隆帯を貼り付け，その上にさらに刺突文を施すものである。12～14は波状口縁で，隆帯は口縁端部のほかに12が縦方向に，13，14が横方向に貼り付けられている。15～18は平口縁で，隆帯は15～17が口縁端部に，18が口縁端部よりやや下に貼り付けられている。また19は胴部小片で隆帯は逆「く」の字形に貼り付けられ押引き状の刺突文が施されている。これらは隆帯上のみに刺突文が施されるものがほとんどだが，18には隆帯以外にも施されている。

調整はナデ，条痕が基本であるが，13の内面には縄文が施されている。

第6図1～15は隆帯を持たず刺突文のみ施されるものである。刺突文が間隔を空けずに数列にわ



第５図　縄文土器実測図(1)１：３

第6図　縄文土器実測図(2)1：3

たって施されるもの（1，3，4，6～8，11）と，刺突文が1段のみか間隔を空けて2列程度に施されるもの（2，5，9，10，12～15）がある。口縁端部に刻目文が施されるものもある（2，5）。施文は二枚貝腹縁を使用するものもある（2）。前者はナデ調整のものが多く，後者は二枚貝条痕調整のものが多いようである。口縁部の形態は内湾気味のもの（1，3など）と外反するもの（2，4）などがある。2は比較的全形を窺うことができるもので，口縁部は外反し胴部は膨む形態を呈している。

条痕土器（第6図16～21・第7図1～9　図版7，8）　有文土器の無文部分の可能性も強い。表裏とも二枚貝条痕のもの（第6図16，19～21），表面二枚貝条痕で内面にナデ調整を加えるもの（第6図14・第7図1，2，8），表面ナデ調整で内面二枚貝条痕のもの（第6図18・第7図4，9）などがあるが，ナデ調整を加えるものでもわずかに条痕が観察されるものが多い。第6図14，17・第7図1，2，6などは条痕とナデ調整を併用している。

後　　期（第7図10～15　図版8）　出土数は少なく，図示したものは6点である。12，13が精製である以外は粗製である。10，11は浅鉢口縁部で，ともに内湾気味である。10はやや厚手で内面に低い隆帯を貼り付けたもので，隆帯部分には指頭による押圧痕がみられる。11は10より器壁が薄く，口縁端部内面には一条の沈線文が施されている。11の外面には条痕が観察される。

12，13は深鉢で，ともに沈線文が施されている。12は頸部の屈曲部で，平行沈線文の間に縦方向に弧状の沈線文が施されている。13は内湾する口縁部で，口縁端部近くに3条，やや間を空けて2条の平行沈線文が施されている。12の内面はミガキ調整が施されている。

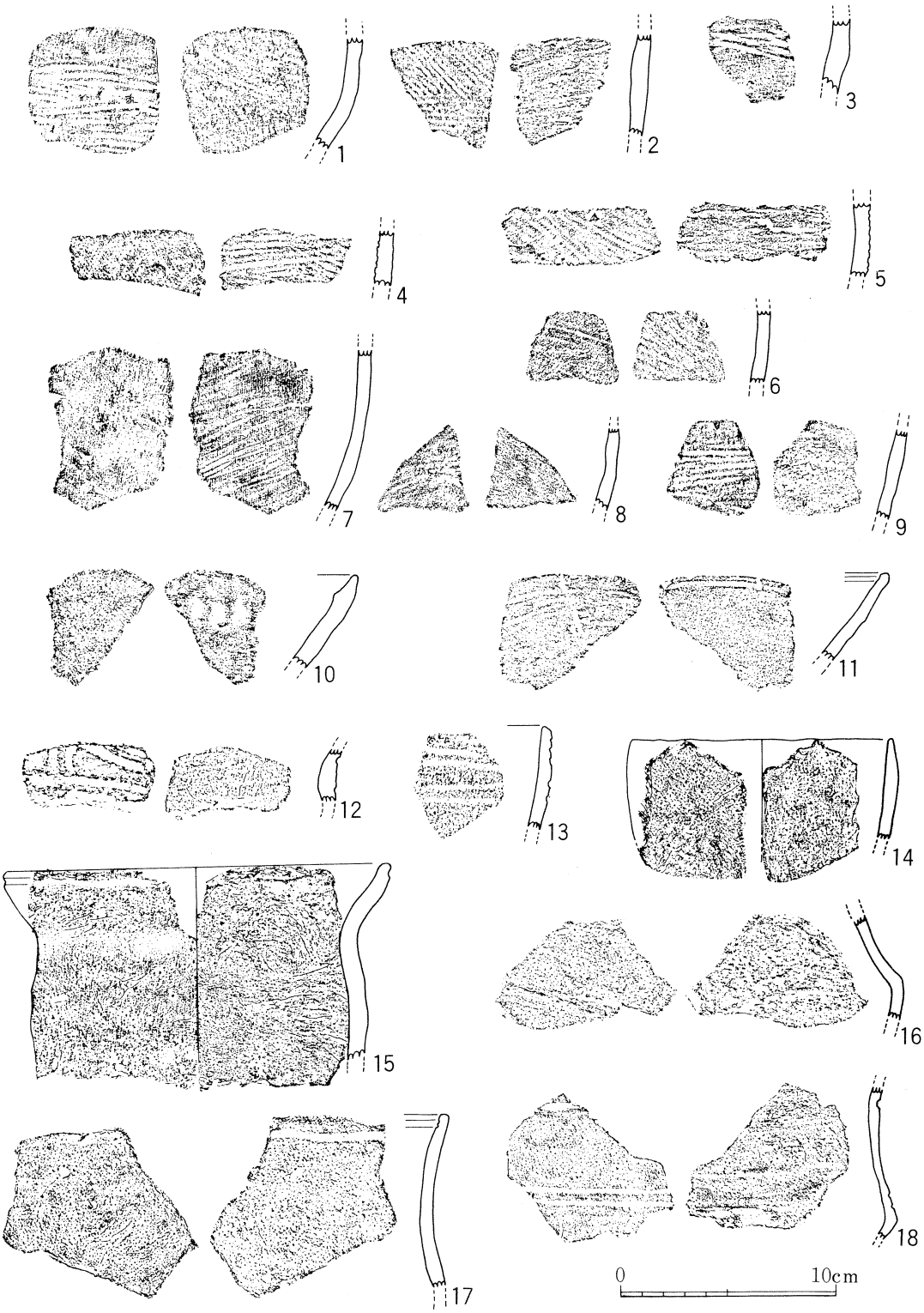
14，15は粗製の深鉢である。ともに内外面ともナデ調整が施され，器面には凹凸が多い。14は口縁部が「く」の字形に屈曲し，わずかに胴部が張るものである。口縁端部外面には一条の沈線文が施されている。15はやや内湾気味の単純な口縁部で，無文である。

晩　　期（第7図16～18・第8図～第11図　図版8～9）　縄文土器では晩期の土器が最も多く出土している。浅鉢と深鉢とが出土しているが，後者が圧倒的に多い。

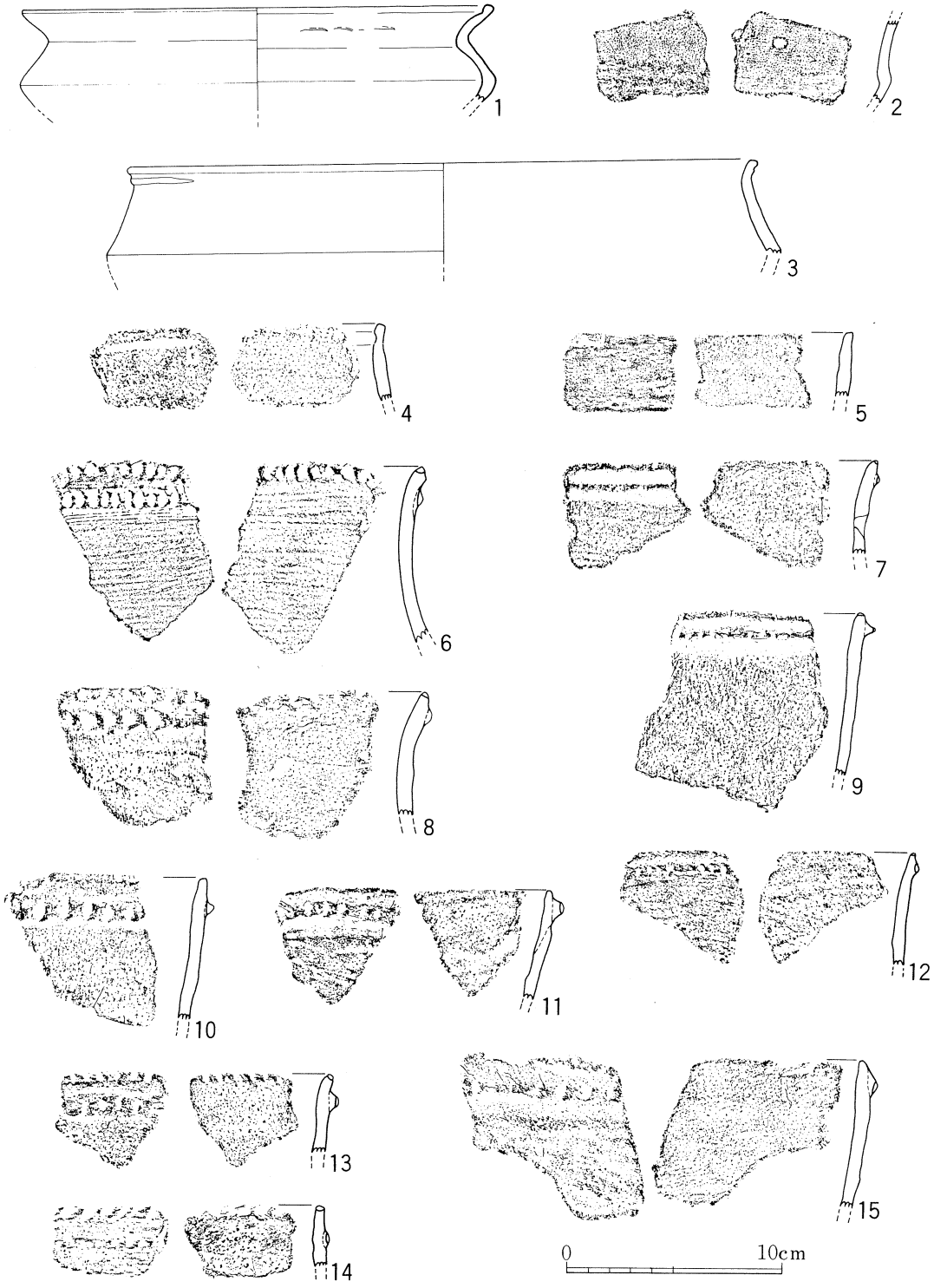
浅鉢（第8図1～4）のうち，第8図1は口縁部が「く」の字形に屈曲し，胴部は中程で明瞭に稜がつくものである。口縁端部は肥厚している。同図2，3も胴部に明瞭な稜がつくものであるが，2は口縁部が大きく外反するもの，3は胴部上半が内傾し口縁端部がわずかに外反するものである。同図4は口縁部小片であるが，反り気味に内傾するもので口縁端部内面に浅い沈線文が施されている。これらは1，3が内外面ミガキ調整が施され，この外面下半には削り調整が施されている。

深鉢は口縁部に突帯文を持たず胴部に稜がつくもの（第7図16～18），口縁部に突帯文を持つもの（第8図6～15・第9図），口縁部に突帯文を持たないもの（第10図1～9）とがある。

第7図16，18は胴部に稜を持つもので，17も同様の形態を呈すと思われる。口縁部はいずれも反

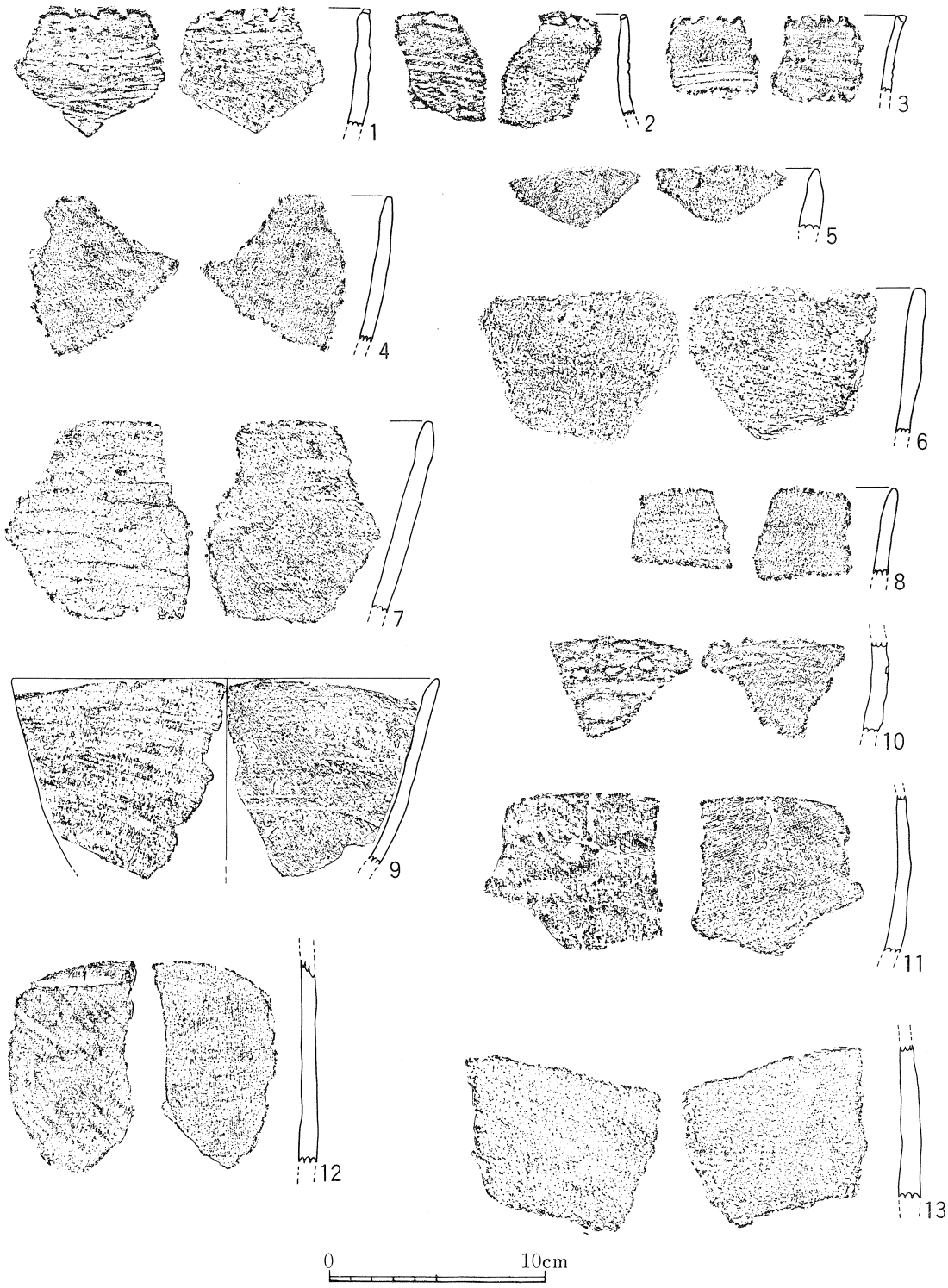


第７図　縄文土器実測図(3)１：３

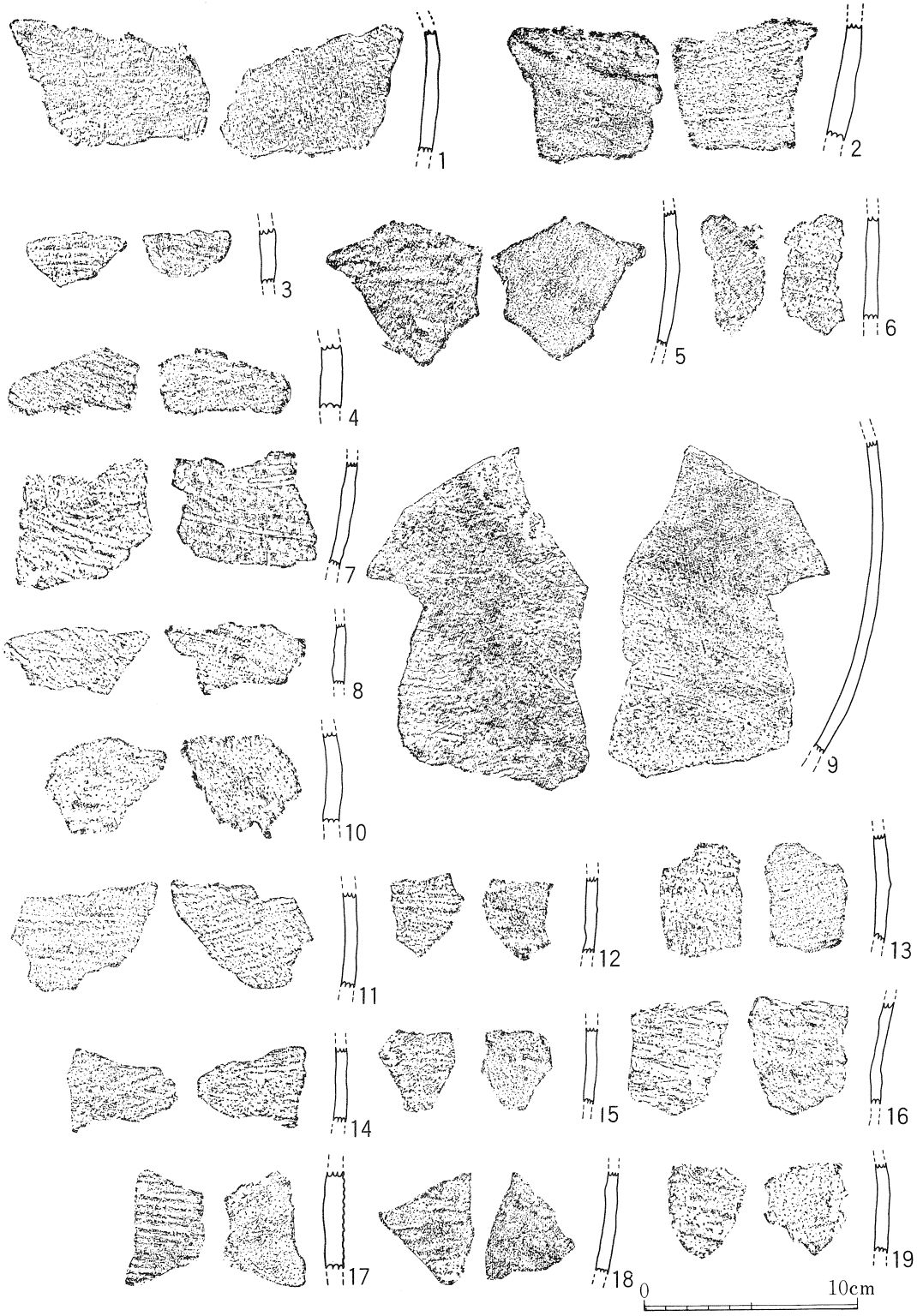


第８図　縄文土器実測図(4)１：３

第９図　縄文土器実測図(5)１：３



第10図　縄文土器実測図(6)1：3



第11図　縄文土器実測図(7) 1：3

り気味に内傾すると思われる。17の口縁端部内面に一条，18の胴部稜の上に二条の沈線文が施されている。調整はナデ及び条痕調整が施されている。

第８図６～15・第９図は口縁部に突帯を持つものである。口縁部は内湾するものがほとんどであるが，第８図６～８は外反するものである。第８図６～14は口縁端部と突帯に刻目文が施され，第８図15，第９図１～10は突帯にのみ刻目文が施されている。第９図11，12は刻目文は施されていない。第９図８は突帯が鋭く，同図11，12は突帯の幅が広いのが特徴である。これらの調整は内外面に二枚貝による条痕調整が施されるもの（第８図６），外面条痕調整，内面ナデ調整が施されるもの（第８図７，11，12・第９図２，４，10），その逆のもの（第９図12），外面ケズリ調整が施されるもの（第９図８，９，11），内外面ナデ調整のもの（第８図８～11，14，15・第９図３），内外面ハケ目状調整のもの（第９図１）などが施されている。

第10図１～８は口縁部に突帯を持たないものである。口縁部は内湾するものが多いが，２は内傾，３，８は外反している。口縁端部には１～３は刻目文が施されているが，４～８には施されていない。これらの調整は外面条痕調整，内面ナデ調整（１～３），外面ナデ調整，内面条痕調整（６），外面条痕調整，内面ナデ調整（９），内外面ナデ調整（４，５，７，８）などが施されている。

第10図10～13，第11図は胴部片である。文様を施されないものが大多数であるが，第11図10には円形の刺突文が施されている。調整は内外面条痕調整（第11図３，７，８，11），外面条痕，内面ナデ調整（第10図10・第11図14，17，19），内外面ナデ調整（第10図11，13・第11図９，10，18），ケズリ調整のあるもの（第10図10・第11図２，４，14，16）などがある。

これらのうち第９図１の調整は内外面ともハケ目状調整が施されている。このハケ目状調整は弥生土器のそれと酷似しており，他の晩期土器の調整と様相を異にしている。また胎土も大粒の砂粒を多く含み弥生土器の胎土に近いのが注意される。

小　　結

縄文土器は早期から晩期の土器約200点出土したが，特に早・前期と晩期の土器が多い。中期・後期の土器は非常に少なく，後期は６点のみで中期の土器は全く出土していない。

今回出土した土器のうち最も古い土器は繊維土器である。胎土に繊維を含む土器は簸川郡大社町菱根遺跡で発見されて以来，「菱根式」土器として早期末に位置づけられる(1)。タテチョウ遺跡出土の土器は器厚が１㎝を越すものはなく繊維の量も多くないことから，繊維土器でもやや新しく位置づけられようか。

隆帯文土器・刺突文土器は繊維土器より新しく，瀬戸内地方の羽島下層Ⅱ式より古く位置づけられている(2)。施文方法など様々であるため細分される可能性もあるが，現時点ではそれぞれの関係は不明と言わざるを得ない。また瀬戸内地方の羽島下層Ⅰ式との関連が注目されるが，羽島下層Ⅰ

式の実態が不明であるためこれとの関連も不明である。

今回出土した隆帯文土器の中で注目できるものとしては，第5図13がある。表面は他の隆帯文土器と共通した文様，調整であるが，内面には縄文が施されている点で他とは異る土器である。これが隆帯文土器と分離して考えるか，同類のバラエティーと考えるか判断しかねるが，文様が他の隆帯文土器に似ることからここでは同類として扱った。今後の資料の増加によって検討されることを期待したい。

条痕土器は羽島下層Ⅱ・Ⅲ式の無文部分の可能性もある。しかしタテチョウ遺跡ではこの時期の土器は昭和52年の調査でわずか3点しか出土していないことから，羽島下層Ⅱ・Ⅲ式に属するものは非常に少ないように思われる。大部分は隆帯文・刺突文土器の無文部分と思われる。

後期の土器はわずかに6点出土している。そのうち精製土器が3点あるが，第7図13は沈線文の様相から瀬戸内地方の福田KⅡ式に併行するか，それに近い時期の土器と思われる。同図12は八東郡美保関町崎ケ鼻洞穴遺跡出土土器と似た文様を持ち，瀬戸内地方の後期縁帯文土器に近い時期のものであろう(3)。このほかの土器については詳細な時期は不明であり，大まかに後期としてとらえるにとどめたい。

晩期の土器は，今回出土した縄文土器中最も多く出土している。大まかに前半の土器（第7図16～18・第8図1～5）と後半の土器（第8図6～15・第9図～第11図）とに分けられる。前半の土器は，岩田式と呼ばれる初頭の土器はみられない(4)。後半の土器は口縁部に刻目突帯文を貼付するものや口縁端部に刻目文を入れるだけのものなどがある。これらは器形にバラエティーがあることなど時期的に細分される可能性もあるが，県内に良好な一括資料がないため，現時点では細分は困難である。晩期の土器で注目されるのは第9図1である。口縁部には刻目突帯文が廻るが，他の突帯文土器より器形が整っており，器面の凹凸も少ない。胴部にはハケ目状の調整痕を残し胎土には弥生土器にみられるような大粒の砂粒を含んでいる。全体の器形や刻目突帯文を除けば弥生前期の土器に非常によく似ていると言えよう。わずか一点であるため他の刻目突帯文土器と分離して扱うには躊躇されるが，検討を要する資料ではなかろうか。

タテチョウ遺跡で出土した縄文土器はすべて小片で，摩滅も著しい。そのため今回発掘した地点が縄文時代集落に近いとは考え難く，集落はもっと上流にあったと思われる。これらの土器を使用した人々の集落が何拠に存在するかは，今後朝酌川上流部の調査を待たねばならない。

註 (1) 酒詰仲男ほか「島根県菱根遺跡発掘報告」『同志社大学人文科学研究所紀要』2号　昭和34年　同志社大学人文科学研究所

(2) 河瀬正利「山陰地方の縄文早期・前期の様相」　宍道正年「島根県の縄文土器研究の諸問題」ともに『山陰考古学の諸問題』　昭和61年　所収　山本清先生喜寿記念論集刊行会

(3) 宍道正年「島根県の縄文土器の研究」『松江考古』3号　昭和55年　松江考古学談話会
(4) 潮見　浩ほか『岩田遺跡』　昭和49年　山口県教育委員会

縄　文　観　察　表

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	手法の特徴	文様の特徴	胎土	色調	焼成	法量(cm)	備考
深鉢	5－1	7	N9E4	9	表　ナデ 裏　ナデ	口縁部に二枚貝腹縁による刺突文	大粒の砂粒と繊維を含む	表　茶褐色 裏　黒褐色	良好		繊維混入
深鉢	5－2	7	N9E4	9	表裏ともナデ		繊維を含む	表　褐色 裏　黒褐色	良好		繊維混入
深鉢	5－3	7	N8E4	9	表　縄文及びナデ 裏　縄文		繊維を含む	表　褐色 裏　灰褐色	良好		繊維混入
深鉢	5－4	7	N8E3	9	表　条痕 裏　条痕及びナデ		繊維を含む	表　灰褐色 裏　黒褐色	良好		裏面火を受ける
深鉢	5－5	7	N9E3	9	表裏とも縄文		繊維を含む	表　黒灰色 裏　灰褐色	良好		繊維混入
深鉢	5－6	7	N8E4	9	表　縄文 裏　ナデか		繊維を含む	表　茶灰色 裏　黒灰色	良好		繊維混入
深鉢	5－7	7	N9E3	9	表　縄文		5㎜大の小石繊維含む	表裏　黒灰色	良好		風化著しい
深鉢	5－8	7	N8E5	9	表　条痕	表　口縁部に粘土帯貼り付けによる隆帯	微砂粒含む	表裏　茶褐色	良好		
深鉢	5－9	7	N9E3	9	表　縄文 裏　条痕及びナデ		砂粒，繊維含む	表裏　暗黒褐色	良好		風化著しい 繊維混入
深鉢	5－10	7	北壁際		裏　条痕	口縁部に粘土帯貼り付けによる隆帯。以下条痕文	砂粒含む	表裏　黒褐色	良好		波状口縁
深鉢	5－11	7	N8E4	9	裏　条痕	口縁部に粘土帯貼り付けによる隆帯とその上に刻目文。以下沈線文	微砂粒含む	表裏　灰茶色	良好		波状口縁
深鉢	5－12	7	N9E3	9	風化により不明	表　口縁部　縦、横に粘土帯貼り付けによる隆帯。突帯上とその直下に半截竹管状工具による刺突文	微砂粒含む	表裏　黄灰色	良好		波状口縁
深鉢	5－13	7	N9E3	9	表　条痕？ 裏　縄文	口縁部およびその下に粘土帯貼り付けによる隆帯。隆帯上に刺突文。口縁端部に縄文	砂粒と繊維含む	表裏　黒褐色	良好		波状口縁
深鉢	5－14	7	西壁際	9	表裏　ナデ	表　口縁部に1条およびその下に2条の粘土帯貼り付けによる隆帯。隆帯上に刻目文	砂粒含む	表裏　暗青灰色	良好		波状口縁
深鉢	5－15	7	北壁際		表裏　ナデ	表　口縁部に粘土帯貼り付けによる隆帯。隆帯上に刺突文	微砂粒含む	表裏　黒灰色	良好		波状口縁

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	手法の特徴	文様の特徴	胎土	色調	焼成	法量(cm)	備考
深鉢	5－16	7	N8E4	9	表　条痕 裏　ナデ	表　口縁部に粘土帯貼り付けによる隆帯。隆帯上に半截竹管状工具による刺突文	砂粒含む	表裏　茶褐色	良好		
深鉢	5－17	7	N9E4	9	表　条痕	表　口縁部に粘土帯貼り付けによる隆帯。隆帯上に貝殻腹縁による刺突文	1～3㎜大の砂粒を含む	表　黒褐色 裏　茶褐色	良好		波状口縁
深鉢	5－18	7	N9E3	9	裏　条痕	表　口縁部に粘土帯貼り付けによる隆帯。隆帯上とその上下に5列の連続刺突文	砂粒を含む	表裏　暗茶褐色	良好		
深鉢	5－19	7	N9E3	9	表裏　ナデ	低い1条の隆帯および押引き文	2㎜大の砂粒を含む	表裏　黒褐色	良好		
深鉢	6－1	7	N9E4	9	裏　ナデ	半截竹管状工具による突文	微砂粒、金雲母を含む	表裏　黒褐色	良好		
深鉢	6－2	7	N8E4	9	表　条痕、下部はケズリ？ 裏　ナデ、胴部下半は条痕	口縁端部ヘラ状工具による刻目文 胴部棒状工具による刺突文	微砂粒を含む	表裏　黒灰色	良好	口径17.8	表面に炭化物付着
深鉢	6－3	7	N8E4	9	表　下部に縄文 裏　ナデ、指頭による押圧痕残る	表　横位の押引き文	微砂粒含む	表裏　暗黄褐色	良好		
深鉢	6－4	7	N8E4	9	裏　ナデ	表　半截竹官状工具による横位の押引き文	微砂粒含む	表裏　黒褐色	良好		
深鉢	6－5	7	N8E4	9	裏　横位の条痕	口縁端部　刺突文	微砂粒を含む	表　黒灰色 裏　茶褐色	良好		風化著しい
深鉢	6－6	7	N9E4	9	不明	表　棒状工具による横位、斜位の押引き文	2㎜大の砂粒含む	表裏　茶褐色	良好		風化著しい
深鉢	6－7	7	N8E4	9	裏　ナデ	表　刺突文	微砂粒含む	表　茶褐色 裏　黒灰色	良好		風化著しい
深鉢	6－8	7	N9E4	9	表裏　ナデ	表　棒状工具による連続刺突文	2～4㎜大の小石を含む	表裏　茶褐色	良好		
深鉢	6－9	7	N9E4	9	表裏　左上りの条痕	表　棒状工具による連続刺突文	2～3㎜大の小石を含む	表裏　黒灰色	良好		
深鉢	6－10		北壁際		表裏　条痕およびナデ	刺突文	1～2㎜大の砂粒含む	表裏　黄灰色	良好		風化著しい
深鉢	6－11	7	西壁際	12	表裏　ナデおよび条痕	刺突文	微砂粒含む	表裏　灰褐色	良好		表面炭化物付着
深鉢	6－12	7	N9E4	9	表裏　条痕	表　刺突文	砂粒を含む	表　黒褐色 裏　茶褐色	良好		
深鉢	6－13	7	N5E4	11下	表　条痕 裏　条痕およびナデ	刺突文	微砂粒、金雲母含む	表裏　白灰色	良好		
	6－14	7	N9E4	9	裏　ナデ	表　2枚貝腹縁による刺突文	2～3㎜大の砂粒含む	表裏　黒灰色	良好		
	6－15	7	N8E3	11上	裏　条痕およびナデ	表　2枚貝腹縁による刺突文	微砂粒含む	表　黒褐色 裏　茶褐色	良好		
	6－16		N9E4	9	表裏　条痕		1～3㎜大の砂粒含む	表裏　黒褐色	良好		

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	手法の特徴	文様の特徴	胎土	色調	焼成	法量(cm)	備考
	6－17	7	N8E4	9	表 条痕 裏 条痕およびナデ		2～3㎜の砂粒含む	表裏 暗褐色	良好		
	6－18	7	N9E3	9	表 条痕およびナデ 裏 条痕		1～2㎜の砂粒含む	表裏 暗褐色	良好		
	6－19	7	N8E3	12	表裏 条痕		微砂粒含む	表裏 黒褐色	良好		裏面炭化物付着
	6－20	7	N9E3	9	表 条痕およびナデ 裏 条痕		微砂粒含む	表裏 茶灰色	良好		
	6－21		N9E4	9	表 条痕およびナデ		微砂粒含む	表 黒褐色 裏 茶灰色	良好		
	7－1	8	N9E4	9	表 条痕 裏 条痕およびナデ		微砂粒含む	表裏 茶褐色	良好		
	7－2	8	N8E3	9	表 横位、左上りの条痕 裏 条痕およびナデ		1～2㎜大の砂粒含む	表裏 黒褐色	良好		
	7－3	8	N9E3	9	表 条痕およびナデ		1～3㎜大の砂粒含む	表裏 黒褐色	良好		風化著しい
	7－4	8	N9E4	9	裏 条痕		微砂粒含む	表 茶褐色 裏 黒灰色	良好		風化著しい
	7－5	8	N8E4	9	表 条痕 裏 条痕およびナデ		微砂粒含む	表裏 黒褐色	良好		風化著しい
	7－6	8	N9E3	9	表 条痕 裏 条痕およびケズリ様調整		微砂粒含む	表裏 黒褐色	良好		風化著しい
	7－7	8	N8E4	9	表 ナデ？ 裏 条痕		微砂粒、金雲母含む	表裏 茶褐色	良好		
	7－8	8	N9E4	9	表 条痕 裏 ナデ		微砂粒含む	表 黒褐色 裏 茶褐色	良好		
	7－9	8	N9E4	9	表 条痕 裏 ナデ		微砂粒含む	表裏 茶褐色	良好		
浅鉢	7－10		N9E4	9	調整不明	口縁部、裏面に低い隆帯	微砂粒含む	表裏 茶灰色	良好		風化著しい
浅鉢	7－11	8	N8E4	9	表 条痕？ 裏 条痕およびナデ	口縁部、裏面に1条の沈線	砂粒含む	表裏 黄褐色	良好		風化著しい
深鉢	7－12	8	N8E5	9	裏 研磨	表 太い沈線を入れる	砂粒含む	表 黄灰色 裏 黒灰色	良好		
深鉢	7－13	8	N8E4	9	不明	表 半截竹管状工具による沈線文	砂粒含む	表 黄褐色 裏 黒灰色	良好		風化著しい
深鉢	7－14	8	N9E4	9	表裏 ナデ		2～5㎜大の砂粒含む	表 黒褐色 裏 茶褐色	良好	口径 12.2	口縁部
深鉢	7－15	8	N8E4	9	表裏 ナデ	口縁部 1条の沈線文	2㎜大の砂粒、金雲母含む	表裏 黒褐色	良好		裏面炭化物付着
深鉢	7－16	8	N9E4	9	表裏 条痕			表 黄灰色 裏 黒褐色	もろい		裏面炭化物付着 風化著しい

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	手法の特徴	文様の特徴	胎土	色調	焼成	法量(cm)	備考
深鉢	7－17	8	N8E4		表　条痕およびナデ 裏　ナデ	裏面　口縁部に1条の沈線	1～2㎜の砂粒含む	表裏　暗青灰色	良好		
深鉢	7－18	8	N8E3	12	表　ヘラ磨き？ 裏　ケズリ様調整	表　3条の平行沈線文	1㎜大の砂粒含む	表裏　黄灰色	良好		
浅鉢	8－1	8	N5E3	10	表裏　ナデ 裏面　粘土積み上げ痕みられる		密	表裏　茶褐色	良好	口径21.8	精製土器
浅鉢	8－2	8	N8E4	9	表　ナデ，段より下方ケズリ様調整 裏　ナデ		微砂粒含む	表裏　黒褐色	良好		精製土器
深鉢	8－3	8	N5E3	10	表裏　ヘラ磨き		微砂粒含む	表裏　黄灰色	良好	口径29.0	精製土器 口縁部
深鉢	8－4	8	N9E4	9	調整不明	口縁部　裏面に沈線文	2～3㎜大の砂粒含む	表裏　黄灰色	良好		風化著しい
深鉢	8－5	8	北壁際		表裏　ナデ		微砂粒、金雲母含む	表　黒灰色 裏　茶褐色	良好		風化著しい
深鉢	8－6	8	N5E5	12	表裏　条痕およびナデ	口縁端部に貝殻状工具による刻目 貼り付けの突帯上に刻目（貝殻状工具）	微砂粒含む	表裏　青灰色	良好 堅緻		
深鉢	8－7	8	N9E3	9	表　横位の条痕	口縁部近くに貼り付け突帯文。口縁端部および突帯上に刻目文	微砂粒含む	表裏　茶灰色	良好		風化著しい
深鉢	8－8	8	北壁際		表裏　ナデか？	口縁部近くに貼り付け突帯文。口縁端部と突帯上に刻目文。一部刻目のない箇所あり	1～3㎜大の砂粒含む	表裏　黄灰色	良好		風化著しい
深鉢	8－9	8	N9E3	9	表裏　ナデ	口縁部近くに突帯文。口縁端部と突帯上に刻目文	砂粒含む	表裏　暗茶褐色	良好		風化著しい
深鉢	8－10	8	N9E3	9	表　ナデ 裏　条痕およびナデ	刻目突帯文を貼付	砂粒含む	表裏　茶灰色	良好		風化著しい 口縁部
深鉢	8－11	8	N9E4	9	表裏　ナデ	口縁部近くに突帯を貼付し、刻目文を施す	砂粒を含む	表　黄灰色 裏　灰褐色	良好		風化著しい 口縁部
深鉢	8－12	8	N9E3	9	表　条痕 裏　ナデ	口縁部近くに狭い突帯文。口縁端部と突帯上に刻目文	砂粒含む	表裏　茶褐色	良好		風化著しい
深鉢	8－13	8	北壁際		調整不明	口縁端部に刻目文。刻目突帯文を貼付	1～3㎜大の砂粒多量に含む	表裏　茶灰色	良好		風化著しい
深鉢	8－14	8	N9E4	9	表裏　ナデ	口縁端部に刻目文。口縁部近くに貼り付け突帯文。突帯上に刻目文	1～3㎜大の砂粒多量に含む	表裏　黒灰色	良好		風化著しい
深鉢	8－15	8	西壁際		表裏　ナデ	口縁部に貼り付け突帯文。口縁端部と突帯上に刻目文	微砂粒含む	表裏　暗青灰色	良好		
深鉢	9－1	9	N7E5	12	表裏　ハケ目様の調整 口縁部ヨコナデ	口縁部に刻目突帯文	微砂粒含む	表裏　青灰色	良好 堅い		
深鉢	9－2	9	N8E5	9	表裏　条痕か？	口縁部に刻目突帯文	微砂粒含む	表裏　黄灰色	良好		風化著しい

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	手法の特徴	文様の特徴	胎土	色調	焼成	法量(cm)	備考
深鉢	9－3	9	北壁際		調整不明	口縁端部に幅広の刻目突帯文	微砂粒含む	表裏　茶褐色	良好		風化著しい
深鉢	9－4	9	N8E4		調整不明	口縁端部に幅広の刻目突帯文	微砂粒含む	表裏　暗青灰色	良好		風化著しい
深鉢	9－5		北壁際		調整不明	口縁部に高い刻目突帯文を貼付	砂粒多量に含む	表裏　暗黒灰色	良好		風化著しい
深鉢	9－6	9	N9E4	9	調整不明	口縁部に刻目突帯	砂粒含む	表裏　灰褐色	良好		風化著しい
深鉢	9－7	9	N9E4	9	調整不明	口縁部に刻目突帯文	微砂粒含む	表裏　黄灰色	良好		風化著しい
深鉢	9－8	9	西壁際	12	調整不明	口縁部に刻目突帯文	微砂粒含む	表裏　黄灰色	良好		風化著しい
深鉢	9－9	9	N9E4	9	表裏　ケズリ様調整	口縁部に刻目突帯文	微砂粒含む	表裏　暗黒褐色	良好		風化著しい
深鉢	9－10	9	N8E4	9	表裏　2枚貝による条痕およびナデ	口縁部に刻目突帯文	微砂粒含む	表　黒褐色 裏　暗灰色	良好		風化著しい 表面炭化物付着
深鉢	9－11	9	N7E4	10	表　ケズリ様調整 裏　ナデ	口縁部に幅広の突帯文を貼付	砂粒含む	表裏　黄灰色	良好		表面　少量の炭化物付着
深鉢	9－12	9	N6E6	12	表　ナデおよび条痕 裏　条痕	口縁部に突帯を貼付	微砂粒含む	表　黒褐色 裏　灰褐色	良好	口径29.6	表面炭化物付着
深鉢	10－1	9	N5E4	12	表裏　ケズリ様調整	口縁端部に刻目文	1～3㎜大の砂粒含む	表　青灰色 裏　黒灰色	良好		
深鉢	10－2	9	N9E3	12	表　条痕およびナデ 裏　ナデ	表　口縁端部に刻目文	微砂粒含む	表裏　黒褐色	良好		
深鉢	10－3	9	N9E3	9	表　条痕	口縁端部にヘラ状工具による刻目文	微砂粒含む	表裏　黄灰色	良好		風化著しい
深鉢	10－4	9	N8E4	9	表裏　ナデ		2㎜大の砂粒含む	表裏　黒灰色	良好		風化著しい
深鉢	10－5	9	N8E4	9	表裏　ナデ		微砂粒含む	表裏　黄灰色	良好		風化著しい
深鉢	10－6	9	N8E4	9	表　ナデ 裏　条痕		微砂粒含む	表裏　茶褐色	良好		風化著しい
深鉢	10－7	9	N6E5	12	表　ナデ 裏　ケズリ様の調整		2～5㎜大の砂粒含む	表裏　青灰色	良好		裏面炭化物付着
深鉢	10－8	9	N8E4	9	表　ナデ 裏　条痕およびナデ		微砂粒含む	表裏　黄灰色	良好		風化著しい
深鉢	10－9	9	N7E4	12	表　条痕か？ 裏　ケズリ様の調整		微砂粒、金雲母含む	表裏　青灰色	良好	口径20.0	裏面炭化物付着
	10－10	9	N9E3	9	表　ナデ 裏　ケズリ様の調整	円形の刺突文	2㎜大の砂粒含む	表裏　黒褐色	良好		風化著しい
	10－11	9	N9E4	9	表裏　ナデ		砂粒含む	表裏　茶褐色	やもろい		

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	手法の特徴	文様の特徴	胎土	色調	焼成	法量(cm)	備考
	10−12	9	N5E4	11下	表 ナデおよび条痕 裏 ナデ		微砂粒含む	表裏 青灰色	良好		炭化物付着
	10−13	9	N7E7	12	表裏 ナデ		微砂粒含む	表裏 灰色	良好		
	11−1	9	N5E6	12	表 条痕 裏 ナデ		砂粒含む	表裏 灰褐色	良好		
	11−2	9	N8E4	9	表 ケズリ様の調整 裏 条痕およびナデ		砂粒含む	表裏 茶褐色	良好		
	11−3		N8E4	9	表裏 条痕およびナデ		砂粒含む	表裏 茶灰色	良好		風化著しい
	11−4		N9E3	9	表 条痕およびナデ 裏 ケズリ様の調整		砂粒含む	表 茶褐色 裏 黒色	良好		
	11−5	9	西壁際	12	表 条痕およびナデか？ 裏 ナデ		2㎜大の砂粒含む	表 黄灰色 裏 黒灰色	良好		風化著しい
	11−6		N9E4	9	表裏 条痕		砂粒含む	表裏 茶灰色	非常にもろい		風化著しい
	11−7	9	N9E3	9	表裏 条痕およびナデ		砂粒含む	表裏 黒灰色	良好		風化著しい
	11−8		N8E4	9	表裏 条痕か？		砂粒含む	表裏 黄灰色	良好		風化著しい
	11−9	9	N8E5	12	表 条痕およびナデ 裏 ナデ		砂粒含む	表 黒褐色 裏 灰褐色	良好		表裏炭化物付着
	11−10		N8E4	9	表裏ともナデ		2㎜大の砂粒含む	表裏 黒灰色	良好		風化著しい 穿孔あり
	11−11		N9E3	9	表裏 条痕		砂粒含む	表 黄灰色 裏 黒褐色	良好		
	11−12		N9E4	9	表 条痕		砂粒含む	表裏 黄灰色	良好		風化著しい
	11−13		N9E3	9	表裏 条痕		砂粒含む	表裏 黄灰色	良好		風化著しい
	11−14		N8E4	9	表 条痕およびナデ 裏 ケズリ様の調整		砂粒含む	表裏 黒褐色	良好		風化著しい
	11−15		N8E4	9	表裏 ナデ		砂粒含む	表裏 黒灰色	良好		風化著しい
	11−16		N9E4	9	表裏 ケズリ様の調整		砂粒含む	表 黄褐色 裏 黒褐色	非常にもろい		風化著しい
	11−17		N9E4	9	表 条痕 裏 ナデ		3㎜大の砂粒含む	表 黒褐色 裏 茶褐色	良好		風化著しい
	11−18		N8E4	9	表 ナデか？ 裏 ナデ		微砂粒含む	表 茶褐色 裏 黒色	良好		裏面炭化物付着
	11−19		N9E3	9	表 条痕か？ 裏 ナデ		砂粒含む	表裏 茶褐色	やもろい		風化著しい

2．弥　生　土　器

弥生土器は本遺跡出土遺物中最も量が多くコンテナ約70箱分出土した。これらのうち10数点が完形あるいはそれに近い状態であったが，ほとんどは破片の状態で出土した。これらは摩滅が著しく，また小片のものが多いため全体の器形，調整，文様など明確に認められるものは少ない。弥生土器の包含層は第８層～第12層であるが，各層とも各時代の土器が混在しており，共伴関係などをつかむことはできなかった。

実測図を測りえたものについて時期別に出土量をみると前期42％，中期43％で後期の土器は極めて少なかった。これを52年度調査結果と比較すると今年度は中期の土器の出土量が前期のそれに対し割合が高く，前回の調査とに違いがみられる。

前　期　の　土　器

壺形土器（第12図～第15図　図版10～13）　完形の土器は２点のみで，大多数は小片のため全体の器形を窺うことができるものは少ない。口頸部の形態により大きく３類に分けられる。

Ⅰ類（第12図１～４，６～８　図版10）　頸部から肩部にかけて「ハ」字形に開くもので，口縁部はやや短く外反する。口頸部に段をもつもの（１～４，７）とヘラ状工具により１条～数条の平行沈線文を施すもの（６，８）とがあり，このうち段はハケメ原体によるもの（２，４），ヘラ状工具により沈線をめぐらせた後ハケメ原体によってつけるもの（３）とが認められる。調整は概ね内外面ともにハケメの後念入りなヘラ磨き調整が施されるが，４の内面にはハケメ調整の後ナデ調整が施される。胎土は２～３㎜大の砂粒を多く含み，焼成は良好で堅固である。また第12図５，９は口縁部を欠いているが頸部の形態からこの類に属するものと思われる。

Ⅱ類（第12図12～20・第13図１～５・第14図１，２　図版10～12）　口縁部はⅠ類に比べやや大きく外反して，頸部が筒状を呈すもので，多くは頸部にヘラ状工具によって平行沈線が施される。また口縁端部に狭い平坦面をもつものがみられ，その平坦面に文様が施されるものが多い。端部の文様にはヘラ状工具により沈線文を引くもの（第12図16），刻目文を入れた後沈線文を施すもの（同図17），羽状の刻目文を施すもの（第13図４，５，第14図１）がある。また頸部の平行沈線文直下には，削り出しによる突帯をもうけ刻目を入れるもの（第12図19），刻目突帯文をめぐらせるもの（第12図20），沈線間に刺突文を施すもの（第13図１），沈線文直下に三角形の刺突文を施すもの（第13図４，５）がある。なお，第12図20の頸部には耳朶状を呈す突起が貼り付けられている。第14図１，２は完形に近く全形が窺える資料である。１は胴部が偏球状に大きく張り出し最大径が胴部中位のやや下に位置するもので，肩部から胴部にかけて７～８条の平行沈線文が３段に施される。２は最大径が胴部のほぼ中位に位置するもので，胴部径に比して頸部径が大きい。頸部にはヘ

ラ状工具による平行沈線文が施されている。

調整は，Ⅱ類はいずれも外面にハケメ調整の後ヘラ磨き調整を施すものと思われるが，Ⅰ類に比べやや雑である。内面はハケメあるいはナデが施され，ヘラ磨きを施すものは少ない。胎土は2～3㎜大の砂粒を含み，焼成は良好である。

Ⅲ類（第13図6～9　図版11，13）　口縁部は短く外反するもので，頸部径が口径に対して太く，短く開くものである。6，8は文様が施されないが，7，9は口縁端部にヘラ状工具による羽状文あるいは斜格子文が施され，頸部に多条の平行沈線文が施されている。調整は不明瞭であるが，8の頸部内面にはヘラ磨き調整が施される。胎土は2～3㎜大の砂粒を含み，焼成は良好である。

その他の前期土器（第13図12，13，第14図3～11，第15図1～15　図版11，12）　第13図12は胴部最大径付近に刻目突帯文を2条貼付したものである。胴部上半には貝殻腹縁により平行沈線文を3条入れ，その上下にやはり貝殻腹縁による羽状文が施されている。

第13図13は，頸部を欠いているが，胴部がかなり張り球形を呈する小形の壺である。肩部にはヘラ状工具による綾杉文，その下にはヘラ状工具による平行沈線文2段とそれに直交する沈線文で区画し，その区画内に羽状文，竹管文，鋸歯文に類似した文様が配されている。さらにその直下に羽状文が部分的に施されている。

第14図3～11，第15図1～15はいずれも肩部および胴部の小片で文様が施されるものである。

第14図3～11，第15図1～8は平行沈線文と羽状文で飾られる。施文は第14図3～11はヘラ状工具，第15図1～8は貝殻腹縁によるが，ヘラ状工具と貝殻腹縁を併用して施文したものが1点ある（第15図6）。これらは平行沈線文と併用されるものがほとんどであるか，さらに平行沈線文に直交する沈線文を加えて区画するものもみられる。（第14図7～9・第15図6，8）。またヘラ状工具によって施文したもののうち，第14図3は有軸羽状文である。また貝殻施文のもので，沈線文の下に連弧文（第15図7），木葉文（第15図8）を施すものがある。なお第14図4，10，11・第15図1，3は肩部に段を有する。

以上の羽状文を主体としたものの他に，山形文，刺突文，弧状の文様を施す土器がある（第15図9～15）。同図9は貝殻腹縁，同図10はヘラ状工具により平行沈線文をめぐらせその直下に山形文を施すものである。10はその下にさらに平行沈線文を施す。11，12は棒状工具による刺突文を施し，13は2条の沈線間に竹管文が施される。また，ヘラ状工具により8条の平行沈線文をめぐらせ，直下に三角形の刺突文を施すもの（14）もある。15は小片のため詳細は不明であるが，ヘラ状工具により弧状の文様が描かれている。

無　頸　壺（第13図10　図版13）　口縁部は強く内湾するもので，口縁部外面にヘラ状工具により上下にそれぞれ2条の平行沈線文をめぐらせ，その間に羽状文が施される。また口縁端部には焼

成前に穿孔された小孔がみられる。胎土は2㎜大の砂粒を含み，焼成は良好である。

甕形土器（第16図～第20図4　図版13～16）　中期甕形土器についで出土量が多い。すべて口頸部の小片であるため全体の器形を窺えるものはない。口縁部の形態に若干の違いがみられるが，胴部は直線的にすぼむものとややふくらんだ後にすぼむものとがあり，後者が大多数を占めるものと思われる。口縁部の形態が短く外反するものをⅠ類とし，逆「L」字形に屈折し上面が平坦になるものをⅡ類として分け，さらに文様構成からⅠ類を4つに細分した。

Ⅰ$_1$類（第16図1～3，5～14・第17図1～5　図版13）　口縁部が短く外反するもので，頸部に段をもつものと，ヘラ状工具による1～3条の平行沈線文をもつものとがある。段をもつ土器（第16図1，2，6）はハケメ原体による段（第16図1，2），ヘラ状工具により沈線をめぐらせた後ハケメ原体によってつける段（第16図6）が認られる。また口縁端部に刻目文を施すものがあり，端部いっぱいに施すもの（第16図1，3，5，7）と下端のみに施すもの（第16図2，6，14）がみられる。調整は内外面ともにハケメ調整，ナデ調整が施されるが，ハケメ調整の後ヘラ磨き調整を施すもの（第16図14）がみられる。いずれも胎土は2～3㎜大の砂粒を含み，焼成は良好である。また外面に炭化物が付着するものが顕著にみられる。

Ⅰ$_2$類（第17図6～15・第18図1～6　図版13，14）　頸部にヘラ状工具による多条の平行沈線文を施すものである。口縁端部に刻目文を施すものが5条以上の平行沈線文をもつものに多くみられ，端部いっぱいに口縁に直交する形で施すもの（第17図7，10，11），斜行状のもの（第17図8，9，13）などがある。調整は外面にハケメ調整が施され，内面はハケメ調整，ナデ調整が施されるが，ヘラ磨きを施すもの（第17図11）もみられる。胎土は2～3㎜大の砂粒を含むものがあり，焼成はいずれも良好である。また内外面に炭化物が付着するものも認られる。

Ⅰ$_3$類（第18図7～9，第20図15　図版14，16）　頸部の平行沈線文に刺突文を加えるもの，沈線文以外の文様をもつものである。第18図8は頸部に2点1単位の列点文を口縁部内面に1段，頸部に2段施すものである。同図9はヘラ状工具により5条の平行沈線文をめぐらせその直下に刺突文を施すものである。また同図7，第20図15ヘラ状工具により2～3条の平行沈線文をめぐらせ沈線間に刺突文を施すものである。調整はいずれも内外面ともにハケメ調整が施され，胎土は第18図7を除き2～3㎜大の砂粒を含み，焼成はいずれも良好である。

Ⅰ$_4$類（第18図10～15・第19図1～12　図版14，15）　無文の土器を一括した。成形，調整ともに雑なものがみられる。調整は概ね内外面ともにハケメ調整，ナデ調整が施されるが，第19図2の内面にヘラ磨きが認られる。胎土は2～3㎜大の砂粒を含むものと細かいものとがあり，焼成はいずれも良好である。また内外面に炭化物が付着するものが顕著にみられる。

Ⅱ類（第19図13～15　図版15）　口縁部が逆「L」字形を呈し上部に平坦面をもち，頸部内面に

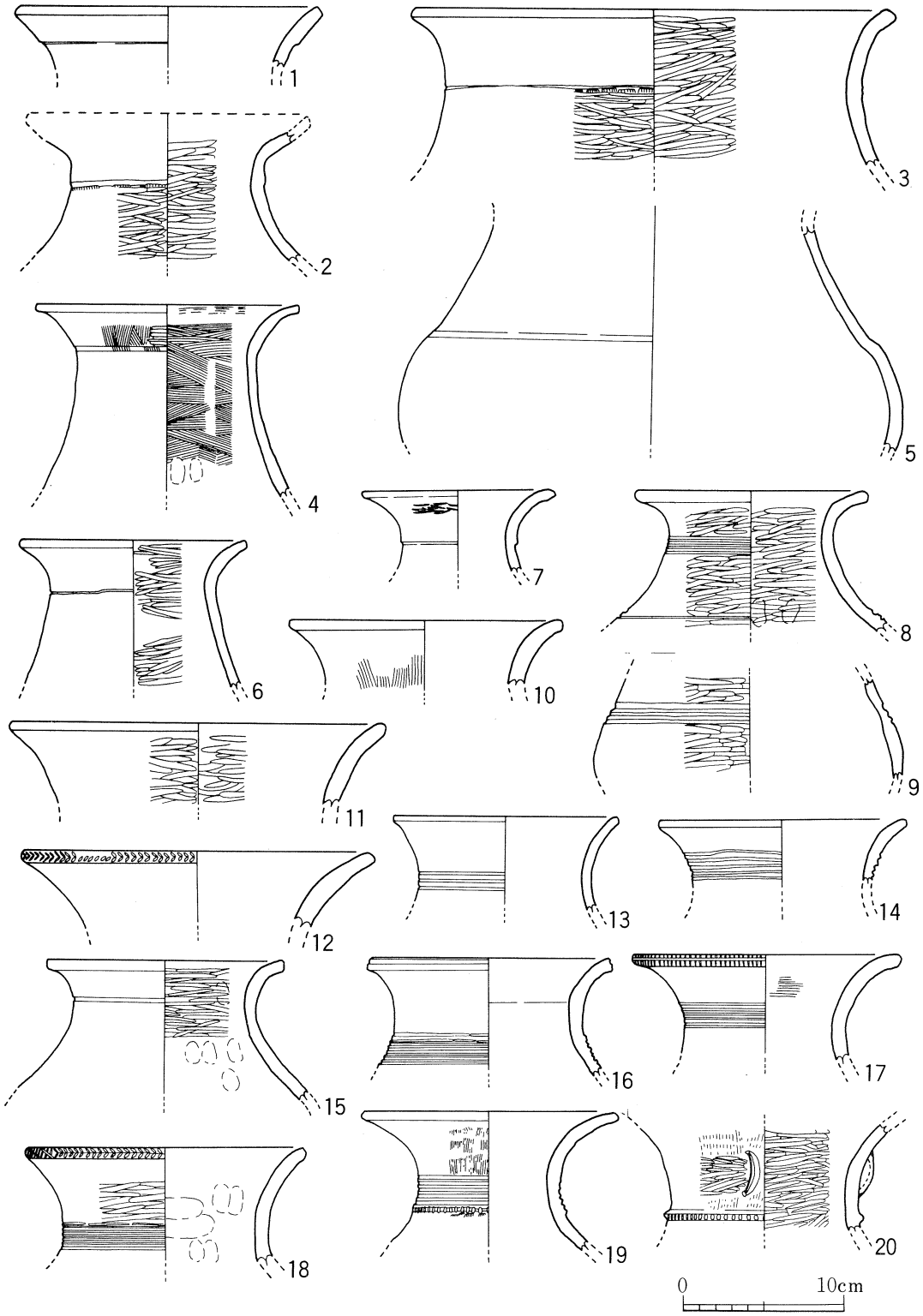
鋭い稜がつくものである。13は口縁端部にヘラ状工具による刻目文，頸部に5条の平行沈線文をもつ。14は貝殻腹縁により口縁端部に刻目文，口縁部上面と頸部に平行沈線文，刺突文を施すものである。調整は内外面ともにハケメ調整が施されるが，15の外面にヘラ磨き調整が認られる。胎土は15を除き2～5㎜大の小石を含み，焼成はいずれも良好である。

小形甕形土器（第20図1～4　図版15，16）　コップ状を呈す小形の甕形土器である。1は口縁部がゆるく外反して胴部は直線的にすぼむ。2，3は口縁部がわずかに外反し，胴部はややふくらんだ後にすぼまり，3は底部がくぼむ。4は口縁部が外反せず胴部から直線的に外傾し，口縁端部は平坦面をもつ。文様は2の頸部にヘラ状工具による沈線文がみられる他は文様は施されない。調整は1，2，4とも内外面にハケメ調整，ナデ調整が施され，3は内外面ともにヘラ磨き調整が施される。胎土は2を除きやや細かく，焼成はいずれも良好である。

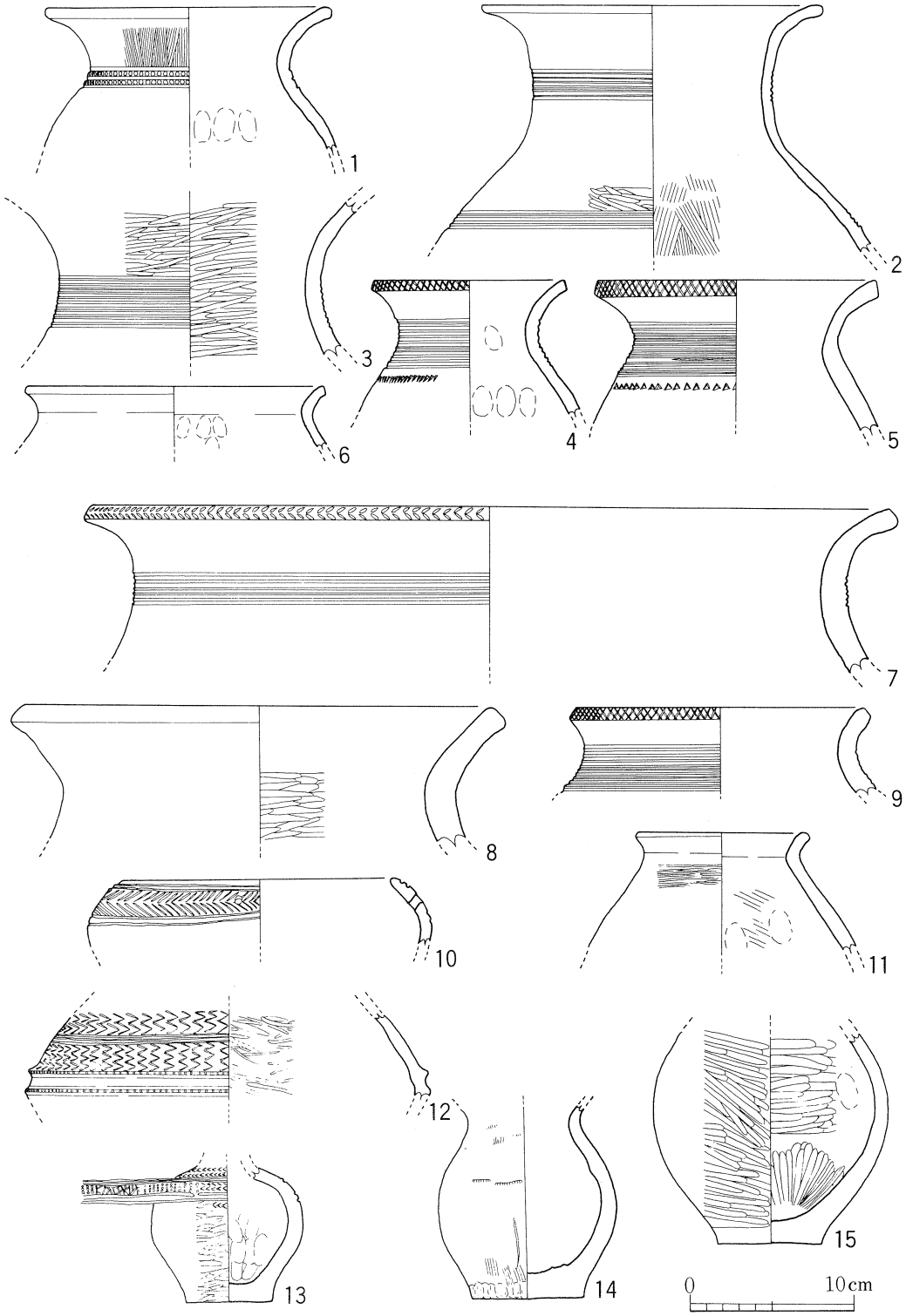
鉢形土器（第20図5～9，14　図版15，16）　口径に比して器高の低いものを鉢形土器とした。5～7は口縁部が短くわずかに外方に折れる。8，9は口縁部がゆるく外反して，胴部はややふくらみをもち，底部は安定した平底である。調整はいずれも内外面にハケメ調整が施される。胎土は2㎜大の砂粒を多く含み，焼成は良好である。

蓋形土器（第20図10，11　図版15，16）　2点出土した。これらはいずれも大きく外方へ開く笠形の土器である。調整はいずれも内外面ともにハケメ調整の後ヘラ磨き調整が施される。胎土は2～3㎜大の砂粒を多く含み，焼成は良好である。これらは中期の土器の可能性もあるが，一応ここでは前期の土器としてとり上げた。

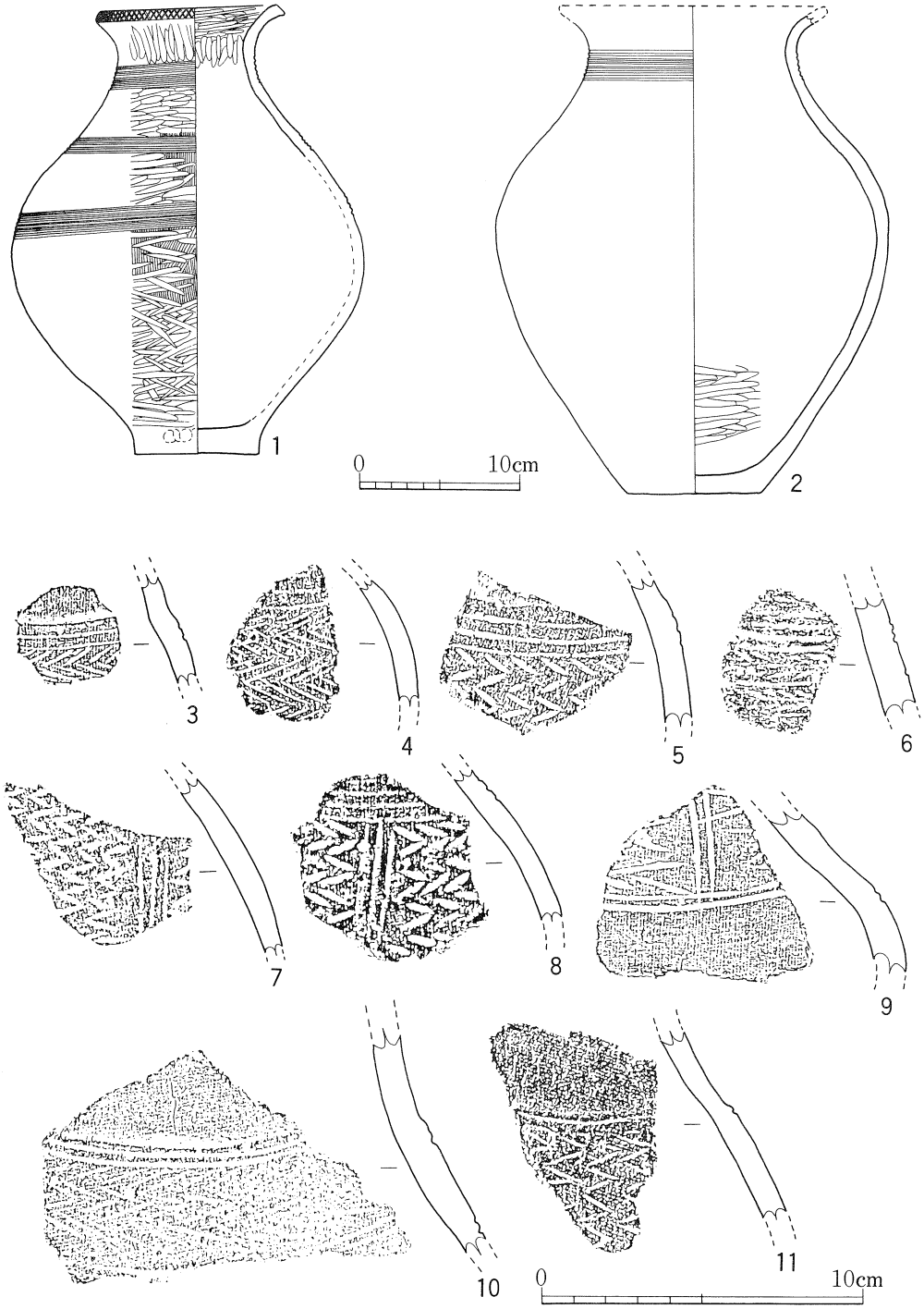
底　　部（第20図12，13・第21図　図版16，17）　いずれも遺存状態が悪く，調整など観察できるものは少ない。また小片も多いため器種を限定するのは難しく，中期の土器が含まれている可能性もある。第20図12，13・第21図1～3，11，12は胴部が大きく広がって伸び，壺形土器の底部の可能性がある。また第21図21，22は焼成後に底面に穿孔された小孔がみられる。その他高台状を呈すもの（第21図25，27），脚台状を呈すもの（第21図26）がある。調整が観察できるもので第20図12，13・第21図3の内面あるいは外面にヘラ磨き調整が認められ，第21図6，16～21は内外面にハケメ調整が施される。いずれも胎土は2～3㎜大の砂粒を多く含み，器面の摩滅により砂粒が露出している。焼成はいずれも良好である。



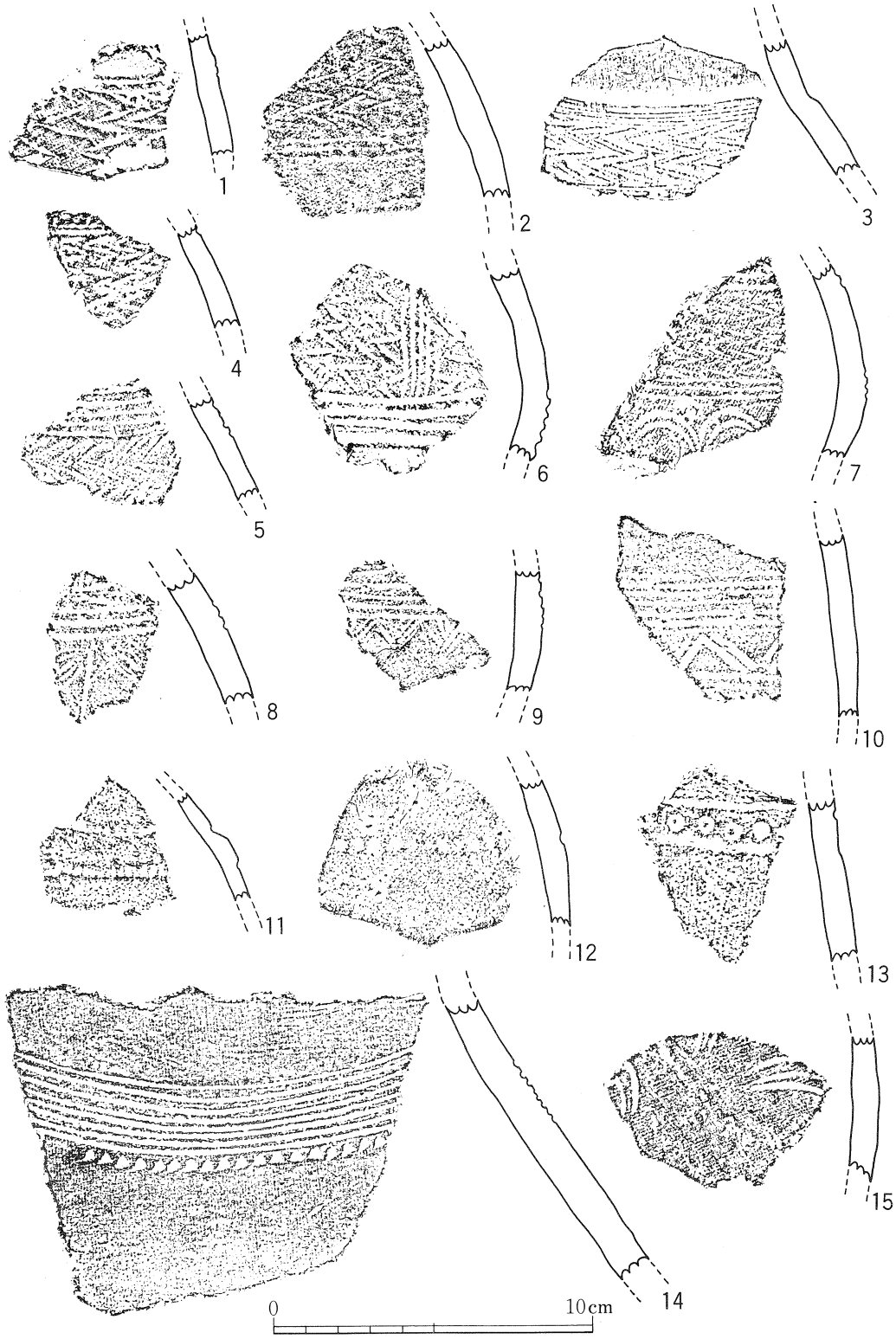
第12図　弥生土器実測図(1) 1：4



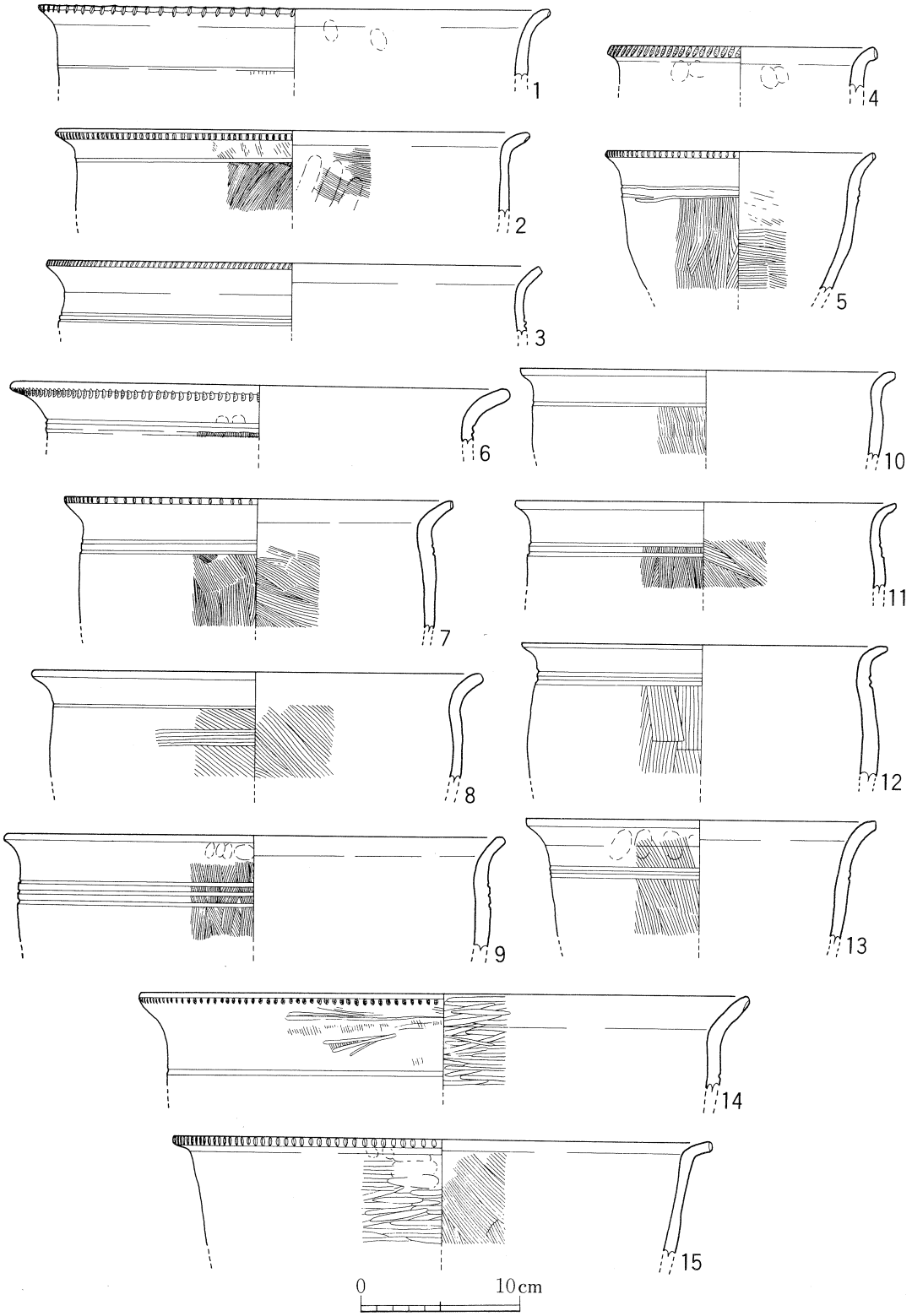
第13図　弥生土器実測図(2)1：4



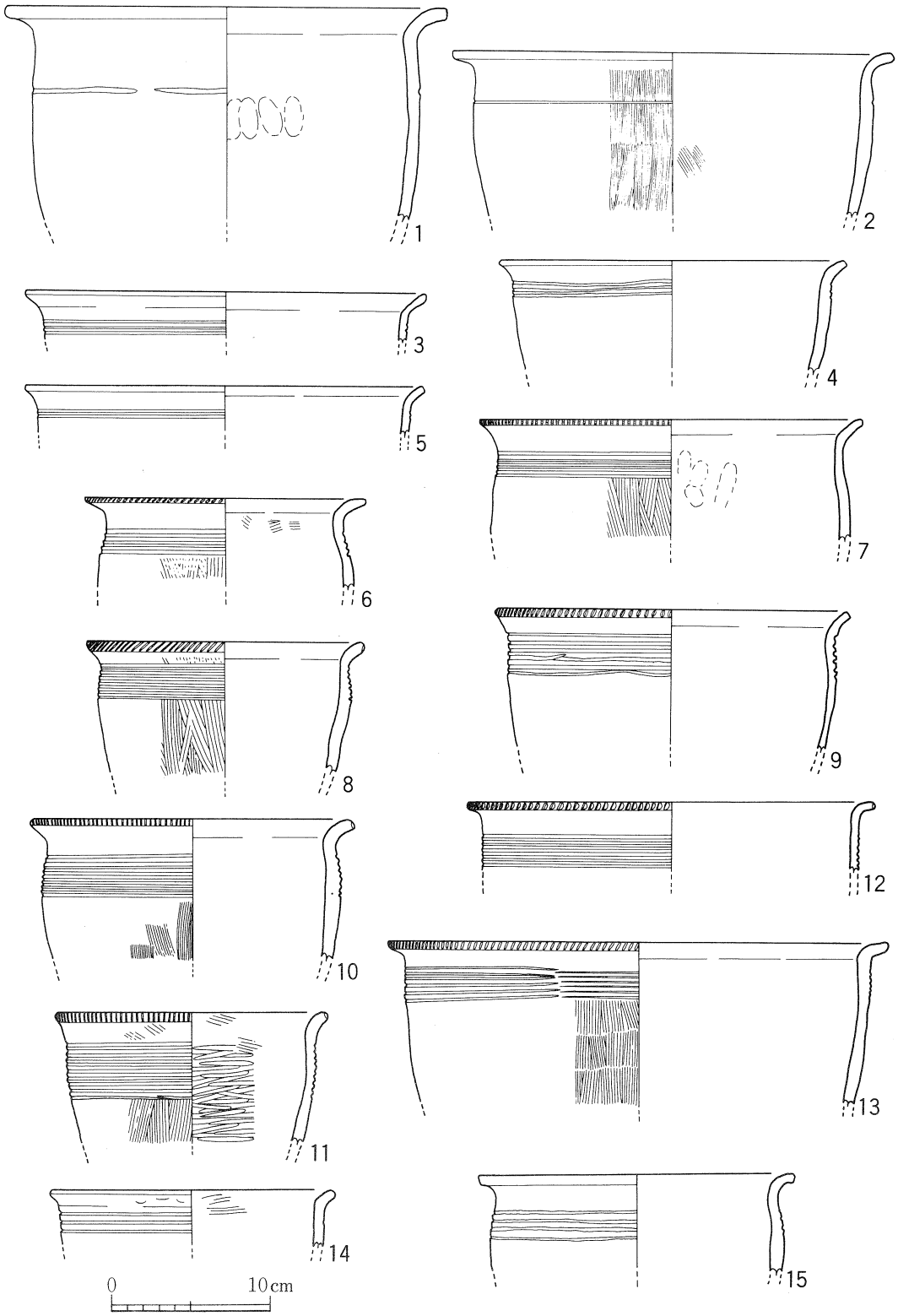
第14図　弥生土器実測図(3)1と2は１:４　その他は１:２



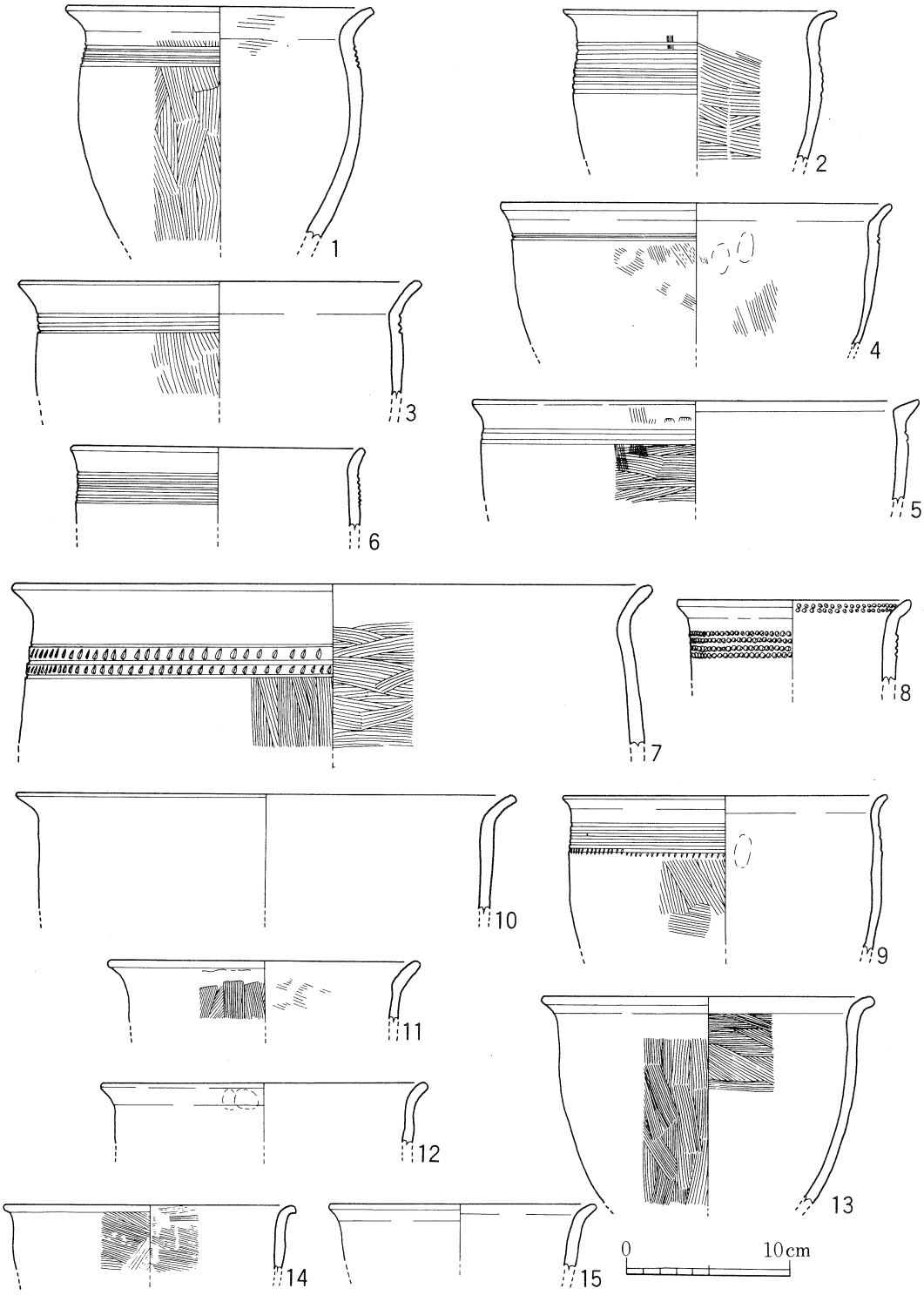
第15図　弥生土器実測図(4) 1：2



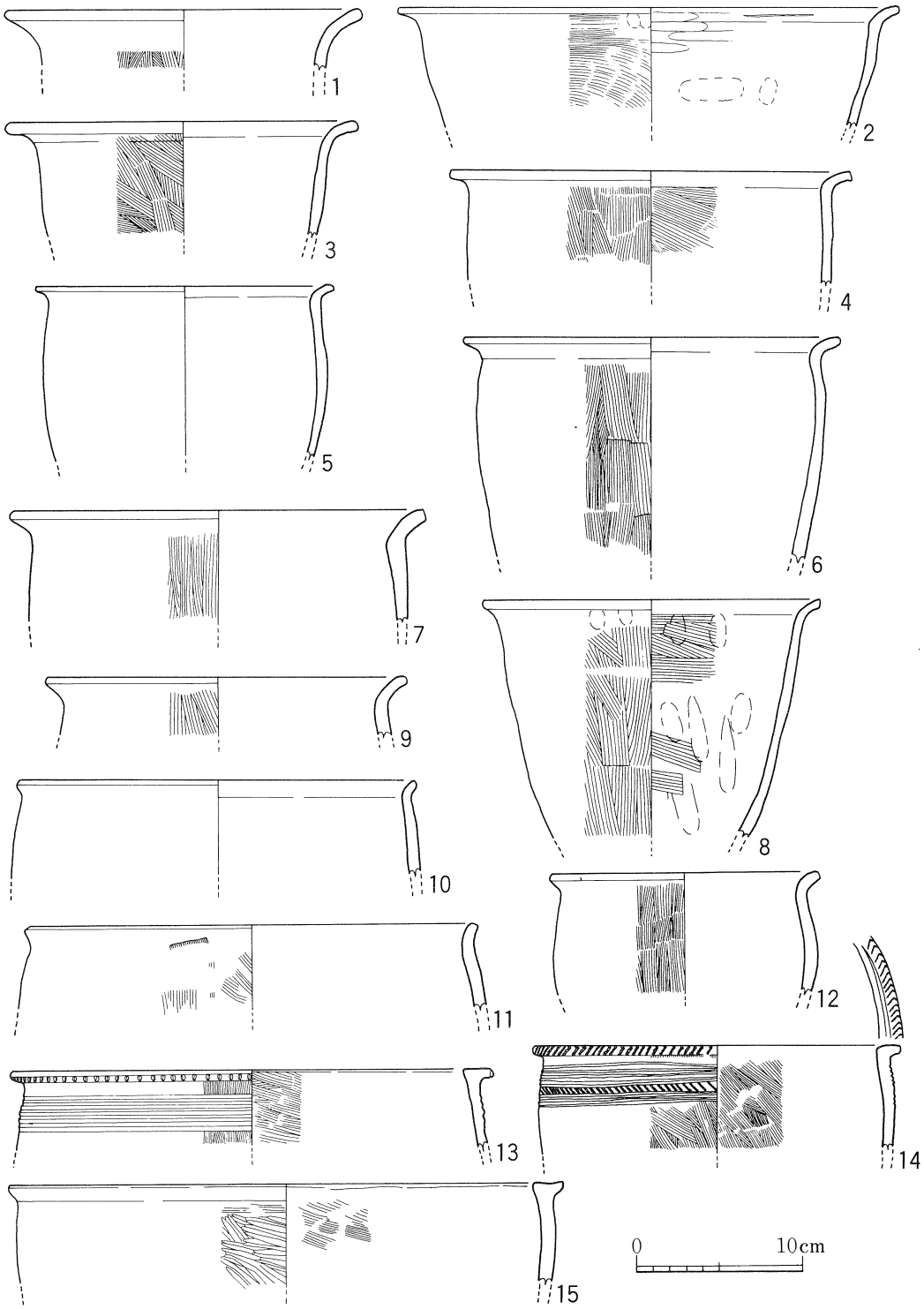
第16図　弥生土器実測図(5) 1：4



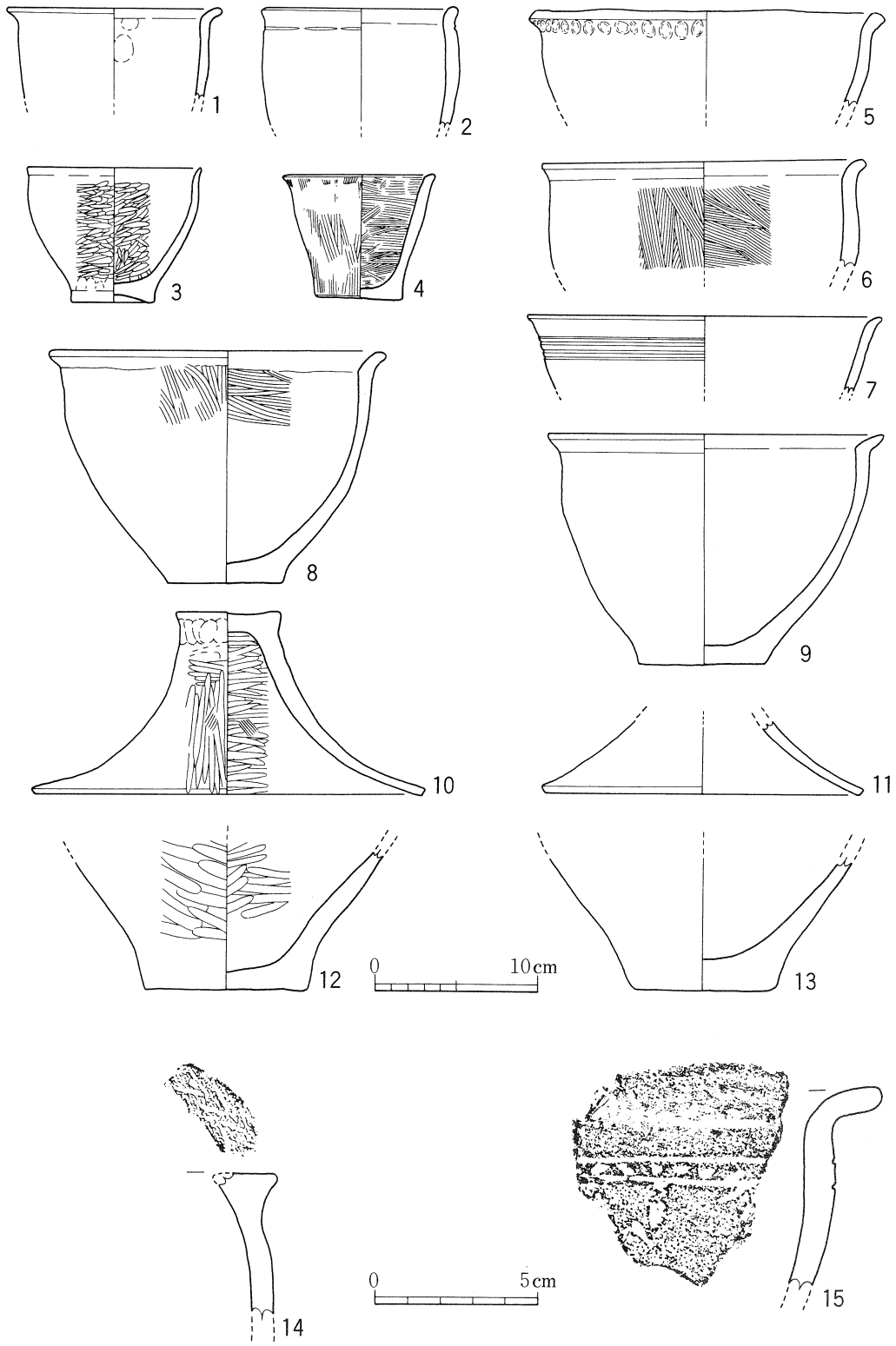
第17図　弥生土器実測図(6)1：4



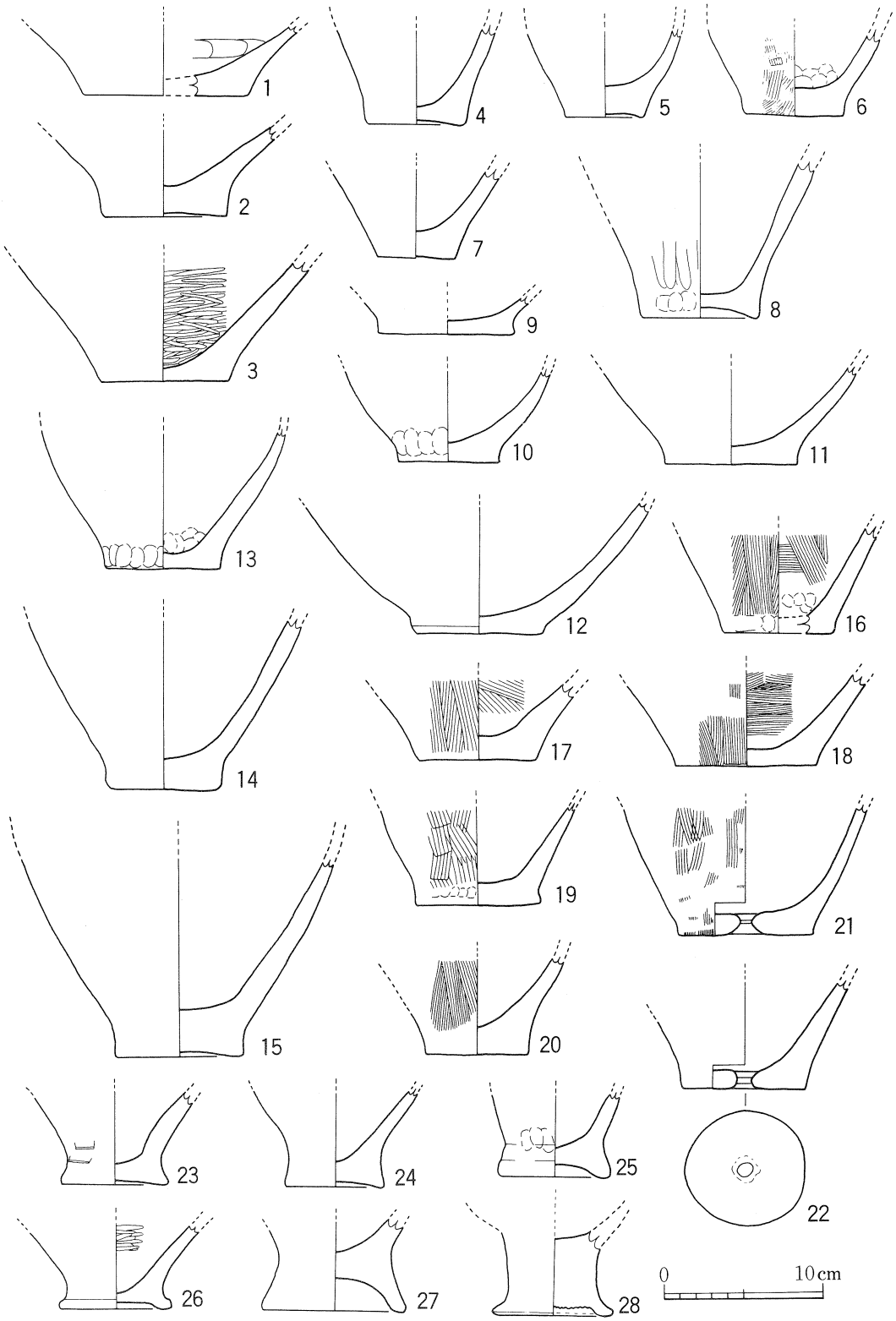
第18図　弥生土器実測図(7)1：4



第19図　弥生土器実測図(8) 1：4



第20図　弥生土器実測図(9)14.15は1：2　その他は1：4



第21図　弥生土器実測図(10) 1：4

中 期 の 土 器

壺形土器，甕形土器，鉢形土器，高坏形土器が出土した。

壺 形 土 器（第22図～第25図　図版18～23）　弥生土器のうち最も器形，文様にバラエティがある。完形の土器が6点あまり出土したが大多数は破片であった。口頸部の形態により大きく9類に分けられる。

Ⅰ類（第22図1　図版18）　口縁部はゆるく外反して頸部から肩部にかけて「ハ」字状に開き，胴部が偏球状に大きく張り出すもので，最大径は胴部中位のやや下に位置する。文様は口縁部にヘラ状工具により刻目文を施し，頸部と肩部にクシ状工具により11条の平行沈線文を2段にめぐらす。調整は内外面ともハケメ調整の後やや雑なヘラ磨き調整を施す。胎土は細かく焼成は良好である。

Ⅱ類（第22図2，3　図版18，19）　口縁部は短く外反し，肩部があまり張り出さず長胴形を呈すもので最大径はほぼ胴部中位に位置する。文様はともに口縁端部にヘラ状工具により刻目文を施し，頸部にクシ状工具により2に20条，3に13条の平行沈線文をめぐらす。また2は沈線文直下に半截竹管状工具による刺突文がみられる。調整はいずれも内外面ともハケメ調整の後ていねいなヘラ磨き調整が施される。胎土は2㎜大の砂粒を含み，焼成は良好である。

Ⅲ類（第22図4，5　図版18）　やや小形の土器で頸部が円筒状に直立して，口縁部は急に開く。肩部はあまり張り出さず長胴形を呈すものと思われる。文様は5の口縁端部にヘラ状工具による刺突文がみられるほか，いずれも頸部から胴部にかけてクシ状工具による平行沈線文，波状文あるいはヘラ状工具による刺突文などで飾られる。調整はいずれも内外面にハケメが施される。胎土は2㎜大の砂粒を含み，焼成は良好である。またともに外面に炭化物が付着する。

Ⅳ類（第23図・第24図1～7，12　図版20，21）　口縁部が大きく朝顔状に開くものである。頸部は円筒状を呈すものと思われる。口縁端部の形態によりさらに2つに分けられる。

$Ⅳ_1$類（第23図1～10　図版20）　口縁端部が逆「L」字状に屈折し広い面をなすもので，口縁部内外面が斜格子文，凹線文など多様な文様で飾られる。第23図1～3は口縁部外面にクシ状工具による斜格子目文あるいは山形文が施され，1は口縁部内面に指頭圧痕を有する貼付突帯文をめぐらせ，2はクシ状工具による斜格子文，波状文あるいはヘラ状工具による刺突文などで飾られる。また1の頸部には断面三角形の貼付突帯文が2条みられる。第23図4～6は口縁部外面にヘラ状工具による斜行文あるいは斜格子目文が施され，内面には施文は認められない。また4～6ともに頸部に指頭圧痕を有する貼付突帯文がめぐらされる。第23図7～10は口縁部外面に凹線文をもつものである。7は凹線文のみ施され，8～9は凹線文に加えヘラ状工具による刻目文あるいは羽状文が施され，10は円形浮文が貼付される。また10は口縁部と頸部の境に5条の凹線文が施される。調整はいずれも口縁部にヨコナデ調整，頸部内外面にハケメ調整が施され，第23図6の内面にはヘラ磨

き調整が認められる。いずれも胎土は細かく，焼成は良好である。

Ⅳ$_2$類（第23図11～18・第24図１～７，12　図版20，21）　口縁端部が肥厚して平坦面をなすものである。口縁部，頸部，胴部には平行沈線文，刻目文，斜格子文，鋸歯文，突帯文，刺突文などで飾られるものが多いが，凹線文が施されるものや無文のものもある。第23図11～13・第24図12は口縁端部に文様が施されないものである。第23図13は頸部に指頭圧痕を有する貼付突帯文がめぐらされ，第24図12は肩部があまり張り出さず胴部が長胴形を呈するもので胴部最大径付近にヘラ状工具による刺突文が認められる。第23図14～18・第24図１～３は口縁部内外面を斜格子文，波状文などで飾るものである。第23図14～16は口縁部外面にクシ状工具により斜格子文，鋸歯文が施される。また16の内面にはクシ状工具による波状文と竹管文が施され，14は口縁部上下端にヘラ状工具により刻目文を入れ，内面にはクシ状工具により斜格子文が施される。第23図17，18・第24図１～３は口縁部外面にヘラ状工具により刻目文，斜行文，あるいは斜格子目文が施されるものである。第23図18の内面にクシ状工具による刺突列点文がみられるほかは内面には施文は認められない。また第23図18・第24図１，２は口頸部に指頭圧痕を有する貼付突帯文がめぐり，第24図２の肩部にクシ状工具による刺突列点文が認められる。第24図４～７は口縁端部が肥厚して平坦をなし端部が内傾するもので，凹線文が施される。６，７は口縁部外面に凹線文のみを施すもので，４は凹線文に加えてヘラ状工具により刻目文を入れ，５は円形浮文を貼付する。また６，７頸部にも凹線文が施される。調整はいずれも口縁部にヨコナデ，頸部内面にハケメ，ナデが施される。またいずれも胎土は細かく，焼成は良好である。

Ⅴ類（第24図８，９　図版21）　頸部がやや直線的に外反する直口の壺形土器である。８は口縁部に棒状工具により２列の列点文が施される。９は口縁端部が肥厚し，平坦面をもつもので頸部に指頭圧痕を有する貼付突帯文をめぐらす。調整は概ね内外面ともハケメ調整が施され，胎土は細かく，焼成は良好である。

Ⅵ類（第24図10，11　図版21）　無頸の壺形土器である。口縁部は端部が肥厚して上部に平坦面をもち，胴部は球状に張り出すものと思われる。10は無文であるが，11は口縁端部にヘラ状工具により刻目文を施し，その下方に指頭押圧による刻目突帯文を貼付する。調整は11の内面にハケメ調整，指頭圧痕が認められる。いずれも胎土は細かく，焼成は良好である。

Ⅶ類（第25図１，２　図版22，23）　短頸の壺形土器である。口縁部は「く」字形に屈曲し，胴部は球状に張り出す。口縁端部は２が丸く終わるのに対し，１は狭い平坦面をなす。いずれも文様は施されない。調整は２が胴部内外面ともハケメが施され，１がハケメの後念入りなヘラ磨き調整が施される。なお，１の内外面には漆と思われる黒茶色の樹脂が全面に塗布されている。

Ⅷ類（第25図３　図版22）　複合口縁の壺形土器で１点のみ図示できた。頸部は「コ」字形に屈

曲し，端部は上下に拡大し内傾する複合口縁である。肩部はあまり張り出さない。文様は口縁部外面にクシ状工具による5条の平行沈線文をめぐらせ，頸部にはヘラ状工具による2条の平行沈線文と斜行文を施す。調整は口縁部ヨコナデ調整，胴部上半は内外面ともにハケメ調整，ナデ調整が施される。胎土は細かく，焼成は良好である。

その他の壺形土器（第24図13・第25図4～12　図版22，23）　口縁部が欠損するためⅠ～Ⅷ類のいずれに属するか不明であるが文様など特徴的なものを図示した。第24図13は胴部がかなり張り出すもので，口縁部は漏斗状に開くものと思われる。文様は頸部に刻目突帯文を2条貼付し，胴部上半にクシ状工具による平行沈線文，鋸歯文が4段にわたって交互に配され，さらに最下段の平行沈線文直下にはクシ状工具による列点文が施される。

第25図4，5は，頸部が直立気味に外反し，口縁部が大きく外反するものである。ともに頸部には凹線文，4の口縁内部には波状文，5の胴部上半には平行沈線文と波状文が交互に2段施されている。

第25図6，7はともに逆「ハ」字形に外傾または外反するもので，直口壺の頸部の可能性がある。6には4条，7には3条の貼付突帯文がめぐらされ，7は突帯文に直交する形で粘土紐を貼付する。また6は突帯文下方に指頭圧痕を有する貼付突帯文がめぐらされる。

第25図9～12はいずれも胴部の小片で文様が施されるものである。9は3条の凹線文が残る。10はヘラ状工具により三角形の刺突文が施されその下方に円形浮文を貼付するものである。11はヘラ状工具による縦，横2条の平行沈線文で格子文状に施される。12はクシ状工具による渦文状の文様を施しその直下に列点文が施される。弥生土器の文様としては例をみないものであるが，胎土などが縄文土器に似つかわしくなく，また下部の列点文など弥生中期の土器の列点文に似ることから一応弥生土器に含めた。

甕形土器（第26図～第29図　図版23～28）　大多数が破片のため口縁部の形態により大きく5類に分けた。

Ⅰ類（第26図1～9　図版23～25）　口縁部が短く外反するもので器形，文様構成など前期甕形土器の要素を受けつぐものである。口縁部の形態によりさらに3つに分けた。

$Ⅰ_1$類（第26図1～4　図版23，24）　口縁部がゆるく短く外反し胴部はあまり張り出さず直線的にすぼむ器形を呈す。第26図4は無文であるが，同図1～3は口縁端部にヘラ状工具により斜行状の刻目文を施し，頸部にクシ状工具により多条の平行沈線文を施すものである。同図3はそれらの文様に加えて平行沈線文直下にクシ状工具により波状文をめぐらせる。調整は概ね内外面ともにハケメ調整が施されるが，ハケメ調整の後外面胴部下半と内面全面にヘラ磨き調整を施すものがある（同図3）。胎土は3を除き2～3㎜大の砂粒を含み，焼成はいずれも良好である。

Ⅰ$_2$類（第26図５～７　図版23）　口縁部は短く若干外方に折れるもので胴部が直線的に細くすぼむものと胴部がやや張るものとがある。文様は６は無文であるが５，７は頸部にクシ状工具により平行沈線文を施すものである。調整は内外面ともにハケメ調整が施され，胎土は２～３㎜大の砂粒を含み，焼成は良好である。

Ⅰ$_3$類（第26図８，９　図版25）　口縁部は大きく折れて外反し胴部が張り気味のもので，胴部径が口径を凌ぐものもみられる。９は口縁端部に板状工具により刻目文を施し，頸部にクシ状工具により平行沈線文をめぐらすもので，８は無文の土器である。調整は外面にハケメ調整，内面にナデ調整が施され，胎土は２㎜大の砂粒を含み，焼成は良好である。

Ⅱ類（第26図10～16・第30図19　図版24，25，28）　口縁部が逆「L」字形を呈し，上部に平坦面をもつものである。胴部はあまり張り出さないものと，口径近くあるいはそれ以上に大きく張り出すものとがある。文様構成は無文のものが大半であるが，口縁端部にヘラ状工具により刻目文を施し，頸部にクシ状工具により多条の平行沈線文をめぐらせるものがある。また第30図19は頸部の平行沈線文に加えてヘラ状工具により三角形の刺突文を施す。調整は概ね内外面ともにハケメ調整が施されるが無文の土器に成形，調整ともに雑なものがみられる。いずれも胎土は２～３㎜大の砂粒を含み，焼成は良好である。

Ⅲ類（第27図１～20・第28図１～３　図版25，26）　中期甕形土器のうち最も量が多い。口頸部が「く」字状に屈曲するもので，胴部は大きく球状に張り出し口径を上回るものと，あまり張り出さないものとがある。いずれも器壁が薄く，胎土は細かく焼成は良好である。口縁部の形態によりさらに３つに分けられる。

Ⅲ$_1$類（第27図１～11　図版25）　口縁端部に丸みをもつもので，内面屈曲部に丸みをもつもの（１，６～11）とやや稜の立つもの（２～５）とがある。文様は施されていない。調整は概ね内外面ともにハケメ調整が施されるが，内面にヘラ磨き調整を施すものがみられる（８，９）。

Ⅲ$_2$類（第27図12～18　図版25，26）　口縁上端部がつまみ出された形態を呈するものである。文様は口縁端部にヘラ状工具により刻目を施すもの（13，15）が若干みられる他は施文は認められない。調整は内外面ともにハケメ調整が施されるものと思われる。

Ⅲ$_3$類（第27図19，20・第28図１～３　図版26）　口縁端部が若干肥厚して狭い平坦面をもつものである。第28図３は口縁部にヘラ状工具により斜格子状の刻目文を施し，頸部に指頭圧痕を有する貼付突帯文をめぐらす。第28図１はヘラ状工具により口縁端部に刻目文，胴部最大径付近に刺突文を施すものである。

Ⅳ類（第28図５～16　図版26，27）　口縁部が強く「く」字状に屈曲して胴部は大きく球状に張り出すもので，Ⅲ類に比べ口縁端部がやや肥厚する土器である。口縁端部の形態によりさらに４つ

に分けられる。

Ⅳ$_1$類（第28図５～７　図版26，27）　口縁部は短いが強く外反するもので，端部は丸みをもつ。内面屈曲部に稜は立たない。いずれも口縁部から肩部にかけてのもので施文はみられず，調整は内外面ともにハケメ調整が施される。胎土は細かく，焼成は良好である。

Ⅳ$_2$類（第28図８～10　図版27）　口縁部が肥厚し比較的広い平坦面をもつもので，内面屈曲部に明瞭な稜が立つ。９の頸部から胴部上半にかけてクシ状工具による多条の平行沈線文がみられる。調整は内外面ともにハケメ調整が施され，胎土は細かく，焼成は良好である。

Ⅳ$_3$類（第28図11，12　図版27）　口縁部は上端部がつまみ出されたような形態を呈し，狭い平坦面をもち，Ⅳ類の中では最も器壁の薄いもので，施文は認められない。調整は内外面にハケメ調整，ナデ調整が施されるものと思われる。胎土は細かく，焼成は良好である。

Ⅳ$_4$類（第28図13～16　図版27）　口縁部の器壁が最も厚く，端部は肥厚して広い平坦面をもつ。内面屈曲部に稜は立たない。文様は13，14の口縁部外面にヘラ状工具による斜行文が施され，16は口縁部外面上下端にヘラ状工具による刻目文が施される。また15，16ともに頸部に指頭圧痕を有する貼付突帯文がめぐる。いずれも調整は内外面にハケメ調整が施されるものと思われ，胎土は細かく，焼成は良好である。

Ⅴ類（第29図１～５　図版27）　口縁部は内湾気味に立ち上がり，端部が肥厚して上部に平坦面をもつものである。胴部はやや張り出すが口径に対し器高が低いものと思われる。２，４は口縁部下に刻目突帯文を貼付するもので，４は胴部にヘラ状工具により刺突文が施される。５は口縁部下に１条，３は２条の貼付突帯文がめぐらされ，３は口縁端部にヘラ状工具により刻目文が施される。１は口縁部下に５条の凹線文が施される。調整は４の外面にハケメ調整が認められるが，その他は摩滅が著しく不明である。胎土は細かく，焼成は良好である。

Ⅵ類（第29図６～18　図版27，28）　口縁部は「く」字状に折れ，端部が肥厚して上下に拡張するもので，外面に凹線文がめぐらされる。胴部上半まで残る破片をみるとあまり張り出さず長胴形を呈すものと思われ，器壁はいずれも薄い。胎土は細かく，焼成は良好である。口縁部の形態によりさらに２つに分けられる。

Ⅵ$_1$類（第29図６～13　図版27，28）　口縁端部がやや小さく上下に拡張するもので，１～３条の凹線文がめぐらされる。文様は口縁部に凹線文のみのもの（６，７，９～11），とそれに加えてヘラ状工具により刻目文を施すもの（８，12，13）とがあり８には円形浮文が貼付される。調整は概ね内外面ともにハケメ調整が施されるものと思われる。

Ⅵ$_2$類（第29図14～18　図版28）　口縁端部がやや大きく上下に拡張して明瞭な平坦面をもつものでⅥ$_1$類と比べやや器壁が厚い。文様は口縁部に凹線文のみをもつもの（14～17）と，それに加

えてヘラ状工具により刻目文を施すもの（18），頸部に指頭圧痕を有する貼付突帯文をめぐらすもの（16～18）がみられる。調整は概ね内外面ともにハケメ調整が施されものと思われる。

Ⅶ類（第29図19～21　図版28）　口縁部は端部が上下に拡張し複合口縁を呈する。文様は口縁部外面に凹線文のみをもつもの（19，20），とそれに加えてヘラ状工具による刻目文，円形浮文を施し，頸部に指頭圧痕を有する貼付突帯文をめぐらすもの（21）がみられる。調整は内外面ともにハケメ調整が施され，胎土は細かく，焼成は良好である。

鉢形土器（第30図１～５　図版28）　量的には少ないが全体の器形を窺えるものが数点出土した。器形により大きく３類に分けた。

Ⅰ類（第30図１～３）　口縁部が「く」字状に屈曲し外反するものである。１は胴部が張らず口縁端部に小さな平坦面をもつ。施文は認められず，調整は内面にヘラ磨き調整がみられる。胎土は２㎜大の砂粒を含み，焼成は良好である。２は胴部がかなり張り頸部には２個一対の小孔が穿たれている。調整は内面に念入りなヘラ磨きが施され，胎土は細かく焼成は良好である。３は口縁部が逆「L」字状を呈し，上部に平坦面をもち，胴部は直線的に細くすぼむものである。摩滅が著しく調整は不明であるが，胎土は２㎜大の砂粒を含み，焼成は良好である。

Ⅱ類（第30図４，５）　口縁部は内傾し端部が肥厚して上部に平坦面をもつものである。いずれも摩滅が著しく，文様，調整などは不明である。胎土は細かく，焼成は良好である。

Ⅲ類（第30図18）　折り返しの口縁部をもつもので，頸部に刻目突帯文を貼付しその直下に多条の凹線文を施す。摩滅が著しく調整は不明である。胎土は細かく，焼成は良好である。

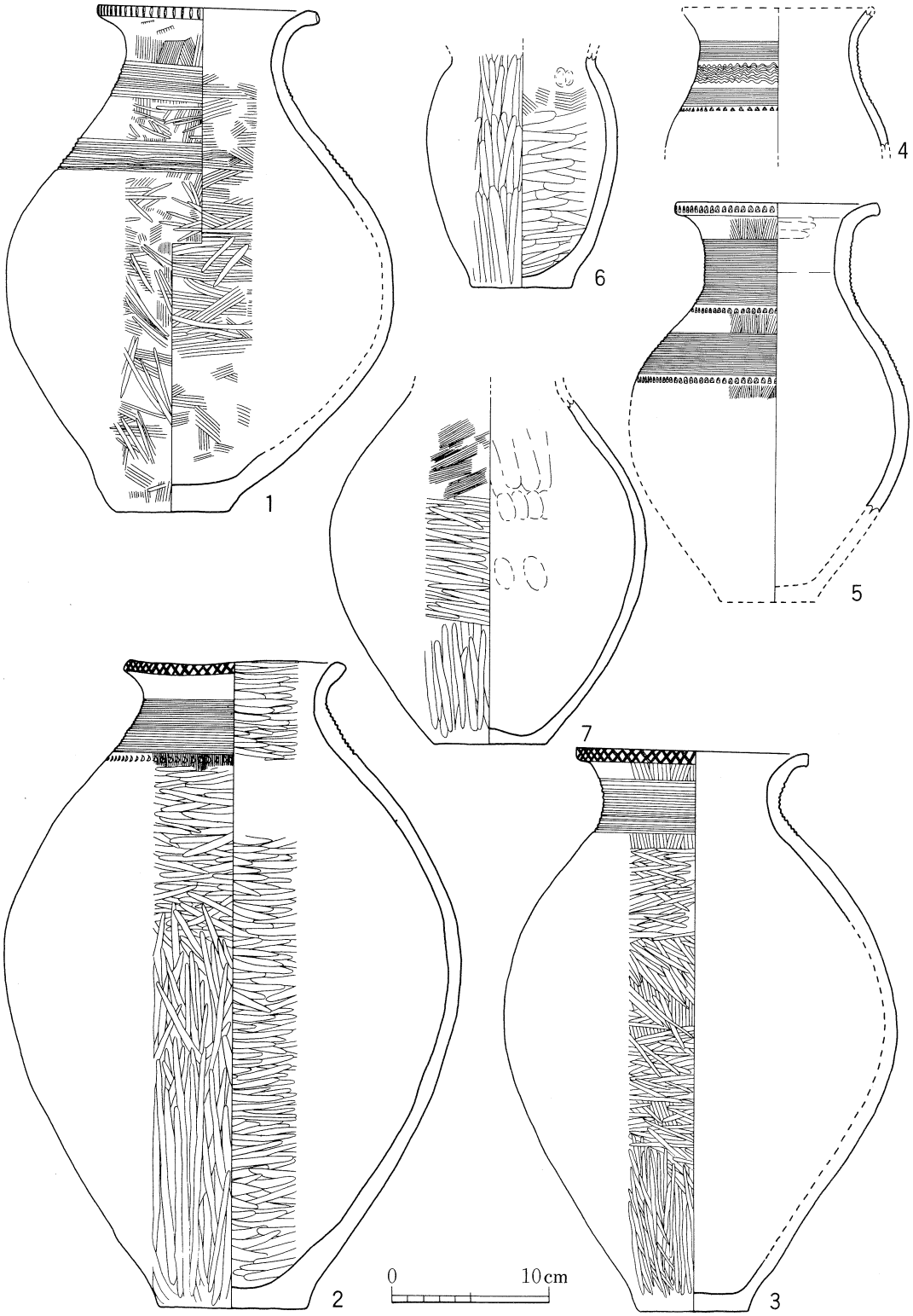
高坏形土器（第30図６～17　図版28）　完形品はみられずすべて破片の状態で出土したため全形を窺うことはできなかった。坏部の形態により３類に分けた。

Ⅰ類（第30図６～８）　口縁部はやや内湾し端部が肥厚して上部に平坦面をもつものである。口縁端部にヘラ状工具により刻目文を施すもの（７）があるが，摩滅が著しく調整などは不明である。

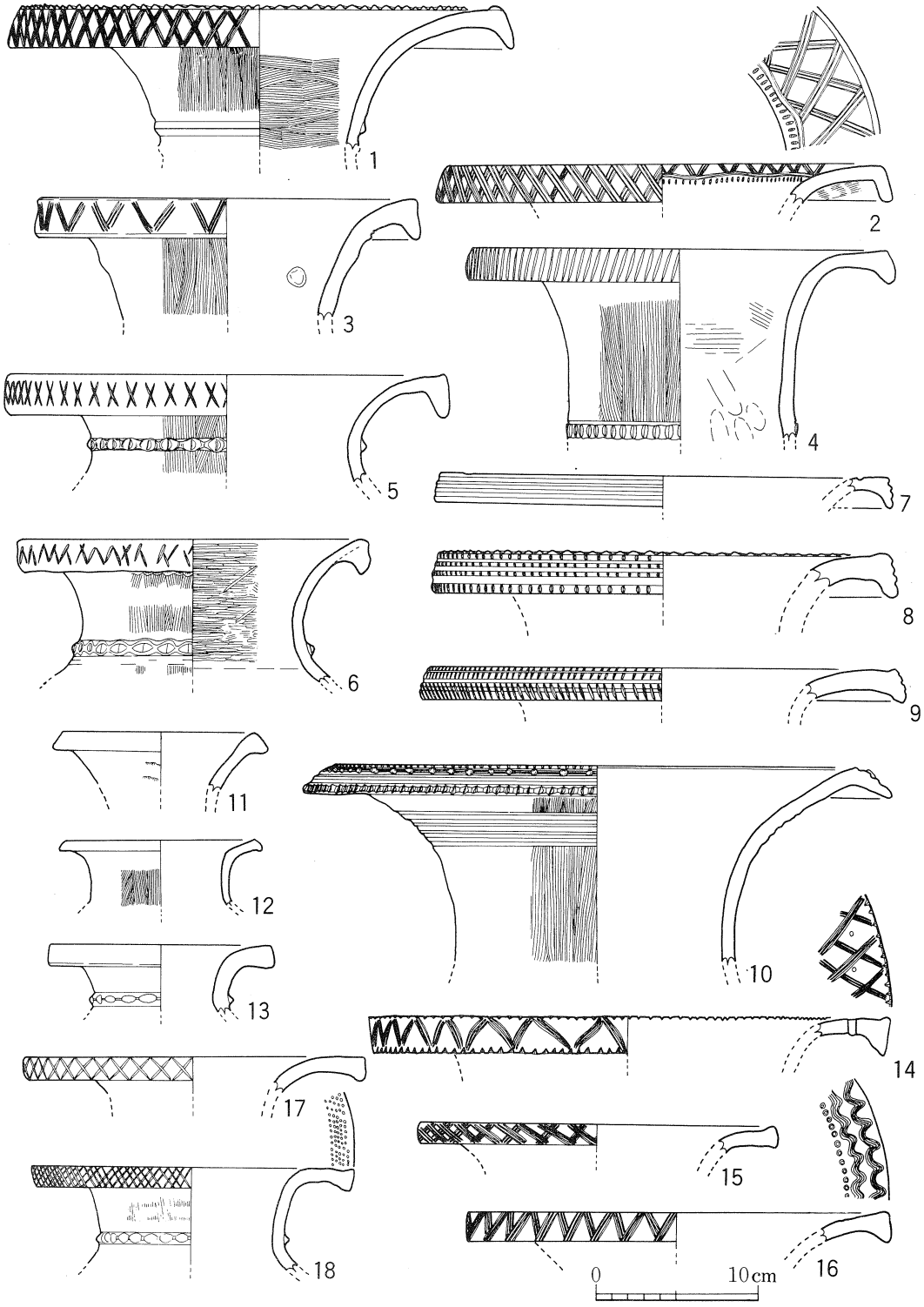
Ⅱ類（第30図９）　口縁部は端部が大きく内外に拡張して「T」字状を呈す。口縁端部にヘラ状工具により刻目文が施され，上部の平坦面に鋸歯文がめぐらされる。調整は外面にハケメ調整が認められる。

Ⅲ類（第30図10）　坏部中ほどで「く」字状に内湾する形態を呈す。坏部上半にヘラ状工具により５条の平行沈線をめぐらせその沈線間に刺突文を施す。調整は内面にハケメ調整が認められる。

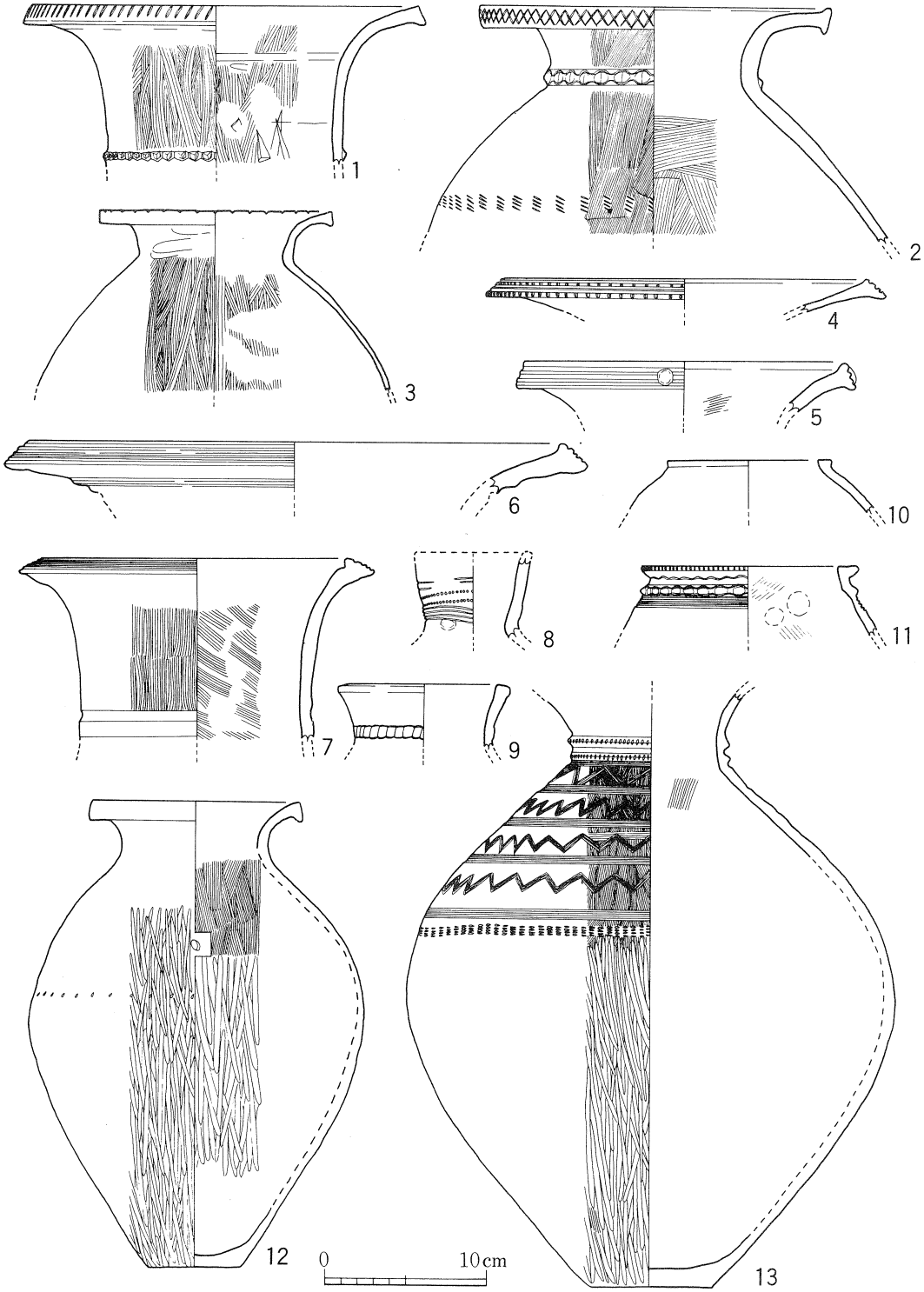
脚部は筒部中程でやや締まり双曲線を描くもの（第30図12，13），筒部が裾部に向かって徐々に開くもの（15，16）などがみられ，12，13，15，16は円板充塡の技法が認められる。文様は筒部に平行沈線文を施すもの（12，13），裾部に凹線文を施し透孔をもつもの（17）がみられる。調整はいずれも外面にヘラ磨きが認められる。胎土は２㎜大の砂粒を含むものもみられるが大多数のもの



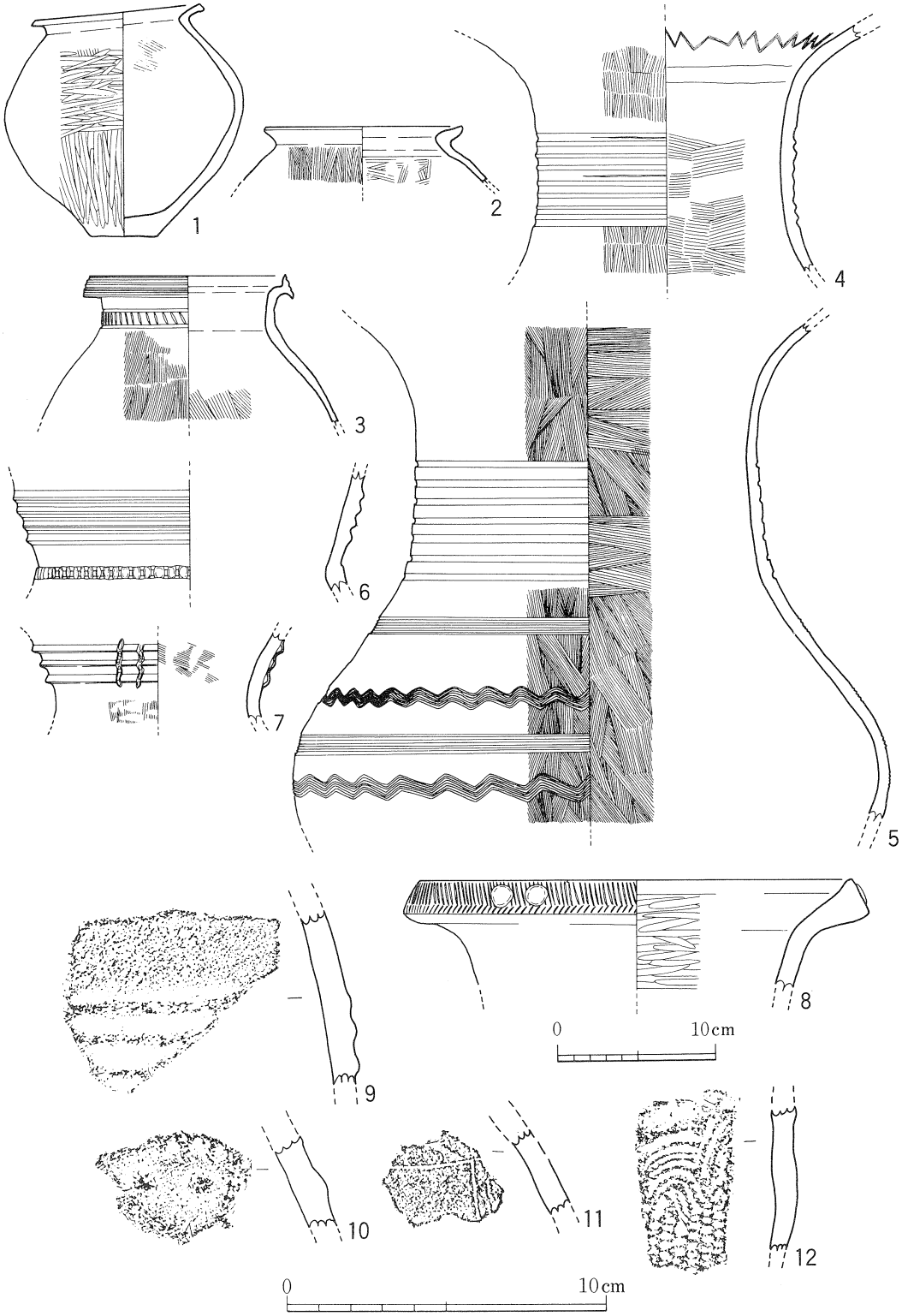
第22図　弥生土器実測図(11) 1：4



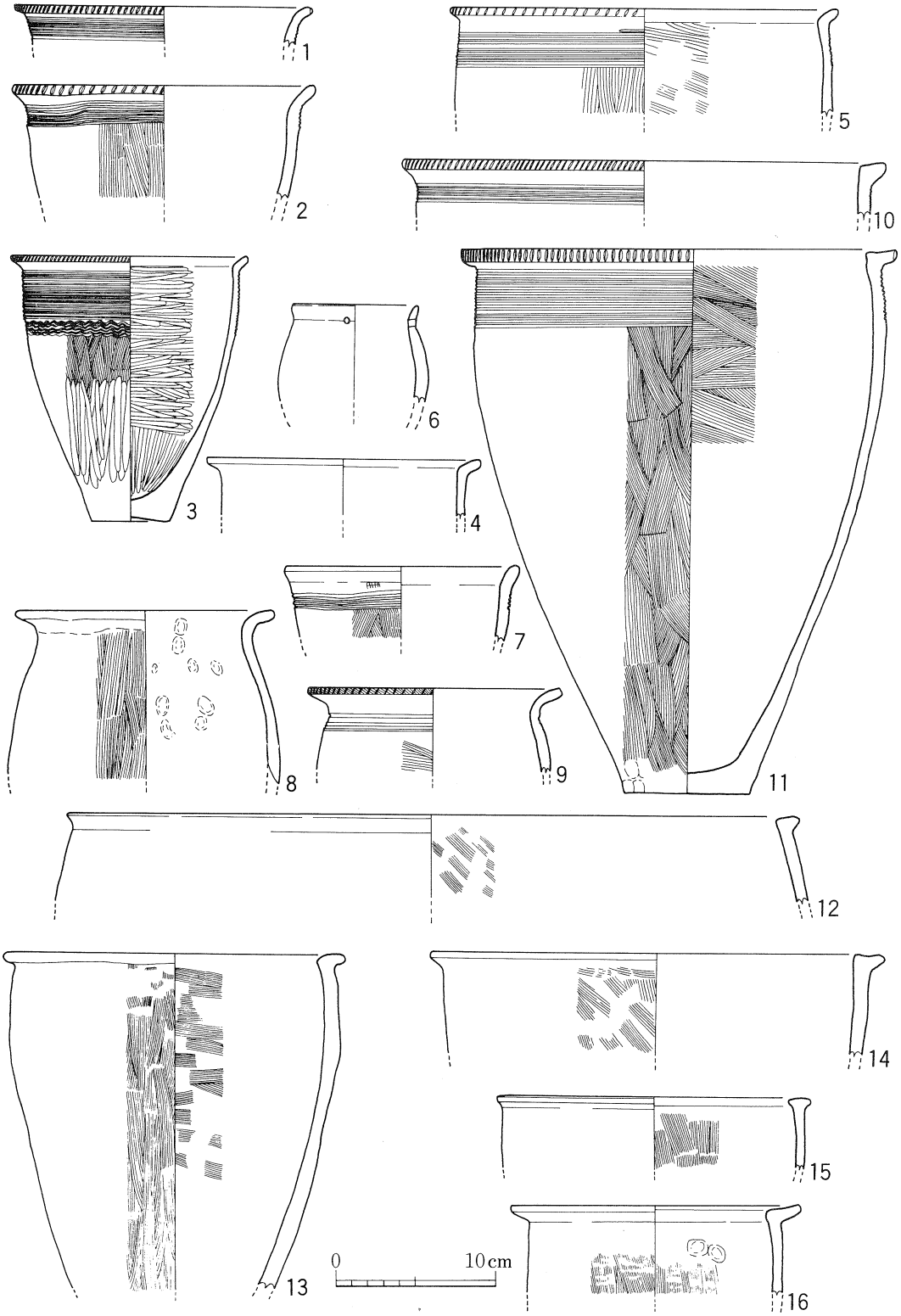
第23図　弥生土器実測図⑿ 1：4



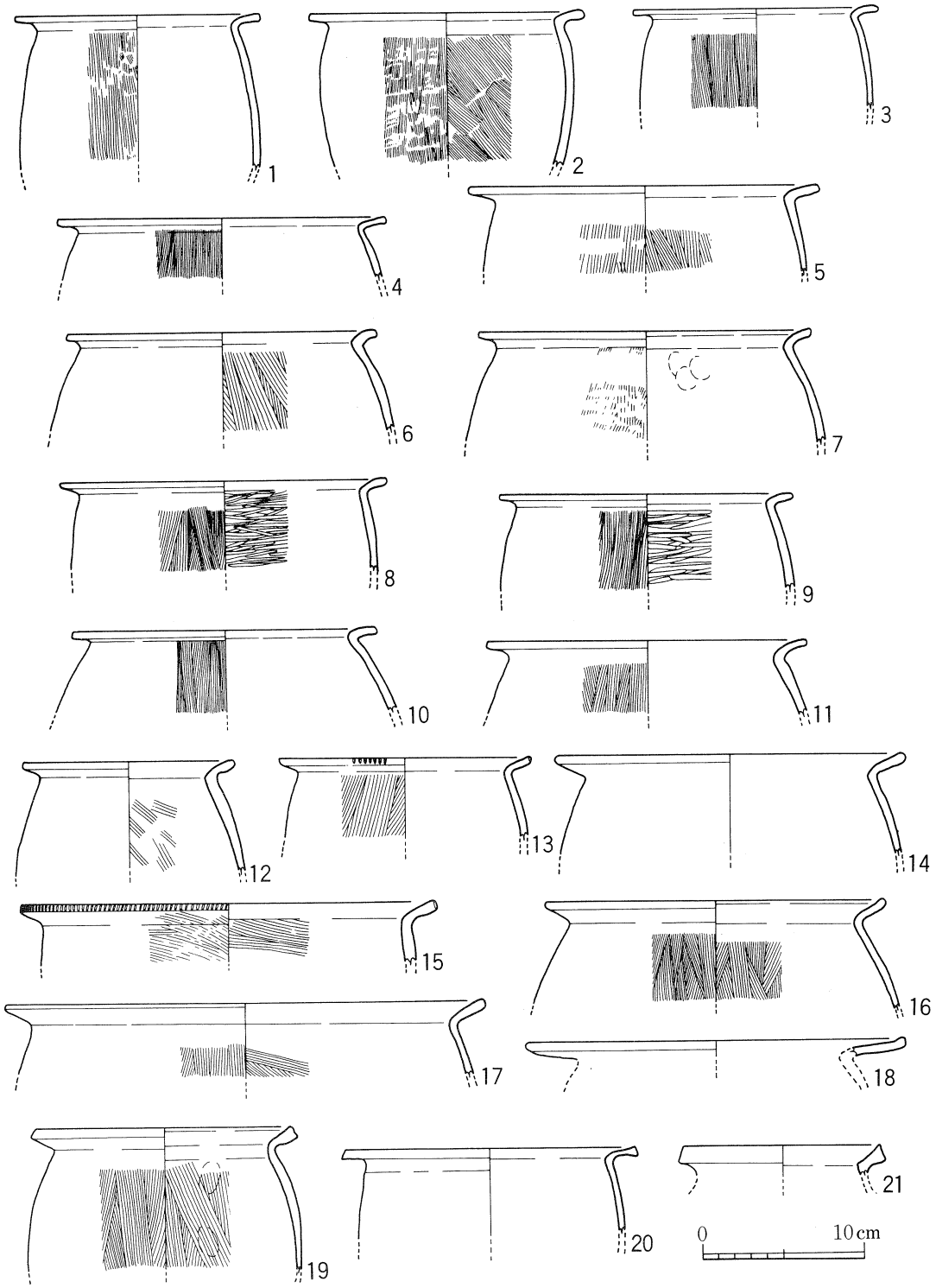
第24図　弥生土器実測図⒀ 1：4



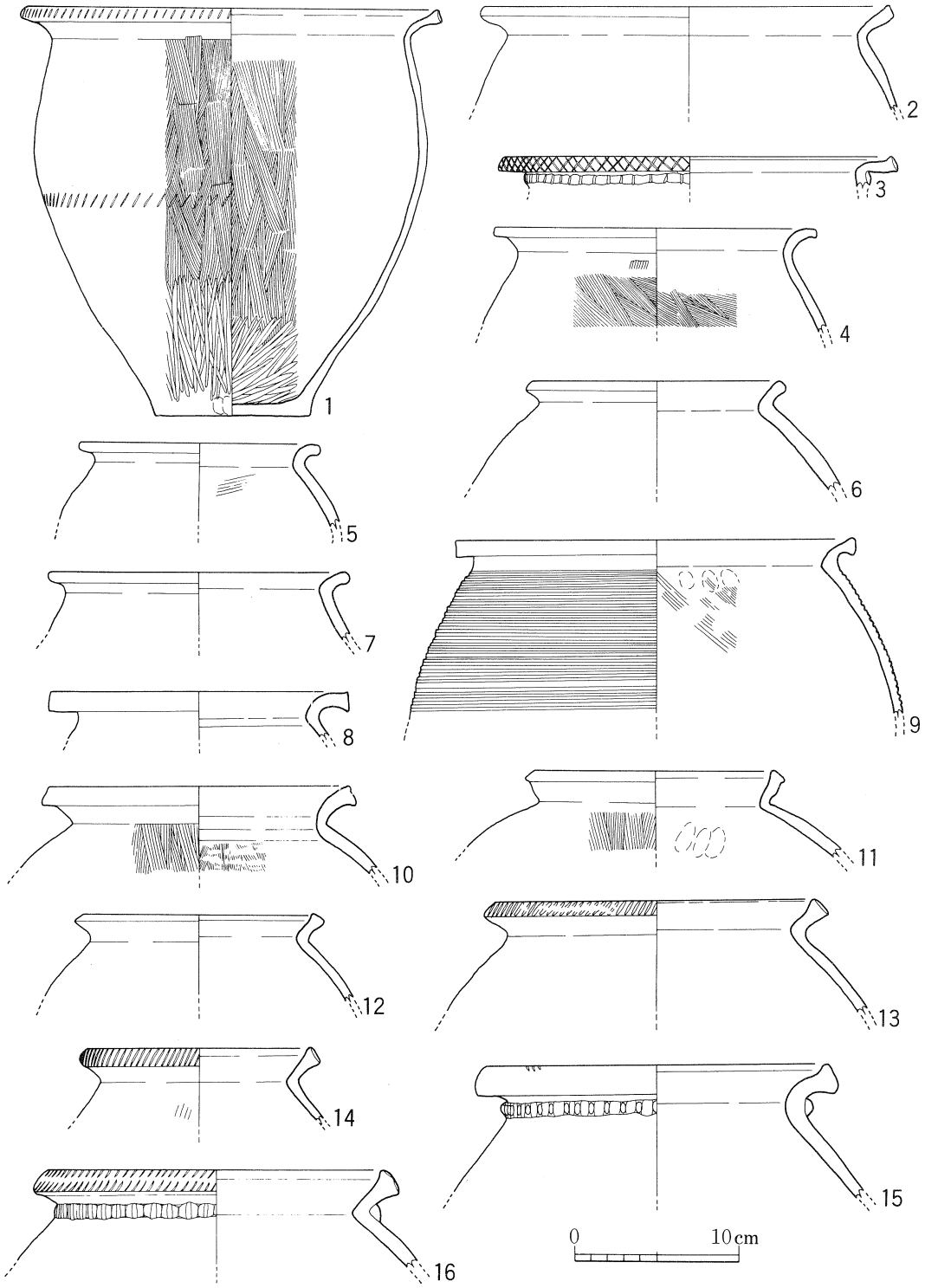
第25図　弥生土器実測図(14)9～12は１：２　その他は１：４



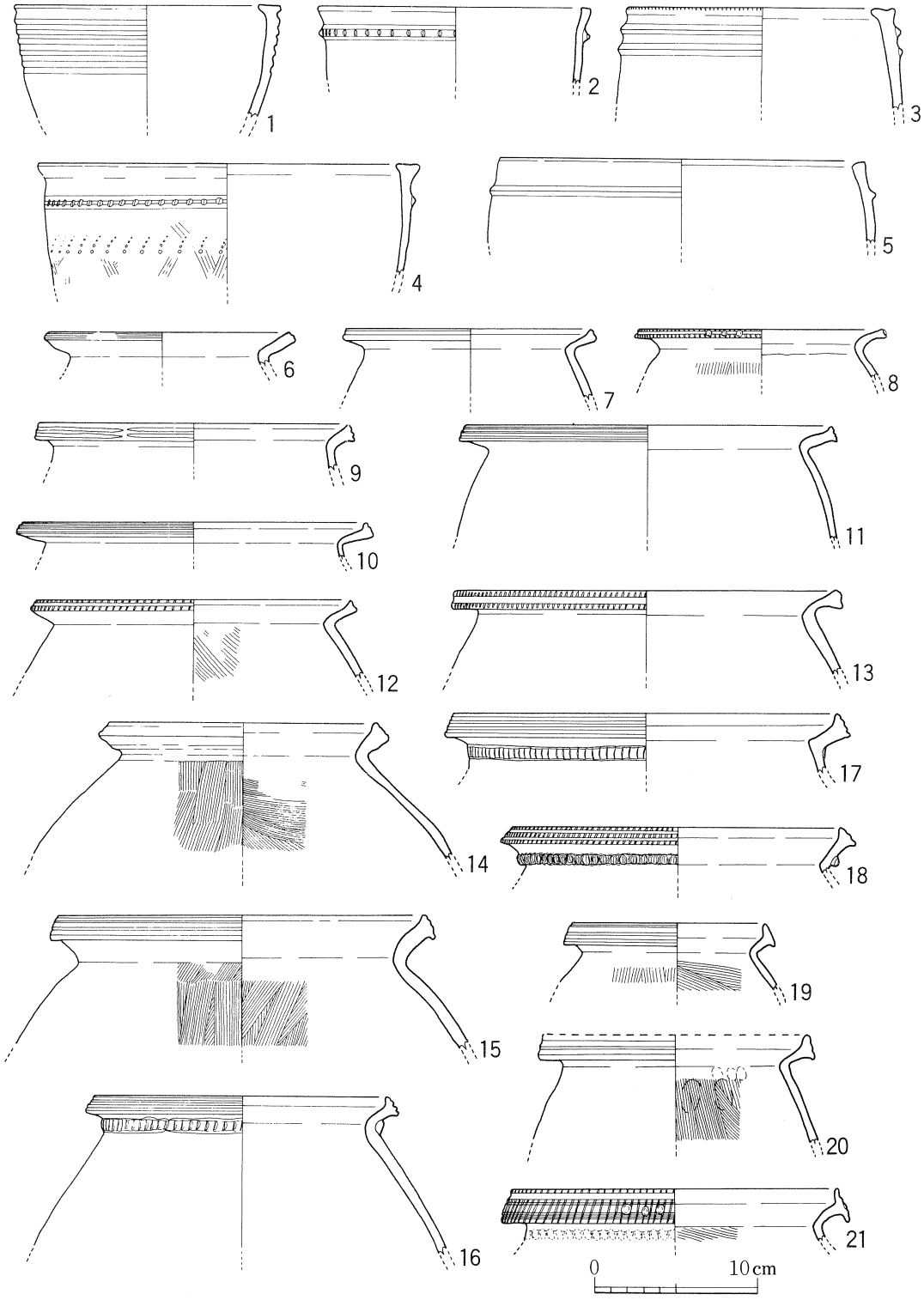
第26図　弥生土器実測図⑮ 1：4



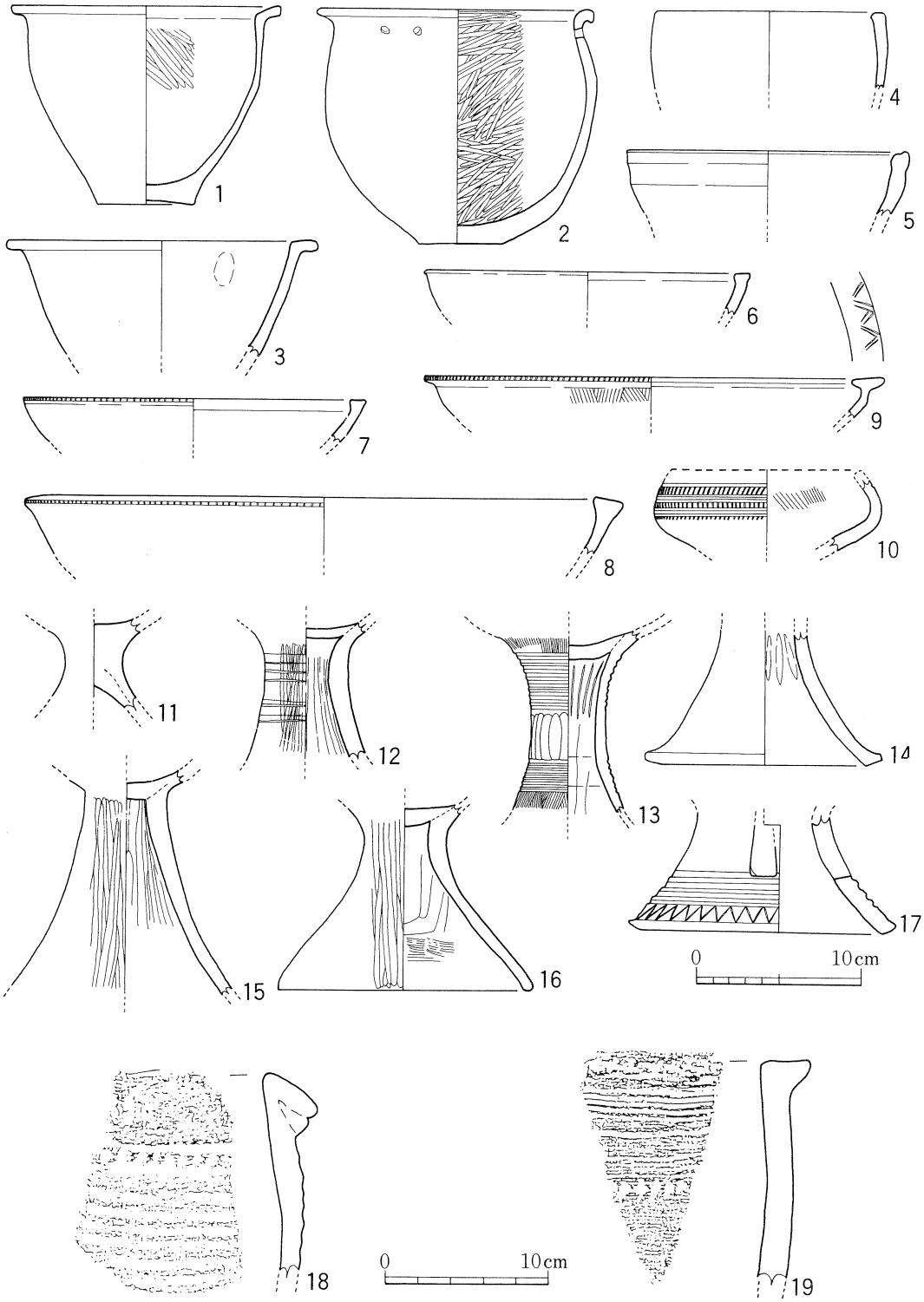
第27図　弥生土器実測図⑯ 1：4



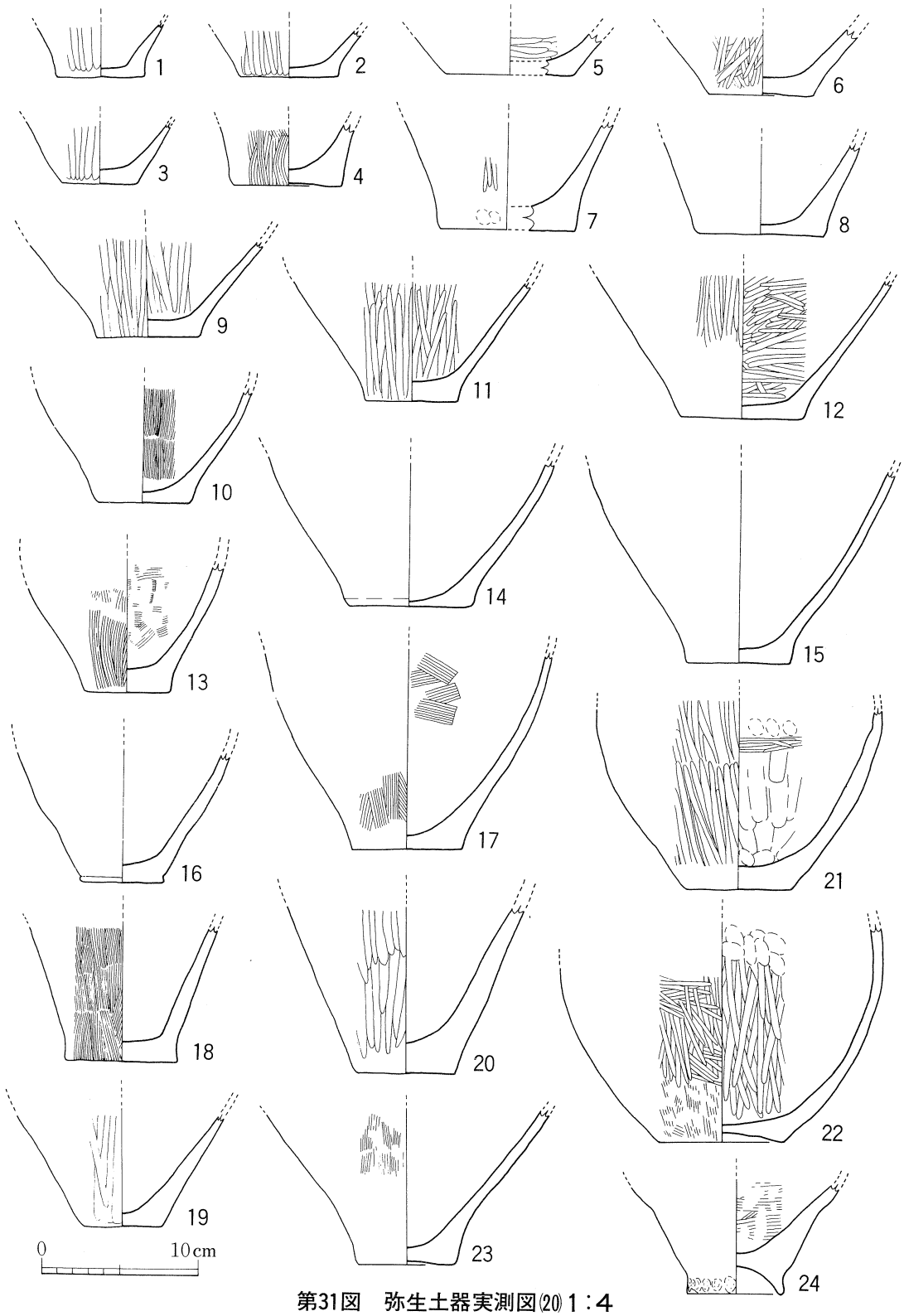
第28図　弥生土器実測図⑰ 1：4



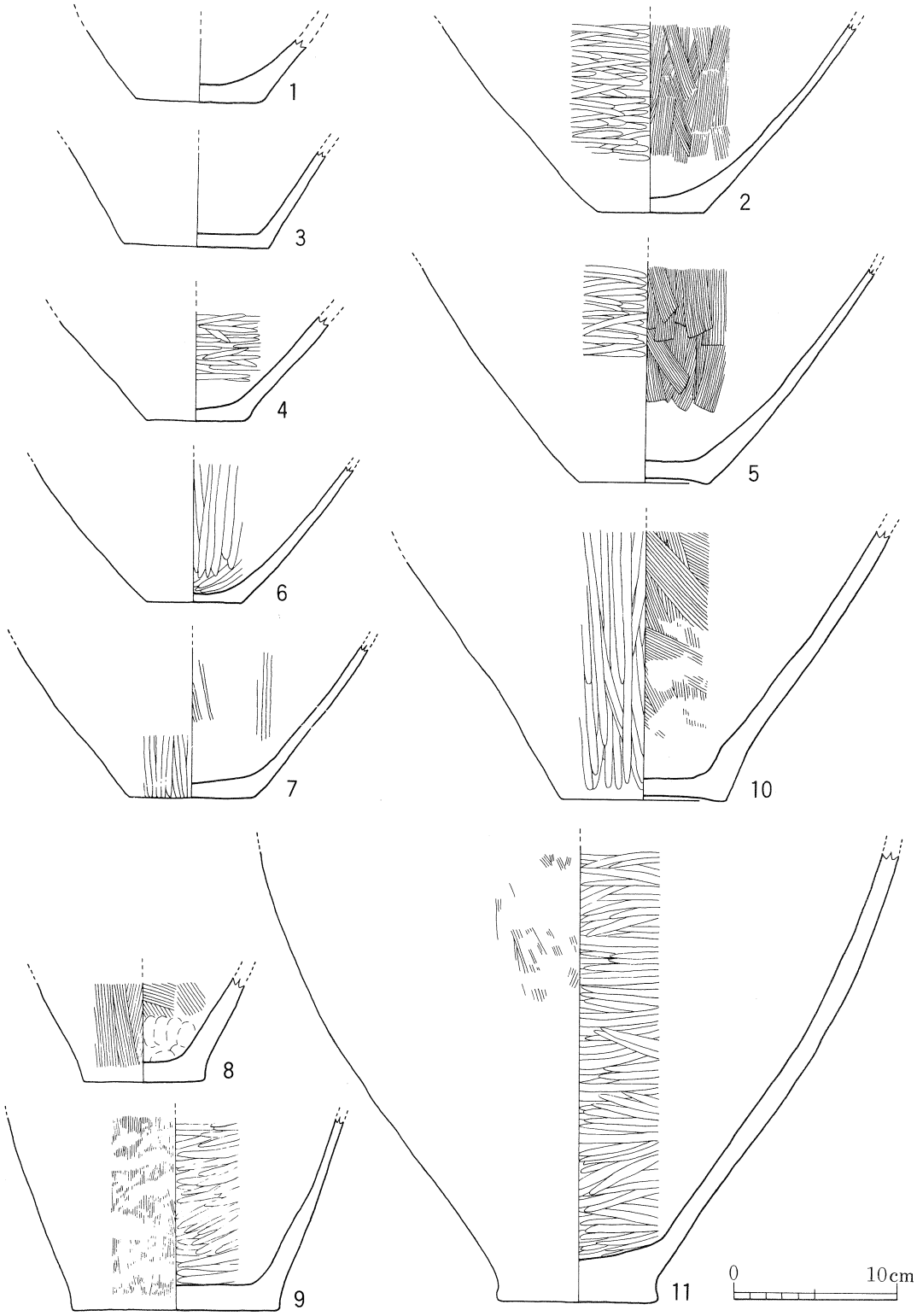
第29図　弥生土器実測図⑱ 1：4



第30図　弥生土器実測図⑲18と19は１：２ その他は１：４



第31図　弥生土器実測図⑳ 1：4



第32図　弥生土器実測図(21) 1：4

は胎土は細かく焼成はいずれも良好である。

底　　部（第31，32図　図版29～31）　中期の土器の底部と思われるものを一括した。いずれも摩滅が著しく調整など明確に認められるものが少ない。小片のためそれぞれの底部がどの類に属するものか判断が困難で，あるいは前期の土器が混っている可能性もある。第31図4，18，20，第32図8は甕Ⅰ類，第31図9，11，12，23は甕Ⅲ類の底部の可能性がある。

後 期 の 土 器

壺形土器，甕形土器などが出土している。これらは第9層から出土したものがほとんどで，風化が著しく調整など不明瞭なものが多い。

壺 形 土 器（第33図1～5　図版32）　甕形土器に比べ出土量は非常に少ない。口縁部の形態により2類に分けられる。

Ⅰ類（第33図1～3）　頸部は短く「く」字状を呈し，口縁部が上下に拡張するもの（1，2）と，肥厚するもの（3）とがある。いずれも口縁部外面には平行沈線文が施され，調整は口縁部にヨコナデ調整，胴部外面にハケメ調整が施されている。

Ⅱ類（第33図4，5）　頸部は円筒状に直立し，口縁部が屈折して外反するもので，口縁部は複合口縁状を呈すものである。4は口縁部外面に平行沈線文をめぐらせるが，5の口縁部は無文である。また5の頸部にはヘラ状工具による6条の平行沈線文がめぐりその直下には刺突文が施される。調整はⅠ類と同様，口縁部にヨコナデ調整が施されている。

甕 形 土 器（第33図6～24・第34図1～16　図版32，33）　口縁部の形態により大きく3類に分けられる。

Ⅰ類（第33図6～12，15　図版32）　口縁部は短く「く」字形に屈曲し，端部が肥厚して上下に拡張して内傾するもので，いわゆるくり上げ口縁状を呈すものである。文様は口縁端部外面に2～5条の平行沈線文を施す。また頸部にヘラ状工具により刺突文を施すもの（11）もみられる。調整は外面にハケメ調整，内面頸部以下はヘラ削り調整が施される。胎土は細かく焼成は良好である。

Ⅱ類（第33図13，14，16～24・第34図1～14　図版32，33）　Ⅰ類より口縁部の幅が広がり複合口縁を呈すものである。口縁部の形態によりさらに2つに分けられる。

$Ⅱ_1$類（第33図13，14，16～24　図版32）　口縁端部が内傾あるいは直立して立ち上がるもので，外面に平行沈線文が施される。また頸部，肩部にヘラ状工具あるいは板状工具により刺突文を施すものが多くみられる（第33図19，21～23）。

$Ⅱ_2$類（第34図1～14　図版32，33）　口縁部が直立または外傾して立ち上がるもので，$Ⅱ_1$類と比べ口縁部の幅が広い。いずれも口縁端部外面に多条の平行沈線文が施される。また肩部にヘラ状工具あるいは板状工具により刺突文を施すものがある（4～6，8，9），調整はいずれも外面

にハケメ調整，内面頸部以下はヘラ削りが調整される。

なお，以上の壺，甕形土器の口縁部外面に施される平行沈線文は第34図11～14以外はクシ状工具あるいはヘラ状工具によって沈線をめぐらせた後ナデ調整を加えて仕上げを行なうものである。この手法による各沈線文は比較的太く深い。それに対し第34図11～14はクシ状工具によって平行沈線文が施されるが，ナデ仕上げは行なわれず沈線文の幅は狭く非常に浅い。この2手法は視覚的にも大きく違うことから第34図11～14はⅡ$_2$類の他のものと分類できる可能性もあるがここでは一応同類として扱った。

Ⅲ類（第34図15，16　図版33）　口縁部は「く」字形に屈曲する単純口縁のもので，内面屈曲部に丸みをもつ。16は口縁端部が肥厚して平坦面をもつ。口頸部に施文は認められず，調整は外面にハケメ調整，内面頸部以下はヘラ削り調整が施される。胎土は細かく，焼成は良好である。

脚　　部（第34図17，18　図版33）　高坏形土器あるいは器台形土器の脚部と思われる。甕形土器と同様の複合口縁状を呈し、外面に平行沈線文が施される。

その他の土器（第34図23，24　図版33）　器種は不明であるが，文様に特徴があるものを2点掲載する。第34図23は「S」字状のスタンプ文である。24は注口土器の破片と考えられ，注口の接合部にヘラ状工具により3条と5条の平行沈線文をめぐらせその間に鋸歯文を施すものである。

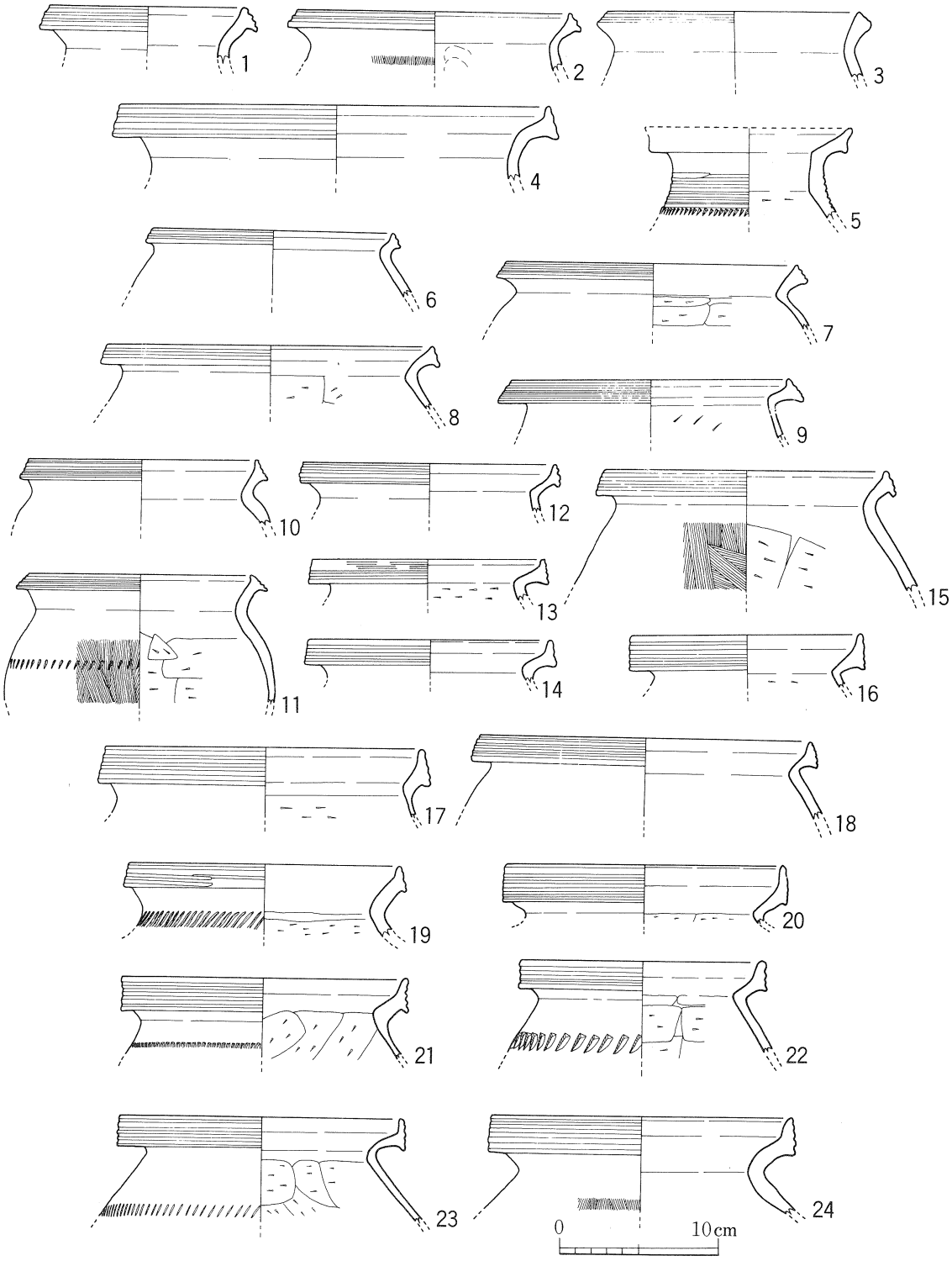
底　　部（第34図19～22　図版33）　底部を一括した。19は脚台状の形態を呈す。20，21は一応後期の土器として扱ったが中期後葉の壺，甕形土器の底部にも内面にヘラ削りが認められることから中期の土器の可能性もある。22はやや丸底に近い平底で底径1.7cmを測る。

ミニチュア土器（第35図　図版33）　13点あまり出土したが時期は判断しがたい。1，2はいずれもぐい呑み形の手捏ね土器で，古墳時代の土器の可能性もある。3は無頸壺と類似した器形を呈すもので，外面にハケメ調整の後ヘラ磨き調整が施され，肩部にヘラ状工具による沈線文が施される。4，5は前期甕形土器と類似した器形を呈し，調整はハケメ調整，ナデ調整が施され，施文はみられない。6～13は底部片のため全形は窺えない。8，9は凹み底，12，13は高台状の底部である。また12の脚部には小孔が穿たれている。

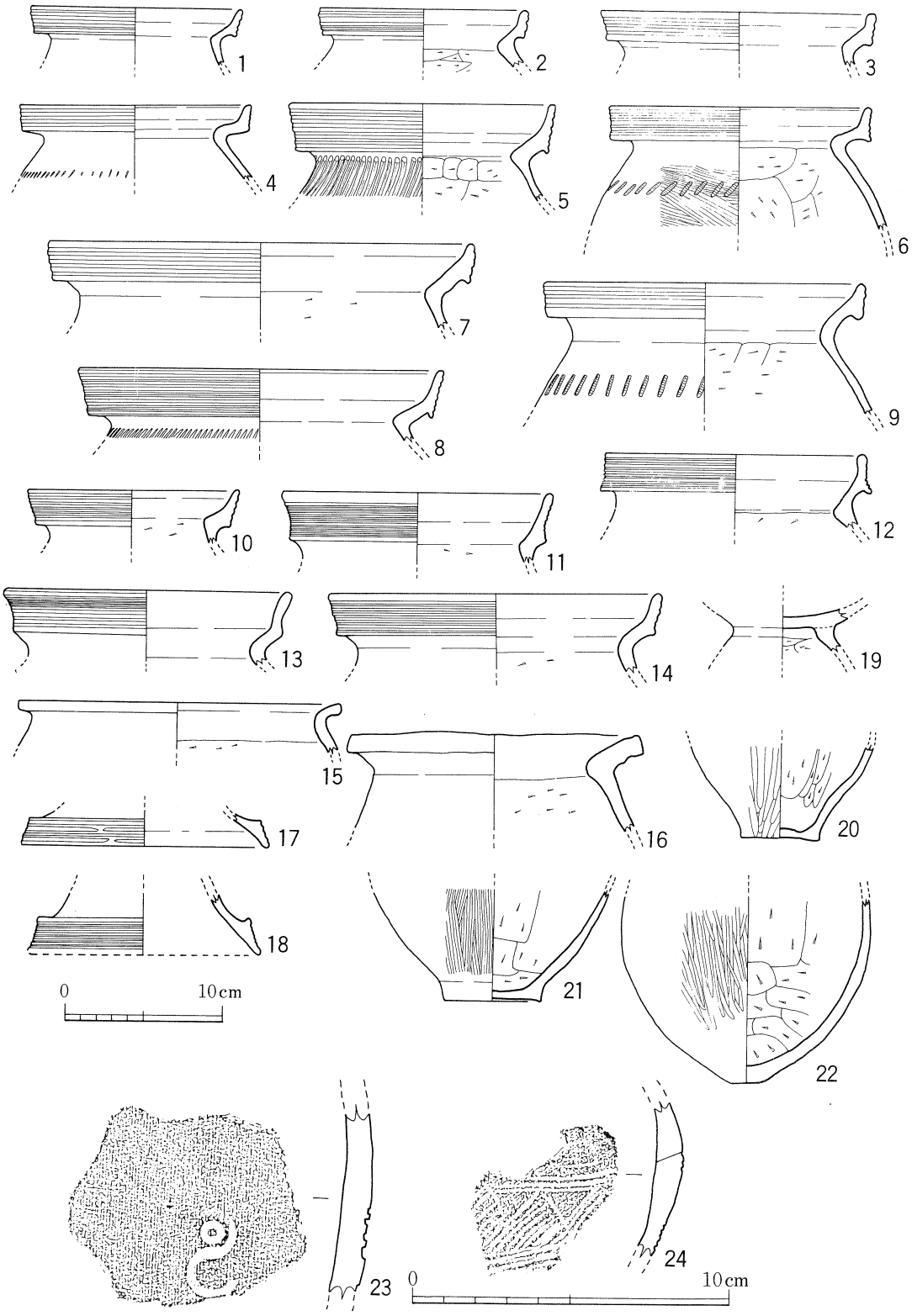
小　　結

弥生土器を以上のように分類し，その概要を記した。本遺跡の土器は層位や供伴関係でとらえられるものはなく，その形態や文様等から分類したものである。したがってこの分類中にやや時期の異なるものが含まれる可能性は大きい。ここでは従来の編年[1]に従い時期的な位置について若干ふれておく。

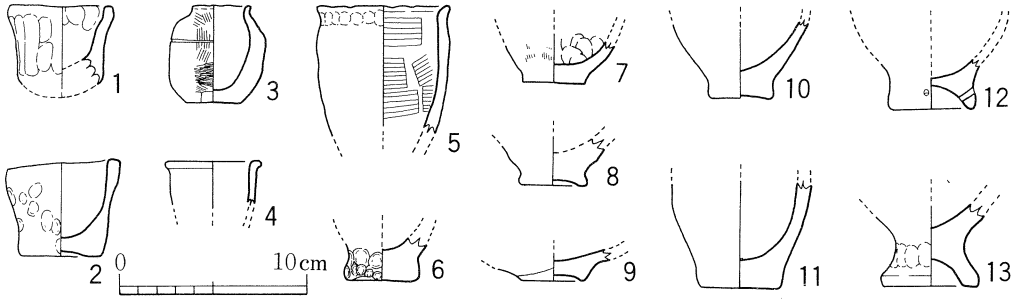
まず前期壺形土器は，口頸部の形態によりⅠ～Ⅲ類に分類した。壺Ⅰ類は口縁部下に段を有することから前期前半に位置づけられる。これらのうち第12図8は頸部に4条の平行沈線文を有するこ



第33図　弥生土器実測図㉒ 1：4



第34図　弥生土器実測図㉓23と24は１：２　その他は１：４



第35図　弥生土器実測図㉔ 1：4

とから前期前半でも新しいと考えられる。また肩部及び胴部の破片で羽状文等を施すもの（第14図3～11・第15図1～8）のうち段を有するものは壺Ⅰ類と時期的に大きな差異はないと思われる。羽状文等の施文についてはヘラ描きによるもの（第14図3～11）と貝殻腹縁によるもの（第15図1～8）とがみられ前者が先行すると考えられている(2)。これら有文の土器と無文の土器との時期的な関係については現在のところ明らかにされていない。

壺Ⅱ類は口頸部が漏斗状に大きく外反することから前期後半に位置づけられる。Ⅱ類のうち口縁端部に施文するもの（第12図12，16～18・第14図1），頸部に刻目突帯文を有するもの（第12図19，20）は前期後半の中でも新しい要素をもつものと思われる。第13図1，4，5は頸部のヘラ描き平行沈線文に刺突文を加えることから前期末頃と考えられる。また壺Ⅲ類の同図7，9は口縁端部，頸部の文様の特徴から前期後半に位置づけられる。

第13図10の無頸壺はヘラ描きによる羽状文がみられるが，出土例が少なく他の壺形土器との関係については現在不明である。また同図12は貝殻腹縁による羽状文をもち，新しい要素とされる刻目突帯文をも有するもので，県内での出土はあまり多くない。他地方の影響を強くうけた土器と思われるが，小片のため具体的な検討は困難である。これらは文様などから前期後半に位置づけられるが，その出自については検討が必要であろう。

前期甕形土器は，口縁部の形態，文様などにより$Ⅰ_1$～$Ⅰ_4$類，Ⅱ類に分類したが，時期的な位置づけは難しい。甕$Ⅰ_1$類は概ね前期前半に位置づけられる。これらのうち口縁部下に段を有するもの（第16図1，2，6）がその典型とするのに対し，他の土器は胴部に張りがみられやや後出的なものと言える。甕$Ⅰ_2$類は胴部に張りがみられ，ヘラ描きによる多条の平行沈線文をもつことから前期後半に位置づけられる。甕$Ⅰ_3$類は平行沈線文に刺突文が加えられることから前期後半でもより新しいと考えられる。また甕Ⅱ類は無文の土器もみられるが，第19図13，14がヘラ描きの平行沈線文をもつことから前期末頃と比定できる。このように当地方の前期甕形土器が沈線文の多条化を一般とする傾向のなかで，甕$Ⅰ_4$類とした無文の甕形土器や口縁端部に刻目をもち平行沈線文を

もたない土器（第16図４，15）の位置づけが問題である。当地では無文の甕形土器はかなり出土しているが，口縁部の形態などがバラエティーに富むことからさらに細分できる可能性がある。今後の研究に注目したい。

中期の壺形土器は口頸部の形態によりⅠ～Ⅷ類に分類した。壺Ⅰ類（第22図１）はクシ描き平行沈線文が施されるものの前期壺Ⅱ類（第14図１）と形態上大きな違いはみられないことから中期前葉の中でも古い要素を残した土器と考えられる。壺Ⅱ類は長胴形を呈し，頸部に多条の描き平行沈線文が施されることから中期前葉に位置づけられる。壺Ⅲ類は同様にクシ描き平行沈線文や波状文で飾られるもので中期前葉に比定されるが，第22図４は文様の構成に中期中葉に近い要素もみられる。壺Ⅳ類は口縁部が朝顔状に大きく外反するものであるが，細片が多く好資料に恵まれなかった。また壺Ⅳ類は壺Ⅱ，Ⅲ類との間に形態に隔たりがみられるが，それを埋める資料は確認できなかった。当地方の中期中葉を代表とする土器は，時期の明確でない包含層などから多数出土しているが全形を窺える好資料に欠けていた。近年，松江市布田遺跡[3]，鳥取県日野郡溝口町下山南通遺跡[4]，米子市目久美遺跡[5]などから多数の好資料が得られたが，この時期についての総体的な研究は進んでいるとは言いがたい。布田遺跡では中期中葉（布田第Ⅴ期）から後葉（布田第Ⅵ期）への形態的変化を系統的にとらえられている[6]。これによると本遺跡の壺Ⅳ類は形態的に少なくとも２時期以上に分かれるものと思われる。また凹線文や指頭圧痕を有する貼付突帯文等の文様の特徴から壺Ⅳ類は概ね中期中，後葉に位置づけられる。このうち第23図１・第24図13は口縁部内外面に文様が施されること，胴部の文様，頸部の貼付突帯文などから中期中葉に比定される。また第23図４～６，13，18・第24図１，２は頸部に指頭圧痕を有する貼付突帯文がみられることから中期後葉と考えられる。第23図７～10は口縁部外面に凹線文をもつことから中期後葉に，第24図６，７は口縁部外面の装飾性が薄れることから後葉でも新しい時期に位置づけられる。壺Ⅷ類は口縁部が複合口縁状を呈すが，胴部内面上半にハケメが施されることから中期末頃と比定される。壺Ⅴ～Ⅶ類，その他の土器としたものに特異的な文様を有するものもみられるが，類例が少なく詳細な時期は不明である。大まかに中期中葉から後葉にかけての土器と考えたい。

中期甕形土器は口縁部の形態，文様などによりⅠ～Ⅶ類に分類した。甕Ⅰ，Ⅱ類は形態的に前期甕形土器を受けつぎ，クシ描きの平行沈線文，波状文が施されるもので中期前葉に位置づけられる。第26図16は口縁端部の肥厚が他の甕Ⅱ類に比べやや大きく中期中葉への形態変化を示すものと思われる。甕Ⅲ類は口縁端部の形態により１～３に分類したが，いずれも中期中葉に位置づけられる。甕$Ⅳ_1$～甕$Ⅳ_3$類と第28図13，14は甕Ⅲ類とは別系統と思われるが中期中葉のバラエティの１つと考えられる。第28図15，16は頸部の指頭圧痕文の特徴から中期後葉に位置づけられる。甕Ⅴ類の第29図３～５は形態，文様の特徴から中期中葉，同図１は凹線文を有することから中期後葉に比定さ

れる。壺Ⅵ$_1$類は口縁端部がわずかに肥厚して1～2条の凹線文が施されることから中期後葉でも古い要素をもち，壺Ⅵ$_2$類はくり上げ口縁状を呈し3～4条の凹線文が施されるところからともに後葉でも新しい要素がみられる土器である。壺Ⅶ類は複合口縁状を呈し後期の土器の形態を呈すが，内面胴部上半にハケメが施されることから中期末頃と比定される。

高坏形土器は出土量が少なく，全形を窺えるものが出土しなかったが，坏部の形態によりⅠ～Ⅲ類に分類した。高坏Ⅰ類は口縁部の形態から中期中葉と比定できる。高坏Ⅱ類は口縁部がやや「T」字状を呈す。この形態の口縁を持つ高坏は今のところ類例は少なく，その系譜は不明である。時期的には中期中葉と考えたい。高坏Ⅲ類，第30図13，17は形態，凹線文などの文様の特徴から中期後葉に位置づけられる。

後期の壺形土器は他の時期の土器と比べ極めて量が少なかった。壺Ⅰ，Ⅱ類ともくり上げ口縁状を呈し，頸部以下の内面にヘラ削りを施すことから後期前半に位置づけられる。

後期甕形土器は口縁部の形態によりⅠ～Ⅲ類に分類した。甕Ⅰ類は口縁部の形態，調整などにより後期前半に位置づけられる。甕Ⅱ類は口縁端部が外傾あるいは内傾する複合口縁を有し，多条の平行沈線文あるいは凹線文が施されていることから後期後半に比定できる。また甕Ⅱ$_2$類のうち第34図11～14はやや発達した複合口縁でクシ描きによる多条の平行沈線文が施されることから，より後出的と言える。甕Ⅲ類は口縁部が短く外反する単純口縁の土器であるが類例が少なく出雲市矢野遺跡[7]，六日市町前立山遺跡[8]で比較的似た土器が出土している。しかしこれらの土器とは様相がかなりことなることから同一視することはできないであろう。一応後期として位置づけるが，詳細な時期は不明と言わざるをえない。

以上のごとく本遺跡出土の弥生土器は前期前半から後期後半までの大きな流れをとらえることができるものの，当遺跡の出土状態からは詳細に時期的な前後関係，供伴関係を知ることはできない。しかし第10層から12層にかけては完形に近い土器も多く，周辺には当時期の遺構の存在は充分予想される。今後の調査で遺構に伴う弥生土器が検出され，より具体的な弥生土器研究が行なわれることを期待したい。

註(1) 東森市良他　「弥生式土器集成」『八雲立つ風土記の丘研究紀要』Ⅰ　昭和52年
(2) 村上勇，川原和人　「出雲，原山遺跡の再検討－前期弥生土器を中心にして－」『島根県立博物館調査報告』第2冊　昭和54年
(3) 島根県教育委員会　「Ⅲ布田遺跡」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財調査報告書』Ⅳ　昭和58年
(4) 鳥取県教育文化財団　「大山南通遺跡」『中国横断自動車道岡山，米子線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』　昭和61年

(5) 米子市教育委員会，鳥取県河川課　『目久美遺跡』　加茂川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』　昭和61年
(6) 註(3)と同じ
(7) 建設省出雲工事事務所，島根県教育委員会　「矢野遺跡」『出雲上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書』　昭和55年
(8) 島根県教育委員会　「前立山遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』昭和55年

弥生土器一覧表

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	分類	法量	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
壺	12－1	10	N8E4	9	I	復元口径 19.0	口縁部はやや短く外反して，外面に明瞭な段をもつ	調整不明		胎土　2～3㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化著しい
同上	12－2	10	N8E4	9	同上		口縁部はゆるく屈曲して外反し，頸部から肩部にかけて「八」字形に開く	内外面　ハケメの後ヘラ磨き	口縁部外面にハケメ原体による段をもつ	胎土　2㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　茶灰色
同上	12－3	10	N8E4	9	同上	復元口径 30.0	口縁部はやや短く外反し，頸部から肩部にかけて「八」字形に開く	口縁部　ヨコナデ 内外面　ハケメの後ヘラ磨き	口縁部外面にヘラ状工具により沈線を引いた後ハケメ原体により段をつける	胎土　2～3㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　茶褐色
同上	12－4	10	N5E3	10	同上	復元口径 16.2	口縁部はやや短く外反し，頸部から肩部にかけて「八」字形に細長く開く	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ後ヘラ磨き 内面　ハケメ，ナデ	口縁部外面にハケメ原体による段をもつ	胎土　砂粒含む 焼成　良好 色調　外黒色，内黄灰色 内外面に炭化物付着
同上	12－5	10	N6E5	12		復元 胴部最大径 31.2	頸部から肩部にかけて「八」字形を呈し，胴部は扁球状に大きく張り出す	調整不明	肩部にかすかな段をもつ	胎土　2㎜大の砂粒を含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化著しい
同上	12－6	10	N8E4	12	I	復元口径 14.0	口縁部はやや短く外反し頸部から肩部にかけて「八」字形に細長く開く	口縁部　ヨコナデ 内外面　ハケメの後ヘラ磨き	頸部にヘラ状工具による1条の沈線文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　淡青灰色
同上	12－7	10	N9E3	10	同上	復元口径 12.0	同　上	口縁部外面にヘラ磨きが認められる	口縁部外面に削り出しによる段をもつ	胎土　砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化著しい
同上	12－8	10	N8E4	9	同上	復元口径 14.4	口縁部はやや大きく外反し，頸部から肩部にかけて「八」字形に開く	口縁部外面にヘラ磨きが認められる	頸部にヘラ状工具による4条の平行沈線文。肩部に削り出しによる段をもつ。その直下に1条の沈線文を施す	胎土　2～3㎜大の砂粒を含む 焼成　良好 色調　青灰色 口縁部外面に炭化物付着
同上	12－9		N8E4	10		復元 胴部最大径 19.0	胴部は扁球状を呈す	外面　ヘラ磨き 内面　ナデ	肩部に段をつけ，その直下にヘラ状工具により2条の平行沈線文を施す	胎土　2㎜大の砂粒を含む 焼成　やや良 色調　青灰色 風化著しい
同上	12－10	10	N8E3	10		復元口径 17.0	同　上	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ		胎土　2～3㎜大の砂粒を含む 焼成　良好 色調　黄灰色 内面　炭化物付着

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	分類	法量	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
壺	12－11	10	北壁際			復元口径 23.2	口縁部はゆるく外反する	内外面　ヘラ磨き		胎土　1～2㎜大砂粒含む 焼成　良好 色調　白灰色
同上	12－12	10	北壁際		Ⅱ	復元口径 23.2	口縁部はやや大きく外反する	調整不明	口縁端部にヘラ状工具による羽状の刻目文	胎土　2㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化著しい
同上	12－13	10	N９E４	9	同上	復元口径 13.8	口縁部はやや大きく外反し，頸部は筒状を呈す	調整不明	頸部にヘラ状工具による３条の平行沈線文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化著しい
同上	12－14	10	N９E３	9	同上	復元口径 15.2	口縁部はやや大きく外反し，頸部は筒状を呈す	調整不明	頸部にヘラ状工具による５条の平行沈線文	胎土　砂粒含む 焼成　良好 色調　黒褐色 風化著しい
同上	12－15	10	N９E４	9	同上	復元口径 14.8	口縁部はゆるく外反し，頸部は筒状を呈し肩部が大きく張り出す	内面　指頭圧痕が認められる	頸部にヘラ状工具による１条の沈線文	胎土　1～2㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化著しい
同上	12－16	10	N８E４	10	同上	復元口径 14.6	口縁部はやや大きく外反し，端部に平坦面をもつ頸部は筒状を呈す	外面　ヘラ磨き	口縁端部にヘラ状工具による１条の沈線文，頸部に７条以上の平行沈線文	胎土　3㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化著しい
同上	12－17	10	N８E４	9	同上	復元口径 16.6	口縁部は大きく外反し，頸部は筒状を呈す	内面　ハケメ	口縁端部にヘラ状工具により，刻目文を入れた後，沈線をめぐらす頸部に６条の平行沈線文	胎土　3㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　茶灰色 風化著しい
同上	12－18	10	N９E４	9	同上	復元口径 17.0	同　上	外面　ヘラ磨き 内面　ナデ	口縁端部にヘラ状工具により羽状の刻目文を施すが，一部斜格子状の部分があり，頸部に７条の平行沈線文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色
同上	12－19	10	N８E４	9	同上	復元口径 16.0	口縁部は大きく外反し，頸部は筒状を呈す	外面　ハケメの後ヘラ磨き 内面　ヘラ磨き	頸部にヘラ状工具による６条の平行沈線文を施しその直下に削り出しによる突端をもうけ刻目を施す	胎土　2～3㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　黄褐色 外面　頸部に黒斑あり
同上	12－20	10	N５E３	10	同上		口縁部は大きく外反し，頸部は筒状を呈すと思われる	外面　ハケメ，ヘラ磨き 内面　ヘラ磨き	頸部に刻目突帯を貼付し，その直上に耳状のものを「ノ」字形に貼付する	胎土　1～2㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　黄灰色
同上	13－1	10	N９E４	9	同上	復元口径 17.4	口縁部は大きく外反し肩部はあまり張り出さず長胴形を呈すと思われる	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ 内面　ナデ	頸部にヘラ状工具により３条の平行沈線文をめぐらせ沈線間に刺突文を施す	胎土　2㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化著しい
同上	13－2	12	N７E３	11下	同上	復元口径 20.8	口縁部はやや大きく外反し，頸部は円筒状に長く肩部が大きく張り出す	外面　ヘラ磨き 内面　ナデ，ハケメ	頸部と肩部にヘラ状工具によりそれぞれ７条，４条の平行沈線文を施す	胎土　2㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 肩部以上完形 風化著しい
同上	13－3	10	N８E３	9	同上		頸部は筒状を呈す	内外面　ヘラ磨き	頸部にヘラ状工具による11条の平行沈線文	胎土　2㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	分類	法量	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
壺	13－4	11	N９E４	10	Ⅱ	復元口径 11.6	口縁部はやや大きく外反し，端部に平坦面をもち肩部はあまり張り出さず長胴形を呈すと思われる	内面　ナデ	口縁端部にヘラ状工具による斜格子状の刻目文，頸部に10条の平行沈線文をめぐらせその直下に刺突文を施すが一部施文のない個所あり	胎土　2～3㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化著しい
同上	13－5	11	N９E３	9	同上	復元口径 16.8	口縁部は大きく外反し，端部はやや肥厚して平坦面をもつ，肩部はあまり張り出さず長胴形を呈す	調整不明	口縁端部にヘラ状工具による斜格子状の刻目文，頸部に13条の平行沈線文をめぐらせその直下に三角形の刺突文を施す	胎土　5㎜大の小石含む 焼成　良好 色調　暗茶褐色 風化著しい
同上	13－6	11	北壁際		Ⅲ	復元口径 18.1	口縁部は短く外反する器壁はうすい	口縁部　ヨコナデ ヘラ磨き 内面　ナデ		胎土　2～3㎜大の砂粒を含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化著しい
同上	13－7	11	N９E３	9	同上	復元口径 50.0	同　上	調整不明	口縁部にヘラ状工具による羽状の刻目文，頸部に６条の平行沈線文	胎土　2㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化著しい
同上	13－8	11	N７E３	10	同上	復元口径 30.0	口縁部はやや大きく外反する	口縁部　ヨコナデ 内外面　ヘラ磨き		胎土　2～3㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化著しい
同上	13－9	13	N９E３	9	同上	復元口径 17.6	口縁部は短く外反する，器壁は厚い	口縁部　ヨコナデ 内面　ヘラ磨き	口縁端部にヘラ状工具による斜格子状の刻目，頸部に10条以上の平行沈線文	胎土　3㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色
無頸壺	13－10	13	N９E３	9		復元口径 16.6	口縁部は強く内湾する	調整不明	口縁部と胴部最大径付近にヘラ状工具によりそれぞれ２条の平行沈線をめぐらせ，その間に羽状文を施す 口縁部に孔が１コ残る	胎土　砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化著しい
壺	13－11	12	N７E４	12		口径 10.4	口縁部は短く外反し，肩部はあまり張り出さず長胴形を呈すと思われる	口縁部　ヨコナデ 外面　ヘラ磨き 内面　ナデハケメ		胎土　2～3㎜大の砂粒を含む 焼成　良好 色調　外青灰色 内白灰色
同上	13－12	11	N９E３	9		復元 胴部最大径 24.4	胴部は扁球状を呈す	内面　ヘラ磨き	胴部最大径付近に２条の刻目突帯を貼付し，胴部上半に，貝殻腹縁により３条の平行沈線文をめぐらせその上下に羽状文を施す	胎土　1～2㎜大の砂粒を含む 焼成　良好 色調　茶灰色
同上	13－13	12	N７E４	12		底径 5.2	胴部は大きく張り出し，球状を呈す小形品	外面　ヘラ磨き 内面　ナデ	肩部にヘラ状工具により羽状文を施し，その直下に２条の平行沈線文と，縦方向の沈線文により文様帯を面し，羽状文，竹管文，鋸歯文と類似した文様を施しその文様帯の直下に一部羽状文を施す	胎土　3㎜大の砂粒を多く含む 焼成　良好 色調　外白灰色 内黒灰色 口縁部のみ欠損，胴部外面黒斑あり
同上	13－14	12	N８E４	11 下		底径 6.8 胴部最大径 10.8	小形品で長胴形を呈す	外面　ヘラ磨き		胎土　2～3㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　黄褐色 口縁部のみ欠損 外面　黒斑あり 風化著しい

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	分類	法量	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
壺	13−15	15	N9E4	10		底径 6.2 胴部最大径 14.2	小形品で長胴形を呈す	内外面　ヘラ磨き		胎土　砂粒含む 焼成　良好 色調　青灰色 口縁部のみ欠損 外面黒斑あり 風化著しい
同上	14−1	12	N6E6	12	Ⅱ	口径 12.1 器高 27.9 最大径 21.7 底径 7.6	口縁部はやや大きく外反し端部に平坦面をもつ，頸部は筒状を呈し，胴部は扁球状に大きく張り出す最大径は胴部中位やや下に位置する	外面　ハケメの後ヘラ磨き 内面　ナデ，ヘラ磨き 底部付近指頭圧痕が認められる	口縁端部にヘラ状工具による斜格子状の刻目文頸部に8条，肩部と胴部中位にそれぞれ7条の平行沈線文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 完形品 外面黒斑あり 外面風化著しい
同上	14−2	12	N7E6	11下	同上	最大径 24.2 底径 8.0	頸部は短く筒状を呈し，肩部はやや張り出すが，長胴形を呈す最大径は胴部中位やや上に位置する	調整不明	頸部にヘラ状工具による7条の平行沈線文	胎土　2㎜大の砂粒を多く含む 焼成　やや良 色調　黒灰色 口縁部のみ欠損風化著しく器面もろし
同上	14−3	11	N9E4	9			肩部に段をもつ	調整不明	肩部にヘラ状工具により3条の平行沈線文をめぐらせその直下に有軸羽状文を施す	胎土　砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化著しい
同上	14−4	11	N7E4	10			肩部に段をもつ	外面　ヘラ磨き 内面　ハケメ	肩部にヘラ状工具により2条の平行沈線文をめぐらせその直下に羽状文を施す	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　青灰色
同上	14−5	11	N8E4	9			同　上	調整不明	肩部にヘラ状工具により3条の平行沈線文をめぐらせ，その直下に羽状文を施す	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　白灰色 風化著しい
同上	14−6	11	N9E4	9				同　上	肩部にヘラ状工具により2条の平行沈線文をめぐらせ，その直下に羽状文を施す	胎土　砂粒含む 焼成　良好 色調　外黄褐色 内黒褐色 風化著しい
同上	14−7	11	N9E3	9				同　上	肩部にヘラ状工具による縦方向の3条の平行沈線文と羽状文を施す	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化著しい
同上	14−8	11	N9E3	9				同　上	肩部にヘラ状工具による縦横方向の3条の平行沈線文で文様帯を区画し，羽状文を施す	胎土　2㎜大の砂粒多量に含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化著しい
同上	14−9	11	N9E4	9				外面　ヘラ磨き 内面　ハケメ	肩部にヘラ状工具による縦横方向の2条の平行沈線文で文様帯を区画し羽状文を施す	胎土　2〜3㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　黒褐色
同上	14−10	11	N9E4	9			肩部に段を持つ	内外面　ヘラ磨き	肩部と胴部にヘラ状工具により2条の平行沈線文をめぐらせその間に羽状文を施す	胎土　2〜3㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化著しい
同上	14−11	11	N9E3	9			同　上	調整不明	肩部にヘラ状工具により1条の沈線文をめぐらせ，その直下に羽状文を施す	胎土　2㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　茶灰色 風化著しい
同上	15−1	11	N7E5	8			肩部に段をもつ	内外面　ヘラ磨き	肩部に貝殻腹縁により2条の平行沈線文をめぐらせ，その直下に羽状文を施す	胎土　3㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　外黄灰色 内青灰色 風化著しい

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	分類	法量	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
壺	15－2	11	N９E３	9				調整不明	肩部に貝殻腹縁により羽状文を施し，その直下に５条の平行沈線文を施す	胎土　３㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化著しい
同上	15－3	11	N９E３	12			肩部に段をもつ	内外面　ヘラ磨き	肩部と胴部に貝殻腹縁により２条の平行沈線文をめぐらせその間に羽状文を施す	胎土　砂粒含む 焼成　良好 色調　青灰色
同上	15－4	11	N８E４	9				調整不明	肩部に貝殻腹縁により平行沈線文と羽状文を施す	胎土　２㎜大の砂粒を含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化著しい
同上	15－5	11	N９E４	9				内面　ヘラ磨き	肩部に貝殻腹縁により４条の平行沈線文をめぐらせ，その直下に羽状文を施す	胎土　２㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色
同上	15－6	11	N９E３	9				調整不明	ヘラ状工具による５条の平行沈線文と貝殻腹縁による縦方向５条の平行沈線文により文様帯を区画し，貝殻腹縁により羽状文を施す	胎土　２～３㎜大の砂粒を含む 焼成　良好 色調　黄灰色 外面炭化物付着 風化著しい
同上	15－7	11	N９E３	9				調整不明	貝殻腹縁により２条と３条の平行沈線文をめぐらせその間に羽状文を施してその直下に重弧文を施す	胎土　３～４㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　外茶灰色 内黒灰色 風化著しい
同上	15－8	11	N９E３	9				同　上	貝殻腹縁による縦横方向の平行沈線文により文様帯を区画し羽状文を木葉文を施す	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化著しい
同上	15－9		N９E４	9				同　上	貝殻腹縁により５条の平行沈線文をめぐらせその下に鋸歯文を施す	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化著しい
同上	15－10	11	N８E４	9				同　上	ヘラ状工具により７条と２条の平行沈線文をめぐらせその間に山形文を施す	胎土　２㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　外茶褐色 内黒褐色 内面炭化物付着，風化著しい
同上	15－11	11	N８E４	9			肩部に段を持つ	同　上	肩部に棒状工具による２条の列点文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　暗青灰色 風化著しい
同上	15－12	11	北壁際					調整不明	棒状工具よる列点文	胎土　２～３㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化著しい
同上	15－13	11	北壁際				肩部に段をもつ	外面　ハケメ	段の上にヘラ状工具により沈線をめぐらせ，沈線と段の間に竹管文を施す	胎土　２～３㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　暗青灰色 風化著しい
同上	15－14	11	N８E４	9				外面　ヘラ磨き	ヘラ状工具により８条の平行沈線文をめぐらせその直下に三角形の刺突文を施す	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外無褐色 内茶褐色 風化著しい

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	分類	法量	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
壺	15−15	11	N9E3	9				内外面　ヘラ磨き	ヘラ状工具により弧状の文様を施す	胎土　砂粒含む 焼成　良好 色調　暗茶褐色 風化著しい
甕	16−1	13	N9E4	9	I₁	復元口径 32.2	口縁部はゆるく短く外反する	口縁部　ヨコナデ 外面　ヘラ磨き 内面　ナデ	口縁端部にヘラ状工具による刻目文 肩部にハケメ原体による段をもつ	胎土　2～3㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　黄褐色 口縁部外面に炭化物付着 風化著しい
同上	16−2	13	北壁際		同上	復元口径 29.4	口縁部はゆるく短く外反する	口縁部　ハケメの後ヨコナデ 内外面 ハケメ	口縁端部にヘラ状工具による刻目文 肩部にハケメ原体による段をもつ	胎土　2㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　外黄灰色 内黒褐色 内面炭化物付着
同上	16−3		北壁際		同上	復元口径 30.8	同　上	調整不明	口縁端部にヘラ状工具による刻目文 頸部に2条の平行沈線文	胎土　砂粒含む 焼成　良好 色調　暗茶褐色 風化著しい
同上	16−4		N5E3	10		復元口径 16.4	口縁部は短く外反する	口縁部内外面に指頭圧痕が認められる	口縁端部にヘラ状工具あるいは貝殻腹縁による刻目文	胎土　1～2㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　白灰色
同上	16−5	13	N9E3	9	I₁	復元口径 17.0	口縁部はゆるく短く外反し，胴部は細くすぼむ	口縁部　ヨコナデ 内外面　ハケメ	口縁端部にヘラ状工具による刻目文 頸部に2条の平行沈線文	胎土　砂粒含む 焼成　良好 色調　外黒褐色 内茶褐色 外面炭化物付着
同上	16−6		N9E3	10	同上	復元口径 30.6	口縁部はやや大きく外反する	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ 内面　ナデ	口縁下端部にヘラ状工具あるいは貝殻腹部による刻目文 頸部にヘラ状工具による沈線をめぐらせ後ハケメ原体により段をつける	胎土　2～3㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化著しい
同上	16−7	13	N9E3		同上	復元口径 24.4	口縁部はゆるく短く外反し，胴部はわずかに張り出す	口縁部　ヨコナデ 内外面　ハケメ	口縁端部にヘラ状工具による刻目文 頸部に2条の平行沈線文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄褐色
同上	16−8	13	N9E3	9	同上	復元口径 28.4	口縁部はゆるく短く外反し，胴部はわずかに張り出す	同　上	頸部にヘラ状工具による1条の沈線文	胎土　2㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　黄褐色 風化著しい
同上	16−9	13	N9E3		同上	復元口径 31.0	口縁部はゆるく短く外反し胴部はわずかに張り出す	口縁部外面に指頭圧痕が認められる 外面　ハケメ	頸部にヘラ状工具による3条の平行沈線文	胎土　2～3㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　黄灰色 内面炭化物付着 風化著しい
同上	16−10		N8E5	11上	同上	復元口径 23.6	同　上	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ	頸部にヘラ状工具による1条の沈線文	胎土　砂粒含む 焼成　良好 色調　外黒褐色 内茶灰色 口縁部外面に炭化物付着 風化著しい
同上	16−11		N7E5	11下	同上	復元口径 23.8	同　上	口縁部　ヨコナデ 内外面　ハケメ	頸部にヘラ状工具による2条の平行沈線文	胎土　2～3㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　外黒色 内黄灰色 外面炭化物付着
同上	16−12	13	N5E4	11下	同上	復元口径 23.0	口縁部はゆるく短く外反し胴部はわずかに張り出す	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ	頸部にヘラ状工具による1条の沈線文	胎土　2～3㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　外黒色 内黄灰色 外面灰化物付着

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	分類	法量	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
甕	16−13		N9E4	9	I_1	復元口径 22.0	口縁部はゆるく短く外反し，胴部は細くすぼむ	外面　ハケメ	頸部にヘラ状工具による2条の平行沈線文	胎土　2～3㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　外黒色 内黄灰色 外面炭化物付着
同上	16−14	13	北壁際		同上	復元口径 38.4	口縁部はゆるく短く外反する	外面　ハケメの後ヘラ磨き 内面　ヘラ磨き	口縁下端部にヘラ状工具による刻目文 頸部に1条の沈線文	胎土　砂粒含む 焼成　良好 色調　青灰色
同上	16−15	13	N9E4	9		復元口径 34.0	口縁部は短く外反し，内面屈曲部に稜が立つ	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ ヘラ磨き 内面　ハケメ	口縁端部にヘラ状工具による刻目文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外黒褐色 内茶褐色 外面炭化物付着
同上	17−1	13	N8E3	9	I_1	復元口径 27.4	口縁部は大きく外反し，胴部はあまり張り出さない	調整不明	頸部にヘラ状工具による1条の沈線文	胎土　2㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 内面炭化物付着 風化著しい
同上	17−2	13	N5E5	12	同上	復元口径 27.4	口縁部は大きく外反し，胴部はあまり張り出さない	口縁部　ヨコナデ 内外面　ハケメ	頸部にヘラ状工具による1条の沈線文	胎土　砂粒含む 焼成　良好 色調　灰褐色 外面黒斑あり
同上	17−3		北壁際		同上	復元口径 25.2	口縁部はややゆるく，外反する	調整不明	頸部にヘラ状工具による3条の平行沈線文	胎土　2㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　暗黒褐色 口縁部外面に炭化物付着 風化著しい
同上	17−4	13	N9E3	9	同上	復元口径 22.0	口縁部は短くわずかに外方に折れ，胴部は細くすぼむ	同　上	同　上	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄茶褐色 風化著しい
同上	17−5	13	北壁際		同上	復元口径 24.8	同　上	同　上	頸部にヘラ状工具による2条の平行沈線文	胎土　2㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　暗青灰色 風化
同上	17−6	13	N9E4	10	I_2	復元口径 16.2	口縁部はゆるく短く外反し，胴部はやや張り出す	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ 内面　ハケメの後ナデ	口縁端部にヘラ状工具，あるいは貝殻腹縁による刻目文 頸部にヘラ状工具による4条の平行沈線文	胎土　2～3㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　茶灰色 風化著しい
同上	17−7	13	N5E3	8	同上	復元口径 22.2	口縁部はゆるく短く外反し，胴部はやや張り出す	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ 内面　ハケメの後ナデ	口縁端部にヘラ状工具による刻目文 頸部に5条の平行沈線文	胎土　3㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　黄褐色 風化著しい
同上	17−8	13	北壁際		同上	復元口径 17.8	口縁部はゆるく短く外反し，胴部は細くすぼむ	口縁部　ハケメ後ヨコナデ 外面　ハケメ	口縁端部にヘラ状工具による斜行状の刻目文，頸部に7条の平行沈線文	胎土　2～3㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　灰褐色 外面炭化物付着 風化著しい
同上	17−9	13	N4E4	11下	同上	復元口径 21.8	口縁部ゆるく短く外反し胴部はわずかに張り出す	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ 内面　ナデ		
同上	17−10	13	北壁際		同上	復元口径 20.0	同　上	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ	口縁端部にヘラ状工具による刻目文 頸部に8条の平行沈線文	胎土　2～3㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　外黒褐色 内茶褐色 風化著しい

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	分類	法量	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
甕	17－11	13	北壁際		I₂	復元口径 16.8	同　上	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ 内面　ハケメ後ヘラ磨き	口縁端部にヘラ状工具による刻目文 頸部に9条の平行沈線文	胎土　1～2㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　外黒褐色 内茶灰色 外面炭化物付着
同上	17－12	13	N5E3	10	同上	復元口径 25.8	口縁部は大きく外反する	調整不明	口縁端部にヘラ状工具による刺突文状の刻目文，頸部に6条以上の平行沈線文	胎土　3㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化著しい
同上	17－13	14	N8E3	10	同上	復元口径 31.6	口縁部は大きく外反し，胴部は細くすぼむ	口縁部に指頭圧痕が認められる 外面　ハケメ		胎土　3～5㎜大の小石含む 焼成　良好 色調　外黄灰色 内茶褐色 外面炭化物付着 風化著しい
同上	17－14		北壁際		同上	復元口径 17.8	口縁部はゆるく短く外反する	調整不明	頸部にヘラ状工具による3条の平行沈線文	胎土　砂粒含む 焼成　良好 色調　外黄灰色 内茶褐色 口縁部内面炭化物付着 風化著しい
同上	17－15		N8E3	10	同上	復元口径 20.0	口縁部はゆるく短く外反し胴部はわずかに張り出す	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ 内面　ナデ	頸部にヘラ状工具による4条の平行沈線文	胎土　2㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 外面炭化物付着 風化著しい
同上	18－1	14	N8E5	12	同上	復元口径 18.4	口縁部はゆるく短く外反し，胴部はやや張り出した後細くすぼむ	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ 内面　ハケメ後ナデ	同　上	胎土　2㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　白灰色
同上	18－2	14	N6E3	10	同上	復元口径 17.0	同　上	口縁部　ヨコナデ 内面　ハケメ，ナデ	頸部にヘラ状工具による7条の平行沈線文	胎土　2～3㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化著しい
同上	18－3	14	北壁際		同上	復元口径 24.4	口縁部はややゆるく外反し，胴部はわずかに張り出す	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ	頸部にヘラ状工具による3条の平行沈線文	胎土　2㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　茶灰色 内面炭化物付着 風化著しい
同上	18－4	14	西北壁際		同上	復元口径 23.6	口縁部はややゆるく外反し，胴部は細くすぼむ	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ	頸部にヘラ状工具による2条の平行沈線文	胎土　砂粒含む 焼成　良好 色調　暗茶褐色 口縁部外面炭化物付着
同上	18－5	14	N8E4	9	同上	復元口径	口縁部はややゆるく外反し胴部はわずかに張り出す	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ 内面　ナデ	同　上	胎土　2～3㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　外黒褐色 内茶褐色 外面炭化物付着 風化著しい
同上	18－6	14	N7E5	11下	同上	復元口径 17.6	口縁部は短くわずかに外方に折れる	調整不明	頸部にヘラ状工具による6条の平行沈線文	胎土　砂粒含む 焼成　良好 色調　外黒色 内白灰色 外面炭化物付着 風化著しい
同上	18－7	14	N8E4	9	I₃	復元口径 39.0	口縁部はやや大きく外反し，胴部はわずかに張り出す	口縁部　ヨコナデ 内外面　ハケメ	頸部にヘラ状工具により3条の平行沈線文をめぐらせ，沈線間に刺突文を配す	胎土　2～3㎜大の砂粒を含む 焼成　良好 色調　外茶褐色 内黒褐色 内面炭化物付着

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	分類	法量	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
甕	18－8	14	N8E5	9	I_3	復元口径 19.4	口縁部はゆるく短く外反する	調整不明	口縁部内面と頸部に2点単位の棒状工具によりそれぞれ2条，4条の列点文を施す	胎土　1㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　黒褐色 風化著しい
同上	18－9	14	N9E4	9	同上	復元口径 19.8	口縁部は短く外方に折れる	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ 内面　ナデ	頸部にヘラ状工具により5条の平行沈線文をめぐらせ，その直下に刺突文を施す	胎土　2～3㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　黒灰色
同上	18－10	14	N9E3	9	I_4	復元口径 30.4	口縁部はゆるく短く外反する	調整不明		胎土　2～3㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　暗茶褐色 風化著しい
同上	18－11	14	N7E6	6	同上	復元口径 18.8	同　上	内外面　ハケメ		胎土　砂粒含む 焼成　良好 色調　外青灰色 内黒褐色 内面炭化物付着
同上	18－12	14	N5E3	10	同上	復元口径 19.4	口縁部はゆるく短く外反する	調整不明		胎土　2～3㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　外青灰色 内茶褐色 風化著しい
同上	18－13	14	南壁際	11下	同上	復元口径 20.4	口縁部はゆるく短く外反し胴部は細くすぼむ	口縁部　ヨコナデ 内外面　ハケメ		胎土　砂粒含む 焼成　良好 色調　黒褐色 外面炭化物付着
同上	18－14	14	北壁際		同上	復元口径 17.8	口縁部はゆるく短く外反する	内外面　ハケメ		胎土　砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色
同上	18－15	14	北壁際		同上	復元口径 16.2	同上	調整不明		胎土　砂粒含む 焼成　良好 外面炭化物付着 風化著しい
同上	19－1	14	N7E4	10	同上	復元口径 21.2	口縁部はやや大きく外反する	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ		胎土　2㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　黄灰色 内面風化著しい
同上	19－2	14	北壁際		同上	復元口径 30.0	口縁部は大きく外反し，胴部は細くすぼむ	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ 内面　ナデ，ヘラ磨き		胎土　2～3㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　暗青灰色
同上	19－3	14	N7E4	10	同上	復元口径 20.8	口縁部は大きく外反し胴部は細くすぼむ	外面　ハケメ		胎土　2㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　青灰色 風化著しい
同上	19－4	14	北壁際		同上	復元口径 24.0	口縁部は大きく外反する	口縁部　ヨコナデ 内外面　ハケメ		胎土　砂粒含む 焼成　良好 色調　暗青灰色 風化著しい
同上	19－5	14	N8E3	10	同上	復元口径 18.0	口縁部は大きく外反し胴部はわずかに張り出す	調整不明		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外黒褐色 内暗青灰色 外面炭化物付着 風化著しい
同上	19－6	15	N6E4	12	同上	復元口径 22.6	口縁部は大きく外反し胴部はわずかに張り出す	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ		胎土　2㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　黒褐色 内外面炭化物付着 風化著しい

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	分類	法量	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
甕	19－7	15	北壁際		I_4	復元口径 25.0	口縁部はややゆるく外反する	調整不明		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外暗青灰色 内黒褐色 内面炭化物付着 風化著しい
同上	19－8	15	N6E5	11上	同上	復元口径 20.6	口縁部はややゆるく外反し，胴部は細くすぼむ	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ 内面　ハケメ，ナデ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外黒褐色 内茶褐色 外面炭化物付着
同上	19－9	15	N7E3	11下	同上	復元口径 22.8	口縁部は短く外方に折れ，胴部は口径以上に張り出す	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ		胎土　1～2㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　青灰色 風化著しい
同上	19－10	15	北壁際		同上	復元口径 24.0	口縁部は短く外方に折れ，胴部は口径以上に張り出す	調整不明		胎土　1～2㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　黒灰色 風化著しい
同上	19－11	15	北壁際		同上	復元口径 27.2	口縁部は短く外方に折れ，胴部は口径以上に張り出す	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ		胎土　2～3㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　暗青灰色 外面炭化物付着 風化著しい
同上	19－12	15	N8E4	9	同上	復元口径 16.4	口縁部は短く外方に折れ，胴部は口径以上に張り出す	口縁部　ヨコナデ 内外面　ハケメ		胎土　砂粒含む 焼成　良好 色調　茶灰褐色 外面炭化物付着
同上	19－13	15	N8E4	9	Ⅱ	復元口径 29.0	口縁部は端部が肥厚して逆「L」字形を呈し，上部に平坦面をもつ	内外面　ハケメ	口縁端部にヘラ状工具による刻目文。頸部に5条の平行沈線文	胎土　砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色
同上	19－14	15	北壁際		同上	復元口径 22.0	口縁部は端部が肥厚して逆「L」字形を呈し，上部に平坦面をもつ	内外面　ハケメ	口縁端部に貝殻腹縁による刻目文。口縁部平坦面にヘラ状工具により沈線をめぐらせ，その外側に貝殻腹縁により刺突文を施す。頸部にヘラ状工具により5条と3条の平行沈線文をめぐらせ，その間に貝殻腹縁により刺突文を施す。	胎土　2～5㎜大の小石含む 焼成　良好 色調　黄灰色
同上	19－15	15	N9E3	9	同上	復元口径 33.6	口縁部は端部が肥厚して逆「L」字形を呈し，上部に平坦面をもつ。	口縁部　ヨコナデ 外面　ヘラ磨き 内面　ハケメ		胎土　砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色
小形甕	20－1	16	N9E3	10		復元口径 13.0	小形品でコップ状を呈す。口縁部はゆるく短く外反する	調整不明		胎土　砂粒含む 焼成　良好 色調　暗茶褐色 風化著しい
同上	20－2	16	N8E4	10		復元口径 11.2	小形品でコップ状を呈す。口縁部は短く外方に折れ，胴部はわずかに張り出す	調整不明	頸部にヘラ状工具による1条の沈線文	胎土　2～3㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　黒灰色 風化著しい
同上	20－3	15	N1E4	11下		復元口径 10.8 器高 8.2 底径 5.0	小形品でコップ状を呈す。口縁部は短く外方に折れ，胴部はわずかに張り出す	口縁部　ヨコナデ 内外面　ヘラ磨き		胎土　2㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　外黄灰色 内黒褐色 1/2破損 内面炭化物付着

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	分類	法量	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
小形甕	20－4	15	N5E3	11下		口径 9.4 器高 7.4 底径 5.4	小形品でコップ状を呈す。口縁部は外反せず，上部に平坦面をもつ。胴部は直線的に細くすぼむ	外面　ハケメの後ナデ 内面　ハケメ 底部内面　ナデ 底面　ナデ		胎土　砂粒含む 焼成　良好 色調　白灰色 完形品 内外面に黒斑あり 口縁部はひずみが大きい
鉢	20－5	16	N9E3	9		復元口径 21.6	口縁部は短くわずかに外方に折れ，胴部はわずかに張り出す	口縁部に指頭圧痕が認められる		胎土　2㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　暗茶褐色 内面炭化物付着
同上	20－6	16	N3E4	12		復元口径 19.6	口縁部は短くわずかに外方に折れ，胴部はわずかに張り出す	口縁部　ヨコナデ 内外面　ハケメ		胎土　砂粒含む 焼成　良好 色調　青灰色 外面炭化物付着
同上	20－7	16	N8E3	10		復元口径 21.6	口縁部は短くわずかに外方に折れ，胴部は直線的に細くすぼむ	調整不明	頸部にヘラ状工具による4条の平行沈線文	胎土　2㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化著しい
同上	20－8	15	北壁際	11下		口径 20.7 器高 14.0 底径 7.2	口縁部はゆるく短く外反し，胴部はわずかに張り出し安定した平底を呈す	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ 内面　ハケメの後ナデ，ヘラ磨き		胎土　1～2㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　黄灰色 完形品 内面黒斑あり，風化著しい
同上	20－9		北壁際	11下		口径 20.5 器高 13.8 底径7.5	口縁部はゆるく短く外反し，胴部はわずかに張り出し安定した平底を呈す	調整不明		胎土　2㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　白灰色 完形品 風化著しい
蓋	20－10	15	N5E3	12		天井部径 6.3 器高 10.8 復元口径 24.0	天井部はやや凹み裾部は「ハ」字形に大きく開く	内外面にハケメの後ヘラ磨き，天井部付近に指頭圧痕が認められる		胎土　1～3㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　外白灰色～黄灰色 内黒褐色～茶褐色 1/2破損
同上	20－11	16	N8E4	9		復元口径 19.6	裾部は「ハ」字形に大きく広がる	内外面　ヘラ磨き 裾端部　ヨコナデ		胎土　2㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 裾端部内外面に炭化物付着
底部	20－12	16	北壁際			復元底径 9.6	底部の器肉が厚い	内外面　ヘラ磨き 底面　ナデ		胎土　2～3㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　黄灰色 外面黒斑あり，モミ痕らしき痕跡あり
同上	20－13	16	北壁際			底径 8.2	底部の器肉が厚い	内外面　ヘラ磨き 底面　ナデ		胎土　2～3㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　外茶灰色 内白灰色
鉢	20－14		N8E3	9			口縁部は端部が肥厚して上部に平坦面をもつ	外面　ヘラ磨き 内面　ナデ	口縁部平坦面にヘラ状工具による羽状文	胎土　2㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色
甕	20－15	16	N9E4	9	I_3		口縁部は大きく外反し，胴部はわずかに張り出す	調整不明	頸部にヘラ状工具により2条の平行沈線文をめぐらせ，沈線間に刺突文を施す	胎土　2㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　外黄灰色 内黒灰色 内面炭化物付着
底部	21－1	16	N9E3	12		復元底径 10.6	底部の器肉が厚い	外面　ハケメの後ヘラ磨き 内面　ハケメ		胎土　砂粒を含む 焼成　良好 色調　白灰色

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	分類	法量	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
底部	21－2	16	N９E３	9		底径 8.0	底部の器肉が厚い	調整不明		胎土　小石を含む 焼成　良好 色調　茶灰色 外面炭化物付着 風化著しい
同上	21－3	16	N８E５	9		底径 8.0	底部の器肉が厚い	内面　ヘラ磨き		胎土　1～3㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　茶灰色 風化著しい
同上	21－4	16	N９E３	9		底径 6.4	底部の器肉が厚い	調整不明		胎土　2㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　茶灰色 風化著しい
同上	21－5	16	N９E３	9		底径 5.0	底面にわずかに凹みをもつ	調整不明		胎土　砂粒含む 焼成　良好 色調　黒褐色 内外面炭化物付着
同上	21－6	16	北壁際			底径 6.0	底部の器肉が厚い	外面　ハケメ 内面　ナデ		胎土　2～3㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　外黒褐色 内茶灰色 内外面炭化物付着
同上	21－7	16	N７E３	10		底径 5.0	底部の器肉が厚い	調整不明		胎土　2㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化著しい
同上	21－8	16	N６E３	10		底径 7.8	底面に凹みをもつ 器肉はやや薄い	調整不明		胎土　2～3㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化著しい
同上	21－9	16	N６E３	10		底径 8.6	器肉がやや薄い	調整不明		胎土　2㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　外黒灰色 内黄灰色 風化著しい
同上	21－10	16	N９E３	10		底径 6.2		外面　ヘラ磨きか 内面　ナデ		胎土　2～3㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　外黄灰色 内茶灰色 外面黒斑あり 風化著しい
同上	21－11	16	N９E４	9		底径 8.2		調整不明		胎土　2～3㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化著しい
同上	21－12	16	N５E６	12		底径 8.2		内外面　ヘラ磨き		胎土　2㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　外青灰色 内白灰色 外面に黒斑あり
同上	21－13	16	N９E４	9		底径 7.4		調整不明		胎土　2～3㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　茶褐色 外面黒斑あり 風化著しい
同上	21－14	17	N３E３	12		底径 7.4	底部の器肉が厚い	調整不明		胎土　砂粒含む 焼成　良好 色調　淡青灰色 外面黒斑あり 風化著しい

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	分類	法量	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
底部	21－15	17	N９E３	9		復元底径 8.3	底部の器肉が厚い	調整不明		胎土　2㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　外黄灰色 内黒灰色 外面黒斑あり 風化著しい
同上	21－16	17	N９E４	9		復元底径 7.0		外面　ハケメ 内面　ハケメ，ナデ		胎土　2㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 内面炭化物付着 風化著しい
同上	21－17	17	N８E５	11上		復元底径 7.4	底部の器肉が厚い	内外面　ハケメ		胎土　2㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　暗青灰色 底面炭化物付着
同上	21－18	17	N７E６	12		底径 9.0		外面　ハケメ 内面　ハケメ，ナデ		胎土　2～3㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　黄灰色 内面炭化物付着
同上	21－19	17	N６E４	11上		底径 8.0	底部の器肉が厚い	外面　ハケメ		胎土　1～2㎜大の砂粒多く含む 焼成　やや良 色調　白灰色 内面と底面に炭化物付着 風化著しい
同上	21－20	17	N６E４	11上		底径 6.6	底部の器肉が厚い	外面　ハケメ		胎土　3～5㎜大の小石含む 焼成　良好 色調　白灰色 内面黒斑あり
同上	21－21	17	N０E３	12		底径 8.7	焼成後底面に径0.7㎝の孔が穿けられる	外面　ハケメ 内，底面　ナデ		胎土　1～2㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　白灰色 内面炭化物付着
同上	21－22	17	N９E３	9		底径 7.1	焼成後底面に径1.0㎝の孔が穿けられる	調整不明		胎土　1㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化著しい
同上	21－23	17	N９E３	10		復元底径 6.9	底部の器肉が厚く，やや高台状を呈す	外面　ハケメ		胎土　2～3㎜大の砂粒多くを含む 焼成　良好 色調　外黒灰色 内黄灰色 風化著しい
同上	21－24	17	N８E３	10		底径 6.2	底部の器肉は厚く，高台状を呈し，底面は凹みをもつ	調整不明		胎土　2～3㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　外暗青灰色 内白灰色 風化著しい
同上	21－25	17	北壁際			底径 7.0	底部の器肉は厚く，高台状を呈し，底面は凹みをもつ	調整不明		胎土　2㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　暗青灰色 内面炭化物付着 風化著しい
同上	21－26	17	N６E５	11上		底径 7.0	脚台状の底部を呈し，底面に凹みをもつ	調整不明		胎土　2㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　外白灰色 内黒灰色 風化著しい

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	分類	法量	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
底部	21－27	17	N９E３	10		復元底径 9.2	脚台状の底部を呈し，底面は大きく凹む	調整不明		胎土　砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 外面炭化物付着 風化著しい
同上	21－28	17	N９E３	9		復元底径 7.8	器肉が非常に厚く，高台状の底部を呈すと思われる	調整不明		胎土　２㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化著しい
壺	22－１	18	N５E４	11下	Ⅰ	復元口径 13.7 最大径 24.3 器高 31.7 底径 6.8	口縁部はやや大きく外反し，頸部から肩部にかけて「八」字形を呈し，扁球状の胴部へ続く。最大径は胴部中位のやや下に位置する	口縁部　ヨコナデ 内外面　ハケメの後雑なヘラ磨き 底部内面　ハケメの後ナデ	口縁端部にヘラ状工具による刻目文。頸部と肩部にクシ状工具によるそれぞれ11条の平行沈線文	胎土　小砂粒含む 焼成　良好 色調　黒褐色～黄褐色 口縁部のみ破損
同上	22－２	19	N２E４	11下	Ⅱ	口径 13.6 最大径 28.8 器高 40.0 底径 9.3	口縁部は短く外反し，肩部はあまり張り出さず，長胴形を呈す。最大径は胴部中位やや上に位置する	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメの後ヘラ磨き 内面　ヘラ磨き	口縁端部にヘラ状工具による斜格子状の刻目文。頸部に４本単位のクシ状工具により20条の平行沈線文をめぐらせ，その直下に半截竹管状工具により刺突文を施す	胎土　２㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　外灰色 内黄灰色 口縁部の１部破損 内外面炭化物付着 風化著しい
同上	22－３	18	N１E３	11下	同上	口径 14.4 最大径 24.3 器高 35.1 底径 6.8	口縁部はゆるく外反して，頸部は筒状に短く長胴形の胴部を呈す。 最大径は胴部中位やや上に位置する	外面　ハケメの後ヘラ磨き	口縁端部にヘラ状工具による斜格子状の刻目文。頸部に５本単位のクシ状工具により13条の平行沈線を施す	胎土　砂粒含む 焼成　良好 色調　外黄灰色 内白灰色 完形品 風化著しい
同上	22－４	18	N８E４	10	Ⅲ		口縁部はゆるく外反し，胴部は長胴形を呈す	調整不明	頸部に８本単位のクシ状工具により平行沈線文，波状文，平行沈線文を順にめぐらせ，その直下にヘラ状工具により刺突文を施す	胎土　２㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　外黄灰色 内白灰色 外面炭化物付着 風化著しい
同上	22－５	18	N５E３	10	同上	口径 12.6 復元最大径 16.8	口縁部は大きく外反して，頸部は円筒状に長く長胴形の胴部を呈す	外面　ハケメ 内面　指頭圧痕が認められる	口縁端部にヘラ状工具による刺突文。頸部と肩部にクシ状工具により，それぞれ27条，20条の平行沈線文をめぐらせ，いずれも沈線下にヘラ状工具により刺突文を施す	胎土　１～２㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　白灰色 外面炭化物付着 風化著しい
同上	22－６	18	N９E４	10		底径 6.4 最大径 12.0	胴部は長胴形を呈す	外面　ヘラ磨き 内面　ハケメの後ヘラ磨き		胎土　２㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　暗黒褐色 内外面炭化物付着
同上	22－７	19	N９E３	11下		復元底径 6.8 復元最大径 19.6	長胴形を呈し，最大径はほぼ胴部中位に位置する	外面　ハケメの後ヘラ磨き 内面　指頭圧痕が認められる		胎土　微砂粒含む 焼成　やや良 色調　外黒灰色 内黄灰色 内外面炭化物付着 風化著しい
同上	23－１	20	N９E３	9	Ⅳ$_1$	復元口径 39.4	口縁部は大きく朝顔状に開き，端部は逆「L」字形に屈曲する	口縁部　ヨコナデ 内外面　ハケメ	口縁部外面に２本単位のクシ状工具による斜格子目文。口縁上端部に指頭圧痕を有する貼付突帯 頸部に２条の貼付突帯	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶灰色～黄灰色 風化著しい

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	分類	法量	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
壺	23－2	20	N9E4	9	Ⅳ1	復元口径 27.2	口縁部は大きく朝顔状に開き，端部が逆「L」字形に屈曲する	内外面　ハケメの後ヨコナデ	口縁部外面に3本単位のクシ状工具による斜格子目文 口縁部内面に斜格子文，波状文，刺突文の順に施立する	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化著しい
同上	23－3	20	N8E4	9	同上	復元口径 23.4	口縁部は大きく外反し，端部が逆「L」字形に屈曲する	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ	口縁部外面に3本単位のクシ状工具による山形文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外茶灰色 内黒褐色 内面炭化物付着 口縁端部に粘土接合痕が認られる 風化著しい
同上	23－4		北壁際		同上	復元口径 25.8	口縁部は筒状の頸部から水平近く大きく開き，端部は逆「L」字形に屈曲する	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ 内面　ハケメ，ナデ	口縁部外面にヘラ状工具による斜行文 頸部にヘラ状工具より沈線文をめぐらせ直下に指頭圧痕を有する貼付突帯	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　青灰色
同上	23－5	20	N9E3	9	同上	復元口径 27.0	口縁部は大きく外反し，端部が逆「L」字形に屈曲する。頸部は短く筒状を呈す	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ	口縁部外面にヘラ状工具による斜行文 頸部に指頭圧痕を有する貼付突帯	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　青灰色 風化著しい
同上	23－6	20	N3E4	11下	同上	復元口径 21.8	口縁部は大きく外反し，端部が逆「L」字形に屈曲する。頸部は短く筒状を呈す	口縁部　ヨコナデ，ナデ 外面　ハケメ 内面　ヘラ磨き	口縁部外面にヘラ状工具による雑な山形文 頸部に指頭圧痕を有する貼付突帯	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　青灰色 口縁端部に粘土接合痕が認られる
同上	23－7		N8E4	9	同上	復元口径 27.6	口縁部は大きく朝顔状に開き，端部が下方に拡張する	調整不明	口縁部外面に3条の凹線文 口縁部内面にヘラ状工具による1条の沈線	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　灰褐色 風化著しい
同上	23－8	20	N9E3	9	同上	復元口径 27.8	口縁部は大きく朝顔状に開き，端部が逆「L」字形に屈曲する	調整不明	口縁部外面に3条の凹線文をめぐらせ，その間と上下端にヘラ状工具により刻目文を施す。 口縁上端部に指頭圧痕を有する貼付突帯	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外黒褐色 内黄灰色 風化著しい 外面炭化物付着
同上	23－9	20	N9E3	9	同上	復元口径 28.6	口縁部は大きく朝顔状に開き，端部が肥厚する	調整不明	3条の凹線文をめぐらせた後，ヘラ状工具により，羽状に刻目文を施す	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化著しい
同上	23－10	20	N8E4	9	同上	復元口径 36.0	口縁部は大きく朝顔状に開き，端部は逆「L」字形に屈曲する。 頸部は長く円筒状を呈す	外面　ハケメ	口縁部外面に4条の凹線文をめぐらせた後，円形浮文を貼付し，口径両端部にヘラ状工具により刻目文を施す。頸部上方に4条の凹線文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化著しい
同上	23－11	20	N8E4	9	Ⅳ2	復元口径 13.4	口縁部は大きく外反し，端部が肥厚して平坦面をなす	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化著しい
同上	23－12	20	N8E5	11下	同上	復元口径 11.8	口縁部は筒状の頸部から屈曲して外反し，端部に平坦面をもつ	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ 内面　ナデ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　青灰色～白灰色 風化著しい
同上	23－13	20	N8E3	10	同上	復元口径 14.0	口縁部は筒状の頸部から屈曲して外反し，端部に平坦面をもつ	調整不明	頸部に指頭圧痕を有する貼付突帯	胎土　2㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化著しい

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	分類	法量	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
壺	23－14	20	N５E６	11下	Ⅳ$_2$	復元口径 32.4	口縁部はやや直線的に外反する頸部から屈曲して水平近く大きく開き，端部は肥厚して平坦面をもつ	口縁部　ヨコナデ	口縁部外面両端にヘラ状工具による刻目，３本単位のクシ状工具による山形文。口縁部内面にクシ状工具による斜格子文 口縁部に焼成前に穿孔された孔が２つ残る	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 口縁部内面に炭化物付着 風化著しい
同上	23－15		北壁際		同上	復元口径 21.8	口縁部は大きく朝顔状に開き，端部が若干肥厚する	調整不明	口縁部外面に３本単位のクシ状工具による斜格子目文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　青灰色 風化著しい
同上	23－16	20	N８E５		同上	復元口径 26.0	口縁部は大きく朝顔状に開き，端部が肥厚する	口縁部　ヨコナデ	口縁部外面に４本単位のクシ状工具による山形文 口縁部内面に同施文具により，２列の波状文を施し，その内側に竹管文を施文する	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化著しい
同上	23－17		北壁際		同上	復元口径 21.0	口縁部はやや直線的に外反する 頸部から屈曲して水平近く大きく開き，端部は肥厚して平坦面をもつ	調整不明	口縁部外面にヘラ状工具による斜格子目文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化著しい
同上	23－18	20	N４E３	10	同上	復元口径 20.0	口縁部はやや直線的に外反する 頸部から屈曲して水平近く大きく開き，端部は肥厚して平坦面をもつ	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ 内面　ナデ	口縁部外面にヘラ状工具による斜格子目文 口縁部内面に５本単位のクシ状工具による列点文。頸部に指頭圧痕を有する貼付突帯	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 口縁部内面に黒斑あり
同上	24－１	21	N５E４	11下	同上	復元口径 25.1	口縁部は大きく外反し，端部が肥厚して平坦面をなす。頸部は長い筒状を呈す	口縁部　ヨコナデ 内外面　ハケメ	口縁部外面にヘラ状工具による斜行文 頸部に指頭圧痕を有する貼付突帯	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　青灰色 風化著しい
同上	24－２	21	N１E４	11下	同上	復元口径 21.6	肩部と頸部の屈曲がやや大きく，口縁部は筒状の頸部から水平近く大きく開き，端部は肥厚して平坦面をなす	口縁部　ヨコナデ 内外面　ハケメ，ナデ	口縁部外面にヘラ状工具による斜格子目文 頸部に指頭圧痕を有する貼付突帯。肩部付近に４本単位のクシ状工具による列点文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　青灰色～白灰色 風化著しい
同上	24－３	21	N５E３	11下	同上	口径 14.5	頸部と肩部の屈曲がやや大きく，口縁部は大きく外反し，端部が肥厚して平坦面をなす	口縁部　ヨコナデ 内外面　ハケメ	口縁端部にヘラ状工具による刻目文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　白灰色 外側に炭化物付着 風化著しい
同上	24－４	21	N８E４	9	同上	復元口径 22.0	口縁部は大きく朝顔状に開き，端部が肥厚する	調整不明	口縁部外面に３条の凹線文をめぐらせその間にヘラ状工具により刻目文を施す	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶灰褐色 風化著しい
同上	24－５	21	N８E４	10	同上	復元口径 20.2	口縁部は大きく朝顔状に開き，端部が肥厚して平坦面をなし内傾する	調整不明	口縁部外面に３条の凹線文をめぐらせた後，円形浮文を貼付する	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黒褐色 風化著しい
同上	24－６		N９E３	9	同上	復元口径 32.6	口縁部は大きく朝顔状に開き，端部が肥厚して平坦面をなし，内傾する	調整不明	口縁部外面に４条の凹線文 口縁部と頸部の境に２条の貼付突帯	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　赤褐色 風化著しい
同上	24－７	21	N８E４	9	同上	復元口径 21.6	口縁部はゆるく外反し，端部が肥厚して平坦面をなし，内傾する 頸部は長く円筒状を呈す	口縁部　ヨコナデ 内外面　ハケメ	口縁部平坦面に４条，頸部に２条の凹線文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化著しい

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	分類	法量	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
壺	24－8	21	N9E3	9	Ⅴ	復元口径 7.0	口縁部は直線的に外反して立ち上がる	外面　ハケメの後ナデ	口縁部に棒状工具による2列の列点文	胎土　2～3㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 外面に黒斑あり 風化著しい
同上	24－9	21	N6E3	8	同上	復元口径 11.4	口縁部は直線的に外反して立ち上がり，上部に平坦面をもつ	調整不明	頸部に指頭圧痕を有する貼付突帯	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化著しい
同上	24－10	21	N9E3	9	Ⅵ	復元口径 10.0	口縁部は内傾し，上部に平坦面をもつ	調整不明		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化著しい
同上	24－11	21	N9E3	10	同上	復元口径 13.4	口縁部は逆「L」字形に呈し，上部に平坦面をもつ	口縁部　ヨコナデ 内外面　ハケメ	口縁端部にヘラ状工具による刻目文 頭部に指頭圧痕を有する貼付突帯をめぐらせ，直下に6本単位のクシ状工具による平行沈線文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化著しい
同上	24－12	21	N8E3	11下	Ⅳ$_2$	口径 13.0 最大径 20.7 器高 28.6 底径 5.7	口縁部は短く外反し，端部は肥厚して平坦面をなす。肩部はあまり張り出さず長胴形を呈す。最大径は胴部中位やや上に位置する	口縁部　ヨコナデ 外面　ヘラ磨き 内面　ハケメ，ヘラ磨き	同部最大径やや上にヘラ状工具による刺突文 胴部上方に主軸に対象に2つの孔がある	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　青灰色 口縁部一部破損 風化著しい
同上	24－13	22	N5E5	11下		最大径 30.1 底径 7.6	口縁部は大きく外反すると思われ，頸部は筒状に大きく張り出し，長円形の胴部を呈す	外面　ハケメ，ヘラ磨き 内面　ハケメ	頸部に2条の刻目突帯 肩部から胴部上半にかけて7本単位のクシ状工具と3本単位のクシ状工具により平行沈線文と山形文を交互に4段にめぐらせ，最下に3本，4本単位のクシ状工具により列点文を施す	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外灰褐色 内　灰～茶褐色 口縁部のみ欠損 外面黒斑あり 外面半分風化著しい
同上	25－1	23	N8E5	11下	Ⅶ	口径 10.4 最大径 15.0 器高 14.3 底径 4.1	口縁部は「く」字形に屈曲して外反し，内面屈曲部に稜が立つ 胴部は扁球状を呈す	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメの後ヘラ磨き 内面　ハケメ，胴部下半はハケメの後ヘラ磨き		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外灰褐色 内黒褐色 完形品 外面黒斑あり 内外面全域に漆を塗布する
同上	25－2	22	N3E3	11下	同上	復元口径 12.4	口縁部は「く」字形に折れまがり，肩部は球状に大きく張り出す	口縁部　ヨコナデ 内外面　ハケメ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 内外面炭化物付着
同上	25－3	22	N5E4	11上	Ⅷ	復元口径 12.2	口縁部は筒状の頸部から短く屈曲して外反し，端部が上下に拡張する。肩部はあまり張り出さず長胴形を呈す	口縁部　ヨコナデ 内外面　ハケメ	口縁部外面に5本単位のクシ状工具による平行沈線文 頸部にヘラ状工具により2条の平行沈線文をめぐらせ，沈線間に斜行文を施す	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黒灰色 内面炭化物付着 風化著しい
同上	25－4	22	N3E3	10			頸部は円筒状に長い	内外面　ハケメ	頸部に8条の凹線文口縁部付近の内面に2本単位のクシ状工具による波状文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化著しい
同上	25－5	23	N6E3	10		復元最大径 37.1	頸部は円筒状に長く，肩部は球状に張り出す	内外面　ハケメ	頸部に7条の凹線文，肩部に7本単位のクシ状工具により平行沈線文と波状文を交互に配す	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外青灰色 内黄灰色

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	分類	法量	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
壺	25－6	22	N９E４	9			口縁部はやや外反しながら直線的に立ちさがる	調整不明	口縁部外面に４条の貼付突帯 頸部に突帯を貼付し，棒状工具により押圧を加える	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外黄灰色 内黒灰色 風化著しい
同上	25－7	22	N８E４	10			口縁部はやや外反しながら直線的に立ちさがる	内外面　ハケメ	口縁部外面に３条の突帯をめぐらせ，その上に縦方向の粘土を２本貼付する	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化著しい
同上	25－8	22	N９E４	9		復元口径 27.0	口縁部はやや直線的に外反する頸部から屈曲して開き，端部が肥厚して平坦面をなす	外面　ナデ 内面　ヘラ磨き	口縁部外面にヘラ状工具により羽状文を施した後円形浮文を貼付する	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化著しい
同上	25－9	22	N８E４	9				調整不明	４条の凹線文が残る	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黒褐色 風化著しい
同上	25－10	22	N９E４	9				調整不明	ヘラ状工具により三角形の刺突文を配し，その直下に円形浮文が２つ残る	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶灰色 風化著しい
同上	25－11		N８E４	9				外面　ヘラ磨き	ヘラ状工具による格子状の文様が残る	胎土　２㎜大の微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化著しい
同上	25－12	22	N８E３	9				調整不明	クシ状工具による文様とその直下に６本単位のクシ状工具による列点文が残る	胎土　２㎜大の微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化著しい
甕	26－1	23	N７E４	10	I_1	復元口径 18.8	口縁部はゆるく短く外反する	調整不明	口縁端部にヘラ状工具による斜行状の刻目文 頸部にクシ状工具による７条の平行沈線文	胎土　２㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化著しい
同上	26－2	23	N８E４	9	同上	復元口径 19.0	口縁部はゆるく短く外反し，胴部は細くすぼむ	外面　ハケメ	口縁端部にヘラ状工具による斜行状の刻目文 頸部に４本単位のクシ状工具による８条の平行沈線文	胎土　２～３㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化著しい
同上	26－3	24	N４E３	10	同上	口径 14.8 器高 16.2 胴部最大径 13.5 底径 4.8	口縁部はゆるく外反し胴部は細くしぼむ 底部の器肉は厚い	口縁部　ヨコナデ 外面　胴部上半はハケメ，下半はハケメの後ヘラ磨き 内面　底部付近はタテ方向，胴部はヨコ方向のヘラ磨き	口縁端部にヘラ状工具による斜行状の刻目文 頸部に５本単位のクシ状工具により15条の平行沈線文をめぐらせ直下に５条の波状文を施す	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外灰褐色 内茶褐色～黒褐色 完形品 外面黒斑あり 内面底部に炭化物付着
同上	26－4	23	N８E４	9	同上	復元口径 17.0	口縁部はゆるく短く外反する	調整不明		胎土　３～５㎜大の小石含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化著しい
同上	26－5	23	N９E３	9	I_2	復元口径 24.2	口縁部は短く外方に折れ，胴部はわずかに張り出す	内外面　ハケメ	頸部にクシ状工具による９条の平行沈線文	胎土　２～３㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　暗黒褐色 外面炭化物付着 風化著しい
同上	26－6	23	N９E３	9	同上	復元口径 16.0	口縁部は短く外方に折れ，胴部は大きく張り出す	調整不明	頸部に焼成前に穿孔されたと思われる	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶灰色 外面黒斑あり

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	分類	法量	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
甕	26－7	23	N4E4	11下	I_2	復元口径 14.6	口縁部は短く外方に折れ，胴部は細くすぼむ	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ 内面　ナデ	頸部にクシ状工具による4条の平行沈線文	胎土　2～3㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　黒褐色 外面炭化物付着
同上	26－8	25	北壁際		I_3	復元口径 16.0	口縁部は大きく外反し，胴部は大きく張り出す	外面　ハケメ 内面　ナデ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黒褐色 内外面炭化物付着
同上	26－9	25	N8E3	10	同上	復元口径 16.0	口縁部は大きく外反し胴部は大きく張り出す	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ 内面　ナデ	口縁端部に板状工具による刺突状の刻目文 頸部にクシ状工具による5条の平行沈線文	胎土　2㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化著しい
同上	26－10	25	N6E5	11上	Ⅱ	復元口径 30.0	口縁部は端部が肥厚逆して「L」字形を呈し，上部に平坦面をもつ	調整不明	口縁端部にヘラ状工具による斜行状の刻目文 頸部にクシ状工具による5条の平行沈線文	胎土　2～3㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化著しい
同上	26－11	24	N5E5	11下	同上	口径 27.0 器高 34.2 胴部最大径 25.6 底径 7.9	口縁部が逆「L」字形を呈し，胴部はわずかに張り出した後細くすぼむ	口縁部　ヨコナデ 内外面　ハケメ	口縁端部にヘラ状工具による刻目文 頸部にクシ状工具による12条の平行沈線文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黒灰色 1/2破損 内外面炭化物付着
同上	26－12	25	N8E4	9	同上	復元口径 45.4	口縁部は逆「L」字形を呈し，胴部は大きく張り出す	外面　ハケメ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化著しい
同上	26－13	24	N5E6	11下	同上	復元口径 21.2	口縁部は逆「L」字形を呈し，胴部は大きく張り出す	口縁部　ナデ 内外面　ハケメ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黒褐色 外面炭化物付着
同上	26－14	25	N9E3	9	同上	復元口径 28.0	口縁部は逆「L」字形を呈す	内外面　ハケメ		胎土　2㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　茶灰色 外面黒斑あり 風化著しい
同上	26－15	25	N9E4	9	同上	復元口径 19.4	口縁部は逆「L」字形を呈す	内面　ハケメ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化著しい
同上	26－16	25	N8E4	10	同上	復元口径 18.4	口縁部	口縁部　ヨコナデ 内外面　ハケメ，ナデ		胎土　2㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化著しい
同上	27－1	25	北壁際		$Ⅲ_1$	復元口径 15.0	口縁部は「く」字形を呈し，端部に丸みをもつ 胴部はわずかにふくらむが長胴形を呈す	外面　ハケメ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黒灰色 内外面炭化物付着 風化著しい
同上	27－2	25	N8E4	10	同上	復元口径 16.9	口縁部は「く」字形を呈し，端部に丸みをもつ 胴部はわずかにふくらむが長胴形を呈す 内面屈曲部に稜が立つ	口縁部　ヨコナデ 内外面　ハケメ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外黒灰色 内茶褐色 風化著しい

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	分類	法量	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
甕	27－3	25	N6E3	8	Ⅲ1	復元口径 15.2	口縁部は「く」字形を呈し，端部に丸みをもつ 胴部はわずかにふくらむが長胴形を呈す 内面屈曲部に稜が立つ	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ 内面　ナデ		胎土　2㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　外黄灰色 内黒色 内面炭化物付着 風化著しい
同上	27－4	25	北壁際		同上	復元口径 20.2	口縁部は「く」字形を呈し，端部に丸みをもつ 内面屈曲部に稜が立つ	外面　ハケメ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　暗青灰色 外面炭化物付着 風化著しい
同上	27－5	25	N9E3	11下	同上	復元口径 23.6	口縁部は「く」字形を呈し端部に丸みをもつ 内面屈曲部に稜が立つ 胴部はやや張り出す	口縁部　ヨコナデ 内外面　ハケメの後ナデ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外黄灰色 内白灰色
同上	27－6	25	N9E4	9	同上	復元口径 18.8	口縁部は「く」字形を呈し端部に丸みをもつ 胴部は球状に張り出す	内面　ハケメ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黒褐色 風化著しい
同上	27－7	25	N9E3	10	同上	復元口径 20.6	口縁部は「く」字形を呈し端部に丸みをもつ 胴部は球状に張り出す	外面　ハケメ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外黄灰色 内茶褐色 風化著しい
同上	27－8	25	N7E4	8	同上	復元口径 20.2	口縁部は「く」字形を呈し端部に丸みをもつ 胴部は長胴形を呈す	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ 内面　ヘラ磨き		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　暗青灰色 外面炭化物付着
同上	27－9	25	ベルト北	9	同上	復元口径 18.0	口縁部は「く」字形を呈し端部に丸みをもつ 胴部は長胴形を呈す	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ 内面　ヘラ磨き		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黒褐色 風化著しい
同上	27－10	25	N9E3	9	同上	復元口径 18.8	口縁部は「く」字形を呈し端部に丸みをもつ 胴部は球状に張り出す	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化著しい
同上	27－11	25	N8E3	10	同上	復元口径 19.8	口縁部は「く」字形を呈し端部に丸みをもつ 胴部は球状に張り出す	外面　ハケメ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化著しい
同上	27－12	25	北壁際		Ⅲ2	復元口径 13.0	口縁部は「く」字形をなし，上端部がつまみ出された形態を呈す。 胴部は張り出すが長胴形を呈す	口縁部　ヨコナデ 内外面　ハケメの後ナデ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黒褐色 外面炭化物付着
同上	27－13	25	N8E6	11上	同上	復元口径 15.6	口縁部は「く」字形をなし，上端部がつまみ出された形態を呈す。 胴部は張り出すが長胴形を呈す	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ 内面　ナデ	口縁端部にヘラ状工具による刻目文が部分的にみられる	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　青灰色
同上	27－14	25	N9E3	9	同上	復元口径 21.4	口縁部は「く」字形をなし，上端部がつまみ出された形態を呈す。 胴部は大きく球状に張り出す	調整不明		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶灰色

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	分類	法量	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
甕	27－15	25	北壁際		Ⅳ$_2$	復元口径 25.6	口縁部は「く」字形をなし，上端部がつまみ出された形態を呈す。 胴部はやや張り出すが長胴形を呈す	内外面　ハケメの後ナデ	口縁端部にヘラ状工具による刻目文	胎土　2㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　黒灰色 外面炭化物付着
同上	27－16	25	N７E５	11下	同上	復元口径 20.8	口縁部は「く」字形をなし，上端部がつまみ出された形態を呈す。 胴部は大きく球状に張り出す	口縁部　ヨコナデ 内外面　ハケメ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黒灰色 内外面炭化物付着
同上	27－17	25	N８E４	11下	同上	復元口径 29.6	口縁部は「く」字形をなし，上端部がつまみ出された形態を呈す 胴部は大きく球状に張り出す	口縁部　ヨコナデ 内外面　ハケメ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 外面炭化物付着 風化著しい
同上	27－18	26	北壁際		同上	復元口径 25.4	口縁部はやや長く上端部がつまみ出された形態を呈す	調整不明		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黒灰色 炭化物付着
同上	27－19	26	N９E４	9	Ⅲ$_3$	復元口径 15.8	口縁部はやや短く「く」字形を呈し端部が肥厚して平坦面をもつ 胴部はやや張り出し，長胴形を呈す	口縁部　ヨコナデ 内外面　ハケメ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶灰色 外面炭化物付着
同上	27－20	26	北壁際		同上	復元口径 17.8	口縁部は「く」字形をなし上端部がつまみ出された形態を呈す。 胴部はやや張り出すが長胴形を呈す	調整不明		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　青灰色 風化著しい
同上	27－21	26	N５E３	10		復元口径 12.2	口縁部はやや短く「く」字形を呈し，端部が肥厚し平坦面をもつ	調整不明		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　青灰色
同上	28－1	26	N８E４	11下	Ⅲ$_3$	復元口径 25.4 最大径 24.1 器高 24.6 復元底径 9.6	口縁部は「く」字形を呈し端部は小さい平坦面をもつ。 胴部はやや大きく張り出した後にすぼみ，安定した底部を呈す 口径に対して器高がやや低い	口縁部　ヨコナデ 内外面　ハケメ 底部付近　ハケメの後ヘラ磨き	口縁端部と胴部付近にヘラ状工具による刺突文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 1/2破損 外面黒斑あり
同上	28－2	26	N８E５	11上	同上	復元口径 24.8	口縁部「く」字形をなし，端部に小さい平坦面をもつ 胴部は大きく球状に張り出す	調整不明		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　白灰色 風化著しい
同上	28－3	26			同上	復元口径 24.0	口縁部は「く」字形を呈し端部がやや肥厚して，小さい平坦面をもつ	調整不明	口縁端部にヘラ状工具による斜格子状の刻目文。頸部に指頭圧痕を有する貼付突帯	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外黒褐色 内黒灰色 外面炭化物付着
同上	28－4	26	N５E３	10		復元口径 19.8	口縁部は「く」字形を呈し端部に小さい平坦面をもつ 胴部は大きく球状に張り出す。 器壁はやや厚い	口縁部　ヨコナデ 内外面　ハケメ		胎土　2㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　外黒褐色 内黄灰色 風化著しい
同上	28－5	26	N８E５	11下	Ⅳ$_1$	復元口径 14.4	口縁部は「く」字形を呈し端部に丸みをもつ 胴部は球状に大きく張り出す 器壁はやや厚い	調整不明		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　青灰色 風化著しい

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	分類	法量	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
甕	28－6	27	N9E4	10	Ⅳ$_1$	復元口径 15.2	口縁部は「く」字形を呈し端部に小さい平坦面をもつ。胴部は大きく球状に張り出す 器壁はやや厚い	調整不明		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　青灰色 風化著しい
同上	28－7	26	N7E6	11上	同上	復元口径 18.2	口縁部は「く」字形を呈し端部に丸みをもつ。胴部は球状に大きく張り出す 器壁はやや厚い	調整不明		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　青灰色 風化著しい
同上	28－8	27	N4E3	10	Ⅳ$_2$	復元口径 18.2	口縁部は「く」字形を呈し端部に丸みをもつ。胴部は球状に大きく張り出す 器壁はやや厚い	調整不明		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黒灰色 炭化物付着
同上	28－9	27	北壁際		同上	復元口径 24.4	口縁部は「く」字形を呈し，端部が肥厚して平坦面をもつ。胴部は大きく球状に張り出す	口縁部　ヨコナデ 内面　ハケメ	頸部から胴部上半にかけてクシ状工具による25条の平行沈線文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黒灰褐色 風化著しい
同上	28－10	27	N4E3	10	同上	復元口径 18.4	口縁部は「く」字形を呈し，端部が肥厚して平坦面をもつ。胴部は大きく球状に張り出す	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ 内面　ハケメの後ナデ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外黄灰色 内青灰色
同上	28－11	27	N8E4	9	Ⅳ$_3$	復元口径 14.6	口縁部は強く「く」字形をなし上端部がつまみ出された形態を呈し，小さい平坦面をもつ。胴部は球状に大きく張り出す	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ 内面　ナデ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化著しい
同上	28－12	27	北壁際		同上	復元口径 14.2	口縁部は強く「く」字形をなし上端部がつまみ出された形態を呈し，小さい平坦面をもつ。胴部は球状に大きく張り出す	調整不明		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　青灰色 風化著しい
同上	28－13	27	N8E4	9	Ⅳ$_4$	復元口径 19.5	口縁部は強く「く」字形を呈し端部が肥厚して大きい平坦面をもつ。胴部は大きく球状に張り出す	調整不明		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶灰色 風化著しい
同上	28－14	27	北壁際		同上	復元口径 13.6	口縁部は強く「く」字形を呈し端部が肥厚して大きい平坦面をもつ。胴部は大きく球状に張り出す	調整不明	口縁端部にヘラ状工具による斜行文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶灰色 風化著しい
同上	28－15	27	N8E3	10	同上	復元口径 16.6	口縁部は強く「く」字形を呈し端部が肥厚して大きい平坦面をもつ。胴部は大きく球状に張り出す	調整不明	口縁部にヘラ状工具による刻目が部分的にみられる。頸部に指頭圧痕を有する貼付突帯	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化著しい
同上	28－16	27	N9E3	9	同上	復元口径 20.7	口縁部は強く「く」字形を呈し端部が肥厚して大きい平坦面をもつ。胴部は大きく球状に張り出す	調整不明	口縁上下端部にヘラ状工具による刻目文 頸部に指頭圧痕を有する貼付突帯	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　青灰色 風化著しい
同上	29－1	27	N8E5	9	Ⅴ	復元口径 16.4	口縁部はやや内湾し，端部が肥厚して上部に平坦面をもつ	調整不明	口縁部直下に6条の凹線文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　暗青灰色 風化著しい

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	分類	法量	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
甕	29－2	27	北壁際		Ⅴ	復元口径 17.0	口縁部はやや内湾し，上部に平坦面をもつ	調整不明	口縁部に刻目突帯を貼付する	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黒灰色 風化著しい 縄文土器の可能性あり
同上	29－3	27	N８E３	9	同上	復元口径 16.4	口縁部はやや内湾し端部が肥厚して上部に平坦面をもつ	調整不明	口縁部直下に２条の貼付突帯 口縁端部にヘラ状工具による刻目文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化著しい
同上	29－4	27	N５E４	11下	同上	復元口径 23.6	口縁部はやや直ロぎみに立ち上がり端部が肥厚して上部に平坦面をもつ	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ	口縁部直下に刻目突帯を貼付し胴部中位にヘラ状工具により刺突文を施す	胎土　２㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　青灰色 風化著しい
同上	29－5	27	N８E４	9	同上	復元口径 22.8	口縁部はやや内湾し，上部に平坦面をもつ	調整不明	口縁部直下に１条の貼付突帯	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化著しい
同上	29－6	27	N９E３	9	Ⅵ1	復元口径 16.6	口縁部は「く」字状に折れて，端部が若干肥厚する	調整不明	口縁端部に２条の凹線文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶灰色 外面炭化物付着
同上	29－7	27	N８E５	9	同上	復元口径 15.2	口縁部は「く」字状に折れて，端部が若干肥厚する。胴部はやや張り出すが長胴形を呈すと思われる	調整不明	口縁端部に１条の凹線文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黒灰色 風化著しい
同上	29－8	27	N８E４	9	同上	復元口径 15.0	口縁部は「く」字状に折れて，端部が若干肥厚する 胴部はやや張り出すが長胴形を呈すと思われる	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ 内面　ナデ	口縁端部に１条の凹線文をめぐらせその上下にヘラ状工具により羽状の刻目文を施し，部分的に円形浮文を貼付する	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黒褐色 内外面炭化物付着 風化著しい
同上	29－9	27	N８E４	9	同上	復元口径 19.0	口縁部は「く」字状に折れて，端部が若干肥厚する 胴部はやや張り出すが長胴形を呈すと思われる	調整不明	口縁端部に２条の凹線文	胎土　２㎜大の砂粒を含む 焼成　良好 色調　青灰色～黄灰色 風化著しい
同上	29－10	27	北壁際		同上	復元口径 21.2	口縁部は「く」字状に折れ，端部が肥厚して上方に若干拡張する	調整不明	口縁端部に３条の凹線文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黒灰色 風化著しい
同上	29－11	27	N８E３	10	同上	復元口径 22.6	口縁部は「く」字状に折れ，端部が肥厚して若干上下に拡張する。 胴部はやや張り出すが長胴形を呈すと思われる	口縁部　ヨコナデ 内面ナデ	口縁端部に３条の凹線文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　白灰色 風化著しい
同上	29－12	27	北壁際		同上	復元口径 19.4	口縁部は「く」字状に折れ，端部が肥厚して若干上下に拡張する。 胴部はやや張り出すが長胴形を呈すと思われる	口縁部　ヨコナデ 内面　ハケメ	口縁端部にヘラ状工具により刻目文を入れた後沈線を施す	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　白灰色 風化著しい
同上	29－13	28	N９E４	9	同上	復元口径 23.8	口縁部は「く」字状に折れ，端部が肥厚して若干上下に拡張する。 胴部はやや張り出すが長胴形を呈すと思われる	調整不明	口縁端部に１条の凹線文をめぐらせ，その上下にヘラ状工具により刻目を施す	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化著しい

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	分類	法量	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
甕	29－14	28	北壁際		Ⅵ₂	復元口径 16.6	口縁部は「く」字状に折れ，端部が肥厚し，平坦面をもつ。 胴部は大きく球状に張り出す	口縁部　ヨコナデ 内外面　ハケメ	口縁端部に2条の凹線文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 外面炭化物付着 風化著しい
同上	29－15	28	N9E3	9	同上	復元口径 22.6	口縁部は「く」字状に折れ，端部は肥厚して若干上下に拡張する。 胴部は大きく球状に張り出す	口縁部　ヨコナデ 内外面　ハケメ	口縁端部に3条の凹線文	胎土　2㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　青灰色
同上	29－16	28	N8E4	9	同上	復元口径 18.2	口縁部は「く」字状に折れ端部は肥厚して若干上下に拡張する。 胴部は大きく直線的に張り出し長胴形を呈すと思われる	調整不明	口縁端部に3条の凹線文 頸部に貼付突帯をめぐらせた後ヘラ状工具により刺突文を施す	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黒灰褐色 外面炭化物付着
同上	29－17	28	N9E4	9	同上	復元口径 23.6	口縁部は「く」字状に折れ，頸部が肥厚して若干上方に拡張する	調整不明	口縁端部に3条の凹線文 頸部に貼付突帯文をめぐらせた後ヘラ状工具により刺突文を施す	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黒灰褐色 外面炭化物付着
同上	29－18	28	N5E3	10	同上	復元口径 20.4	口縁部は「く」字状に折れ，頸部が肥厚して若干上方に拡張する	調整不明	口縁端部にヘラ状工具により刻目文を施した後2条の凹線文をめぐらす 頸部に指頭圧痕を有する貼付突帯	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　青灰色
同上	29－19	28	N8E4	9	Ⅶ	復元口径 11.0	口縁部は「く」字状に折れ，端部が大きく上方に拡張し複合口縁状を呈す 胴部は球状に張り出す	口縁部　ヨコナデ 内外面　ハケメ	口縁端部に3条の凹線文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 外面炭化物付着 風化著しい
同上	29－20	28	N9E4	9	同上	復元口径 16.2	口縁部は複合口縁状を呈し，胴部はややふくらむが長胴形を呈すと思われる	口縁部　ヨコナデ 内面　ハケメ	口縁端部に2条の凹線文	胎土　2㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　黒灰褐色 風化著しい
同上	29－21	28	N9E3	10	同上	復元口径 20.2	口縁部は「く」字状に折れ，端部が大きく上下に拡張する	口縁部　ヨコナデ 内面　ハケメ	口縁端部に4条の凹線文をめぐらせた後，ヘラ状工具により斜行文を施し，部分的に円形浮文を貼付する 頸部に指頭圧痕を有する突帯を貼付した痕跡あり	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰褐色 風化著しい
鉢	30－1		N7E3	11下	Ⅰ	口径 16.6 器高 12.1 底径 6.0	口縁部は大きく外反し，端部に平坦面をもつ 胴部はややふくらんだ後にすぼまる	内面　ヘラ磨き，ナデ		胎土　2㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　茶灰色 1/2破損 風化著しい
同上	30－2		N8E3	11下	同上	口径 16.8 器高 14.2 底径 5.0	口縁部はゆるく短く外反し，胴部は大きく張り出し球状を呈す	内面　ヘラ磨き	頸部の相対する位置に2つづつ焼成前に穿孔される	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外黄灰色 内黒色 完形品 内面炭化物付着 外面風化著しい
同上	30－3	28	N8E4	9	同上	復元口径 19.0	口縁部は逆「L」字形を呈し，胴部は細くすぼまる	調整不明		胎土　2㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　外黒灰色 内黄灰色 外面炭化物付着 風化著しい

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	分類	法量	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
鉢	30－4	28	N9E3	9	Ⅱ	復元口径 14.0	口縁部はやや内湾し，上部に平坦面をもつ	調整不明		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黒灰褐色 内外面炭化物付着 風化著しい
同上	30－5	28	北壁際		同上	復元口径 17.0	口縁部はやや内湾し，上部に平坦面をもつ	調整不明		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黒灰色 風化著しい
高坏	30－6	28	N9E3	9	Ⅰ	復元口径 20.0	口縁部は上部に平坦面をもち，体部は椀状に湾曲する	調整不明		胎土　2㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　茶灰色 風化著しい
同上	30－7	28	N9E4	9	同上	復元口径 21.0	口縁部は上部に平坦面をもち，体部は椀状に湾曲する	調整不明	口縁端部にヘラ状工具による刻目文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黒灰色～黄褐色
同上	30－8	28	西北壁際		同上	復元口径 34.6	口縁部は端部が肥厚し，上部に平坦面をもつ 体部は椀状に湾曲する	調整不明	口縁端部にヘラ状工具による刻目文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外黒色 内白灰色 風化著しい
同上	30－9	28	N5E3	10	Ⅱ	復元口径 28.6	口縁部はやや内湾して，端部が「T」字状を呈し，上部に平坦面をもつ	調整不明	口縁端部にヘラ状工具による刻目文 口縁部平坦面に2条の山形文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黒灰色 風化著しい
同上	30－10	28	N7E5	8	Ⅲ	復元坏部最大径 13.8	口縁部は内湾し，体部は中ほどで大きく「く」字形に湾曲する	内面　ハケメの後ナデ	体部にヘラ状工具により5条の平行沈線文をめぐらせ，その上下と沈線間に刺突文を施す	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外青灰色 内黄灰色
同上	30－11	28	N7E4	10			筒部は短く裾広がりに開く	調整不明		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 外面黒斑あり 風化著しい
同上	30－12	28	N8E4	11下			脚筒部は円筒状にやや長い　円板充塡法が認められる	外面　ヘラ磨き 内面　しぼり目	筒部にヘラ状工具により雑な5条の平行沈線文を2段施す	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　白灰色 風化著しい
同上	30－13	28	N3E3	10			脚筒部は円筒状にやや長い　円板充塡法が認められる	外面　ハケメ，ヘラ磨き 内面　しぼり目	筒部にヘラ状工具により9条と7条の平行沈線文を施す	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化著しい
同上	30－14	28	N5E3	10		復元底径 14.0	裾部は「八」字形に大きく開く	内面　しぼり目		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化著しい
同上	30－15	28	N9E4	10			筒部から裾部にかけて徐々に開く 円板充塡法が認められる	外面　ヘラ磨き 内面　しぼり目		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化著しい
同上	30－16	28	N5E4	10		復元底径 15.5	胴筒部から円筒状やや短く裾部は「八」字形に大きく開く 円板充塡法が認められる	外面　ヘラ磨き 内面　しぼり目，ハケメ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化著しい
同上	30－17	28	N9E4	9		復元底径 16.0	裾部は「八」字形に大きく開く	調整不明	裾部に三角形の透孔を穿孔し，その下に4条の凹線文と，ヘラ状工具による山形文を施す	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶灰色 風化著しい
鉢	30－18	28	N9E4	9	Ⅲ		折り返しの口縁部を呈しやや内湾する	調整不明	頸部に刻目突帯を貼付し，その直下に7条の凹線文を施す	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黒灰色 風化著しい

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	分類	法量	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
甕	30－19	28	N８E４	9	Ⅱ		口縁部は端部が肥厚して逆「L」字形を呈す	調整不明	口縁端部にヘラ状工具による斜格子状の刻目文 頸部にクシ状工具により10条の平行沈線文をめぐらせその直下にヘラ状工具により三角形の刺突文を施す	胎土　2～3㎜大の砂粒を含む 焼成　良好 色調　黒褐色 風化著しい
底部	31－1	29	N９E４	10		底径 5.9		外面　ヘラ磨き 内面　ナデ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 底面炭化物付着 風化著しい
同上	31－2	29	N４E３	10		復元底径 6.2		外面　ヘラ磨き 内面　ナデ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黒灰色 外面炭化物付着 風化著しい
同上	31－3	29	N９E３	10		底径 4.8		外面　ヘラ磨き 内面　ナデ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化著しい
同上	31－4	29	N２E４	11 下		底径 7.0		外面　ハケメ 内面　ナデ		胎土　2～3㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　白灰色 風化著しい
同上	31－5	29	N５E３	10		復元底径 8.2		内面　ヘラ磨き		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化著しい
同上	31－6	29	N６E６	12		復元底径 6.6		外面　ヘラ磨き 内面　ナデ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外黒褐色 内黄灰色 外面炭化物付着 風化著しい
同上	31－7	29	N６E５	12		復元底径 8.6	底部の器肉が厚い	内外面　ヘラ磨き		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　灰黒褐色 外面炭化物付着 風化著しい
同上	31－8	29	北壁際			復元底径 7.8		調整不明		胎土　2㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　黒灰色 内面炭化物付着 風化著しい
同上	31－9	29	N９E３	9		底径 6.7	底部の器肉が厚い	内外面　ヘラ磨き		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　灰褐色 内面炭化物付着 風化著しい
同上	31－10	29	N８E３	9		底径 6.0		内面　ハケメ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化著しい
同上	31－11	29	N９E３	9		底径 6.0	底部の器肉が厚い	内外面　ヘラ磨き		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 内外面炭化物付着 風化著しい
同上	31－12	29	N８E４	11 下		底径 8.0		内外面　ヘラ磨き		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　青灰色 内面黒斑あり 風化著しい

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	分類	法量	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
底部	31－13	29	N１E３	12		底径 5.6	底部の器肉が厚い	内外面　ハケメ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外青灰色 内黒褐色 外面黒斑あり 内外面炭化物付着
同上	31－14	29	北壁際			復元底径 7.6		調整不明		胎土　2㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　茶灰色 風化著しい
同上	31－15	29	N５E３	12		底径 6.8		調整不明		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　青灰色 外面黒斑あり 風化著しい
同上	31－16	29	N９E３	9		復元底径 5.4		調整不明		胎土　2㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 内外面炭化物付着 風化著しい
同上	31－17	29	N９E３	9		復元底径 7.0	底部の器肉が厚い	外面　ハケメの後ナデ 内面　ナデ，部分的にハケメ		胎土　2㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　茶褐色 内外面炭化物付着
同上	31－18	30	N７E６	11下		底径 7.2	底部の器肉が厚い	外面　ハケメ 内面　ナデ		胎土　2㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　外青灰色 内黒色 内面炭化物付着
同上	31－19	30	北壁際			底径 4.8		外面　ヘラ磨き 内面　ナデ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　灰褐色 内外面炭化物付着 風化著しい
同上	31－20	30	北壁際			底径 6.2	底部の器肉が厚い	外面　ヘラ磨き 内面　ナデ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　暗青灰色 内外面炭化物付着
同上	31－21	30	N４E４	11下		底径 6.8	底部の器肉が厚い	外面　ヘラ磨き 内面　ナデ，ヘラ磨き		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 内外面炭化物付着 風化著しい
同上	31－22	30	N６E４	11下		底径 7.4	器壁はうすい 表面に凹みをもつ	外面　ヘラ磨き，ハケメの後ナデ 内面　ナデ，ヘラ磨き		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　灰褐色 外面黒斑あり 風化著しい
同上	31－23	30	N７E５	11下		底径 6.4	底部の器肉が厚い	外面　ハケメ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　白灰色 内外面炭化物付着 風化著しい
同上	31－24	30	N９E３	9		底径 6.3	底部が大きく凹み脚台状を呈す	調整不明		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 内外面炭化物付着 風化著しい
同上	32－1	31	N９E３	9		底径 8.0		調整不明		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶灰色 外面黒斑あり 風化著しい
同上	32－2	31	西壁際	11下		底径 6.6	大型品	外面　ヘラ磨き 内面　ハケメ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	分類	法量	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
底部	32－3	31	N９E４	9		復元底径 8.8	器肉がうすい	調整不明		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化著しい
同上	32－4	31	N９E３	9		底径 6.0		内面　ヘラ磨き		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶灰色 内面炭化物付着 風化著しい
同上	32－5	31	N８E５	11 下		底径 8.2	底面わずかに凹む	外面　ヘラ磨き 内面　ハケメ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　白灰色
同上	32－6	31	N８E４	11 下		底径 5.8	器壁がうすい	内面　ヘラ磨き		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　灰色 外面黒斑あり 風化著しい
同上	32－7	31	N８E５	11 下		底径 7.8	器壁がうすい	外面　ヘラ磨き 内面　ハケメ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色～白灰色 外面黒斑あり 風化著しい
同上	32－8	31	N８E４	9		復元底径 7.6		内外面　ハケメ，ナデ		胎土　3～5㎜大の小石含む 焼成　良好 色調　外青灰色 内黒灰色 内面炭化物付着 風化著しい
同上	32－9	31	N８E５	11 下		底径 13.0	底部の器肉が厚い	外面　ハケメ 内面　ヘラ磨き		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　灰褐色 外面風化著しい
同上	32－10		N６E５	11 下		底径 10.2		外面　ヘラ磨き 内面　ハケメの後部分的にナデ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　灰褐色 外面風化著しい
同上	32－11	30	N７E５	11 上		底径 10.0	底部の器肉が厚い	外面　ハケメ 内面　ヘラ磨き		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　灰褐色 少量炭化物付着 外面風化著しい
壺	33－1	32	N９E４	9	Ⅰ	復元口径 12.2	口縁部はゆるく「く」字状に折れ，端部が上下に拡張する	内外面　ヨコナデ	口縁部にクシ状工具により３条の平行沈線文を施した後ナデ仕上げ	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　灰褐色 風化著しい
同上	33－2	32	N４E３	10	同上	復元口径 19.4	口縁部はゆるく「く」字状に折れ，端部が上下に拡張する	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ 内面　ナデ	口縁端部に２条の平行沈線文を施した後ナデ仕上げ	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　暗灰褐色 外面炭化物付着
同上	33－3	32	北壁際		同上	復元口径 16.0	口縁部はゆるく「く」字状に折れ，端部がやや肥厚する	調整不明	口縁端部に２条の平行沈線文の痕跡あり	胎土　砂粒含む 焼成　良好 色調　暗茶褐色 風化著しい
同上	33－4	32	N９E４	9	Ⅱ	復元口径 26.6	口縁部は筒状の頸部から屈曲して外反し，端部が上下に拡張する	調整不明	口縁部に４条の平行沈線文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄茶褐色 外面炭化物付着 風化著しい
同上	33－5	32	N８E４	9	同上	復元口径 13.0	口縁部は筒状の頸部から屈曲して外反し，端部が上下に拡張する	口縁部　ヨコナデ 内面頸部以下　ヘラ削り	頸部にヘラ状工具により６条の平行沈線文をめぐらせその直下に刺突文を施す	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化著しい
甕	33－6	32	N８E４	9	Ⅰ	復元口径 15.2	口縁部は「く」字状に折れて，端部が上下に拡張する	調整不明	口縁端部に２条の平行沈線文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　暗褐色 風化著しい

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	分類	法量	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
甕	33－7	32	N7E4	10	Ⅰ	復元口径 18.4	口縁部は「く」字状に折れて，端部が若干肥厚する	口縁部　ヨコナデ 内面頸部以下　ヘラ削り	口縁端部にヘラ状工具により3条の平行沈線文を施した後ナデ仕上げ	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　暗茶褐色 風化著しい
同上	33－8	32	N7E4	10	同上	復元口径 20.6	口縁部は「く」字状に折れて端部が若干肥厚する	口縁部　ヨコナデ 内面頸部以下　ヘラ削り	口縁端部に2条の平行沈線文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外明灰褐色 内明茶褐色 外面炭化物付着 風化著しい
同上	33－9	32	N9E3	10	同上	復元口径 17.8	口縁部は「く」字状に折れて端部が上下に拡張する	口縁部　ヨコナデ 内面頸部以下　ヘラ削り	口縁部にクシ状工具により5～6条の平行沈線文を施した後ナデ仕上げ	胎土　砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 外面炭化物付着 風化著しい
同上	33－10	32	N9E3	10	同上	復元口径 14.6	口縁部は「く」字状に折れて端部が上下に拡張する	口縁部　ヨコナデ 内面頸部以下　ヘラ削り	口縁部にヘラ状工具により4条の平行沈線文を施した後ナデ仕上げ	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　暗茶褐色 外面炭化物付着
同上	33－11	32	N6E3	8	同上	復元口径 14.2	口縁部はゆるく「く」字状に折れて端部が上下に拡張する 胴部は球状に大きく張り出す	口頸部　ヨコナデ 外面　ハケメ 内面頸部以下　ヘラ削り	口縁部にヘラ状工具により3条の平行沈線文を施した後ナデ仕上げ 肩部にヘラ状工具による刺突文	胎土　2㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　黒灰色 外面風化著しい
同上	33－12	32	北壁際		同上	復元口径 16.0	口縁部は「く」字状に折れて端部がやや大きく上下に拡張する	口頸部　ヨコナデ 内面頸部以下　ヘラ削り	口縁部にヘラ状工具により3条の平行沈線文を施した後ナデ仕上げ	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　明茶褐色
同上	33－13	32	N8E4	10	Ⅱ$_1$	復元口径 14.8	口縁部は複合口縁を呈し，端部はやや内傾する	口縁部　ヨコナデ 内面頸部以下　ヘラ削り	口縁部にクシ状工具により4条の平行沈線文を施した後ナデ仕上げ	胎土　砂粒含む 焼成　良好 色調　明茶褐色 外面炭化物付着
同上	33－14	32	N8E3	10	同上	復元口径 16.0	口縁部は複合口縁を呈し，端部はやや内傾する	口縁部　ヨコナデ 内面頸部以下　ヘラ削り	口縁部にヘラ状工具により3条の平行沈線文を施した後ナデ仕上げ	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 外面炭化物付着
同上	33－15	32	N8E5	9	Ⅰ	復元口径 18.0	口縁部は「く」字状に折れて，端部が上下に拡張する 肩部は大きく直線的に張り出す	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ 内面頸部以下　ヘラ削り	口縁部にヘラ状工具により3条の平行沈線文を施した後ナデ仕上げ	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化著しい
同上	33－16	32	N8E4	9	Ⅱ$_1$	復元口径 14.4	口縁部は複合口縁を呈し，端部はやや内傾する	口縁部　ヨコナデ 内面頸部以下　ヘラ削り	口縁部にクシ状工具により4条の平行沈線文を施した後ナデ仕上げ	胎土　2㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　内黒灰色 外灰褐色 外面風化著しい
同上	33－17	32	N9E3	10	同上	復元口径 20.0	口縁部は複合口縁を呈し，端部はやや内傾する	口縁部　ヨコナデ 内面頸部以下　ヘラ削り	口縁部に4条の平行沈線文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　暗黒褐色 外面風化著しい
同上	33－18	32	N9E4	9	同上	復元口径 21.0	口縁部は複合口縁を呈し，端部はやや内傾する	調整不明	口縁部にクシ状工具により4条の平行沈線文を施した後ナデ仕上げ	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　灰褐色 風化著しい
同上	33－19	32	N9E3	9	同上	復元口径 17.2	口縁部はゆるく「く」字状に折れて端部が肥厚する	口縁部　ヨコナデ 内面頸部以下　ヘラ削り	口縁部にヘラ状工具により2～3条の平行沈線文を施した後ナデ仕上げ 頸部にヘラ状工具による刺突文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化著しい
同上	33－20		N7E3	10	同上	復元口径 17.4	口縁部は複合口縁を呈し，端部はやや内傾する	口縁部　ヨコナデ 内面頸部以下　ヘラ削り	口縁部にクシ状工具により5条の平行沈線文を施した後ナデ仕上げ	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	分類	法量	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
甕	33－21	32	N８E４	10	Ⅱ₁	復元口径 18.0	口縁部は複合口縁を呈し，端部はやや直立して立ち上がる	口縁部　ヨコナデ 内面頸部以下　ヘラ削り	口縁部にクシ状工具により４条の平行沈線文を施した後ナデ仕上げ 肩部にヘラ状工具による刺突文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黒褐色
同上	33－22	32	N９E３	9	同上	復元口径 15.4	口縁部は複合口縁を呈し，端部はやや直立して立ち上がる 肩部は直線的に大きく張り出す	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ 内面頸部以下　ヘラ削り	口縁部にクシ状工具により平行沈線文を施した後ナデ仕上げ 肩部に板状工具による刺突文	胎土　３㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　明白灰色 風化著しい
同上	33－23	32	北壁際		同上	復元口径 17.8	口縁部は複合口縁を呈し，端部はやや直立して立ち上がる 肩部は直線的に大きく張り出す	口縁部　ヨコナデ 内面頸部以下　ヘラ削り	口縁部にクシ状工具により平行沈線文を施した後ナデ仕上げ 肩部にヘラ状工具による刺突文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外暗黒灰色 内暗茶灰色 風化著しい
同上	33－24	32	N８E４	10	同上	復元口径 18.8	口縁部は複合口縁を呈し，端部はやや直立して立ち上がる 肩部は直線的に大きく張り出す	口縁部　ヨコナデ 外面　ハケメ	口縁部にクシ状工具により４条の平行沈線文を施した後ナデ仕上げ	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　暗褐色 風化著しい
同上	34－１	32	N９E４	9	Ⅱ₂	復元口径 13.6	口縁部は複合口縁を呈し，端部は外傾する	口縁部　ヨコナデ 内面頸部以下　ヘラ削り	口縁部にクシ状工具により４条の平行沈線文を施した後ナデ仕上げ	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外黒褐色 内茶褐色 風化著しい
同上	34－２	32	北壁際		同上	復元口径 13.2	口縁部は複合口縁を呈し，端部は外傾する	口縁部　ヨコナデ 内面頸部以下　ヘラ削り	口縁部に４条の平行沈線文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化著しい
同上	34－３	32	N９E４	9	同上	復元口径 17.4	口縁部は複合口縁を呈し，端部は外傾する	口縁部　ヨコナデ 内面頸部以下　ヘラ削り	口縁部にクシ状工具により３条の平行沈線文を施した後ナデ仕上げ	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化著しい
同上	34－４	32	N８E４	10	同上	復元口径 16.4	口縁部は複合口縁を呈し，端部は外傾する	調整不明	口縁部にクシ状工具により４条の平行沈線文を施した後ナデ仕上げ 肩部にヘラ状工具による刺突文が部分的に認められる	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　暗褐色 風化著しい
同上	34－５	32	N５E３	10	同上	復元口径 16.3	口縁部は複合口縁を呈し，端部は外傾する 口縁部の幅が大きい	口縁部　ヨコナデ 内面頸部以下　ヘラ削り	口縁部にクシ状工具により６条の平行沈線文を施した後ナデ仕上げ 頸部にヘラ状工具による刺突文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　明茶褐色 外面炭化物付着 風化著しい
同上	34－６	33	N９E３	9	同上	復元口径 16.4	口縁部は複合口縁を呈し，端部は外傾する 胴部は球状に大きく張り出す	口縁部　ヨコナデ 内面頸部以下　ヘラ削り	口縁部にクシ状工具により５条の平行沈線文を施した後ナデ仕上げ	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化著しい
同上	34－７	33	N９E４	9	同上	復元口径 26.6	口縁部は複合口縁を呈し，端部は外傾する	口縁部　ヨコナデ 内面頸部以下　ヘラ削り	口縁部にクシ状工具により４条の平行沈線文を施した後ナデ仕上げ	胎土　２㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　外茶褐色 内暗青灰色 風化著しい
同上	34－８	33	N９E３	9	同上	復元口径 24.0	口縁部は複合口縁を呈し，端部は外傾する	口縁部　ヨコナデ 内面頸部以下　ヘラ削り	口縁部にクシ状工具により９条の平行沈線文を施した後ナデ仕上げ 頸部にヘラ状工具による刺突文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黒褐色 風化著しい
同上	34－９	33	N８E４	9	同上	復元口径 20.0	口縁部は複合口縁を呈し，端部は外傾する 肩部は直線的に大きく張り出す	口縁部　ヨコナデ 内面頸部以下　ヘラ削り	口縁部にクシ状工具により３条の平行沈線文を施した後ナデ仕上げ 肩部に板状工具による刺突文	胎土　２㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　茶灰色 風化著しい

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	分類	法量	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
甕	34−10	33	N9E4	9	Ⅱ2	復元口径 13.2	口縁部は複合口縁を呈し，端部は外傾する	口縁部　ヨコナデ 内面頸部以下　ヘラ削り	口縁部にクシ状工具により6条の平行沈線文を施した後ナデ仕上げ	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外暗茶褐色 内明茶褐色 外面炭化物付着 風化著しい
同上	34−11	33	N8E4	9	同上	復元口径 16.8	口縁部は複合口縁を呈し，やや弓なりに外反して立ち上がる	口縁部　ヨコナデ 内面頸部以下　ヘラ削り	口縁部にクシ状工具により10数条の平行沈線文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外黒褐色 内茶褐色 風化著しい
同上	34−12	33	北壁際		同上	復元口径 16.2	口縁部は複合口縁を呈し，やや弓なりに外反して立ち上がる	口縁部　ヨコナデ 内面頸部以下　ヘラ削り	口縁部にクシ状工具により7条の平行沈線文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　明茶褐色
同上	34−13	33	北壁際		同上	復元口径 18.0	口縁部は複合口縁を呈し，やや弓なりに外反して立ち上がる	調整不明	口縁部にクシ状工具により9条の平行沈線文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外青灰色 内灰白色 風化著しい
同上	34−14	33	N9E4	9	同上	復元口径 20.8	口縁部は複合口縁を呈し，やや弓なりに外反して立ち上がる	調整不明	口縁部にクシ状工具により7条の平行沈線文	胎土　2㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化著しい
同上	34−15	33	北壁際		Ⅲ	復元口径 20.0	口縁部はゆるく「く」字状に折れ，内面屈曲部に丸みをもつ	口縁部　ヨコナデ 内面口頸部以下 ヘラ削り		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　灰褐色
同上	34−16	33	N8E4	9	同上	復元口径 18.6	口縁部はゆるく「く」字状に折れ，内面屈曲部に丸みをもつ 口縁部の器肉が厚い	口縁部　ヨコナデ 内面口頸部以下 ヘラ削り		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　暗灰色 風化著しい
脚部	34−17	33	N9E4	9		復元口径 15.4	脚端部は複合口縁状を呈す	外面　ヨコナデ 内面　ヘラ削り	外面にヘラ状工具により4条の平行沈線文を施した後ナデ仕上げ	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄褐色 風化著しい
同上	34−18	33	N9E4	9		復元口径 14.6	脚端部は複合口縁状を呈す	外面　ヨコナデ 内面　ヘラ削り	外面にクシ状工具による10条の平行沈線文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　白茶灰色 風化著しい
底部	34−19		N9E3	9			脚台状の底部を呈す	外面　ナデ 内面　ヘラ削り		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　灰褐色 風化著しい
同上	34−20		N8E3	9		底径 5.0	底面がわずかに凹む	外面　ヘラ磨き 内面　ヘラ削り		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外灰褐色 内灰色 風化著しい
同上	34−21	33	N6E3	12		底径 6.2	底面がわずかに凹む	外面　ヘラ磨き 内面　ヘラ削り		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　暗黒灰色 外面風化著しい
同上	34−22	33	N9E4	10		底径 1.7	丸底に近い平底	外面　ヘラ磨き 内面　ヘラ削り		胎土　3㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　暗茶褐色
	34−23	33	N9E3	9				外面　ハケメ 内面　ヘラ削り	竹管状工具による「S」字形のスタンプ文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外黄褐色 内赤灰色 風化著しい
注口土器	34−24	33	N9E3	9			注口のため孔あり	内面　ヘラ削り	ヘラ状工具による平行沈線文と鋸歯状の文様を施す	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　明茶灰色 風化著しい

器種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	分類	法量	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
ミニチュア	35－1	33	N9E4	9		復元口径 5.4	ぐい呑状を呈す	粘土塊から指オサエ，ナデによってつくられる		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黒色 火を受ける 風化著しい
同上	35－2	33	N7E3	10		口径　6.0 器高　5.1 底径　4.0	ぐい呑状を呈す	粘土塊から指オサエ，ナデによってつくられる		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　灰褐色 完形品
同上	35－3	33	N8E4	12		口径　2.9 器高　5.1 底径　3.0	短頸壺状の形態を呈す	外面　ハケメの後ヘラ磨き 内面　ナデ	肩部にヘラ状工具による沈線	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　明黄灰色 完形品 外面黒斑あり
同上	35－4		N9E3	9		復元口径 5.0	前期甕形土器と器形が類似する	調整不明		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黒灰色 風化著しい
同上	35－5	33	N8E4	9		復元口径 6.8	前期甕形土器と器形が類似する	外面　ナデ 内面　ハケメ		胎土　2㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　灰褐色
同上	35－6	33	N9E3	9		底径 4.0		調整不明		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　灰褐色 風化著しい
同上	35－7	33	N7E4	10		底径 3.2		内外面　ナデ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　明茶褐色 風化著しい
同上	35－8	33	N9E4	9		底径 3.4	底面に凹みをもつ	内外面　ナデ		胎土　2㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化著しい
同上	35－9	33	N9E4	9		底径 3.8	底面に凹みをもつ	調整不明		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶灰色 風化著しい
同上	35－10	33	N9E3	10		底径 3.5		調整不明		胎土　砂粒含む 焼成　良好 色調　淡灰色 風化著しい
同上	35－11	33	N9E3	9		底径 4.6		調整不明		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外黒灰色 内暗灰色 風化著しい
同上	35－12	33	N9E3	9		底径 4.6	脚台状の底部を呈す	調整不明	脚部に焼成前に2つ穿孔される	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄褐色 風化著しい
同上	35－13	33	N8E4	9		底径 5.0	脚台状の底部を呈す	脚部に指頭圧痕が認められる		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化著しい

3．土　師　器

土師器は弥生土器に比較して出土量は少なく，図示できたものは163点である。これらは第８層から第11層に包含されていたが，いずれの層でも縄文土器，弥生土器と混在していることから，原位置を保つものはないと考えられる。第８，９層では小片が多いが，第10層では残存状態の良好な資料が多く出土した。

今回出土した土師器は，壺，甕，高坏，小型丸底壺，器台，低脚坏，注口土器などがあるが，甕，高坏，小型丸底壺が多く，他の器種は少ない。また当地方で古墳時代前期とされる，いわゆる鍵尾式および小谷式のものは少なく，時期的にやや下がるものが多いようである。さらに叩き痕の残る土器（第39図９）や外来の影響を受けたと考えられる土器（第36図11など）も若干みられる。以下，器種別に分類を行ない，それぞれの特徴を摘記することにする。

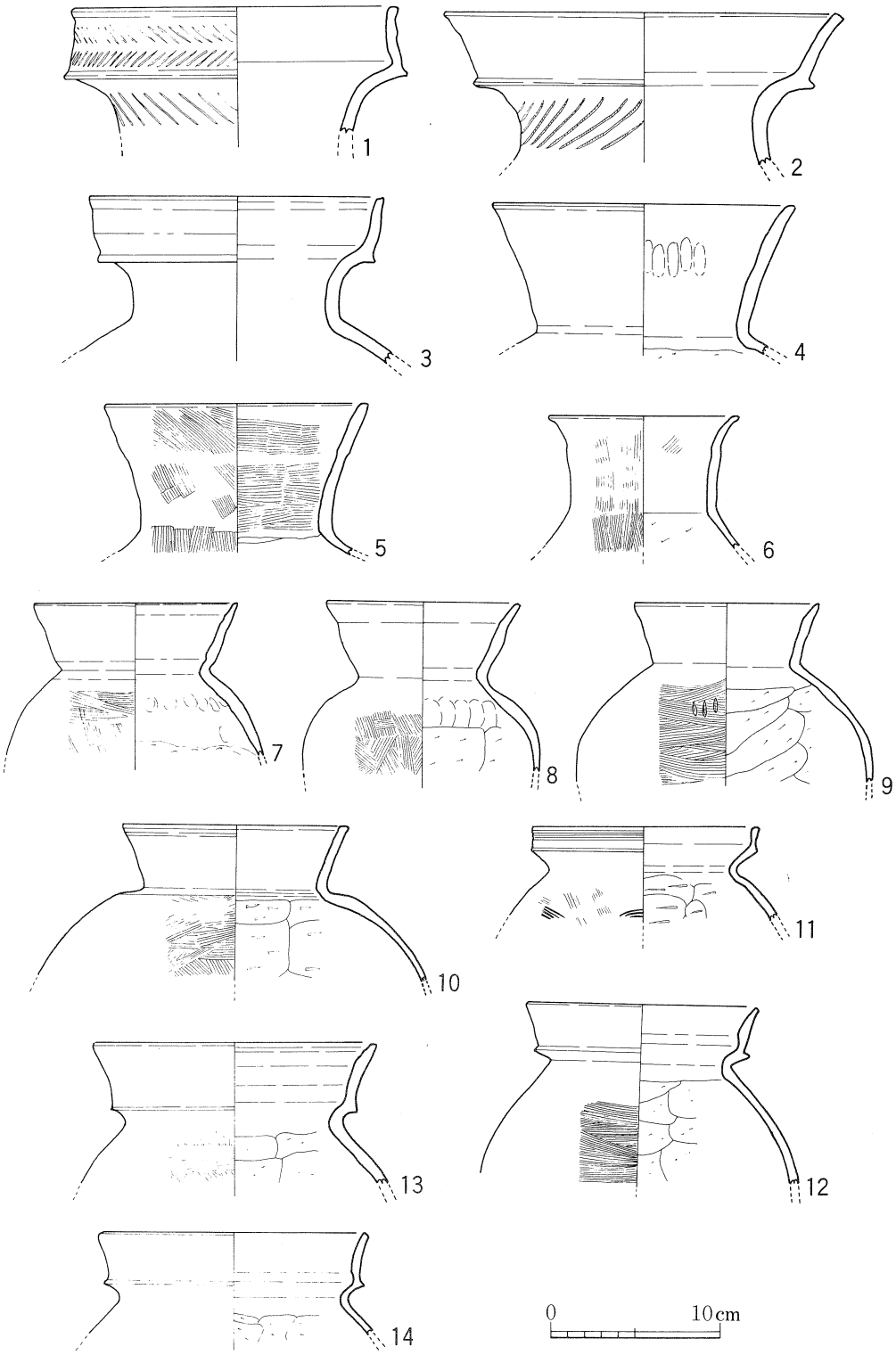
壺形土器（第36図１～10　図版34，35）　壺形土器は複合口縁を有するもの（Ⅰ類），口縁下部にわずかにふくらみを持つ複合口縁の退化したと思われるもの（Ⅱ類），単純口縁のもの（Ⅲ類），口縁部上半が外反するもの（Ⅳ類）の４類に分けることができる。

Ⅰ類（第36図１～３　図版34）　頸部は長くゆるやかに湾曲し，口縁部は複合口縁を有するものである。口縁部は１が内傾しながら立ち上がり，２はゆるやかに外反し，３は内湾しながら立ち上がる。１，３の口縁部は平坦面をなす。調整は全面ヨコナデが施され，１の口縁部にヘラ状工具による綾杉文，頸部にヘラ状工具による刺突文，２は頸部にヘラ状工具による刺突文が施されている。胎土はやや粗く，焼成は良好である。色調は灰色または褐色を呈している。

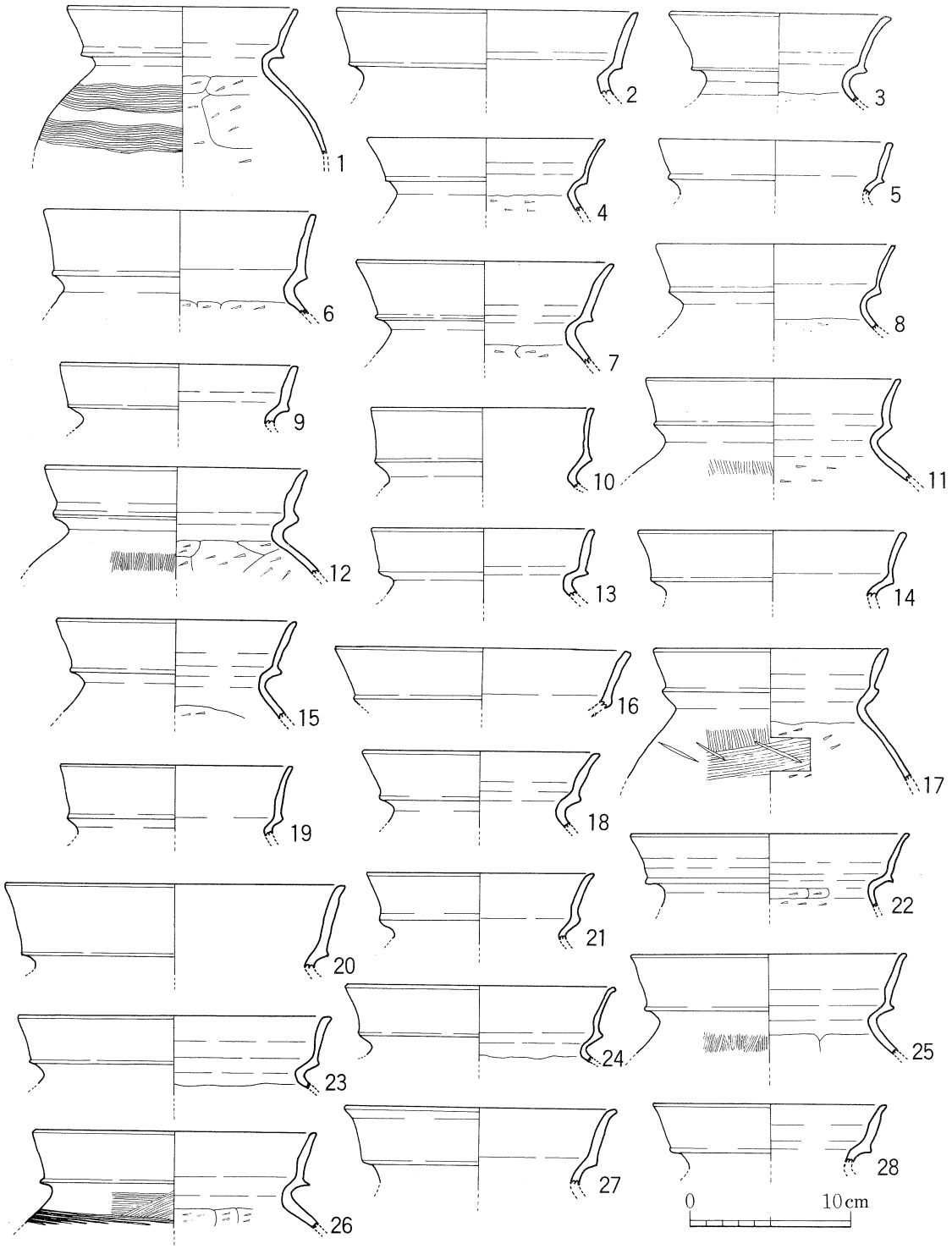
Ⅱ類（第36図７～９　図版34，35）　頸部はやや「く」の字形に屈曲し，口縁下部はわずかに膨らみを持ち，複合口縁の稜が退化したものと思われる。いずれも胴部はほぼ球状と思われる。また７の口縁部内面には比較的明瞭な段がつく。これらは口縁部内外面ともヨコナデ，胴部外面に刷毛目，内面にヘラ削り調整が施され，７，８の肩部内面には指頭による押圧痕が残る。９の胎土はやや粗いが，その他はいずれも密で，焼成は良好である。色調は暗灰色ないし茶褐色を呈している。

Ⅲ類（第36図４，５，10　図版34）　単純口縁の壺形土器である。頸部は「く」の字形に屈曲し，口縁部はゆるやかに外反しながらのびるもので，口縁端部は平坦面をなしている。調整は４が口縁部内外面ともヨコナデ，内面には指頭圧痕が若干残る。頸部外面はヨコナデ，内面はヘラ削りで仕上げられている。５は口縁部内外面とも刷毛目，頸部外面は刷毛目，内面はヘラ削りで仕上げられている。10の肩部は強いナデによって凹面をなしている。ともに胎土は密で，焼成は良好である。色調は灰白色（４），淡灰褐色（５）を呈している。

Ⅳ類（第36図６　図版34）　口縁部下半は直線的に立ち上がり，上端部は外反する。胴部はあま



第36図　土師器実測図(1)1：4



第37図　土師器実測図(2) 1：4

り張らないようである。口縁部は内外面とも刷毛目の後ナデ，肩部内面はヘラ削りで調整が施されている。胎土は密で，焼成も良好である。色調は灰褐色を呈している。

甕形土器（第36図11～14・第37図～第40図　図版34～39）　甕形土器は口縁部の形態から大きく4つに分類することができる。すなわち複合口縁を有するもので，口縁部が短く直立する薄手のもの（Ⅰ類），複合口縁を有するもので，口縁部が外反または外傾するもの（Ⅱ類），単純口縁で口縁部が内湾し，上端部に平坦面をなすものまたは肥厚するもの（Ⅲ類），その他の単純口縁のもの（Ⅳ類）である。

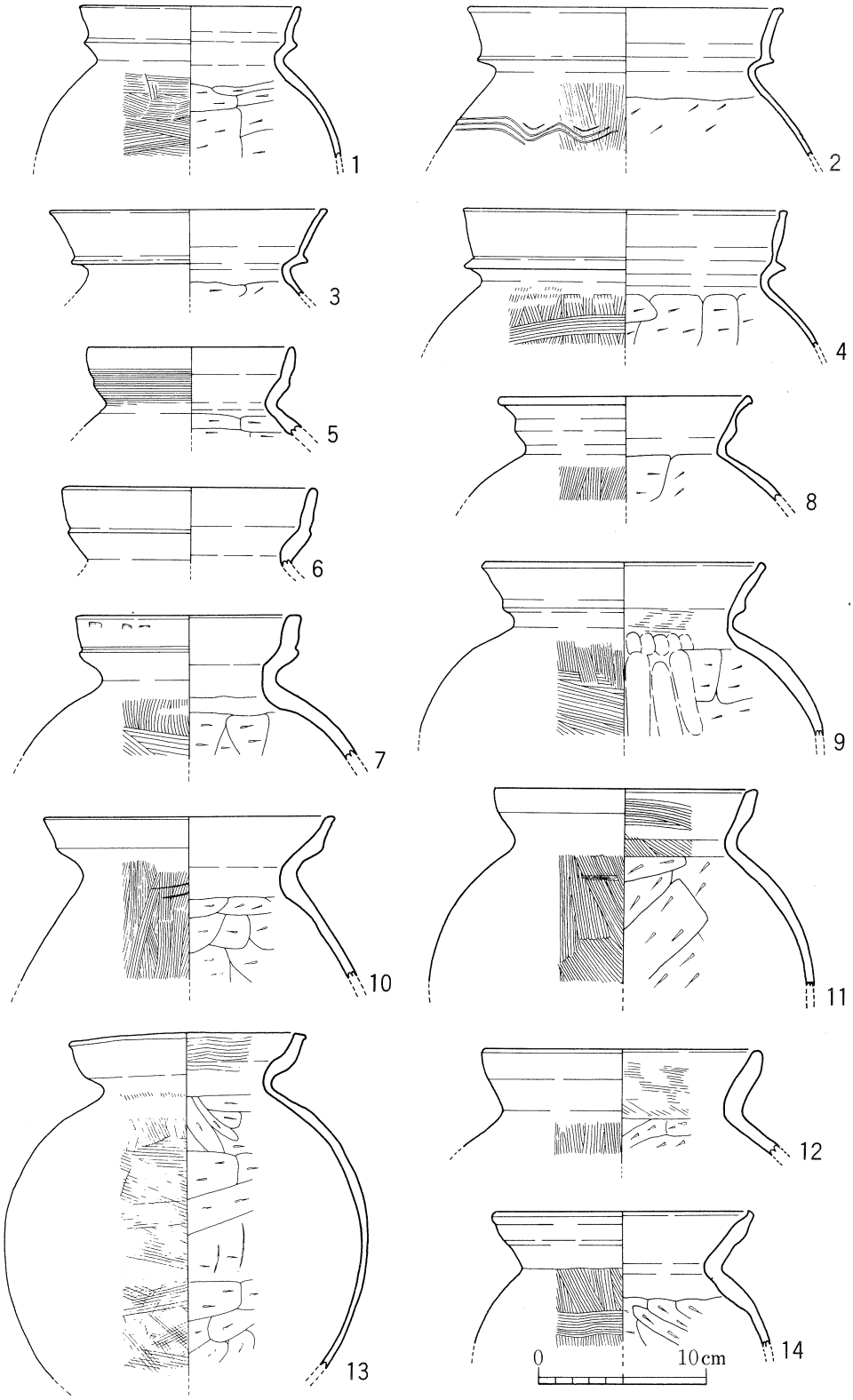
Ⅰ類（第36図11　図版34）　口縁部は複合口縁を有するもので，上半は直立している。口縁部外面には櫛状工具による4条以上の平行沈線文，胴部には櫛状工具による波状文が施されている。調整は口縁部内外面ともヨコナデ，胴部外面に刷毛目の後ナデ，内面にはヘラ削りで調整が施されている。胎土は精良で，焼成は良好である。色調は明茶褐色を呈している。この土器は器壁が非常に薄いのが特徴である。

Ⅱ類（第36図12～14・第37図・第38図1～11）　複合口縁のもので，口縁部は外反または外傾するものである。口縁端部，稜などの形態からⅡ$_1$～Ⅱ$_5$類の5類に分類できる。

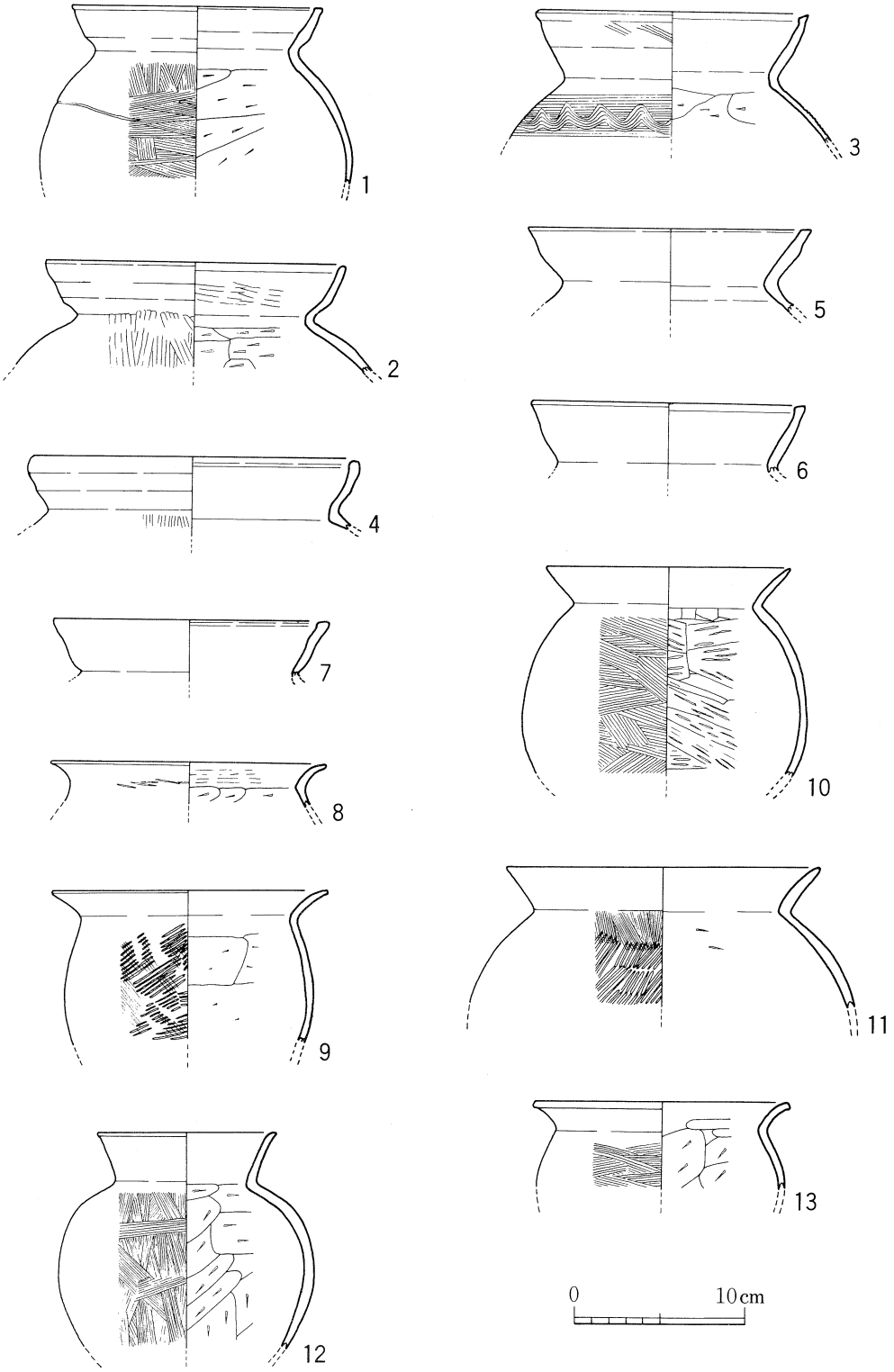
Ⅱ$_1$類（第36図13・第37図2，4，6～8，12，15，19，21，25，27　図版34～36）　口縁部外面に明瞭な鋭い稜を持ち，内面に段がつくもので，当地方でよくみられる複合口縁の典型的なものである。口縁端部の形態に若干の差違がみられるが，端部はすべて丸く納められている。文様は施されていないものが多いが，第37図26は肩部に平行沈線文が施されている。調整は口縁部内外面ともヨコナデ，胴部は外面に刷毛目，内面にヘラ削りが施されるものが多い。いずれも胎土は精良で，焼成は良好である。色調は黄褐色を呈している。

Ⅱ$_2$類（第36図14・第37図1，3，5，9，10，13，14，16，18，20，22～24，26，28・第38図2，3　図版34～38）　Ⅱ$_1$類に似るが，口縁端部が肥厚し平坦面をなすものである。第38図1，2は稜が鋭いが，第37図4の稜はやや鈍く厚い。いずれも口縁部外面には文様が施されていないが，第37図1・第38図2の肩部に櫛状工具による波状文が施されている。調整は口縁部内外面ともヨコナデ，胴部内面にはヘラ削りが施されている。胎土は精良で，焼成は良好である。色調は黄褐色ないし白灰色，黄灰色，青灰褐色を呈している。

Ⅱ$_3$類（第36図12・第37図11，17・第38図1，4　図版34～36，38）　Ⅱ$_1$類に似るが，稜がⅡ$_1$類に比べ鈍く稜から頸部にかけてやや厚いものである。器壁はⅡ$_2$類に比べ厚く，全体としてシャープさに欠ける。文様は第37図17の肩部に「ノ」の字状に刺突文があるほかは無文である。調整は口縁部内外面ともヨコナデ，胴部外面は刷毛目，内面はヘラ削りが施されている。いずれも胎土は精良で，焼成は良好である。色調は灰褐色または黄褐色を呈している。



第38図　土師器実測図(3) 1：4



第39図　土師器実測図(4) 1：4

Ⅱ$_4$類（第38図５～７　図版36）　稜が丸味を帯び鈍いものだが，複合口縁の形はまだ充分窺え，口縁部の器壁は厚い。７は胴部が球状に近い。調整は口縁部内外面ともヨコナデ，胴部外面に刷毛目，内面にヘラ削り調整が施されている。いずれも胎土は緻密で，焼成は良好である。色調は黄茶褐色ないし暗褐色（５），黄褐色（６），青灰色（７）を呈している。

Ⅱ$_5$類（第38図８，９　図版36，39）　口縁部外面に鋭い稜がつくもので，口縁部上半は短く外反する。外見は複合口縁であるが，内面に明瞭な段がつかず断面形は「５」の字形を呈していない。これらはいずれも口縁端部が平坦に面取りされ，胴部はほぼ球状であり，無文である。調整は口縁部内外面ともヨコナデ，胴部外面は刷毛目，内面はヘラ削り調整がされているが，９の頸部内面には刷毛目調整が施されている。胎土は密で，焼成は良好である。色調は黄灰色を呈している。

Ⅱ$_6$類（第38図10～12　図版36，38）　Ⅱ$_4$類に似るが口縁部外面の稜が非常に鈍く，内面に明瞭な段がつかないものである。11，12は口縁部上半が肥厚し直立気味であるが，10は口縁部の器壁が均等で，上半部は外反し，口縁端部は平坦面をなす。また胴部の張りは比較的少ないが11の胴部は張りが強く球状をなすようである。いずれも文様は施されていない。調整はいずれも口縁部外面にヨコナデ，胴部外面は刷毛目，内面はヘラ削り調整が施されているが，12の口縁部内面には刷毛目調整が施されている。胎土は密で，焼成は良好である。色調は茶褐色ないし茶灰色を呈している。

Ⅲ類（第38図13，14　図版36，38）　口縁部が逆「Ｓ」字形を呈するものである。複合口縁の稜に相当する部分で大きく湾曲する（13）かあるいは大きな膨みを持つ（14）。内面は13が緩かな段がつくが，14は内湾気味に外傾するだけである。ともに口縁端部は平坦に面取りされていて，両者とも文様は施されていない。調整はともに口縁部外面はヨコナデ，内面は13では刷毛目，14ではヨコナデ，胴部外面は刷毛目，内面はヘラ削り調整が施されている。胎土は密で，焼成は良好である。色調は灰褐色ないし黄灰褐色（13），暗黄灰色ないし明黄灰色（14）を呈している。

Ⅳ類（第39図１～７　図版36，37，39）　口縁部が内湾する単純口縁のもので，口縁端部は肥厚し内傾するもの（２，３），水平のもの（１，４～６），内側に巻き込み丸くなるもの（７）など様々である。また口縁部の形態は比較的強く内湾するもの（１，２，４）と，緩く内湾するもの（３，５～７）とがある。いずれも口縁部は無文だが３の肩部には櫛状工具による波状文が施されている。調整は口縁部内外面ともヨコナデ，胴部外面は刷毛目，内面はヘラ削り調整が施されるのを基本とするが，２の口縁部内面，３の口縁部外面にはヨコナデの前に刷毛目が施されている。胎土は密で，焼成は良好である。色調は茶褐色（１，５，６），暗灰色（２），黄褐色（３），青褐色（４），暗灰褐色（７）を呈している。

Ⅴ類（第39図８～13・第40図　図版37～39）　単純口縁であるが，口縁端部は肥厚せず単純に終るものである。口縁部・胴部の形態などによってⅤ$_1$～Ⅴ$_8$類に細分できる。

V_1類（第39図8，9　図版37）　口縁部が短く外反するもので，端部はうすく尖り気味に終る。胴部はあまり張らず楕円形を呈すようである。調整は口縁部内外面ともヨコナデ，胴部外面に刷毛目，内面にヘラ削りが施されているが，8の口縁部内面にはヨコナデの前に刷毛目が施されている。また9の胴部外面には，成形時のものと思われる粗い叩き痕跡が観察できる。胎土はやや粗く，焼成は良好である。色調は黒褐色（8），明茶褐色（9）を呈している。

V_2類（第39図10，11　図版37）　口縁部が直線的に大きく開き，胴部の張りが強く球状をなすと思われるものである。口縁端部は薄くなり尖り気味に終わる。ともに無文である。11は器壁がやや厚手であるが，10は非常に薄い作りである。調整は口縁部内外面ともヨコナデ，胴部外面は刷毛目，内面はヘラ削り調整が施される。また11の胴部外面には叩き痕がみられる。胎土は精良で，焼成は良好である。色調は暗灰褐色（10），赤褐色（11）を呈している。

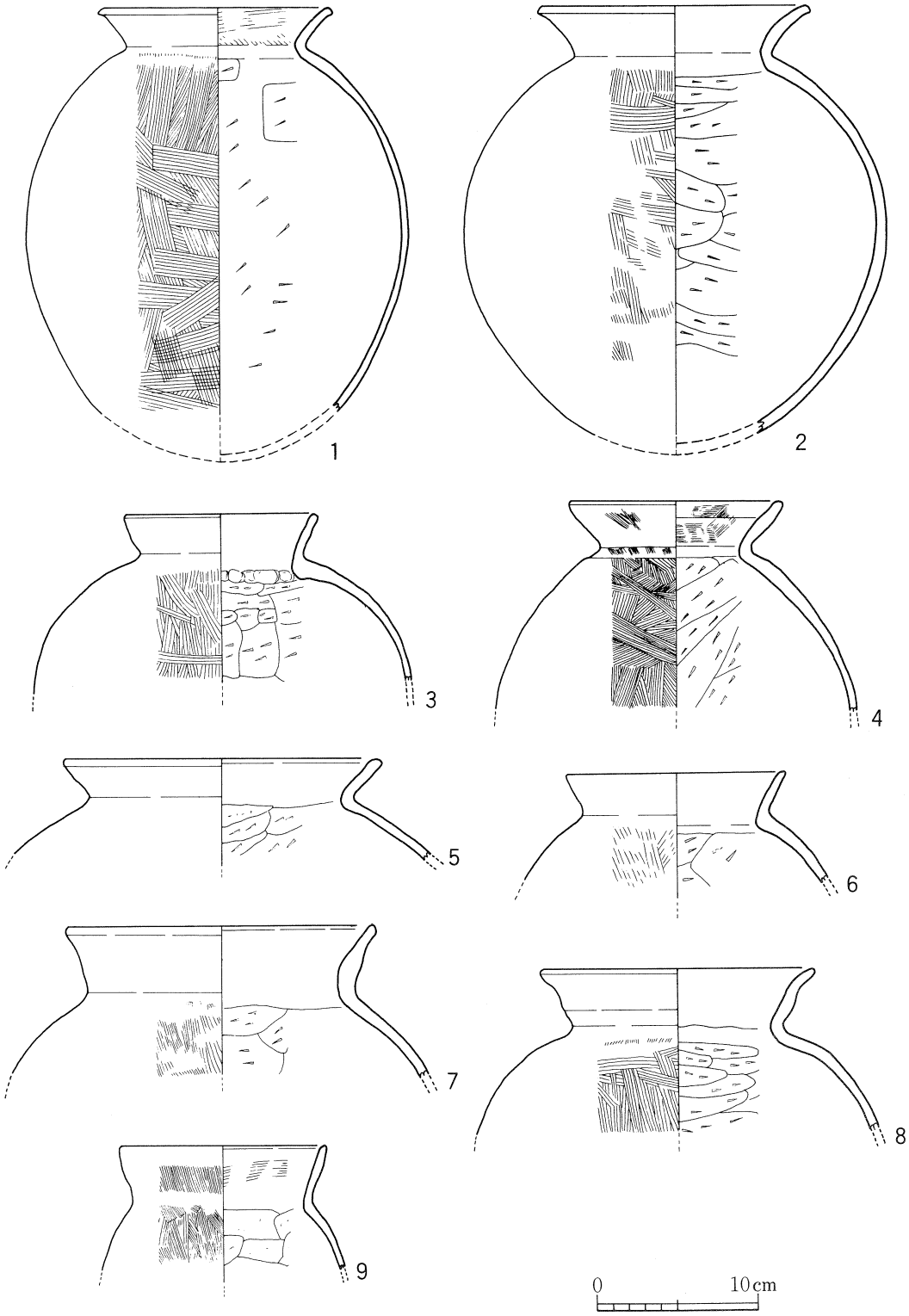
V_3類（第39図12　図版38）　口縁部が長く，胴部は球状をなすものである。口縁端部は平坦に面取りされている。調整は口縁部内外面ともヨコナデ，胴部外面は刷毛目，内面はヘラ削り調整が施されているが，文様は施されていない。胎土は粗いが，焼成は良好である。色調は暗灰褐色を呈している。

V_4類（第39図13・第40図1，2　図版37，38）　V_1類に似るが口縁端部が平坦に面取りされ，胴部の張りが強いものである。器壁もV_1類より厚く，いずれも文様は施されていない。調整は第39図13・第40図2の口縁部内外面にヨコナデ，胴部外面と第40図1の口縁部内面に刷毛目，胴部内面にヘラ削りが施される。胎土は精良で，焼成は良好である。色調は明灰褐色，灰褐色ないし黒色を呈している。

V_5類（第40図3～6　図版37，39）　口縁部が短く伸び，わずかに内湾しているものである。胴部は非常に強く張り，3，5などは胴部最大径は口径をかなり凌ぐと思われる。調整は4の口縁部内外面と胴部外面に刷毛目，3，5，6の口縁部にヨコナデ，胴部内面にヘラ削りが施されている。なお，4の口縁部外面は刷毛目の後ヨコナデが施されている。胎土は4と7以外は精良で，焼成は良好である。色調は暗灰色，茶褐色，白黄色を呈している。

V_6類（第40図7，8　図版37，39）　口縁部上半がさらに大きく外反するものである。胴部の張りはかなり強く，いずれも無文である。口縁部は内外面ともヨコナデ，胴部外面は刷毛目，内面はヘラ削り調整が施されている。胎土は粗いが，焼成は良好である。色調は明灰褐色，黄褐色ないし暗褐色を呈している。

V_7類（第40図9　図版39）　口縁部が直線的に急角度に伸びるもので，V_3類に似るが口径と頸部との差があまりなく直口壺に近い形態である。口縁部内外面と胴部外面には刷毛目，胴部内面にはヘラ削りで調整が施されている。なお口縁部内面には刷毛目の後ヨコナデで調整が施される。



第40図　土師器実測図(5) 1：4

胎土は精良で，焼成は良好である。色調は黒褐色を呈している。

小型丸底壺（第41図・第42図　図版39～41）　今回の調査では37個体以上出土し，完形または完形に復元できるものが多い。口縁部の長いもの（Ⅰ類），口縁部の短いもの（Ⅱ類），大型品で口縁部が直立するもの（Ⅲ類）の3類に分類できる。

Ⅰ類（第41図2～6，8，15，17～19・第42図2）　口縁部は長く胴部は球状あるいは倒卵形を呈し，さらに4種に分けることができる。

$Ⅰ_1$類（第41図2　図版39）　口縁部は長く内湾し，胴部径が口径よりも小さく，口縁端部は内側に屈曲している。口縁端部はわずかに内側につまみ出されている。調整は口縁部外面にヨコナデ，内面に刷毛目の後ヨコナデ，胴部外面に刷毛目，内面は比較的丁寧なヘラ削りが施されている。胎土は小砂粒を多く含みやや粗いが，焼成は良好である。色調は暗褐色を呈している。

$Ⅰ_2$類（第41図4，8～15，17～19　図版40）　口縁部は長くやや内湾気味に立ち上がるもので，口縁部高が胴部高よりも短く，胴部径は口径より大きいものである。胴部は横広の楕円形を呈するもの（4，10，12など）と倒卵形を呈するもの（8，13など）がある。口縁部外面はヨコナデ，内面は刷毛目，胴部外面は刷毛目，内面は丁寧なヘラ削り調整が施されている。胎土は密で，焼成は良好である。色調は褐色または灰色を呈している。

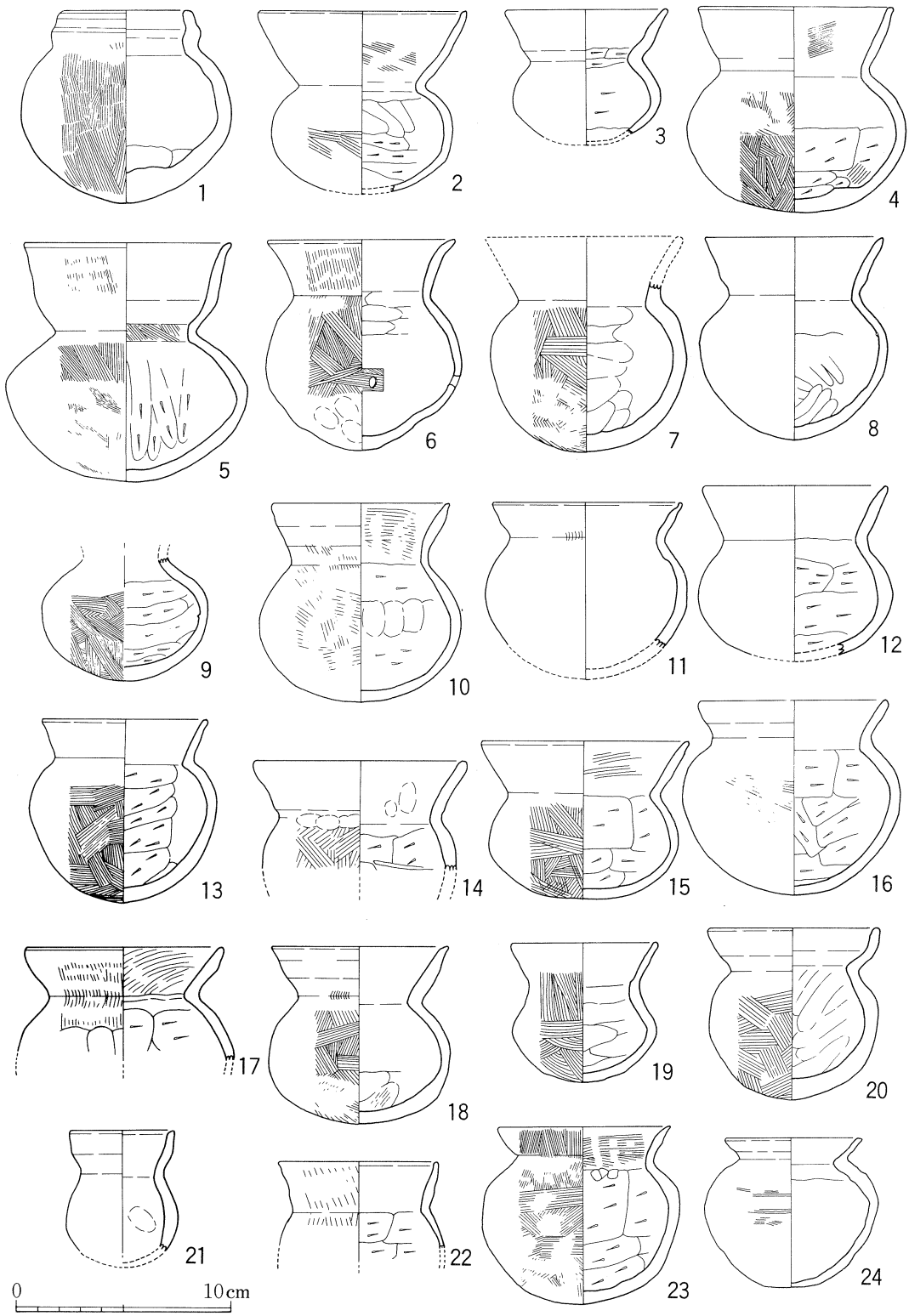
$Ⅰ_3$類（第41図3，5・第42図2　図版40，41）　口縁部が長く中ほどに段をもうけて立ち上がり，口縁端部はさらに外反する逆「S」字形を呈してる。胴部は肩部が強く張り，楕円形を呈している。3の口縁部は大きく外反するが，5の口縁部は直立気味である。調整は外面に刷毛目の後ナデ，内面は口縁部にヨコナデ，頸部に指による強いナデの後ナデ調整が施されている。胎土は密で，焼成は良好である。色調は灰褐色を呈している。

$Ⅰ_4$類（第41図6　図版40）　口縁部は長くゆるやかに外反し，胴部は倒卵形をなす。底部はやや尖り気味である。外面は刷毛目，下半部に指頭圧痕，内面はヨコナデ，ヘラ削り調整が施されている。胎土は精良で，焼成は良好である。色調は青灰褐色ないし明茶褐色を呈している。

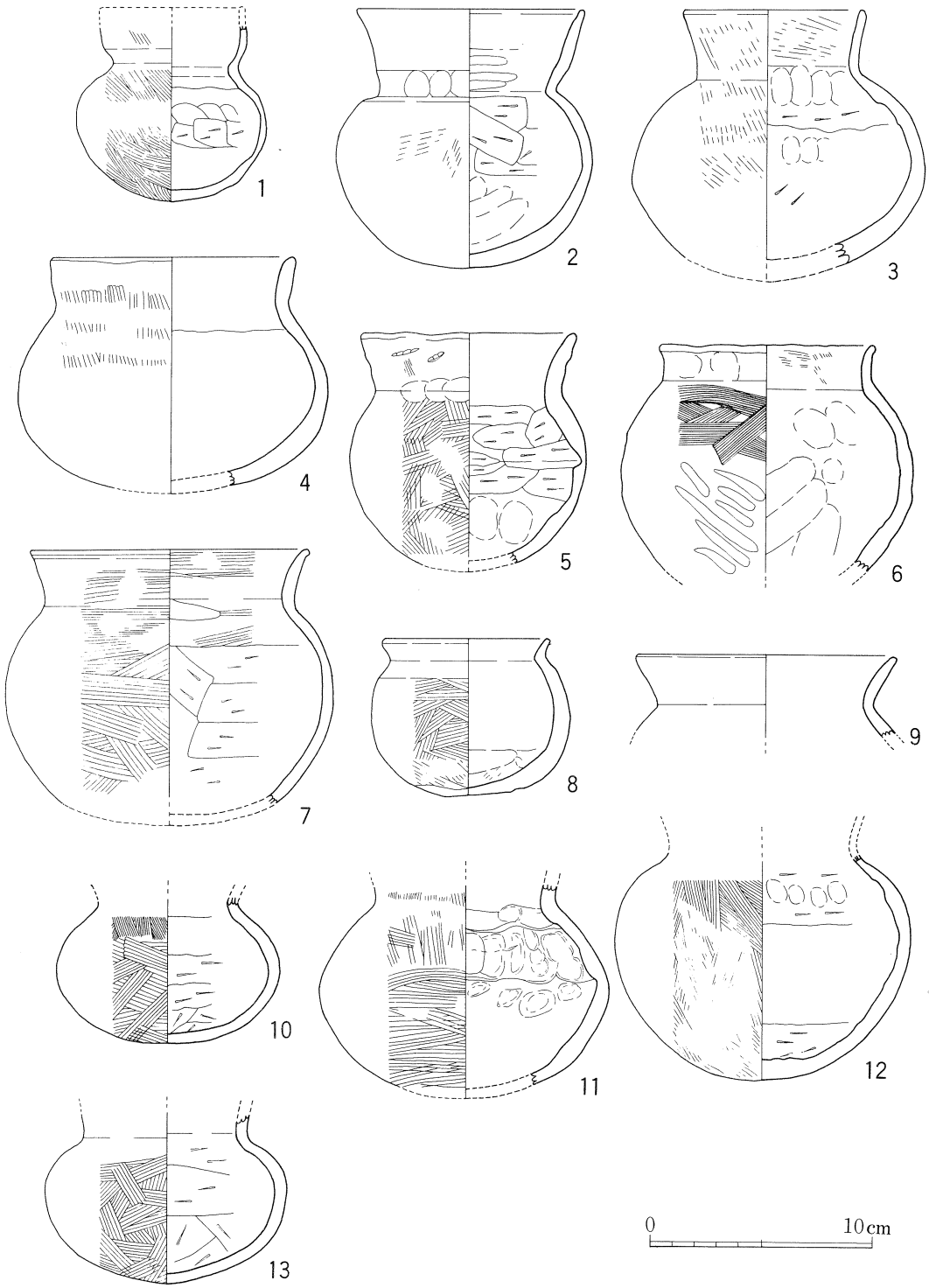
Ⅱ類（第41図1，16，20～24・第42図1，8，9　図版39，40，41）　口縁部は短く胴部は球状をなし，口径も4.8～11.6cmと様々である。口縁部の形態により，$Ⅱ_1$～$Ⅱ_3$類に分けられる。

$Ⅱ_1$類（第41図1・第42図1　図版39，41）　口縁部に丸い稜をもつ複合口縁状を呈するものである。第41図1は口縁上半部は短く内傾し，胴部はほぼ球状をなす。また第42図1は，口縁部に明瞭な稜がつかず丸くカーブを描くもので，上半部は直立している。いずれも口縁部内外面ともヨコナデ，胴部外面に雑な刷毛目，内面にはやや丁寧なヘラ削り調整が施されている。胎土はやや粗く，焼成は良好である。色調は茶褐色，明黄灰色ないし茶灰色を呈している。

$Ⅱ_2$類（第41図20～22　図版40）　口縁部が内湾しながら立ち上がり，胴部は球状を呈すもので



第41図　土師器実測図(6) 1：3



第42図　土師器実測図(7) 1：3

ある。特に20の口縁部は強く内湾している。口縁部は内外面ともヨコナデ，胴部外面は刷毛目または指頭押圧痕・ナデ，内面はヘラ削りまたは指頭による押圧で調整が施されている。胎土は緻密で，焼成は良好である。色調は黄灰色ないし灰褐色を呈している。

Ⅱ$_3$類（第41図23，24・第42図８，９　図版40，41）　口縁部は短く大きく外傾または外反するもので，胴部は球状を呈す。第41図23・第42図９はゆるやかに外反し，第42図８の口縁部は非常に短く外傾している。口縁部は内外面ともヨコナデ，胴部外面は刷毛目，内面はナデ調整が施されている。第41図24は風化が著しいため調整は不明である。胎土は密で，焼成は良好である。色調は灰褐色を呈している。

Ⅲ類（第42図３～７　図版41）　比較的大型品で，口径は８～14cmを測る。口縁部は短く直立気味に外反または外傾し，口径と頸部径の差はⅠ・Ⅱ類に比べ少ない。５は整形調整が非常に粗雑で器壁には凹凸が著しいが，口縁部外面は刷毛目，内面は刷毛目の後ナデ，胴部外面は刷毛目，内面はヘラ削り調整が施されている。また３は口径が胴部径より小さく，外面は刷毛目の後ナデ，内面口縁部は刷毛目の後ナデ，頸部以下はナデまたは指頭による押圧で調整が施されている。６は口縁端部が外縁に肥厚しており，口縁部外面は押え，ナデ，内面は刷毛目の後ナデ，胴部外面は刷毛目の後ナデ，内面は押え，ナデ調整が施されているが，整形はやや粗いようである。７は口縁部内外面ともヨコナデ，胴部外面は刷毛目，内面はヘラ削り調整が施されている。胎土は全体的にやや粗いが，焼成は良好である。色調は灰色ないし褐色を呈している。

高坏形土器（第43図　図版41，42）　高坏形土器はほとんど破片で出土しており，完形品は数点出土したにすぎない。そのためここでは坏部・脚部に分けて述べることにする。坏部はⅠ・Ⅱ類に，脚部はⅠ～Ⅲ類に分類できる。

坏部Ⅰ類（第43図１～８，10　図版41，42）　坏底部から口縁部下半にかけては内湾し，口縁部上半が外反するものである。底部と口縁部との境の稜の有無，形態などで坏部Ⅰ$_1$～Ⅰ$_3$類に分けられる。

Ⅰ$_1$類（第43図１，２　図版41）　底部と口縁部との境に突線状の稜が廻り，口縁部は外反するものである。内面はヘラ磨きで調整され，２は放射状の暗文が２段に施されている。ともに内面中央がわずかに凹んで，坏部と脚部を接合した後中央に粘土を埋め込んだものと思われる。外面は刷毛目，ナデ調整が施されている。胎土は精良で，焼成は良好である。色調は赤褐色（１），明茶褐色（２）を呈す。

Ⅰ$_2$類（第43図３～５　図版41，42）　坏部底部と口縁部に突線状の稜は廻っていないが，断面形が逆「く」の字形に屈曲するために底部と口縁部の境は明瞭である。口縁部は大きく外反し，器壁はⅠ$_1$，Ⅰ$_3$類に比べやや厚い。４，５は坏部内面に入念なヘラ磨きが施され，５の内外面には

暗文状のヘラ磨きが施されている。また，５の坏部と脚部の接合はⅠ$_1$類と同じ手法と思われる。胎土は精良で，焼成は良好である。色調は灰色または褐色を呈している。

Ⅰ$_3$類（第43図６～８，10　図版42）　底部と口縁部の境が不明瞭なもので，底部から口縁部下半にかけてゆるやかに内湾しながら立ち上がり，上半分で外反する。８は完形でやや深身の坏に「ハ」の字形に広がる低い脚部がつく。外面はヘラ磨き，ナデ，刷毛目，内面は刷毛目，ヘラ磨き調整が施されている。胎土は密で，焼成は良好である。色調は灰色または褐色を呈している。

坏部Ⅱ類（第43図９，11　図版42）　坏部が内湾し，そのまま口縁端部に至るもので，口縁端部は丸味をもって終る。内面はヘラ磨きあるいはナデ，外面は刷毛目あるいはナデ調整が施されている。胎土は密で，焼成は良好である。色調は暗灰色（９）または黄灰色（11）を呈している。

脚部Ⅰ類（第43図21～25，29　図版42）　裾部が大きく広がるもので，筒部との境は明瞭で内面に稜がつくものが多い。22は裾部に，24，25は筒部下部に円形の透孔が穿たれている。なお23～25の坏部内面には小孔が貫通している。外面はヘラ磨きあるいはナデ，内面はヘラ削り痕，しぼり痕が残り，後にナデ調整が施されている。胎土は精良で，焼成は良好である。色調は灰色または褐色を呈している。

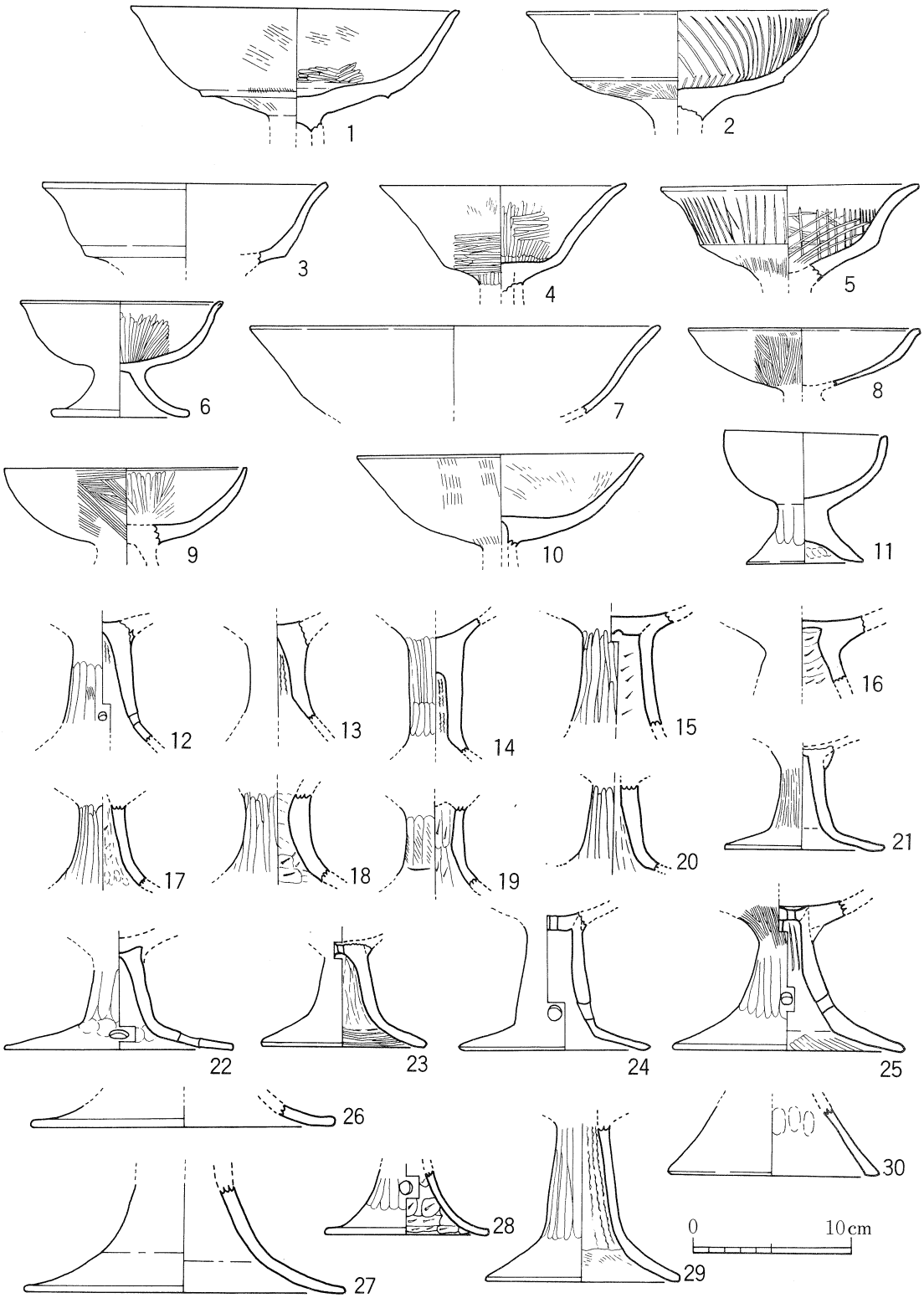
脚部Ⅱ類（第43図27，28　図版42）　筒部と裾部の境が不明瞭で，緩いカーブを描いて広がるものである。28の筒部には円形の透孔が穿たれている。27の調整は風化が著しいために不明であるが，28の外面はヘラ磨きの後にナデ，内面はヘラ磨き調整が施されている。胎土はやや粗く，焼成は良好である。色調は茶褐色または灰褐色を呈している。

脚部Ⅲ類（第43図30）　ほとんどカーブを描かずに広がるもので，端部は肥厚し接地面は平坦である。調整は風化が著しいためにはっきりしないが内面に指頭圧痕が残っている。胎土はやや粗く，焼成は良好である。色調は黄灰褐色を呈す。これは別器種の脚部の可能性もあるが，ここでは高坏脚部として扱った。

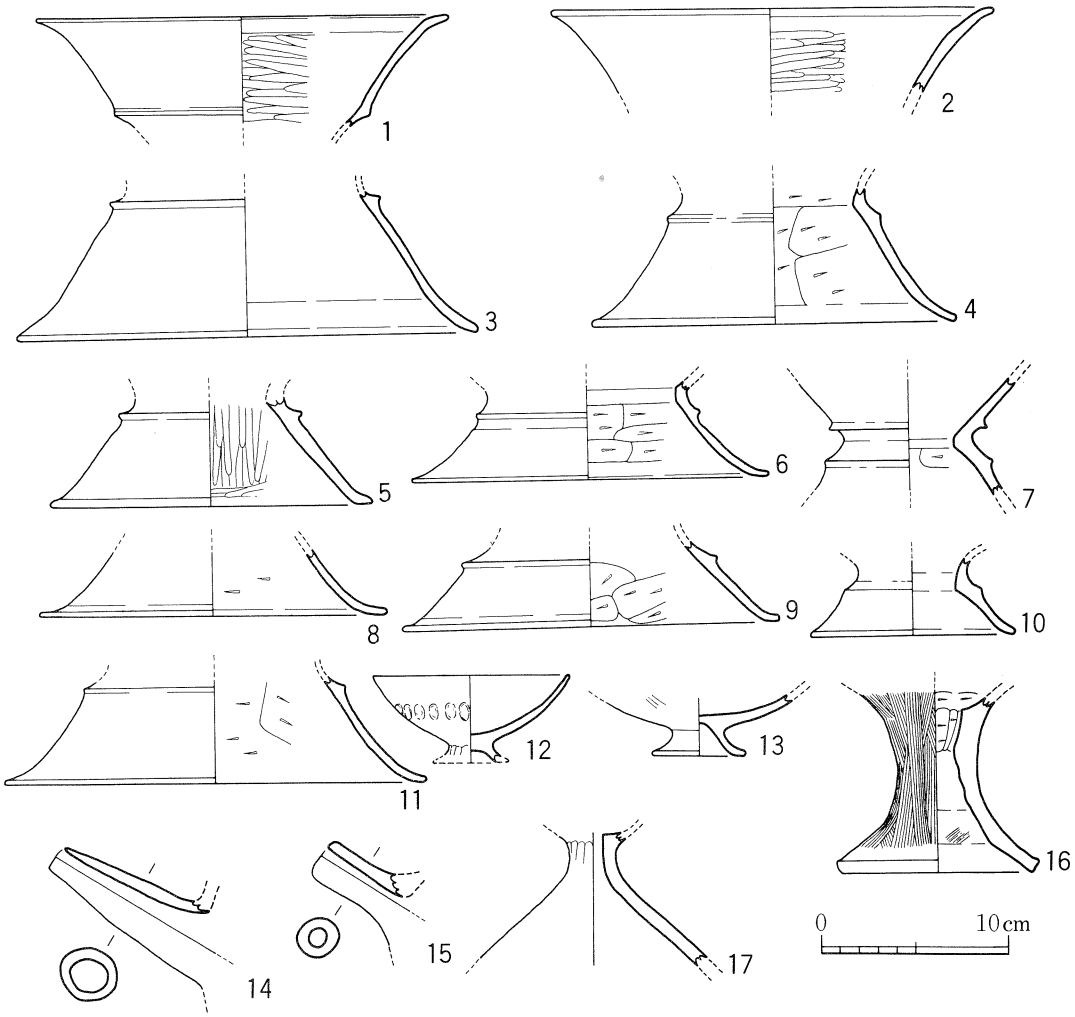
以上のほかに裾部が欠損し筒部のみ残るものがある（第43図12～20　図版42）。12は下部に円形の透孔が穿たれている。12，15の坏底部には外面から小孔が穿たれているが貫通していない。また14の坏部・脚部の接合部分は，かなり厚く粘土が詰まっている。いずれも外面はヘラ磨き，内面はヘラ削り調整が施される。胎土は比較的密で，焼成は良好である。色調は灰色ないし褐色を呈している。

器台形土器（第44図１～11　図版37）　すべて小片のため全形を窺うことはできないが，鼓形器台が出土している。

受部・脚部とも「ハ」の字形に大きく開くもので，いずれも受部と脚部の間隔は狭いと思われる。筒部内面は６，７のように狭い平坦面をなすものと，５，10のように逆「く」の字形を呈すものが



第43図　土師器実測図(8) 1：4



第44図　土師器実測図(9)1：4

ある。また，受部下端および脚部上端には突線状の稜が廻るものが多い。10は1～9，11より小型で，脚部上端に突線状の稜が廻らないのが特徴である。これらは受部外面がヨコナデ，内面がヘラ磨き，脚部外面がヨコナデ，内面がヘラ削り調整が施されている。胎土は密で，焼成は良好である。色調は灰色または褐色を呈している

底脚付坏形土器（第44図12，13　図版37）　「ハ」の字形に広がる低く小さな脚に，内湾して伸びる坏部を付ける。口径に比して脚端径が小さいのが特徴である。坏部内面はヘラ磨き，外面は指頭圧の後ナデ，脚部内面はナデ，外面はヘラ磨き調整が施されている。胎土は精良で，焼成は良好である。色調は黄灰色または暗茶褐色を呈している。

注口土器（第44図14，15　図版37）　注口部のみ出土しており，胴部を欠く。14は長さ10cmと細長く，先端がやや細くなる。15はやや径が太く長さも短い。調整は風化が著しいため不明であるが，15は刷毛目が若干残っている。胎土は14は精良で15はやや粗いが，焼成は良好である。色調は灰色を呈している。

器種不明の土器（第44図16・17　図版37）　16は双曲線状に開く円筒形の土器である。上部が欠損しているため全体の器形は窺えず，天地も定かでない。器壁は厚く，外面は刷毛目，内面上部はヘラ削り，下部はナデおよび刷毛目調整が施されている。胎土は小砂粒を多く含みやや粗いが，焼成は良好である。色調は灰褐色を呈している。

17はラッパ状に大きく広がる器形である。上半部は細くなり孔があいている。上端とも欠損しており，全体を窺うことはできない。調整は外面にヘラ磨き，内面にヘラ削り調整が施されている。胎土はやや粗いが，焼成は良好である。色調は暗灰褐色を呈している。

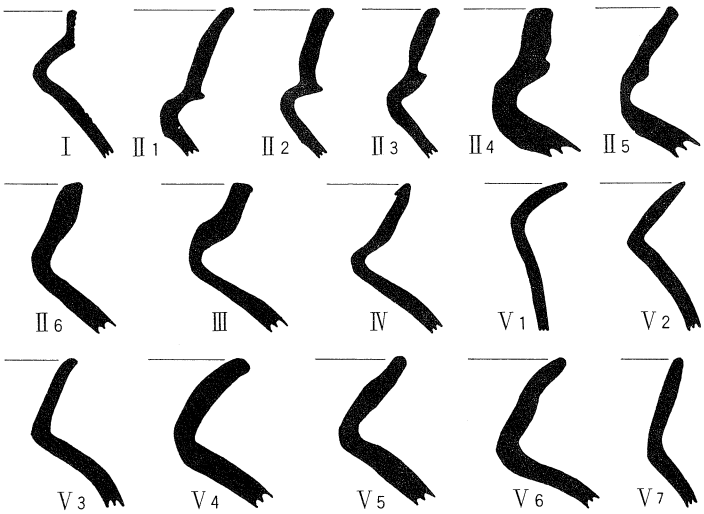
小　　結

タテチョウ遺跡では，先述の如く，壺，甕，高坏，小形丸底壺など約160点が出土した。これらはいずれの層からも縄文土器，弥生土器などと混在して出土したため，各層出土の土器群を一括遺物と見做すことはできない。そのため，特に出土数の多かった甕，小型丸底壺，高坏について，各型式を比較し，それぞれの新旧関係を検討したい。

当地では一般に古式土師器の段階では口縁部が複合口縁の壺，甕が多いとされている。弥生後期から古代土師器にかけての編年は，大まかに鍵尾（的場）式→小谷式→大東式[1]と変遷すると考えられている。しかし古式土師器の編年は充分に整理されているとは言い難く，今回出土した土器もこれらの型式に相当しないものも多い。そのため各型式の標識となる土器と比較して，各類がどの型式に近いかを検討したい。

今回出土した土器のうち壺Ⅰ類，甕Ⅱ類以外は県内では出土例が少ないが，当地方の横穴墓ではタテチョウ遺跡出土土師器のように頸部の屈曲が明瞭なものは出土していないことから，壺Ⅱ類，

Ⅲ類，甕Ⅰ，Ⅲ～Ⅴ類は少なくとも横穴墓出現以前（須恵器第Ⅲ期以前）の土器と思われる。また鍵尾（的場）式の土器もみられないことから，今回出土した土器は大まかに小谷式前後から須恵器第Ⅲ期以前に位置づけることができる。



第45図　土師器甕分類模式図

壺Ⅰ類，甕Ⅱ$_2$類は複合口縁の土器で，口縁端部は肥厚し平坦面を持つ特徴がある。これは小谷式の標式とされている小谷遺跡出土土器や，小谷式に比定される神原神社古墳出土土器と似た特徴である。第36図14のように口縁端部が外方に突出しないものも多いが，上端を平坦にするという手法は神原神社古墳出土土器と共通する手法で，これらは時期的にあまり差のないものと思われる。

甕Ⅱ$_1$類はⅡ$_2$類とよく似ているが，口縁端部は肥厚せず丸く納める土器である。全体につくりはシャープで口縁端部の処理などⅡ$_2$類より古い要素を残していると思われる。しかし，口縁部内面の調整がヨコナデ調整のみでヘラ磨き調整が施されていないなど鍵尾（的場）式までは遡りえないと思われる。小谷式より若干古い要素を残した土器と言えよう。

甕Ⅱ$_4$類は複合口縁であるが稜も鈍く器壁が厚い土器で，全体にシャープさに欠ける土器である。この形態の土器は大東式の標式遺跡とされる大東高校々庭遺跡出土土器によく似た土器で，Ⅱ$_4$類は大東式に相当すると考えて大過なかろう。なお大東式は須恵器出現前後の時期と考えられている。

甕Ⅱ$_3$類も複合口縁であるが，稜は太く鈍いもので器壁も厚い。大東高校々庭遺跡の土器に比べると複合口縁の形態は明瞭であるが，神原神社古墳出土土器と比較すると稜，口縁端部などシャープさを欠く土器である。Ⅱ$_3$類は大東式よりも小谷式に近い形態を呈すが，小谷式よりも新しい要素を持つ土器群と言えようか。

甕Ⅱ$_5$，Ⅱ$_6$類も複合口縁であるが，Ⅱ$_5$類は稜が明瞭であるものの，内面には段がつかず，Ⅱ$_6$類は稜は既に失われ，わずかに段がつづくにすぎない。甕Ⅱ$_3$類よりさらに複合口縁の退化したものと考えたい。公表されている大東高校々庭遺跡出土土器には甕Ⅱ$_5$，Ⅱ$_6$類に似た土器は見られず，これらが大東式に併行するのか，前後の時期に位置するのか不明であるが，器壁の厚さや胴部内面のヘラ削り調整が頸部まで施されていないなど大東高校々庭遺跡出土土器と共通する点もある。

少なくとも甕Ⅱ$_1$～Ⅱ$_3$類より後出の可能性が強いと思われる。

甕Ⅲ類は「S」字状の口縁を持つ土器である。一見複合口縁にみえるが，複合口縁の退化型式か別の系譜をひくものかは不明である。器壁が厚い，胴部内面のヘラ削り調整が頸部まで施されていない，刷毛目調整が粗い，などの特徴から考えると，少なくとも神原神社古墳出土土器より新しい要素が多いと思われる。これらの特徴は大東高校々庭遺跡出土土器と似ているが，公表されている土器には甕Ⅲ類と似た形態の土器はないため，大東式との併行または前後関係は不明である。ただ一見したところでは甕Ⅲ類は神原神社古墳出土土器よりも大東高校々庭遺跡出土土器により近い感を受ける。

甕Ⅳ類は口縁端部が肥厚し内傾または水平に整形する単純口縁の土器である。このような土器は近畿地方の布留式の影響を強く受けた土器とされるが(2)，県内ではあまり出土例がない。甕Ⅳ類は口縁部の形態のほかに器壁がやや薄い，胴部内面のヘラ削り調整が頸部まで施され丁寧である，頸部内面の指頭押圧痕がまったくみられない，などの特徴がある。これらの諸特徴は，甕Ⅱ$_4$～Ⅱ$_6$，Ⅲ類より甕Ⅱ$_1$～Ⅱ$_3$類に似た要素と思われる。所属時期を決定するには将来良好な供伴関係を知り得る遺跡の発見を待たねばならないが，甕Ⅱ$_4$～Ⅱ$_6$，Ⅲ類よりも古い要素は多いと思われる。

甕Ⅰ類は口縁端部が短く直立する複合口縁の土器である。これも当地方ではあまり例をみない土器で，この形態は山陽地方に多くみられる。小片のため全形を窺うことはできないが，肩部があまり張っておらず，胴部は球状を呈すものと思われる。この形態の口縁部を持ち胴部が球状を呈すものは岡山県地方では亀川上層式とされ・第11図も亀川上層式に酷似すると言われる(3)。亀川上層式は布留式の古い段階に併行するとされているが(4)，当地方の土器編年との併行関係は明確にされていない。

この土器は上述のように亀川上層式によく似ているが，胴部に波状文が施されるという特徴がある。この文様は山陰地方の古式土師器に多く施される文様で山陽地方ではあまりみない文様であると言われる。また胎土も当地方で一般的な胎土である。以上のことから考えるとこの土器は岡山県地方の亀川上層式の影響を強く受けて当地方で作られた土器であろうか。

壺Ⅲ類，甕Ⅴ$_1$，Ⅴ$_2$，Ⅴ$_7$は器壁がうすく内面のヘラ削り調整が頸部まで施されていることなど古い様相が窺える。積極的な根拠はないが，大東高校々庭遺跡出土土器にみられる諸要素は認められずそれより遡る可能性は充分あると思われる。

壺Ⅱ類，甕Ⅴ$_3$～Ⅴ$_6$類は口縁部の形態は様々であるが，いずれも器壁が厚く内面のヘラ削り調整は頸部より下位の部分までしか施されていない。また頸部内面には指頭による押圧痕が残るものもみられる。これらの諸特徴は神原神社古墳出土土器には認められず，大東高校々庭遺跡出土土器にみられる土器である。また，松江市布田遺跡SD12，SK01出土土器にも似ていると思われる(5)。

布田遺跡ではこれらが第Ⅰ期の須恵器と伴っていることなどから大東式に比定されている。一時期のものか否か不明であるが，このように調整手法などに似た点があるため，甕V_3～V_6類は一応大東高校々庭遺跡出土土器に併行するものとしておく。

小型丸底壺は約40個体出土している。このうちI_1類は胴部上半は指でナデ上げるなど新しい要素はみられるものの，口縁部が大きく開くなど今回出土の小型丸底壺中最も古い形態を残すものと思われる。松本1号墳出土の土器に比べ新しい要素も多いが，大東高校々庭遺跡出土の小型丸底壺か胴部径が口径に比較して著しく大きくなることから考えると，少なくともI_1類は大東高校々庭遺跡出土土器より古い時期の小型丸底壺と思われる。

小型丸底壺II_3，Ⅲ類はともに胴部径が口径を凌ぐものである。これらは調整が雑で器面の凹凸が著しいものが多い。また胴部内面のヘラ削り調整も肩部付近までしか施されていないなど大東高校々庭遺跡出土の小型丸底壺と似た特徴を持つ。これらを大東高校々庭遺跡出土土器と併行すると考えて大過なかろう。

小型丸底壺I_2～I_4，II_1，II_2類は県内では出土例はなく時期を決定することはできない。I_3類，I_4類など器壁が薄く丁寧につくられていることなどの他の土器と様相は若干違うものの，これらは胴部内面のヘラ削り調整が頸部まで施されていない，頸部に指頭による押圧痕が残る，など新しい要素も多い。これらは個々に時期差はあるかもしれないが，小谷式に比定される大成古墳出土小型丸底壺[6]より新しいように思われる。

高坏坏部はいずれも体部中程の稜が退化しており，内面には暗文状のヘラ磨き調整が施されている。I_2類は大東高校々庭遺跡出土の高坏と調整，形態ともよく似た高坏である。また調整はやや違うものの，八束郡八雲村増福寺古墳出土高坏と似た形態をしている[7]。増福寺古墳群では第Ⅰ期の須恵器と供伴していることから高坏坏部I_2類は概ねこの頃の土器と思われる。他の坏部も形態はかなり違うものの調整などからみるとI_2類と大きな時期差はないであろうか。

第44図11は筒部が粘土が詰まったままの状態の土器で他のものよりやや新しいかとも想像されるが，積極的な根拠はない。

以上，壺，甕，小型丸底壺，高坏について主に各型式の新旧関係を検討してきた。再度簡単にまとめると次のとおりである。

1．壺Ⅰ，Ⅲ類，甕II_2類はほぼ同時期と思われる。

2．甕II_1類は壺Ⅰ，Ⅲ類，甕II_2類よりやや古い要素がみられる。

3．甕II_4類は大東高校々庭遺跡出土土器と似ており，須恵器出現期頃の土器と思われる。

4．甕II_3類は甕II_4より古いが，甕II_2よりやや新しい要素がみられる。

5．甕II_5類，II_6類は甕II_3より新しい要素が多い。

6．甕Ⅲ類は甕Ⅱ$_4$～Ⅱ$_6$類と共通の要素がみられる。

7．甕Ⅳ類は甕Ⅱ$_4$～Ⅱ$_6$，Ⅲ，Ⅴ$_3$～Ⅴ$_6$類より古い要素を持つ。

8．甕Ⅴ$_1$，Ⅴ$_2$，Ⅴ$_7$類は甕Ⅱ$_4$～Ⅱ$_6$，Ⅲ，Ⅴ$_3$～Ⅴ$_6$類より古い要素を持つ。

9．甕Ⅴ$_3$～Ⅴ$_6$類は須恵器出現期頃の土器と思われる。

10. 壺Ⅱ類は壺Ⅰ，Ⅲ類，甕Ⅱ$_2$類より新しい要素がみられる。

11. 小型丸底壺Ⅱ$_3$，Ⅲ類は小型丸底壺Ⅰ$_1$類より新しいと思われる。

12. 高坏のうち大部分は須恵器出現期のものと思われる。

冒頭述べたとおり島根県では土師器の編年は，良好な資料がないこともあり，充分整理されているとは言い難い。特に小谷式と大東式の形態，手法上の差は大きく，両型式がどのような流れをするか検討されていない。今回出土した土器群もけっして良好な資料ではなく，型式分類を行なったにとどまり，前後関係については想像を逞しくした部分も多い。編年を考えるに当っては確実に遺構に伴う一括資料をもって行うのが常道であり，今回の作業は多くの誤謬を犯していると思われる。今後の資料の増加によって今回の分類が修正され，また各類の併行関係を明らかにし小谷式から大東式にかけて細分されることを期待したい。

註(1) 山本清「山陰の土師器」『山陰古墳文化の研究』昭和46年，前島己基・松本岩雄「島根県神原神社古墳出土の土器」『考古学雑誌』62－3，昭和51年

(2) 置田雅昭・吉田恵二氏の御教示による

(3) 平井勝・岡田博氏の御教示による

(4) 岡山県教育委員会『川入・上東』昭和52年

(5) 島根県教育委員会「布田遺跡」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』昭和58年

(6) 房宗寿雄「山陰地域における古墳型式期の様相」『島根考古学会誌』第1集，昭和59年 島根考古学会

(7) 八雲村教育委員会『増福寺古墳群発掘調査報告書』昭和57年

土師器一覧表

器種		挿図番号	図版番号	出土地点	層位	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
壺形土器	Ⅰ	36－1	34	N7E4	10	復元口径 19.2	口縁部は複合口縁で上部は内傾し，端部は肥厚し上端は平坦になる	口縁部内外面ともヨコナデ	口縁部にヘラ状工具による綾杉文，頸部はヘラ状工具による刺突文を施す	胎土　小砂粒含む 焼成　良好 色調　暗青灰褐色
		36－2	34	N8E4	10	復元口径 23.6	口縁部は複合口縁で上半部は外反する	口縁部内外面ともヨコナデ	口頸部にヘラ状工具による綾杉文を施す	胎土　砂粒含む 焼成　良好 色調　黄褐色
		36－3	34	N8E5	9	復元口径 17.4	口縁部は複合口縁で上部はやや内湾気味に立ち上がる端部は平坦でやや膨む	風化のため調整不明		胎土　1㎜大白色砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化が著しい
	Ⅲ	36－4	34	N8E3	9	復元口径 17.8	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部はゆるやかに外反する。端部はやや平坦でやや膨む。器肉はやや厚い	外面　ヨコナデ 内面口縁部は指頭圧痕残る。肩部内面　ヘラ削り		胎土　細砂を多く含む 焼成　良好 色調　白灰色
		36－5	34	N8E3	10	復元口径 15.6	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は外傾する。上端部は平坦になる	外面　刷毛目の後ナデ。内面口縁部　刷毛目。肩部内面　ヘラ削り		胎土　1㎜大の砂粒含む細砂含む 焼成　良好 色調　淡灰褐色
	Ⅳ	36－6	34	N4E3	10	復元口径 11.1	頸部はゆるやかに屈曲し，口縁部は上部で屈曲し上端は外反する	口縁部外面縦方向の刷毛目の後ナデ。同内面　ナデ 頸部外面　刷毛目。同内面　ヘラ削り		胎土　微砂粒多く含む 焼成　良好 色調　灰褐色
	Ⅱ	36－7	34	N8E4	10	復元口径 12.0	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部下部に段をもうけ断面「S」字形を呈す	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面　刷毛目の後ナデ。同内面　指頭圧痕，ヘラ削り		胎土　小砂粒含む 焼成　良好 色調　暗灰色
		36－8	35	N9E4	10	復元口径 11.2	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部下部に段をもうけ断面「S」字形を呈す。肩部はかなり張り球状をなす	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部内面　指頭圧痕，ヘラ削り。同外面　刷毛目		微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色
		36－9	35	N8E4	10	復元口径 11.6	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は外傾し端部は平坦になる。肩部は張り胴部はほぼ球形を呈す	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面　横方向の刷毛目。同内面　横方向のヘラ削り		砂粒含む 焼成　良好 色調　灰褐色 胴部上半に刺突痕あり
	Ⅲ	36－10	34	N9E4	10	復元口径 13.6	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は外傾し，端部は肥厚する。肩部は張り胴部は球形を呈すと思われる	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面　不整方向の刷毛目，同内面　横方向のヘラ削り		胎土　少量の大砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 外面に炭化物付着
甕形土器	Ⅰ	36－11	34	N5E3	10	復元口径 13.4	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は複合口縁で直立気味に立ち上がる。端部は肥厚する	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面刷毛目のの後ナデ，同内面　ヘラ削り	口縁部に3～4条の櫛状工具による平行沈線文胴部に櫛状工具による波状文	胎土　精良 焼成　良好 色調　明灰褐色 器壁薄い
	Ⅱ$_3$	36－12	34	N8E4	9	復元口径 13.8	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は複合口縁で，上部は外反する	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面　横方向の刷毛目。同内面　横方向のヘラ削り		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色
	Ⅱ$_1$	36－13	34	N8E3	9	復元口径 16.8	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は複合口縁で，上部は外反する	口縁部内外面ともヨコナデ。肩部外面　縦横斜方向の刷毛目。同内面　横方向のヘラ削り		胎土　小砂粒含む 焼成　良好 色調　明灰褐色

器種		挿図番号	図版番号	出土地点	層位	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
甕形土器	Ⅱ$_2$	36−14	34	N4E3	10	復元口径 15.4	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は複合口縁で，上部はわずかに外反する	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面　縦方向の刷毛目の後ナデ。同内面　ヘラ削り		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　明灰褐色 外面に少量の炭化物付着
	Ⅱ$_2$	37−1	35	N8E4	9	復元口径 14.4	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は複合口縁で，上部はやや直線的に外傾する	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面　ヨコナデ。同内面　横方向のヘラ削り	胴部に櫛状工具による13条以上の平行沈線文	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外面黄灰色 内面白灰色 外面炭化物付着
	Ⅱ$_1$	37−2	35	N8E3	9	復元口径 19.0	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は複合口縁で，上部はゆるやかに外反する	内外面ともヨコナデ		口縁部 胎土　少量の砂粒含む 焼成　良好 色調　明灰褐色 風化が著しい
	Ⅱ$_2$	37−3	35	N9E3	9	復元口径 14.0	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は複合口縁で外反する	口縁部内外面ともヨコナデ。頸部以下内面ヘラ削り		胎土　緻密 焼成　良好 色調　白灰色
	Ⅱ$_1$	37−4	35	北壁際		復元口径 15.0	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は複合口縁で外反する	風化のため調整不明		胎土　少量の砂粒含む 焼成　良好 色調　明茶褐色 風化が著しい 外面に炭化物付着
	Ⅱ$_2$	37−5	35	北壁際		復元口径 15.6	口縁部は複合口縁で，端部は肥厚し平坦面をなしている	内外面ともヨコナデ		胎土　少量の砂粒含む 焼成　良好 色調　明灰褐色 風化が著しい
	Ⅱ$_1$	37−6	35	北壁際		復元口径 17.0	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は複合口縁で直立気味に立ち上がる	口縁部内外面ともヨコナデ。同肩部横方向のヘラ削り		胎土　やや精良 焼成　良好 色調　外面茶灰色 内面黄灰色 外面炭化物付着
	Ⅱ$_1$	37−7	35	N8E4	9	復元口径 16.2	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は複合口縁で比較的長く，外反している	口縁部内外面ともヨコナデ。肩部内面　横方向のヘラ削り		胎土　微砂粒を含む 焼成　良好 色調　茶灰褐色 風化が著しい
	Ⅱ$_1$	37−8	35	北壁際		復元口径 15.0	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は複合口縁で，ゆるやかに外反する	口縁部内外面ともヨコナデ。肩部内面　横方向のヘラ削り		胎土　微砂粒を含む 焼成　良好 色調　明茶褐色
	Ⅱ$_2$	37−9	35	N5E4	10	復元口径 14.8	口縁部は複合口縁で，上半部の器壁はやや厚い	内外面ともヨコナデ		胎土　小砂粒を含む 焼成　良好 色調　淡灰褐色
	Ⅱ$_2$	37−10	35	N8E4	9	復元口径 14.0	口縁部は複合口縁で，直立気味に外反する	内外面ともヨコナデ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色
	Ⅱ$_3$	37−11	35	N6E4	8	復元口径 15.8	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は複合口縁で，上部は外反する 端部は平坦面をなし，稜は鈍い	口縁部内外面ともヨコナデ。肩部内面　ヘラ削り 外面　刷毛目		胎土　微砂粒含む 色調　外面白灰色 内面赤褐色 風化著しい
	Ⅱ$_1$	37−12	35	N8E4	10	復元口径 16.4	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は複合口縁で，ゆるやかに外反する。稜は鈍い	口縁部内外面ともヨコナデ。肩部外面　縦方向の刷毛目，同内面　横斜方向のヘラ削り		胎土　小砂粒含む 焼成　良好 色調　黄褐色 風化がすすんでいる
	Ⅱ$_2$	37−13	35	N9E3	9	復元口径 14.0	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は複合口縁で，上部は直立して立ち上がり，端部でわずかに外反する	内外面ともヨコナデ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　暗灰色

器種		挿図番号	図版番号	出土地点	層位	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
甕形土器	Ⅱ$_2$	37－14	35	N８E４	9	復元口径 16.8	口縁部は複合口縁でゆるやかに外反し，端部は肥厚する	内外面ともヨコナデ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　灰色
	Ⅱ$_1$	37－15	35	N７E６	8	復元口径 15.0	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は複合口縁で上半は外傾する。端部はわずかに外反する	口縁部内外面ともヨコナデ。肩部内面　横方向のヘラ削り		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　白灰色 風化が著しい
	Ⅱ$_2$	37－16	35	北壁際		復元口径 18.4	口縁部は複合口縁で，端部はわずかに外反する	内外面ともヨコナデ		胎土　精良 焼成　良好 色調　明茶褐色 口縁部外面に炭化物付着
	Ⅱ$_3$	37－17	35	N７E３	8	復元口径 14.8	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は複合口縁で，やや直線的に外傾し，上端部は肥厚し平坦面をなす。稜は太く鈍い	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面　不整方向の刷毛目，同内面　横方向のヘラ削り	胴部にヘラ状工具による刺突文を施す	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化がすすんでいる。 外面炭化物付着
	Ⅱ$_2$	37－18	35	N７E４	8	復元口径 14.8	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は複合口縁で，直線的に外傾する	口縁部は内外面ともヨコナデ。肩部内面　横方向のヘラ削り		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外面黒色 内面黄灰褐色 外面炭化物付着
	Ⅱ$_1$	37－19	35	N６E３	10	復元口径 14.6	口縁部は複合口縁で直立気味に立ち上がり，端部で外反する	内外面ともヨコナデ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外面暗青灰色 内面暗茶褐色 外面炭化物付着
	Ⅱ$_2$	37－20	35	N９E３	10	復元口径 21.4	口縁部は複合口縁で直立気味に立ち上がり，端部で外反する。稜はあまり突出しない	風化のため調整不明		胎土　小砂粒含む 焼成　良好 色調　明茶褐色 風化著しい
	Ⅱ$_1$	37－21	35	北壁際		復元口径 14.2	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は複合口縁でゆるやかに外反する。端部は外側に膨み上端は平坦面をなす。稜は丸く鈍い	内外面ともヨコナデ		胎土　砂粒含む 焼成　良好 色調　灰褐色 風化が著しい
	Ⅱ$_2$	37－22	35	N５E４	8	復元口径 17.4	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は複合口縁で，端部は丸味をおび外反している	口縁部内外面ともヨコナデ。頸部以下内面ヘラ削り		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外面黒色 内面白灰色 外面炭化物付着
	Ⅱ$_2$	37－23	36	N８E４	9	復元口径 19.6	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は複合口縁で，上半部はゆるやかに外反し，端部で外側に膨み，平坦面をなす	口縁部内外面ともヨコナデ。頸部以下内面ヘラ削り		胎土　砂粒少ない 焼成　良好 色調　黄褐色
	Ⅱ$_2$	37－24	36	N８E４	9	復元口径 16.8	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は複合口縁でゆるやかに外反し，端部は外側に膨み，丸く終わる	口縁部内外面ともヨコナデ。頸部以下内面ヘラ削り		胎土　砂粒少ない 焼成　良好 色調　黄褐色
	Ⅱ$_1$	37－25	36	N９E３	10	復元口径 17.0	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は複合口縁で，やや直線的に外傾する。端部は外反する	風化のため調整不明		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　明茶褐色 風化が著しい 外面炭化物付着

器種		挿図番号	図版番号	出土地点	層位	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
甕形土器	Ⅱ$_2$	37－26	36	N７E３	10	復元口径 18.0	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は複合口縁で，やや直線的に外傾する。端部は平坦面をなす	口縁部内外面ともヨコナデ。肩部外面　刷毛目，同内面　ヘラ削り	櫛状工具による平行沈線文を施す	胎土　砂粒が少ない 焼成　良好 色調　黄褐色
	Ⅱ$_1$	37－27	36	北壁際		復元口径 16.8	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は複合口縁で，端部で急激に外反する	内外面ともヨコナデ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　明灰褐色 風化が著しい 内面に炭化物付着
	Ⅱ$_2$	37－28	36	N７E３	8	復元口径 14.6	口縁部は複合口縁で直線的に外傾する。端部で急激に外反する	内外面ともヨコナデ		胎土　1㎜大の砂粒多量に含む 焼成　良好 色調　白灰色 風化が著しい
	Ⅱ$_3$	38－1	36	N９E４	10	復元口径 13.4	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は複合口縁で，上部は外反する。稜は太く鈍い	外面口縁部　ヨコナデ。胴部　横方向の刷毛目。内面口縁部　ヨコナデ。胴部　横方向のヘラ削り		胎土　小砂粒を多く含む 焼成　良好 色調　淡灰褐色 外面炭化物付着
	Ⅱ$_2$	38－2	36	N７E３	8	復元口径 18.6	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は複合口縁で，ゆるやかに外反する。端部は外縁が膨み，平坦面を呈す	口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部外面　縦方向の刷毛目。同内面はヘラ削り	胴部に櫛状工具による波状文を施す	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外面黄褐色 内面白灰色 風化がすすんでいる
	Ⅱ$_2$	38－3	36	N７E３	8	復元口径 16.4	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は複合口縁で，直線的に外傾する。端部は外縁が膨み，平坦面をなす	外面はヨコナデ。内面口縁部　ヨコナデ。同肩部　横方向のヘラ削り		口縁部から肩部にかけて 胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化がすすんでいる 外面に炭化物付着
	Ⅱ$_3$	38－4	38	N５E３	10	復元口径 19.4	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は複合口縁で，上半部は内湾気味に外傾する。端部は肥厚し内側に突出する。稜は太く突出する	外面口縁部　ヨコナデ。同胴部　縦横方向の刷毛目。内面口縁部　ヨコナデ。同胴部　ヘラ削り		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　青灰褐色
	Ⅱ$_4$	38－5	36	北壁際		復元口径 12.4	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は複合口縁だが，稜は丸く突出しない。上半部は内湾気味に直立する	外面口縁部　ヨコナデの後，横方向の刷毛目。同肩部　ヨコナデ。内面口縁部　ヨコナデ。同肩部　横方向のヘラ削り		胎土　微砂粒を多く含む 焼成　良好 色調　外面黄茶灰色 内面暗茶灰色
		38－6		N８E４	10	復元口径 14.8	口縁部は複合口縁だが，稜は丸く上半部との境に段がつく程度	内外面ともヨコナデ		胎土　小砂粒を含む 焼成　良好 色調　黄褐色
		38－7	36	N８E３	10	復元口径 13.4	頸部は「く」字形にゆるやかに屈曲し，口縁部は複合口縁であるが，稜は丸く上半部との境に段がつく程度。上半は直立する	口縁部外面　ヨコナデ。同内面　ヨコナデ，指頭圧痕。胴部外面　縦横方向の刷毛目。同内面　ヘラ削り		胎土　精良 焼成　良好 色調　青灰色 風化がすすんでいる
	Ⅱ$_5$	38－8	36	N９E４	9	復元口径 15.0	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は複合口縁だが，稜は丸味をおび内面に段をもたない。端部は肥厚し平坦面をなす。胴部はかなり張り球形を呈す	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面　斜方向の刷毛目。同内面　横方向の粗いヘラ削り		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 内面炭化物付着 風化が著しい

器種		挿図番号	図版番号	出土地点	層位	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
甕形土器	Ⅱ5	38－9	39	N9E4	9	復元口径 16.6	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は複合口縁であるが，稜が丸味をおび内面に段をもたない。端部は肥厚し平坦面をなす。肩部は張り，胴部は球形を呈す	外面口縁部　ヨコナデ。同胴部　不整方向の刷毛目。内面口縁部　ヨコナデ。同頸部　刷毛目の後ナデ。同胴部　ヘラ削りの後ナデ，押え		胎土　小砂粒多量に含む 焼成　良好 色調　黄灰色 内面炭化物付着
	Ⅱ6	38－10	36	N8E4	9	口径 17.4	頸部は「く」字形にゆるやかに屈曲し，口縁部は複合口縁だが，稜は丸く鈍い。上面は外反し，端部は平坦面をなす	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面　ヘラ状工具による横方向の沈線状の線の後，横斜方向の刷毛目。同内面　横方向のヘラ削り		胎土　小砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化がすすんでいる
		38－11	38	N8E4	9	復元口径 16.0	頸部は「く」字形にゆるやかに屈曲し，口縁部は複合口縁状に延びるが，稜は丸く内面の段は不明瞭。口縁部上半の器壁は厚く，端部は平坦面をなす。胴部はほぼ球形	外面口縁部　ヨコナデ。同胴部に縦方向の刷毛目。内面口縁部　ヨコナデ。同頸部　刷毛目。同胴部　ヘラ削り		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色
	Ⅱ6	38－12	36	N9E4	9	復元口径 16.4	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は内湾気味に外傾するが外面中ほどで角度を変えて立ち上がる。口縁端部は平坦面をなす	外面口縁部　ヨコナデ。同肩部に縦方向の刷毛目。内面口縁部　横および斜方向の刷毛目の後ナデ。同肩部　ヘラ削り		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶灰色 風化が著しい
	Ⅲ	38－13	38	N6E4	10	復元口径 14.5 胴部最大径 22.0	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は断面逆「S」字形に屈曲し複合口縁様を呈す。端部は肥厚し平坦面をなし外側に張む。胴部は球形を呈す	外面口縁部　ヨコナデ。同頸部　刷毛目の後ヨコナデ。同胴部以外斜不整方向の刷毛目。内面口縁部　横方向の刷毛目の後ヨコナデ。同頸部以下ヘラ削り		胎土　精良 焼成　良好 色調　外面灰褐色 内面黄灰褐色
		38－14	36	N9E4	9	復元口径 15.4	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部外面は複合口縁様を呈すが稜は丸く，内面に段がつかない。端部は平坦面をなし内側上方に突出する	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面　整方向の刷毛目。同内面　斜方向のヘラ削り		胎土　白色微砂粒含む 焼成　良好 色調　外面暗黄灰色 内面明黄灰色 風化が著しい
	Ⅳ	39－1	39	N5E3	10	復元口径 14.8	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は内湾するが下部に	外面口縁部　ヨコナデ。同胴部　横縦不整方向の刷毛目。内面口縁部　ヨコナデ。同胴部は横方向のヘラ削り	肩部にヘラ状工具による一条の沈線文を施す	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　明茶褐色 外面に炭化物付着
		39－2	36	N9E4	10	復元口径 17.4	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は内湾し，端部は内側に突出している	口縁部外面　ヨコナデ。同内面　刷毛目の後ヨコナデ。頸部外面以下粗い刷毛目。同内面以下横方向のヘラ削り		胎土　砂粒含む 焼成　良好 色調　暗灰色 風化が著しい
		39－3	36	N8E4	9	復元口径 16.0	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は内湾する。端部は内側に突出している	口縁部外面　刷毛目の後ヨコナデ。同内面　ヨコナデ。胴部外面　横方向の刷毛目。同内面　横方向のヘラ削り	胴部に櫛状工具による波状文を施す	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄褐色

器種		挿図番号	図版番号	出土地点	層位	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
甕形土器	Ⅳ	39－4	37	N９E３	9	復元口径 19.0	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は内湾している。端部は内側に突出している	口縁部内外面ともヨコナデ。頸部外面　縦方向の刷毛目。同内面　ヘラ削り		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　青褐色 風化が著しい
	Ⅳ	39－5	36	N９E３	9	復元口径 16.6	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は外面中央でやや膨み外傾している。端部は肥厚し平坦面をなす	口縁部内外面ともヨコナデ。肩部内面　ヘラ削り		胎土　1㎜大白色砂粒少量含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化が著しい
	Ⅳ	39－6	37	北壁際		復元口径 16.0	口縁部は内湾気味に立ち上がり，端部は肥厚し平坦面をなす	内外面ともヨコナデ。		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　暗茶褐色
		39－7	37	N８E４	9	復元口径 16.2	口縁部は外傾する。端部は平坦面をなし，内側に突出する	内外面ともヨコナデ。		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色
	V_1	39－8	37	N５E４	10	復元口径 16.0	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は短く外反する	外面はヨコナデ。内面口縁部　横方向の刷毛目の後ヨコナデ。同頸部ヘラ削り		胎土　小砂粒を多量に含む 焼成　良好 色調　外面暗茶褐色 内面黒褐色 風化がすすんでいる 外面に炭化物付着
		39－9	37	N７E４	10	復元口径 16.2	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は外反する。胴部はあまり張らない	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面　叩き後刷毛目。内面　横方向のヘラ削り		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　明茶褐色
	V_2	39－10	37	N７E４	9	復元口径 14.4	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は直線的に外傾する。端部は細く尖っている。胴部は張り球形を呈す	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部内外面とも斜方向の刷毛目		胎土　精良 焼成　良好 色調　暗灰褐色 風化がすすんでいる 外面に炭化物付着
		39－11	37	N６E４	8	復元口径 18.6	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は短く外反する。胴部はかなり張る	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面　斜方向の刷毛目。同内面　ヘラ削り		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　赤茶褐色 風化が著しい
	V_3	39－12	38	N５E３	10	復元口径 11.6 胴部最大径 15.0	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は直交気味に外反する。端部は肥厚し平坦。肩部は張り，胴部は球形を呈す	口縁部内外面ともヨコナデ。頸部以下外面　不整方向の刷毛目。内面ヘラ削り		胎土　3㎜大の砂粒，微砂粒含む 焼成　良好 色調　暗灰褐色 外面炭化物付着
	V_4	39－13	37	N５E３	10	復元口径 14.8	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は短く外反し，端部は平坦面をなす	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面　横方向の刷毛目。同内面　ヘラ削り		胎土　精良 焼成　良好 色調　明灰褐色 外面に炭化物付着
	V_4	40－1	38	N８E４	9	復元口径 14.0 胴部最大径 23.6	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は外反する。端部はやや肥厚し平坦面をなす。胴部は長胴である	外面口縁部　ヨコナデ。同胴部　不整方向の刷毛目。内面口頸部　斜方向の刷毛目の後ヨコナデ。同胴部ヘラ削り		胎土　精良 焼成　良好 色調　外面黒色 内面灰褐色 外面に炭化物付着
		40－2	38	N５E４	10	復元口径 17.0 胴部最大径 26.0	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は外反し，端部は平坦面をなす。胴部は球形を呈す	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面　不整方向の刷毛目の後ナデ。同内面　ヘラ削り		胎土　ほぼ精良 焼成　良好 色調　灰褐色 一部風化している 外面に炭化物付着

器種		挿図番号	図版番号	出土地点	層位	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
甕形土器	V5	40－3	37	ベルト北		復元口径 11.9	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部はやや短く，直立気味に外傾し，中央でわずかに屈曲する。胴部は張っている	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面　不定方向の刷毛目。同内面　指頭による押圧，ヘラ削り		胎土　微砂粒を含む 焼成　良好 色調　白灰色 外面少量の炭化物付着
		40－4	39	N8E4	10	口径 13.4	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は内湾気味に外傾する。口径に比して頸部径小さい	外面口縁部　斜方向の刷毛目の後ヨコナデ。同胴部　不整方向の刷毛目。内面口縁部　横斜方向の刷毛目。同胴部　左上り方向のヘラ削り		胎土　砂粒含む 焼成　やや良 色調　茶褐色 風化が著しい 炭化物付着
		40－5	37	N9E3	9	復元口径 19.8	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部はやや内湾気味に短く立ち上がる	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部内面　ヘラ削り		胎土　精良 焼成　良好 色調　暗灰色 風化がすすんでいる
		40－6		N7E3	8	復元口径 13.6	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は直線的に外傾する	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面　斜方向の刷毛目の後ナデ。内面　ヘラ削り		
	V6	40－7	37	N7E3	10	復元口径 19.0	頸部はゆるやかに屈曲し，口縁部は直立気味に外傾する。上半部はやや外反し，端部は平坦面をなす	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面　縦方向の刷毛目。同内面　ヘラ削り		胎土　2～3㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　明灰褐色 風化が著しい 外面炭化物付着
		40－8	39	N8E4	9	復元口径 16.8	頸部は「く」字形に屈曲し，口縁部は「S」字形にゆるやかに屈曲し，上部は外反する。肩部は張っている	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面　不整方向の刷毛目。同内面　横方向のヘラ削り		胎土　小砂粒多く含む 焼成　良好 色調　外面黄褐色 内面暗褐色
	V7	40－9	39	N5E3	10	復元口径 12.8	頸部はゆるやかに屈曲し，口縁部はやや直立気味に立ち上がる	外面は斜方向の刷毛目。口縁部　刷毛目の後にナデ。端部　ヨコナデ。内面口頸部　横方向の刷毛目の後ナデ。同肩部　ヘラ削り		胎土　精良 焼成　良好 色調　黒褐色
小型丸底壺	II1	41－1	39	N8E4	10	口径 5.6 胴部最大径 9.7 器高 8.7	口縁部は中程に稜をもち，複合口縁状を呈し，上部は内傾する。胴部は球形を呈し，底部はやや尖り気味	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面　縦方向の刷毛目。同内面上部　丁寧なヘラ削り		完形 胎土　小砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化がすすんでいる
	I1	41－2	39	N8E4	10	口径 9.6 胴部最大径 8.5	口縁部は長く内湾気味に立ち上がり，口径は胴部径を凌ぐ。胴部は扁平な楕円形を呈す	口縁部外面　ヨコナデ。同内面　刷毛目の後ナデ。胴部外面　ナデ。同内面　削り		底部を欠く 胎土　砂粒を含みやや粗い 焼成　良好 色調　暗褐色
	I3	41－3	39	N9E4	10	復元口径 7.6 胴部最大径 7.0	口縁部は内湾気味に立ち上がり，端部近くで外反する。口径は胴部径を凌ぐ。胴部は扁平な楕円形を呈す	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面　ナデ。同内面　ヘラ削り		底部を欠く 胎土　小砂粒を含む 焼成　良好 色調　灰褐色
	I2	41－4	40	N5E3	10	復元口径 9.0 胴部最大径 10.3 器高 9.7	口縁部は内湾して伸び，端部近くで外反する。胴部は扁平な楕円形を呈す	口縁部外面　ヨコナデ。同内面　刷毛目の後ヨコナデ。胴部外面　刷毛目の後ナデ。同内面　ヘラ削り		ほぼ完形 胎土　微砂粒を含む 焼成　良好 色調　明灰褐色

器種		挿図番号	図版番号	出土地点	層位	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
小型丸底壺	I_3	41－5	40	N7E4	10	口径 9.4 胴部最大径 11.2 器高 11.1	口縁部は一旦内湾気味に伸び，端部近くで外反する。胴部は楕円形を呈す	外面口縁部　縦方向の刷毛目の後ヨコナデ。同胴部縦，斜方向の刷毛目の後ナデ。内面口縁部　ヨコナデ。同頸部　斜方向の刷毛目。同胴部削りの後ナデ		完形 胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰褐色 多少風化している
	I_4	41－6	40	N5E4	10	口径 8.6 胴部最大径 9.1 器高 9.8	口縁部はゆるやかに外反する。胴部はほぼ球形を呈し，底部は尖り気味。全体に凹凸著しい	口縁部外面　刷毛目の後ヨコナデ。同内面　ヨコナデ。胴部外面　不整方向の刷毛目。同内面　削りの後ナデ		完形 胎土　微砂粒を多く含む 焼成　良好 色調　外面青灰褐色 内面明茶褐色 風化がすすんでいる
		41－7	40	N5E3	10	胴部最大径 9.1	胴部はやや球形を呈す	外面　不整方向の刷毛目の後ナデ。内面　削り		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　明茶褐色 風化が著しい
	I_2	41－8	40	N8E3	9	復元口径 8.0 胴部最大径 8.7 器高 9.5	口縁部は直線的に外傾し，下部に鈍い稜がつく。肩部はやや張り，底部は尖り気味	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面　ナデ。同内面　削りの後ナデ。指頭による押圧痕		完形 胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外面茶褐色 内面黄褐色 風化が著しい
		41－9	40	N8E4	9	胴部最大径 7.6	肩部はやや張り楕円形を呈す。胴部径に比して頸部径小さい	外面　斜不整方向の刷毛目。内面削り		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　暗灰色
		41－10	40	N8E3	9	復元口径 8.2 胴部最大径 9.5 器高 9.2	口縁部は内湾気味に外傾し，中央に鈍い稜をもうけ，胴部は球形を呈す	外面　斜方向の刷毛目の後ナデ。内面口縁部　横方向の刷毛目の後ヨコナデ。同胴部　ヘラ削り。中央に指頭による押圧痕あり		完形 胎土　1㎜大の白色砂粒少量含む 焼成　良好 色調　外面茶灰色 内面黄白灰色 外面は風化がすすんでいる
		41－11	40	N7E4	10	復元口径 8.8	口縁部は内湾気味に外傾し，胴部は球形を呈す	口縁部内外面ともヨコナデ。頸部以下調整不明		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　青灰褐色 風化が著しい
		41－12	40	N8E4	9	復元口径 8.6	口縁部はやや短く外反する。口径と胴部径はほぼ等しい。胴部は球形を呈す	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面　ナデ。同内面　ヘラ削り		胎土　微砂粒含む 焼成　やや良 色調　茶褐色
		41－13	40	N8E4	10	口径 7.6 胴部最大径 8.7 器高 8.6	口縁部はやや短く外反する。端部で外縁に膨む。肩部は張る	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面　不整方向の刷毛目。同内面　ヘラ削り		完形 胎土　小砂粒を含む 焼成　良好 色調　灰褐色
		41－14	39	N5E3	10	復元口径 10.0	口縁部は直線的に外傾する。口径は胴部径を凌ぐ	口縁部内外面ともヨコナデ。指による押圧。胴部外面　縦斜方向の刷毛目。同内面　ヘラ削り		胎土　小砂粒を少量含む 焼成　良好 色調　明茶褐色
		41－15	40	N6E4	10	口径 9.6 胴部最大径 8.8 器高 7.2	口縁部は内湾気味に伸びる。胴部は扁平な楕円形を呈す	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面　不整方向の刷毛目。同内面　ヘラ削り		完形 胎土　微砂粒を含む 焼成　良好 色調　青灰褐色
	II	41－16	40	N6E4	10	口径 8.6 胴部最大径 10.1 器高 9.0	口縁部は短く内湾気味に外傾し，肩部は張り，球形を呈す	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面　刷毛目の後ナデ。同内面　ヘラ削り		完形 胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外面暗青灰色 内面明黄灰色 風化が著しい

器種		挿図番号	図版番号	出土地点	層位	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
小型丸底壺	Ⅰ$_2$	41－17	40	N３E３	10	口径 9.0	口縁部は内湾気味に立ち上がる	外面　縦方向の刷毛目の後ナデ。内面口縁部　斜方向の刷毛目の後ナデ。同胴部　ヘラ削り		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　明茶褐色 外面炭化物付着
		41－18	40	N５E３	10	口径 8.2 胴部最大径 8.5 器高 8.2	口縁部は内湾気味に立ち上がり，端部近くでわずかに外反する。胴部は球形を呈す	口縁部外面　縦方向の刷毛目の後ヨコナデ。同内面ヨコナデ。胴部外面　不整方向の刷毛目の後ナデ。同内面　削りの後ナデ		完形 胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外面暗灰褐色 内面明茶褐色
		41－19	40	N４E４	10	復元口径 6.8 胴部最大径 6.7 器高 6.5	口縁部は直線的に外傾する。頸部は「く」の字形にゆるく屈曲し，頸部内面には稜線がつかない。胴部は楕円形を呈す	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部不整方向の刷毛目の後ナデ。同内面　削り		完形 胎土　精良 焼成　やや良 色調　白灰褐色 風化が著しい
	Ⅱ$_2$	41－20	40	N９E４	9	復元口径 7.8 胴部最大径 7.8 器高 8.0	口縁部は大きく内湾して短く立ち上がり複合口縁状を呈す。胴部は球形を呈す	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面　不整方向の刷毛目。同内面　削りの後ナデ		完形 胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化がすすんでいる
		41－21	39	N９E４	10	復元口径 4.8	口縁部は内湾しながら立ち上がり，上部は直立し複合口縁状を呈す。端部は平坦面をなす。胴部はあまり張らず，やや長胴である	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面　ナデ。同内面　指による押圧，ナデ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　明灰褐色
		41－22		N５E３	10	復元口径 6.4	口縁部はやや直線的に外傾し，端部は内側に膨む	外面　斜方向の刷毛目の後ヨコナデ。内面口縁部　ヨコナデ。同頸部以下　ヘラ削り		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　明灰褐色
	Ⅱ$_3$	41－23	40	N５E３	10	口径 7.8 胴部最大径 9.2 器高 8.2	口縁部は短く外反している。肩部は張り楕円形を呈す	外面　不整方向の刷毛目の後ナデ。内面口縁部　横方向の刷毛目の後ナデ。同胴部　ヘラ削り		完形 胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　暗灰褐色 風化がすすんでいる
		41－24	40	N５E４	9	口径 6.3 胴部最大径 8.1 器高 6.9	口縁部は短く開き，内湾気味に立ち上がる。肩部は張り，底部は尖り気味である	胴部外面　横方向の刷毛目の後ナデ。以下調整不明		完形 胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　明灰褐色 風化が著しい
	Ⅱ$_1$	42－１	41	N４E４	9	胴部最大径 8.6	口縁部は内湾しながら伸び，複合口縁状を呈す。胴部はやや楕円形を呈す	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面　斜方向の刷毛目の後ナデ。同内面　ヘラ削り		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外面明黄灰色 内面茶灰色
	Ⅰ$_3$	42－２	41	N７E４	10	口径 10.2 胴部最大径 11.5 器高 11.7	口縁部はゆるやかに外反する。肩部は張り，胴部は球形を呈す	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面　刷毛目の後ナデ。同内面　ヘラ削り		完形 胎土　微砂粒を多く含む 焼成　良好 色調　青灰褐色
	Ⅲ	42－３	41	N８E５	9	口径 8.6 胴部最大径 13.2	口縁部はほぼ垂直で短い。胴部は球形を呈す	口縁部内外面とも斜方向の刷毛目の後ヨコナデ。胴部外面　斜方向の刷毛目の後ナデ。同内面　ナデ，指頭圧が残る		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化がすすんでいる

器種		挿図番号	図版番号	出土地点	層位	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
小型丸底壺	Ⅲ	42－4	41	N７E３	10	復元口径 11.0	口縁部は短く垂直に立ち上がる。頸部はあまりしまらない。胴部は扁平な楕円形を呈す	外面　刷毛目の後ナデ。内面口縁部ヨコナデ。同頸部以下ナデ		胎土　微砂粒を多く含む 焼成　良好 色調　明灰褐色 炭化物付着
		42－5	41	N４E３	10	口径 9.6 胴部最大径 10.8	口縁部はゆるやかに外反し短い。胴部は球形だかやや長胴である。頸部はあまりしまらない	口縁部外面　刷毛目の後ヨコナデ。同内面　ヨコナデ。胴部外面　不整方向の刷毛目の後ナデ。同内面　ヘラ削り		胎土　２㎜大の砂粒含む 焼成　良好 色調　暗茶褐色 炭化物付着
		42－6	41	N４E４	9	復元口径 9.6	口縁部はほぼ垂直に短く立ち上がり，端部で外反する。頸部はあまりしまらない。胴部は球形を呈す	外面口縁部　指による押圧，ナデ。同胴部　横，斜方向の刷毛目，ナデ。内面口縁部　刷毛目の後ナデ。同頸部以下　指による押圧，ナデ		胎土　１㎜大の砂粒を少量含む 焼成　良好 色調　暗灰褐色 風化が著しい 外面一部炭化物付着
		42－7	39	N８E３	9	復元口径 14.0	口縁部はわずかに外傾し，端部で外線に膨む。頸部はあまりしまらない。胴部は球形を呈す	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面　横，斜方向の刷毛目。同内面ヘラ削り		胎土　微砂粒を含む 焼成　良好 色調　外面黒灰色 内面黄灰色 風化が著しい
	Ⅱ$_3$	42－8	41	N５E３	10	復元口径 7.8 胴部最大径 9.1	口縁部は非常に短く，頸部はあまりしまらない。胴部は扁平な楕円形を呈す	口縁部内外面ともヨコナデ。胴部外面　不整方向の刷毛目。同内面　ナデ		完形 胎土　微砂粒を含む 焼成　良好 色調　暗灰褐色 風化がすすんでいる
		42－9		N８E４	9	復元口径 11.6	口縁部は直線的に外傾する	内外面ともナデ		胎土　小砂粒を多く含み粗い 焼成　やや良 色調　灰褐色
		42－10		N８E３	9		胴部は扁平な楕円形を呈す	外面　斜不整方向の刷毛目。内面ヘラ削り		胎土　白色砂粒少量含む 焼成　良好 色調　灰褐色
		42－11	39	N１E３	10		胴部は扁平な楕円形を呈す	外面　不整方向の刷毛目の後ナデ。内面　ナデ，指頭圧痕あり。肩部と胴部中央に粘土接合痕あり		胎土　微砂粒を含む 焼成　良好 色調　灰白色
		42－12	41	N７E３	9		肩部は張り，底部は尖り気味	外面　刷毛目の後ナデ。内面　ヘラ削りの後ナデ。同肩部　指頭圧痕あり		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外面茶褐色 内面淡黄灰色
		42－13	41	N７E５	8		肩部は張り，扁平な楕円形を呈す	頸部内外面ともヨコナデ。胴部外面　不定方向の刷毛目。同内面　横方向のヘラ削り		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外面白灰色 内面黒灰色 風化が著しい
高坏形土器	Ⅰ$_1$	43－1	41	N９E４	10	口径 20.8	口縁部は内湾気味に伸び，端部で外反する。底部と口縁部の境には鈍い突線が廻る	内面端部　ヨコナデ。底面　ヘラ磨き。外面　斜方向の刷毛目の後ナデ		胎土　精良 焼成　良好 色調　赤褐色 一部炭化物付着
		43－2	41	N９E４	10	口径 19.2	口縁部は内湾気味に立ち上がり，端部で外反する。底部と口縁部の境には段をつけ界線とする	内面　ヨコナデ，不定方向のヘラ磨きおよび放射状の暗文を２段入れる。外面　ヨコナデ。底部　刷毛目の後ナデ		坏部 胎土　精良 焼成　良好 色調　明茶褐色

器種		挿図番号	図版番号	出土地点	層位	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
高坏形土器	I_2	43－3	42	N8E4	9	復元口径 20.2	底部と口縁部の境には稜がつき，口縁部はゆるやかに外反しながら立ち上がる	風化のため調整不明		胎土　精良 焼成　良好 色調　白灰色 風化が著しい
		43－4	41	N6E3	10	復元口径 15.6	底部と口縁部の境には稜がつき，口縁部はゆるやかに外反しながら立ち上がる	内面　放射状のヘラ磨き。上方は横縦の不整方向のヘラ磨き。外面　斜方向の刷毛目の後ヘラ磨き		胎土　精良 焼成　良好 色調　外面暗灰褐色 暗黄灰色
		43－5	42	北壁際		復元口径 16.0	底部と口縁部の境には稜がつき，口縁部は大きく外反する	外面上半部　ヨコナデの後，下方から上方への暗文。底部　横方向の刷毛目		胎土　精良 焼成　良好 色調　外面暗茶褐色 暗黄灰色
	I_3	43－6	41	N7E4	10	口径 12.7 底径 8.4 器高 7.2	坏部は内湾しながら立ち上がり端部で外反する。脚部は低く，裾は「ハ」の字形にゆるやかに広がる	外面　ナデ。坏部端部　ヨコナデ。内面坏部　ヘラ磨き。端部　ヨコナデ。脚部　ナデ		完形 胎土　精良 焼成　良好 色調　外面暗黒茶褐色 暗黄灰褐色 風化がすすんでいる
	I_3	43－7	42	N9E3	9	復元口径 26.2	やや内湾しながら立ち上がり，上半部で外反する	内面　ヘラ磨き。外面　ヨコナデ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化している
		43－8	42	N8E4	9	復元口径 14.4	坏部はゆるやかに内湾しながら立ち上がり，端部はわずかに外反する	外面　縦方向の刷毛目。内面　丁寧なヘラ磨き		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色
	Ⅱ	43－9	42	N8E4	9	復元口径 17.2	口縁部は内湾しながら立ち上がる	内面　ヘラ磨き。外面　刷毛目の後ナデ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　暗灰色
	I_3	43－10	42	N5E3	10	復元口径 17.6	底部は平坦で，口縁部は直線的に立ち上がる。口縁部と底部の境は不明瞭	内面　刷毛目の後ヨコナデ。底部丁寧なヨコナデ。外面　縦方向の刷毛目の後ヨコナデ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化がすすんでいる
	Ⅱ	43－11	42	N7E3	8	口径 9.9 底径 7.2 器高 8.6	坏部は深身で内湾しながら立ち上がる。脚部は低く，裾はゆるやかに広がる。筒部は円筒状にならず，粘土が詰まっている	坏部内外面ともナデ。脚部内外面ともナデ。裾部内外面ともヨコナデ		完形 胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化がすすんでいる
		43－12	42	N5E3	10		筒部は円筒状で，裾部はゆるやかに広がると思われる。坏底部に小孔あり	外面　縦方向の刷毛目の後ヘラ磨き。内面　ナデ，しぼり痕残る	円形の透孔を3方向に配す	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　明青灰褐色
		43－13	42	N6E3	10		筒部は円筒状で，裾部はゆるやかに広がると思われる。	風化のため調整不明		胎土　小砂粒含む 焼成　良好 色調　赤茶褐色 風化が著しい
		43－14	42	N9E3	10		筒部は比較的長い円筒状で，裾部との境で屈曲し，裾部は大きく広がると思われる。上部は粘土が詰まっている	外面　ヘラ磨き 内面　ヘラ削り，しぼり痕残る		胎土　微砂粒含む 色調　良好 風化が著しい
		43－15	42	北壁際			器壁は薄く，筒部は下部がやや広がる。坏底部に小孔あり	外面　調整不明 内面　ヘラ削り		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　青褐色 風化が著しい
		43－16	42	N8E4	9		筒部は下部に広がる	外面　ヨコナデ 内面　ヘラ削り		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　白灰色 風化が著しい

器種		挿図番号	図版番号	出土地点	層位	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
高坏形土器		43－17	42	北壁際			裾部は「ハ」の字形にゆるやかに広がると思われる	外面　ヘラ磨きの後斜方向の刷毛目 内面　しぼり痕，指頭圧痕あり		胎土　微砂粒多く含む 焼成　良好 色調　暗灰色
		43－18	42	北壁際			裾部はゆるやかに広がると思われる	外面　ヘラ磨き 内面　ヘラ削り		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　灰色 内面黄褐色
		43－19	42	N４E３	10		裾部はゆるやかに広がると思われる	外面　刷毛目の後ヘラ磨き 内面　ヘラ削り		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　暗青灰褐色
		43－20	42	N８E３	10		筒部と裾部の境で屈曲し，裾部は大きく広がる	外面　ヘラ磨き 内面　しぼり痕跡残る		胎土　精良 焼成　良好 色調　灰色
	Ⅰ	43－21	42	N７E３	10	底径 10.6	筒部と裾部の境で急激に屈曲し，裾部は大きく広がる	筒部外面　ヘラ磨き，一部刷毛目あり。同内面　ヘラ削り。裾部内外面ともヨコナデ		胎土　精良 焼成　良好 色調　灰褐色 風化が著しい
	Ⅰ	43－22	42	N５E４	10	復元底径 14.2	筒部と裾部の境で急激に屈曲し，裾部は大きく広がる	風化のため調整不明		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　明茶褐色 風化が著しい
	Ⅰ	43－23	42	N９E３	9	復元底径 10.6	筒部と裾部の境で急に屈曲し，裾部は「ハ」の字形に大きく開く。坏底部に小孔	外面　調整不明 内面脚部　しぼり痕跡あり。同裾部　横方向の刷毛目		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化が著しい
	Ⅰ	43－24	42	N８E４	9	復元脚端径 11.6	筒部と裾部の境で急激に屈曲し，裾部は大きく広がる。坏底部に小孔	外面脚部　ヘラ磨きの後ナデ。裾部　ヨコナデ。内面脚部　ナデ。同裾部　ヨコナデ	筒部に円形の透孔を３方向に配す	胎土　白色微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化がすすんでいる
	Ⅰ	43－25	42	N８E３	9	復元脚端部 14.3	筒部から裾部にかけてゆるやかに広がる。坏底部に小孔	外面接合部　縦方向の刷毛目。脚部　ヘラ磨き。裾部　ヨコナデ。内面脚部　ヘラ削り。同裾部　放射状の刷毛目	筒部に円形の透孔を３方向に配す	胎土　白色微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化がすすんでいる
		43－26		北壁際		復元脚端径 19.0	脚部はゆるやかな曲線を描いて広がる	内外面ともヨコナデ		胎土　細砂を多く含む 焼成　良好 色調　白灰色
	Ⅱ	43－27	42	N９E４	9	復元脚端径 20.2	裾部はゆるやかな曲線を描いて広がる	風化のため調整不明		胎土　１㎜大白色砂粒少量含む 焼成　良好 色調　茶褐色 風化が著しい
	Ⅱ	43－28		N８E４	10	復元脚端径 10.4	裾部はゆるやかな曲線を描きながら広がる	外面上方　ヘラ磨き。同下方　ヨコナデ。内面　ヘラ削り	筒部に円形透孔を有する	胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　灰褐色
	Ⅰ	43－29		N８E４	9	復元脚端径 13.6	脚部はやや垂直気味に下向し，裾部は比較的急に折れ，「ハ」の字形に広がりをみせる	脚部外面　縦方向のヘラ磨き。同内面　しぼり痕残る。裾部外面　ヨコナデ。同内面　刷毛目の後ナデ		胎土　精良 焼成　やや良 色調　暗灰色
脚	Ⅲ	43－30		N８E４	9	復元底径 12.9	裾部は「ハ」の字形を呈している。端部は平坦面をなす。	外面　調整不明 内面　指頭圧痕あり		胎土　１㎜大砂粒多量に含む 焼成　良好 色調　黄灰褐色 風化が著しい

器種		挿図番号	図版番号	出土地点	層位	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
器台形土器		44－1	37	N7E4	10	復元口径 21.6	受部は外反し，筒部との境には鋭い稜がつく	外面　ヨコナデ 内面　横方向のヘラ磨き。端部　ヨコナデ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　明茶褐色 風化が著しい
		44－2		N9E3	10	復元口径 23.8	受部はゆるやかに外反する	外面　ヨコナデ 内面　ヘラ磨きか。 端部　ヨコナデ		胎土　小砂粒多く含む 焼成　良好 色調　黄褐色 風化が著しい
		44－3	37	N8E3	10	復元脚端径 24.8	脚台部の稜はやや鋭く「ハ」の字形に開く	外面　ヨコナデ		胎土　1㎜大の砂粒多く含む 焼成　良好 色調　灰褐色
		44－4	37	N8E4	9	復元脚端径 19.2	脚台部の稜はやや鋭く「ハ」の字形にゆるやかに開く	外面　ヨコナデ 内面　ヘラ削り		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰褐色 風化がすすんでいる
		44－5	37	N9E4	9	復元脚端径 17.0	器壁はやや厚く，稜は鋭く直線的に開く	外面　ヨコナデ 内面　横および縦方向のヘラ磨き		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外面黄灰色 内面黒褐色 風化が著しい
		44－6	37	N9E3	9	復元脚端径 18.8	稜はやや丸く，ゆるやかに広がる。筒部は短く，内面は平坦面が残る	外面　ヨコナデ 内面　横方向のヘラ削り 端部　ヨコナデ		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　暗褐色
		44－7		N9E4	9		筒部は短く，内面は平坦面がみられる。稜は鋭い	器受部外面　ヨコナデ 内面器受部　ヘラ磨き 筒部から脚部　ヘラ削り		筒部 胎土　白色微砂粒含む 焼成　良好 色調　外面白灰色 暗青灰色 風化が著しい
		44－8		N5E3	10	復元脚端径 18.2	脚部はゆるやかに広がる	外面　ヨコナデ 内面　ヘラ削り		脚部 胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　明茶褐色 風化が著しい
		44－9	37	北壁際		復元脚端径 20.0	稜はやや丸味をおびている。脚部は直線的に開く	外面　ヨコナデ 内面　横方向のヘラ削り		脚部 胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　暗茶褐色
		44－10	37	N9E4	9	復元脚端径 10.8	稜は突線をなさず丸い。脚部は「ハ」の字形に広がる	外面　ヨコナデ 内面　風化のため調整不明		脚部 胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　外面黄灰色 内面茶褐色 風化が著しい
		44－11	37	N7E4	8	復元脚端径 22.2	脚部は「ハ」の字形にゆるやかに外反する。稜は丸い	外面　ヨコナデ 内面端部　ヨコナデ。上半部　ヘラ削り	脚部に焼成後，小孔を穿孔	脚部 胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　黄灰色 風化が著しい
低脚付坏土器		44－12	37	N8E4	9	復元口径 10.4	坏部は内湾しながら立ち上がる。底部には短い脚部がつき「ハ」の字形に広がる	坏部内面　ヘラ磨き。同外面　指頭による押圧の後ナデ。脚部外面　ヘラ磨き。同内面ナデ		ほぼ完形 胎土　精良 焼成　良好 色調　黄灰色 風化がすすんでいる
		44－13	37	N9E3	9	復元脚端径 5.0	脚部は端部で外反し，裾部は広がる	風化のため調整不明		胎土　微砂粒含む 焼成　良好 色調　坏部黄灰色 脚部暗茶褐色 風化が著しい

器種		挿図番号	図版番号	出土地点	層位	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	文様の特徴	備考
注口土器		44−14	37	N8E4	9	長さ 10.0	基部に比べ先端細い	風化のため調整不明		注口部 胎土　小砂粒多量に含む 焼成　良好 色調　暗灰色 風化が著しい
		44−15	37	N9E3	9	長さ 5.5	器壁厚く，先端は太い	風化のため調整不明		注口部 胎土　小砂粒多量に含む 焼成　良好 色調　暗灰色 風化が著しい
不明		44−16	37	N5E3	10	脚端径 10.0	円筒状で，双曲線を描きながら端部に至る。端部は平坦面をなす	外面　縦方向の刷毛目。内面　ヘラ削り。端部　ヨコナデ		脚部 胎土　1㎜大の砂粒少量含む 焼成　良好 色調　明灰褐色
		44−17	37	N5E4	10		上部は注口状に先細になり，下部は大きく広がる	外面　ヘラ磨き 内面　ヘラ削り		胎土　砂粒含む 焼成　良好 色調　暗灰褐色 風化が著しい

4．石　　器

石器は，石鏃，スクレーパー，楔形石器，剝片，石核，管玉，管玉未成品などが出土している。これらの大多数は第９層から出土しており，第10層以下からはほとんど出土していない。本遺跡出土の石器のうち最も多いのは黒曜石製の剝片であるが，一部を二次加工しただけのものが多く一定の剝片剝離技術は認められない。また本遺跡出土の遺物が朝酌川氾濫による二次堆積によるものであることを考えると，氾濫時に偶然に剝離したものも多いと思われる。これらはすべて再堆積しているため，各石器の所属時期を求めることは困難である。

石　　鏃（第46図１～14　図版43）　黒曜石製のものがほとんどで，図示したもののうち安山岩製の石鏃は，１点のみである。１は，有茎式，２～11は凹基式，12～14は平基式である。比較的平面形の整っているものが多いが，11は不整三角形を呈しているようである。また，８の側縁は，鋸歯状である。細部の加工は比較的ていねいなものが多いが，片面に大きな剝離面を残すもの（12，14）や，粗雑な調整をするもの（13）などもある。

石　　匙（第46図15　図版43）　横形で細身の石匙で１点のみ出土している。現存長5.2㎝，幅2.7㎝を測り，安山岩製である。比較的粗雑な作りで表裏面とも大きな剝離面を残し，加工は両面の舌周辺と一面の刃部のみに施されている。

スクレーパー（第46図16，17・第47図１～４　図版43）　不定形のスクレーパーが６点出土している。これらは剝片の一部をわずかに加工して刃部としたのものがほとんどで，第46図16，第47図４以外は表裏面とも大きな剝離面が残っている。第46図16は長さ2.1㎝，幅1.9㎝の小型のもので，平面形は方形を呈す。両面とも比較的ていねいな加工が施され，周縁を刃部としている。黒曜石製である。

第46図17は長さ6.4㎝，幅4.5㎝，第47図３長さ4.2㎝，幅4.3㎝を測り，平面形は半円形または三角形を呈すものである。ともに一面の一辺を加工して刃部としている。第46図17は安山岩製，第47図３は，黒曜石製である。

第47図１は長さ4.8㎝，幅2.4㎝，２は長さ5.5㎝，幅3.1㎝を測り，平面形菱形およびだ円形を呈す。前者は両面に，後者は一面に大きな剝離面が残っており，ともに上部と下部に加工が施されている。安山岩製である。

第47図４は長さ4.2㎝，幅1.5㎝を測り，平面形長方形を呈す。側縁および上部に比較的ていねいな細部加工が見られ，上部にはわずかにつぶれが観察される。黒曜石製である。

管　　玉（第47図５，６　図版44）　５は長さ1.3㎝，径0.7㎝，６は長さ2.6㎝，径0.5㎝を測る。両者とも上下２方向から穿孔され，５は中程で，６は上から３分の１の位置で孔のずれが認め

られる。全面ていねいに研磨されているが，摩滅のための研磨痕は観察できない。ともに緑色凝灰岩製である。

有孔円板（第47図7　図版44）　全形を窺うことはできないが，半形2.8cm，厚さ0.4cm程度のものと思われる。周縁はていねいに研磨され平坦面をなすが，表裏面はほとんど加工されていない。孔は二方向からあけられている。安山岩製である。

石包丁状石製品（第47図8　図版44）　平面形三角形を呈す板状の石製品で長さ8.9cm，幅3.1cmを測る。上下両端には擦り切り手法によると思われる浅い溝状の凹みがみられる。また一面の両端に2ヶ所，反対面の中央に2ヶ所の計4ヶ所に径0.1cmの浅い円形の凹みがみられる。両面とも比較的ていねいに研磨され細かい擦痕が観察される。緑色凝灰岩製である。

楔形石器（第48図1～10　図版44）　本遺跡出土の楔形石器は1，10のように小型のものもあるが，大半はやや大型で厚いものである。石材は図示できなかったものも含め黒曜石製がほとんどで，安山岩製は1のみである。いずれも上下端につぶれ，階段状の剥離がみられるが，9は中程で折れておりつぶれは下端のみにみられる。なお1，5，6の一部には自然面が残り6には截断面がみられる。

剥　　片（第48図11・第49図1～7　図版45）　基本的に縦長の剥片を使用しているが，背面と腹面の剥離方向が異なるものがほとんどである。第49図2，5は背面，腹面とも同一方向の剥離，同図3は背面に上下2方向の剥離面がみられるが，これらが一定の剥片剥離技術によるものであるかは判断し難い。

第48図11は長さ2.6cmの二次加工のある小型の剥片である。素材の全周縁を比較的ていねいに加工しており，断面形は台形を呈している。

第49図2，4，5，6は縦長の剥片を素材にしたもので，側縁に二次加工，刃こぼれ様の使用痕がみられる。また4の側縁，5の下端にはつぶれがみられる。なお5，6には自然面がよく残っている。

これら第49図3，4が安山岩製である以外は黒曜石製である。

石　　核（第49図8　図版45）　長さ4.5cm，幅3.7cmの残核で自然面が大きく残る。一面の上部に階段状の細かい剥離が多くみられ，この方向からの打撃を主としていたと思われるが一定方向から規則的に剥片をとったものではなかろう。周縁には細かい剥離がみられるが，二次加工によるものかローリングによるものかは不明である。

図示しなかった石核も8と同様なものが多く，規則的に剥片を取ったと考えられるものはなかった。いずれも黒曜石製である。

板状石製品（第49図9・第50図1～4・第51図1～3　図版45）　平面形が方形または方形状を

呈す板状の石製品である。いずれも緑色凝灰岩製で一側縁または二側縁に施溝がみられる。第49図9・第50図1，2・第51図1，3の一面，第51図2の両面には研磨痕が観察できるが，第50図3，4には両面とも研磨痕は観察できない。

これらは板状に加工された石核に施溝した後，ここを打点に剝ぎ取ったもので管玉の未製品と思われる。これらに研磨，施溝をくり返し加えて棒状にしさらに研磨，穿孔して管玉成品とする予定であったと予想される。本遺跡出土の板状石製品は荒割段階の未成品と思われる。

石斧未成品（第51図4　図版46）　長さ9.9cm，幅4.5cmを測り，平面形長方形を呈す。打点は表裏とも上部で両面とも大きな剝離面が残る。縁片には二次加工が施され，上下端，一側縁は平坦面をなす。安山岩製である。

小　　結

石器・石製品はほとんどが第9層から出土しており，いずれも摩滅が著しい。土器の項で述べたように第9層からは縄文土器，弥生土器，土師器などが混在していることから，出土した石器・石製品のすべてが同時期であったとは言い難い。

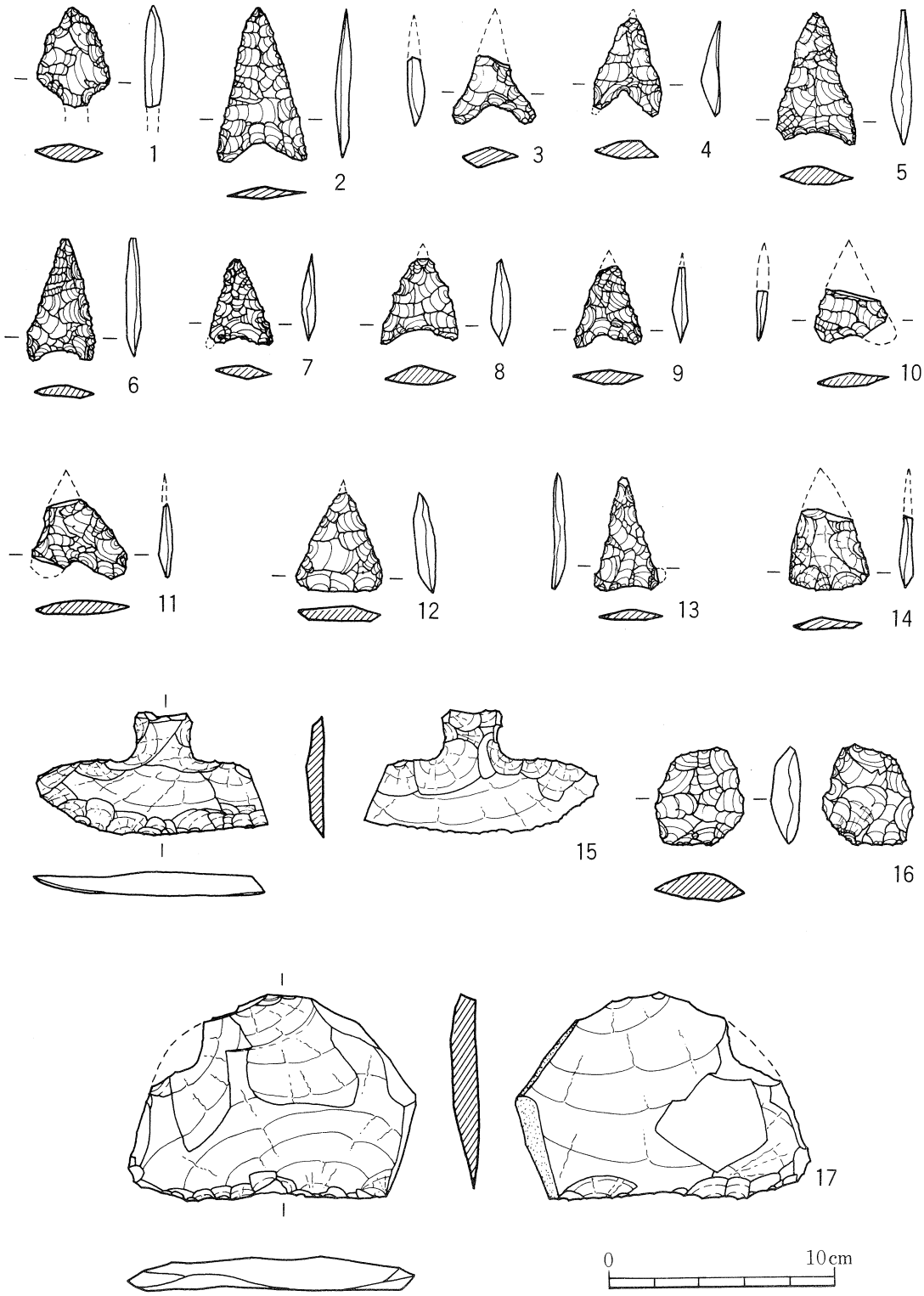
今回出土した石器・石製品は黒曜石製のものがほとんどで他は安山岩製，緑色凝灰岩製が少数みられるにすぎない。黒曜石製の剝片，石核，楔形石器は図示できなかったものも含め比較的大型のものが多いが，これは原産地である隠岐島から比較的近いことに起因するであろうか(1)。

今回の調査では，弥生土器が大量に出土したにもかかわらず大陸系の磨製石器類は出土していない。前回の調査でも石包丁，石鑿などわずか8点出土したにすぎず(2)，本遺跡では土器の量に比して大陸系磨製石器類が少ないという特徴が窺える。ただ，2度の発掘調査ではいずれも二次堆積地を調査しているため，今後集落の中心部が調査されれば大陸系磨製石器が出土する可能性も充分あろう。また木製品の加工痕からみても磨製の石製工具が皆無であるとは考えられない(3)。本遺跡で出土した木製品の性格を検討する上からもこれらの石器類の出土が期待されるところである。

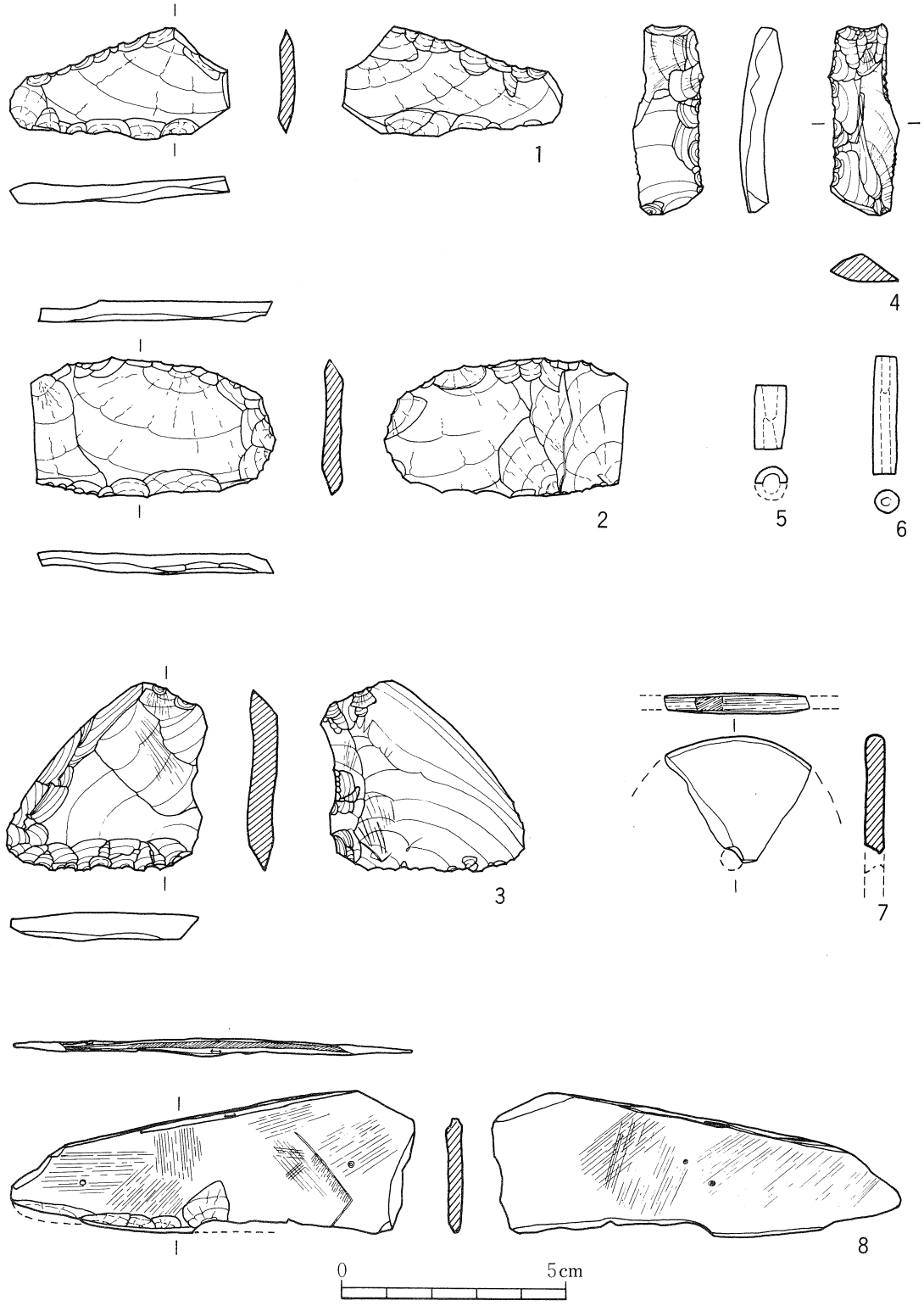
註(1)　ケイ光x線分析による原産地推定では，中海・宍道湖周辺の遺跡から出土した黒曜石はすべて隠岐島久見産であるという。平野芳英「隠岐島産の黒曜石」『山陰考古学の諸問題』昭和61年　山本清先生喜寿記念論集刊行会

(2)　島根県教育委員会『タテチョウ遺跡発掘調査報告書』－Ⅰ－昭和54年

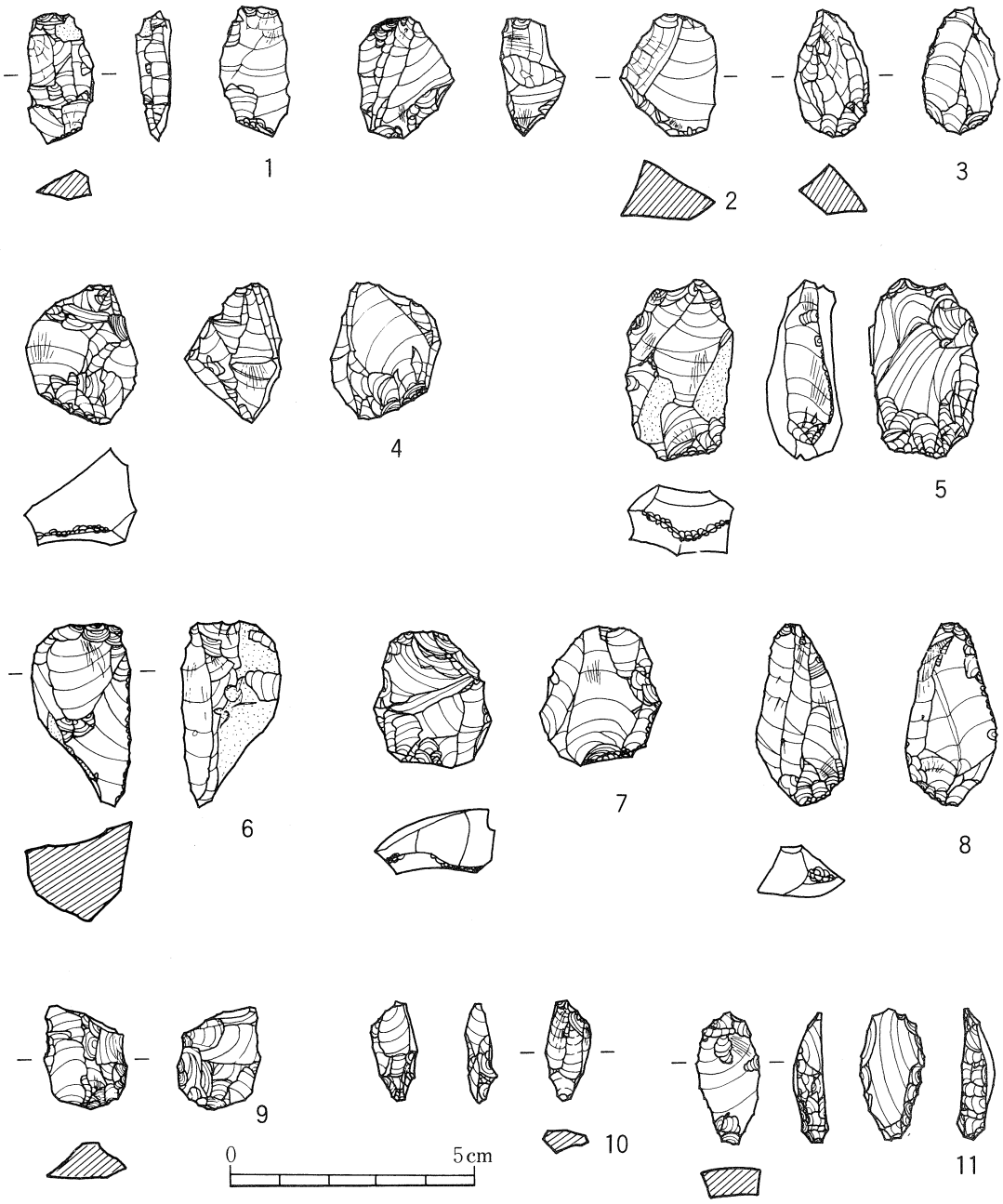
(3)　町田　章「木器の製作と役割」『日本考古学を学ぶ』(2)昭和54年　有斐閣



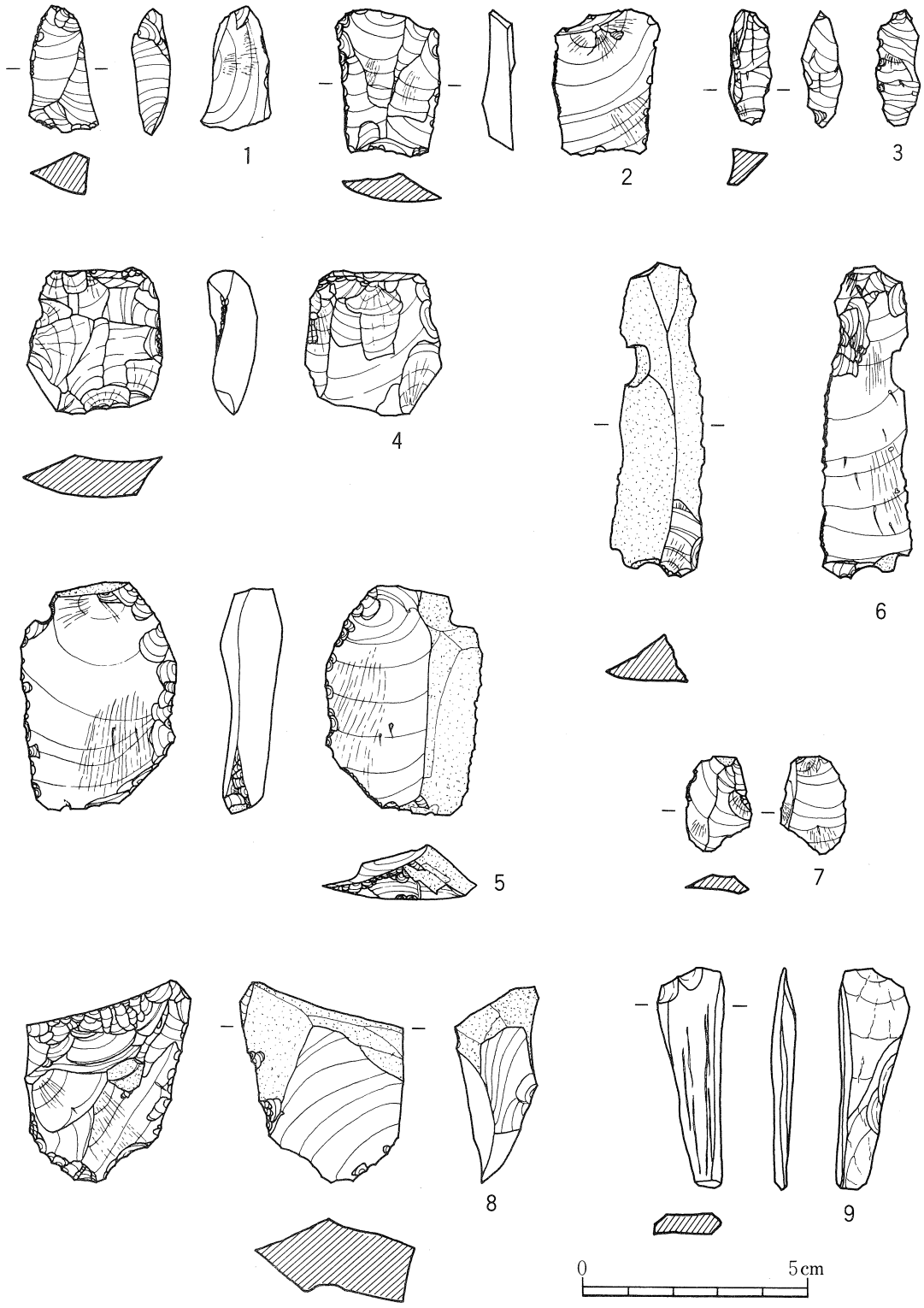
第46図　石器実測図(1) 7:10



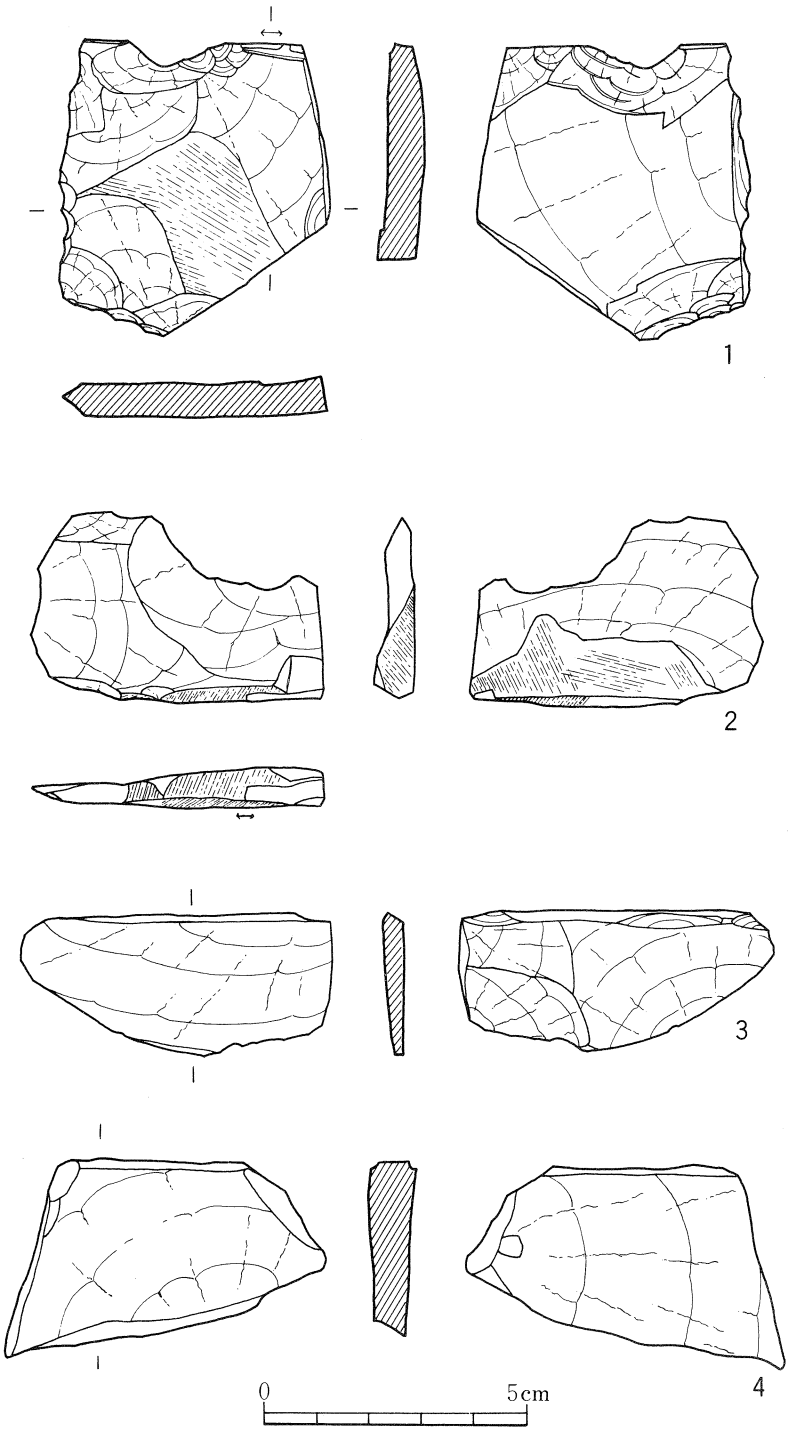
第47図　石器実測図(2)7:10



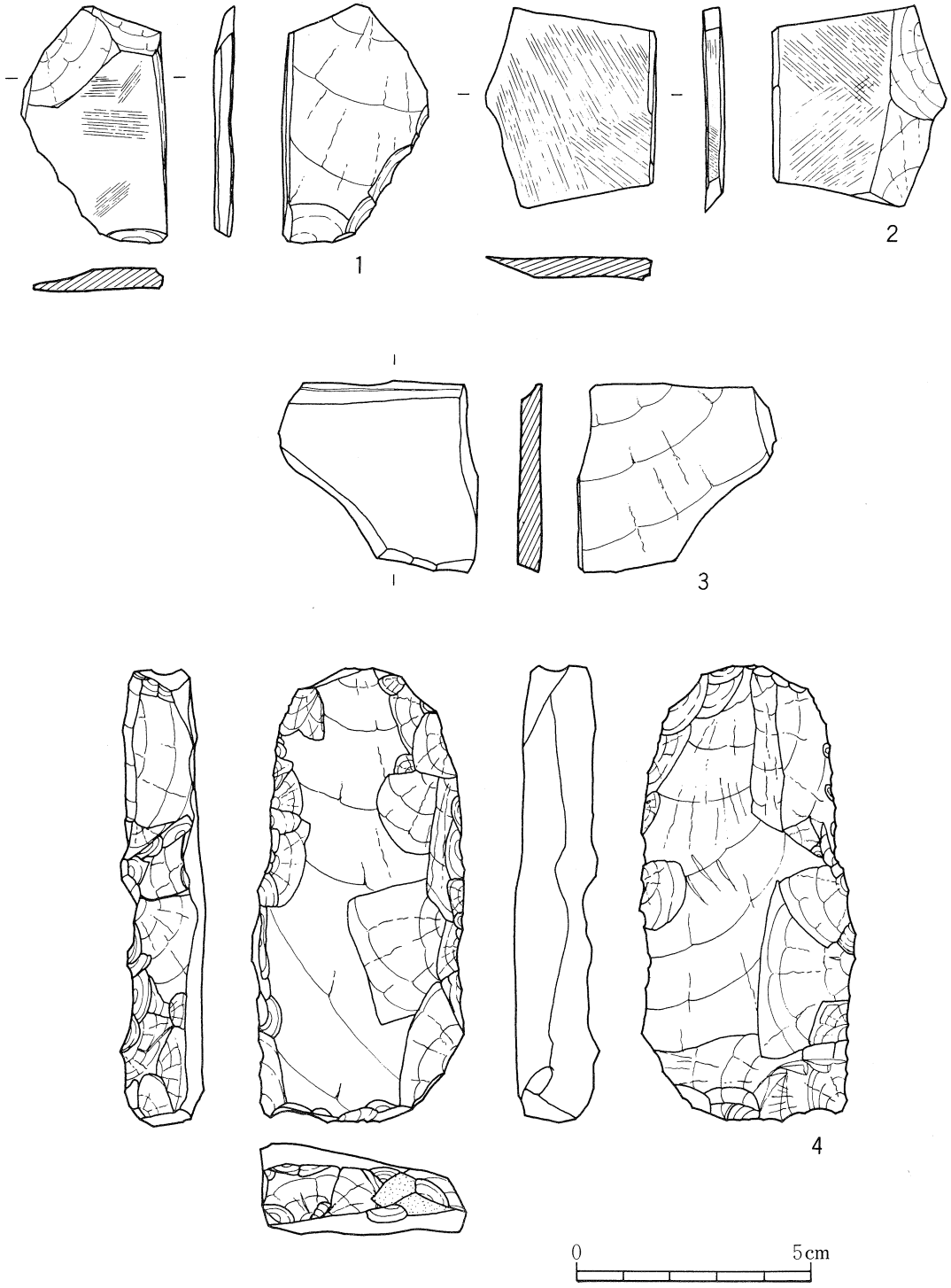
第48図　石器実測図(3) 7:10



第49図　石器実測図(4) 7:10



第50図　石器実測図(5)7:10



第51図　石器実測図(6)7:10

石　器　一　覧　表

器　種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	石　材	最大長(cm)	最大幅(cm)	重量(g)	備　考
石　鏃	46－1	43	N8E4a	9	黒曜石	2.2	1.6	1.40	茎部欠損
石　鏃	46－2	43	N9E4b	9	黒曜石	3.9	2.0	1.47	
石　鏃	46－3	43	N9E4c	9	黒曜石	1.5	1.9	0.65	先端欠損
石　鏃	46－4	43	N9E3a	9	黒曜石	2.2	1.5	0.80	先端欠損
石　鏃	46－5	43	N8E4	9	黒曜石	2.9	1.8	1.50	
石　鏃	46－6	43	N9E3a	9	黒曜石	2.7	1.5	0.86	
石　鏃	46－7	43	N9E4c	9	黒曜石	1.9	1.4	0.60	脚部欠損
石　鏃	46－8	43	N9E3a	9	黒曜石	2.0	1.7	0.90	先端欠損
石　鏃	46－9	43	N9E3a	9	黒曜石	1.7	1.6	0.66	先端欠損
石　鏃	46－10		N9E3a	9	黒曜石	1.2	1.6	0.55	先端欠損
石　鏃	46－11	43	N9E3a	9	黒曜石	1.7	2.1	1.09	先端欠損
石　鏃	46－12	43	N9E3a	9	黒曜石	2.2	1.9	1.15	先端欠損
石　鏃	46－13	43	N8E3b		黒曜石	2.5	1.4	0.75	先端欠損
石　鏃	46－14	43	N9E4d		安山岩	1.8	1.7	1.02	
石　匙	46－15	43			安山岩	5.2	2.7	6.31	縁辺，舌部を加工，主要剝離面残る
スクレーパー	46－16	43	N9E3	9	黒曜石	2.1	1.9	2.75	縁辺を加工し刃部とする
スクレーパー	46－17	43	N9E3a	9	安山岩	6.4	4.5	23.90	下端のみ加工
スクレーパー	47－1	43	N9E3a	9	安山岩	4.8	2.4	5.70	上，下端のみ加工
スクレーパー	47－2	43	N9E3ad	9	安山岩	5.5	3.1	11.45	上，下端のみ加工
スクレーパー	47－3	43	N9E3a	9	黒曜石	4.2	4.3	15.02	刃部のみ加工
スクレーパー	47－4	43	N9E3a	9	黒曜石	4.2	1.5	4.38	側縁を加工
管　玉	47－5	44	N9E3a	9	安山岩	1.3	0.7	0.57	
管　玉	47－6	44	N9E3a	9	安山岩	2.6	0.5	1.02	
有孔円板	47－7	44	N9E3b	9	安山岩	半径 2.8		4.81	
包丁形石製品	47－8	44	N9E4c	9	緑色凝灰岩	8.9	3.1	33.48	上端には擦切りによる溝 全面に研磨痕
楔形石器	48－1	44	N9E3a	9	チャート	2.6	1.3	2.29	わずかに自然面残る
楔形石器	48－2	44	N9E3a	9	黒曜石	2.4	1.9	4.15	
楔形石器	48－3	44	N9E3a	9	黒曜石	2.5	1.5	3.05	
楔形石器	48－4	44	N9E4c	9	黒曜石	2.8	2.2	8.88	
楔形石器	48－5	44	N8E5d	9	黒曜石	3.7	2.1	12.67	

器　種	挿図番号	図版番号	出土地点	層位	石　材	最大長(cm)	最大幅(cm)	重量(g)	備　考
楔形石器	48－6	44	N9E4c	9	黒曜石	3.7	2.0	11.40	自然面残る
楔形石器	48－7	44	N9E3a	9	黒曜石	2.8	2.4	7.80	
楔形石器	48－8	44	N8E5d	9	黒曜石	3.7	1.8	5.51	
楔形石器	48－9	44	N9E3a	9	黒曜石	2.1	1.7	2.36	
楔形石器	48－10	44	N8E3b		黒曜石	2.0	0.9	0.93	
剝片	48－11	44	N9E3a	9	黒曜石	2.6	1.3	2.22	側縁を加工
剝片	49－1	45	N9E3a	9	黒曜石	2.7	1.5	2.13	
剝片	49－2	45	N9E4b	9	黒曜石	3.2	2.2	4.73	側縁に使用痕
剝片	49－3	45	N9E3a	9	黒曜石	2.5	0.9	1.72	
剝片	49－4	45	N9E3d	9	安山岩	3.2	3.0	12.65	
剝片	49－5	45	N9E3a	9	黒曜石	5.1	3.4	18.05	自然面残る
剝片	49－6	45	N9E3a	9	黒曜石	6.9	1.8	10.91	一面に自然面残る 側面に使用痕
剝片	49－7		N9E3a	9	黒曜石	2.1	1.5	1.05	一部に自然面残る
石核	49－8	45	N9E4	9	黒曜石	4.4	3.6	21.75	自然面残る
板状石製品	49－9	45	N9E4b	9	緑色凝灰岩	4.8	1.5	3.77	一側縁に擦切りによる溝 一面に研磨痕
板状石製品	50－1	45	N9E4	9	緑色凝灰岩	5.6	5.0	29.20	一側縁に擦切りによる溝 一部に研磨痕
板状石製品	50－2	45	N9E4c	9	緑色凝灰岩	5.5	3.6	12.52	一側縁に擦切りによる溝 一部に研磨痕
板状石製品	50－3	45	N8E4a	9	緑色凝灰岩	5.9	2.6	8.40	一側縁に擦切りによる溝
板状石製品	50－4	45	N9E4	9	緑色凝灰岩	5.7	3.6	24.05	一側縁に擦切りによる溝
板状石製品	51－1	45	N9E3a	9	緑色凝灰岩	5.0	3.1	8.65	一側縁に擦切りによる溝 一面に研磨痕
板状石製品	51－2	45	N7E3a	10	緑色凝灰岩	4.2	3.6	9.95	一側縁に擦切りによる溝 全面に研磨痕
板状石製品	51－3	45	N8E4a	9	緑色凝灰岩	4.2	4.0	12.46	一側縁に擦切りによる溝
石器未成品	51－4	46	N9E3a	9	安山岩	9.7	4.5	10.95	縁辺，下端を加工

5．土　製　品

分銅形土製品，円板状土製品，有孔円板，土錘などが出土している。

分銅形土製品（第52図１　図版46）　第９層から１点出土している。下部は欠損しているが現存長6.4cm，最大幅８cm，厚さ1.5cmを測る。一面には側縁に沿って棒状工具による刺突文が施されている。胎土には小砂粒が含まれ，焼成は良好で色調は黄灰色を呈す。重量は55ｇである。

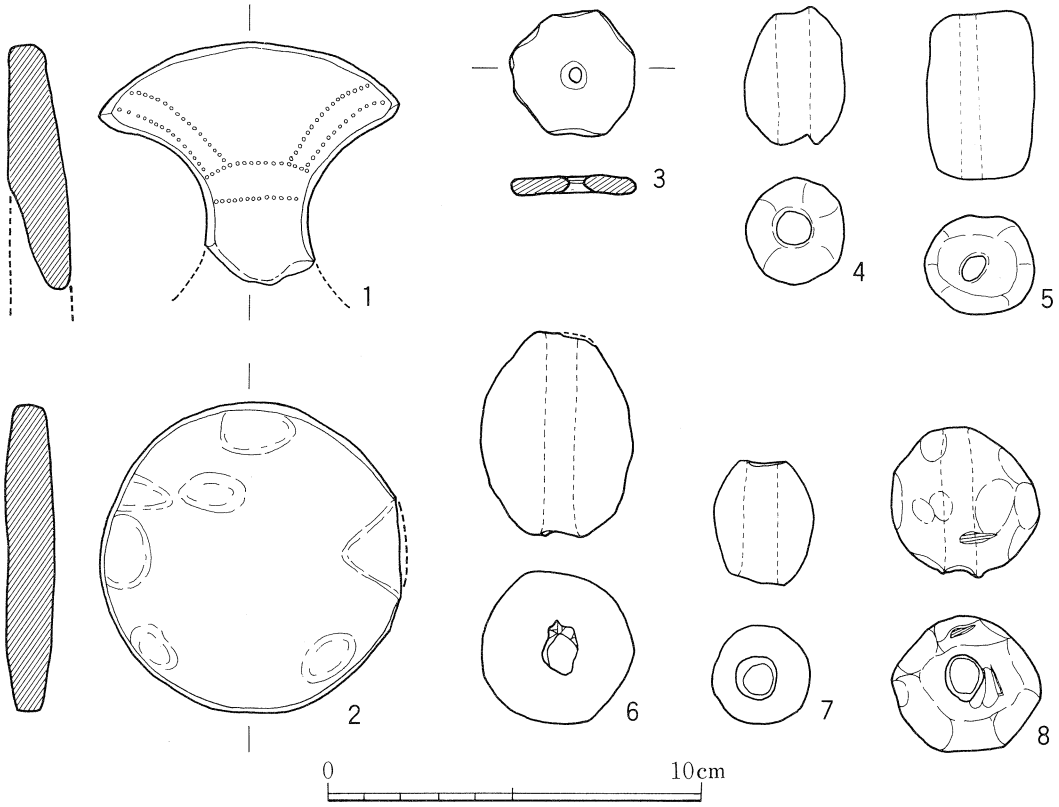
円板状土製品（第52図２　図版46）　径８cm，厚さ1.2cmを測り，平面形はほぼ正円形を呈す。両面とも指頭による押圧痕が良く残っており，一部にナデ調整痕も残る。胎土には細砂粒が含まれ，焼成はやや不良で暗灰色を呈している。重量は90ｇ。

有孔円板（第52図３）　第９層から１点出土している。径3.2cm，厚さ0.4cm，孔径0.8cmを測り，重量は5.6ｇである。土器の胴部を転用したものと思われ断面形は凸レンズ状を呈している。摩滅が著しく調整は不明瞭だが，表面にはハケ目が残り，裏面はヘラ削り調整は施されていない。胎土には細砂粒が含まれ，焼成は良好で灰褐色を呈している。胎土，調整，厚さなどから概ね弥生時代中期ごろのものと思われる。

土　　錘（第52図４～８　図版46）　正面形が紡錘形（同図４，６，７），円柱形（同図５），球形（同図８）など形態は様々である。整形はいずれも手捏ねによるものと思われ，表面には指頭による押圧痕がよく残っている。

土　錘　一　覧　表

挿図番号	図版番号	出土地点	層位	長さ（cm）	径（cm）	重量（ｇ）	その他
52－4	46	N４E３	10	3.4	2.6	23.0	胎土　砂粒多く含む，焼成　良好 色調　暗灰褐色
52－5	46	N４E３	10	4.4	2.9	35.5	胎土　微砂粒含む，焼成　やや良 色調　暗灰褐色
52－6	46	N８E３	11上	5.4	4.1	80.0	胎土　１㎜前後の砂粒多少含む微密 焼成　良好，色調　全体の約3/4が黒褐色（焼成時のものと思われる）残り1/4は灰褐色
52－7	46	N９E３	9	3.3	2.6	20.0	胎土　砂粒はほとんど見られず緻密 焼成　良好，色調　黒褐色
52－8	46	N８E４	9	3.9	4.0	40.0	胎土　密，焼成　良好，色調　褐色



第52図　土製品実測図（1：2）

6．木　製　品

木製品は農耕具，容器，杭，用途不明木製品などが出土している。このうち農耕具の出土が最も多く57点を数え，未成品の出土も多い。また成品は完形のものがほとんど出土していないのに対し，未成品は残存状態の良好なものが多く完形も比較的多い。成品，未成品とも広鍬，丸鍬が圧倒的に多く他の農耕具は少ない。用途不明木製品は組み合わせの用具の部材のものも多いと思われるが，各々の機能を部分から判断することは困難であるため，形態から一応の分類を試み仮称を与えた。農耕具については，基本的には図上で左側にある平面図をＡ面，右側にある図をＢ面とする。

広　　鍬〔成品〕（第53～55図・第56図１～５　図版47～50）　総数18点出土しており，木取りは全て柾目である。これらは舟形隆起，ゲタなどから，大きく２つに分類できる。

Ｉ類（第53図・第54図１，２　図版47～49，51）　これは舟形隆起とゲタを持つもので平面形は長方形を呈す。頭部の抉りの有無によってI_1，I_2類とに分けられる。

I_1類（第53図・第54図　図版47，48）　これは頭部に抉りが無いもので，９点出土している。全長23.4～27.0cm，幅21.9～22.2cmを測り，平面形は長方形を呈している。舟形隆起の平面形は上端が丸く下端は尖る形のもの（第53図１，２，３）と，上端をつまみ上げた形で下端は尖る形のもの（第54図１）とがある。第53図３は舟形隆起の高さが他と比べて0.3～1.1cm程低い。隆起の取り付け位置は，頭部端から平均1.5cm下側に位置するものがほとんどだが，第53図２のように頭部端に接しているものもある。

これらの頭部側縁には第51図１～３のように隅丸形もしくは直角になるものもあるが，「Ｌ」字形（第54図２）または「Ｖ」字形（第54図６）の刻目を入れるものもある。また，第52図３の頭部側縁には径0.6cmの円形の孔が穿たれている（図版51）。

I_2類（第55図・第56図１　図版48，49）　頭部中央に抉りがあるもので，５点出土している。平面形は長方形を呈し，全長23.7～25.0cm，幅17.5～22.0cmを測る。舟形隆起の平面形は上端が丸く下端は尖る形のものである。

頭部側縁はいずれも「Ｖ」字形の刻目が入れられている。第53図１は１側縁に２ヶ所，同図４，54図１は１側縁に１ヶ所に刻目がみられ，第53図２の側縁には頭部から約5.4cmの位置に径0.6cmの円形の孔が穿たれている。これはＡ，Ｂ両面から穿孔されている。

頭部の抉りはレンズ状を呈し幅の広いもの（第55図１），レンズ状を呈すが幅の狭いもの（第55図２），角張っているもの（第55図４）等，いろいろである。

以上の他に舟形隆起のみ残存する例があるが，I_1，I_2類のいずれかであるかは不明である（第56図２）。

Ⅱ類（第56図３～５　図版50）　柄孔部周辺が舟形隆起の形態をなさず，山形にゆるやかに隆起させるだけのものである。Ｂ面もほぼ平らでゲタを削り出さないものである。３点出土している。

３はほぼ完形で，全長24.3㎝，幅約16.6㎝を削り，平面形はやや中ふくらみをする隅丸長方形を呈す。柄孔は一辺4.2㎝の隅丸方形である。刃部はＡ，Ｂ両面から削り込んでおり，先端の断面形は鋭く尖っている。

４は，刃部が欠損しており，残存長18.9㎝，残存幅18.6㎝で頭部は隅丸長方形である。柄孔部周辺を急に肥厚させている。柄孔は楕円形で長径3.0㎝，短径2.4㎝である。

５は残存長21.0㎝，残存幅13.9㎝を測り，平面形は隅丸長方形を呈す。頭部端から柄孔部までは急に肥厚させ，柄孔部から刃部に向かっては徐々に厚さを薄くしている。柄孔はほぼ正円で直径3.0㎝である。

狭　　鍬（第56図６・７　図版50）　２点出土しており，木取りは全て柾目取りである。

ともに平面形は短冊形を呈し，Ｂ面にはゲタが造り出されている。法量は６が全長27.6㎝，幅7.1㎝，７が全長24.4㎝，幅7.8㎝を測る。６はＡ面に上端が丸く下端が尖る形の舟形隆起があるが，７にはみられない。６の側縁は加工がやや雑であるところから，広鍬Ⅰ$_1$類の欠損品を再加工したものと思われる。また，７の頭部側縁には「Ｖ」字形の刻目が施され，広鍬Ⅰ類と似た特徴を持つ。身は６は比較的厚いが，７は厚さ0.6㎝前後と薄いつくりである。

広　　鍬（未成品）（第57図～第60図　図版52～55）　総数11点出土しており，木取りは全て柾目取りである。舟形隆起の有無及び平面形によってⅠ～Ⅳ類と４分類した。

Ⅰ類（第57・58図，第59図１　図版52～54）　６点出土している。Ａ面に舟形隆起を持つもので，平面形は４辺とも直線で構成される縦長の長方形である。

第57図１，２は，２個体分（図上で上の固体をａ，下の固体をｂとする）が連結しているもので，原形段階(1)の未製品である。両個体とも同一方向を向いているため，刃部と頭部がつながる様になる。１は全長52.8㎝，幅20.5㎝でミカン割り材を削り込んで舟形隆起をつくり出している。２は全長53.2㎝，幅23.5㎝で身に加工を加えながら切断用の施溝を行なっている。この溝の位置から各個体の大きさを測ると，ａは全長25.3㎝，幅22.9㎝，ｂは全長27.8㎝，幅23.5㎝である。

第58図，第59図１は第57図１，２を切断した整形段階の未成品である。これらは全長26.6㎝～29.1㎝，幅17.7㎝～24.4㎝を測る。法量は比較的まとまりがあるものの，第58図１は幅が17.7㎝と，他と比べ幅が狭い。舟形隆起の平面形は第58図１，３が三角形，第58図２，第59図１が紡錘形を呈す。舟形隆起は頭部寄りのほぼ中央に位置するものが多いが，第59図１は左に大きく片寄っている。いずれも頭部および刃部には切断時の刃物痕が明瞭に残り第58図３のＢ面上部にはゲタづくりのための加工痕がみられる。また，第58図３のＡ面右側には樹皮が残っている。

Ⅱ類（第59図２，３　図版54）　２点出土している。舟形隆起を持つもので，平面形は馬蹄形をしているものである。

第59図２は全長28.8cm，幅17.4cmで，頭部を丸くつくり，舟形隆起も丸く削り出している。頭部・刃部には切断時の刃痕が残っている。３は全長24.5cm，幅約16.7cmで側縁は内湾しながら刃部にいたる。舟形隆起は頭部端に接する位置にある。

Ⅲ類（第60図１　図版55）　１点出土している。舟形隆起を持つもので，平面形は頭部がわずかに曲線を描くように作られ，両側縁は双曲線状に湾曲しながら刃部につながる。刃部も丸味を持っている。第58図１は全長約31.7cm，幅約27.4cm，刃部の復元値は約29.0cmで頭部幅に比べて刃部幅はやや広がると思われる。舟形隆起は紡錘形である。頭部，刃部には切断時の刃痕はみられず，Ａ面，Ｂ面ともていねいに調整が施されている。

Ⅳ類（第60図２，３　図版55）　２点出土している。明確な舟形隆起を持たないもので，平面形は縦長の長方形である。第58図２は全長36.4cm，幅20.6cm，３は全長24.9cm，幅17.9cmを測る。２の頭部は丸味を帯びている。ともに頭部，刃部は切断時の刃物痕が明瞭に残るが，２はＢ面のみに見られる。３のＡ面には頭部端から約8.1cmの所に縦6.4cm，横3.4cmの楕円形状の平面をもち，この部分を中心にゆるやかに隆起している。３は頭部端から3.2cmの間が斜めに加工されている。

丸　　鏃〔成品〕（第61図・第62図１，２　図版56）　総数６点出土している。完形品はなく，頭部か刃部のいずれかが欠損しているため，全形が窺えるものは少ない。木取りは全て柾目である。

比較的全形を窺えるものは第61図１で，平面形は，頭部は直線的で刃部は扁円形を呈すると思われる。Ａ面の柄孔を頂点として山形に隆起させており，Ｂ面はそれに合わせて窪めている。

第61図１，２は頭部が残存しており，１は残存長20.8cm，頭部幅18.9cmで，２は残存長12.8cm，頭部幅22.0cmである。頭部端は肥厚させ先端は斜めに加工している。そのため，裏側の頭部端から１は0.9cm，２は0.3cmの所に稜ができている。面の柄孔部に着柄用と思われる溝が施されており，柄孔の上側から頭部端に向けて逆「ハ」の字状に削り込まれている。その法量は，１は柄孔側の幅1.5cm，東部側の幅3.7cm，長さ2.6cm，深さ0.8cm，２は柄孔側の残存幅1.7cm，頭部側の幅2.0cm，長さ1.8cm，深さ0.5cmである。

同図３，４は刃部が残存している。３は残存長17.0cm，残存幅22.1cmで，側辺と刃部との境はやや角ばっている。４は残存長16.3cm，残存幅32.9cmで，側辺と刃部は丸くつながる。

第60図１は柄孔部から刃部にかけて，同図２は刃部の小片であるが，小片であるため全長は窺うことができない。

丸　　鏃〔未成品〕（第62図３・第63図～第65図　図版56～59）　総数９点出土しており，木取りは全て柾目である。隆起部の高さによって，Ⅰ，Ⅱ類の２つに分類した。Ⅰ類は平均4.2cm，

Ⅱ類は3.1cmの高さである。

Ⅰ類（第62図3・第63図・第64図・第65図1　図版56～59）　8点出土している。全長22.7cm～27.8cm，幅29.0～31.5cmのやや小型のもの（第62図3，第63図1・3，第64図1）と，全長25.5cm～26.4cm，幅36.0～39.0cm（第62図2，第64図2・3，第65図1）とがある。いずれも頭部端から3.0cm～7.0cmの位置を頂点として隆起している。平面形は頭部と側縁が直線的で，刃部が湾曲するもののがほとんどであるが，第63図2は刃部も直線的である。また，第62図3，第64図1，2は，刃部は湾曲しているものの，全形は長方形に近いものである。第62図3，第63図1，2，第64図1，2，第65図1は側縁に切断時の刃物痕を明瞭に残している。第64図1は側縁が鰭状に張り出しており，原形段階[2]から切断された直後の未成品であろうか。また，第64図1～3，第65図1のB面はわずかながら窪んでおり，一層加工が進んだものと思われる。

Ⅱ類（第65図2　図版59）　1点出土している。

第65図2は全長25.5cm，幅28.6cmで，円の一端を切り落とした様な形を呈す。両側端に切断時の刃物痕はない。A面の頭部端から20cmの所を頂点としているが高さは低い。B面のほぼ中央部を刃部側に口が開く様に「コ」の字形に若干削り込んで窪められている。

諸　手　鍬（第66図1・2　図版60・61）　成品1点，未成品1点の計2点出土している。

1は全長35.4cm，幅11.5cmを測る成品である。舟形隆起はほぼ中央につけられ，平面形は紡錘形を呈す。身は弓なりにかなり反っている。A面の刃部近くには幅2.0～3.0cmの平坦面が見られる。

2は未成品で，全長64.1cm，幅15.4cmを測る。平面形は短冊形を呈し，側縁を内湾させ，刃部はやや丸味をもたせた形をしている。舟形隆起はほぼ中央に位置し，平坦面は砲弾形をしており，広鍬のそれに似ている。木取りは1と違い板目であるが，これは原木の湾曲部をそのまま利用した結果であろう。A面の下端には幅約8.1cmの平坦面が見られるが，これは木を割った時のそのままの面である。B面はほとんどが自然面で，加工痕は両端の刃部のみにみられる。

鍬　？（第66図3）　現存長17.7cm，幅10cmを測り，平面形は短冊形を呈している。A面の左側中央が若干盛り上がっている。下端は鑿刃状を呈し，諸手鍬の刃部の可能性もあろう。

又　　鍬（第67図1・2　図版60）　似た様な大きさのものが2点出土している。

第67図1は現存長15.8cm，現存幅11.4cm，同図2は現存長16.0cm，現存幅11.5cmを測る。ともに頭部は丸く，身の平面形は半円形を呈す。歯は復元すると5本歯と思われるが，櫛歯状の刃が2本残存するのみである。歯の間隔は1が2.7cm，2が3.2cmである。A面は柄孔部を頂部にしてわずかに隆起しているか，B面はほぼ平坦である。

えぶり状木製品（第65図3　図版61）　1点出土している。図示した平面図は裏面であり，この面をA面とする。

全長約10.5cm残存幅45.1cmの横長で平面形は短冊形を呈し，身には円形の孔が2ヶ所穿たれている。孔の位置は右側の孔が左側の孔よりやや上方に穿たれている。身はわずかに湾曲しており，下端は上端より薄くつくられている。頭部は左側端から約11.0cmの所に浅く段が付いている。刃部はほぼ直線的につけられている。これらの事から欠損部分を復元し全形を考えると，右側の孔を中心に折り返した形が原形と思われ，全幅約90.0cm，孔3個のえぶりが想定できる。これが正しいとすると，現存する右側の孔は主孔となり，その両側は支木用の孔になると思われる。

鍬状木製品（第67図4　図版62）　1点出土している。

全長24.2cm，幅8.9cmを測り，平坦面は長方形，縦断面形は不整な菱形をしている。A面の頂部はほぼ平坦であるが，B面は内湾している。刃部は鑿刃状を呈している。柄孔は縦5.1cm，横4.0cmの不整円形で，穿孔はA，B両面から行なっている。形態及び木取りがかなり特殊であることから，木臼のようなものを転用，再加工して利用した可能性も考えられる[3]。

鋤　（第67図5・6，第68図　図版60・62～64）　総数5点出土している。全て成品で，着柄方法の違いによって2つに分類できる。

Ⅰ類（第67図5・6，第68図2　図版60・62・64）　組み合せのもので3点出土している。

第67図5は全長36.8cm残存幅16.7cmの縦長の楕円形をしており，横断面は凸レンズ状をしている。身の頭部には長さ3.9cm，幅2.6cmの着柄軸があり，そのB面には端部から1.7cmの所に節状の段が削り出されている。身のほぼ中央部には孔が2つあり，A面で左の孔は長径4.7cm，短径1.0cm，右の孔は長径5.3cm，短径1.3cmで両方とも楕円形である。この2つの孔の間は約1.5cmであり，この部分はわずかに窪んでいるが，これは削り込んだものか，あるいは柄を結わえたための圧痕かは不明である。

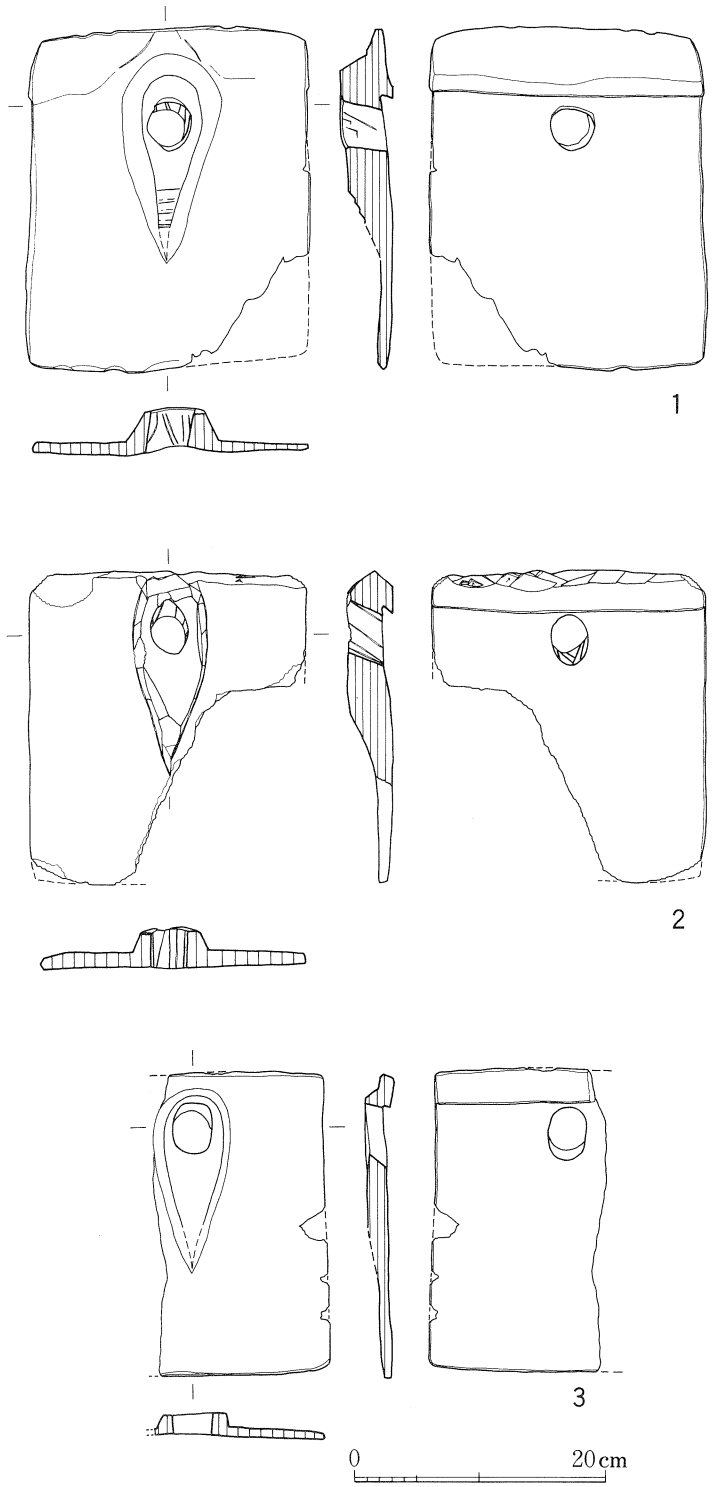
同図6は残存長25.9cm，幅17.6cmを測り，身の厚さは0.8cmと非常にうすいものである。平面形は二等辺三角形の三辺をややふくらませた様な形をしている。刃部から8.3cm前後の所に，0.5～0.7cmの円形の孔が2つあり，この間は約7.2cmある。

第68図2は全長48.1cm，幅11.8cmを測る。肩は張り，刃部は丸く終わる。着柄軸はやや長く，長さ約15.2cmを測り，更に8.5cm程身部まで延びている。その軸の断面形は隅丸方形である。着柄軸の上端は段状に加工され，それ以下はゆるやかに身と一体化する。身のA面は皿状に刳りこまれ，身下部から内部にかけて比較的強く反る。

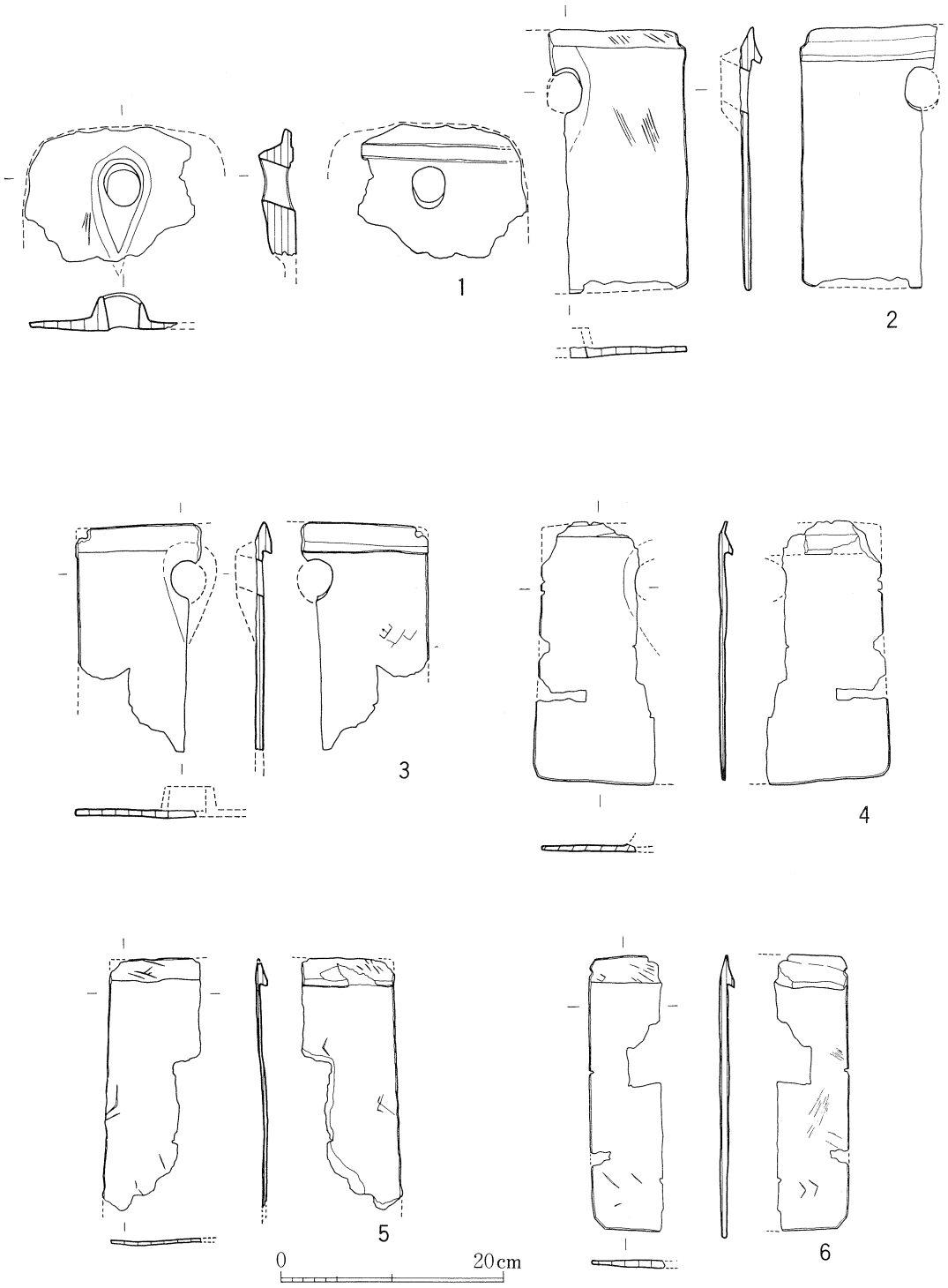
Ⅱ類（第68図1・3　図版62・64）　一木鋤で2点出土している。

1は残存長90.2cm，幅6.7cmで刃部が若干欠けるがほぼ完形である。柄は長さ79.6cmと細長く，下端に幅の狭い小さな身をつけたものである。

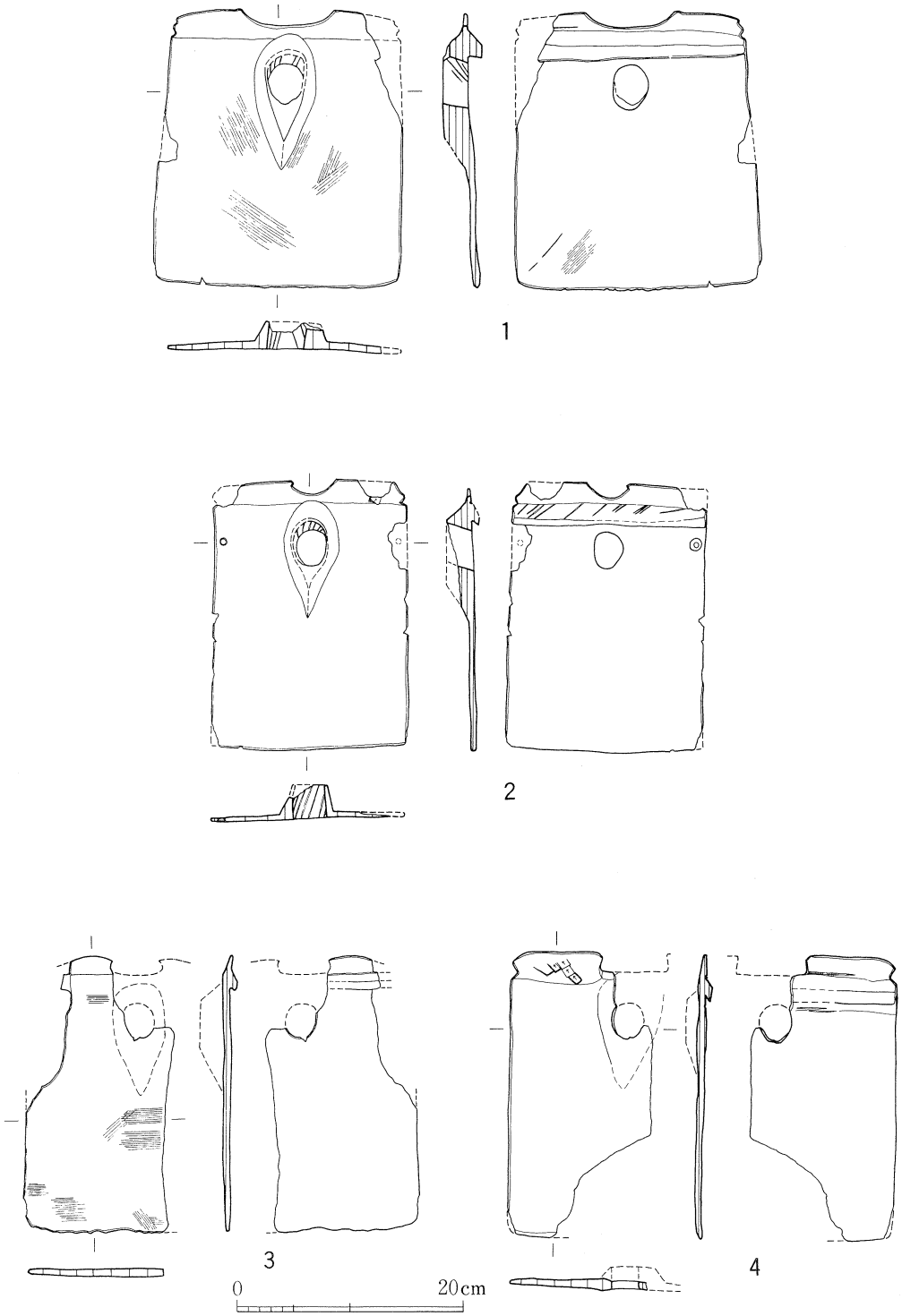
3は現存長16.6cm，幅7.6cmの小形のもので，平面形はスプーン状を呈す。柄と身の境は関状に



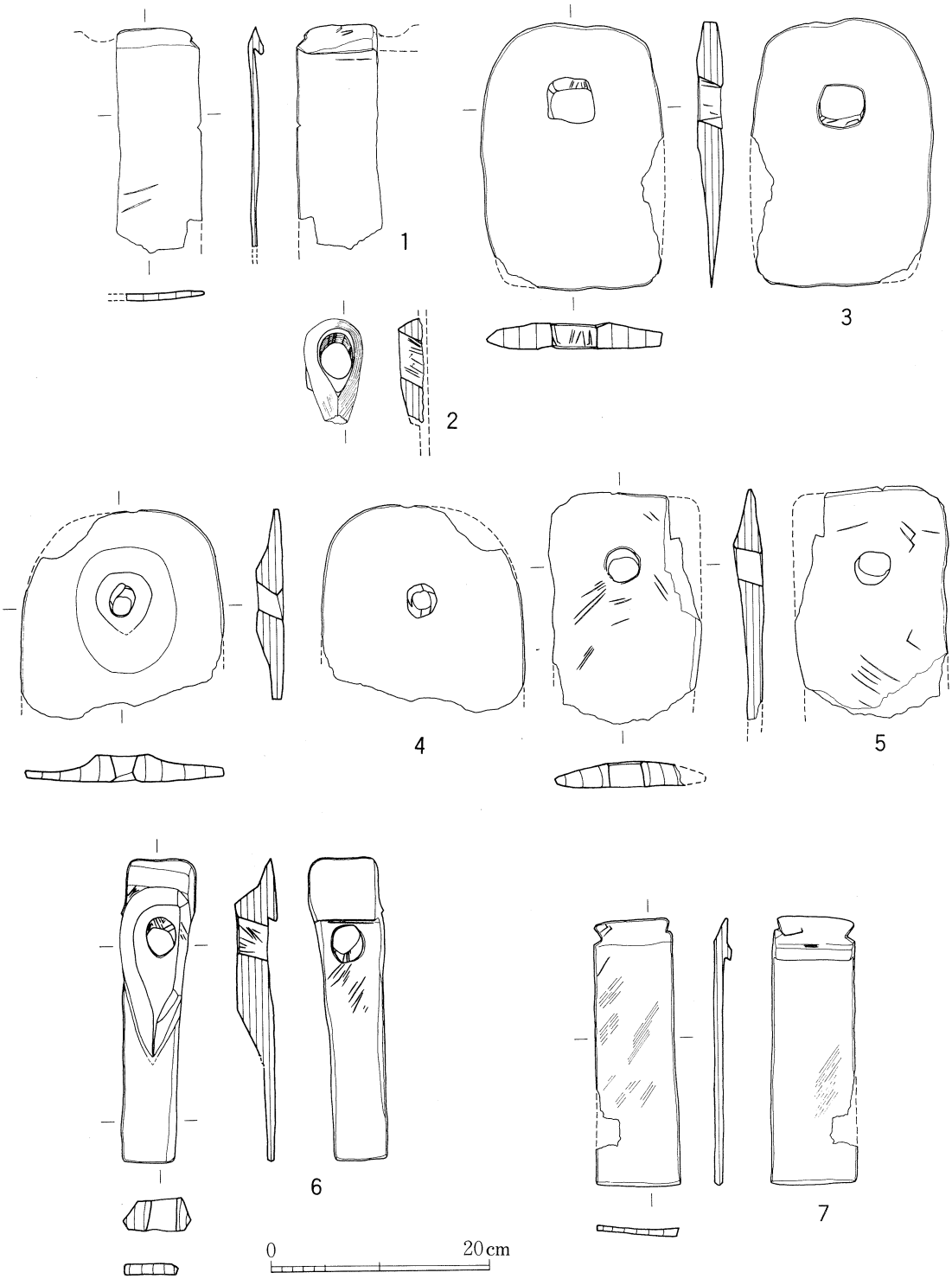
第53図　木製品実測図(1)1：6



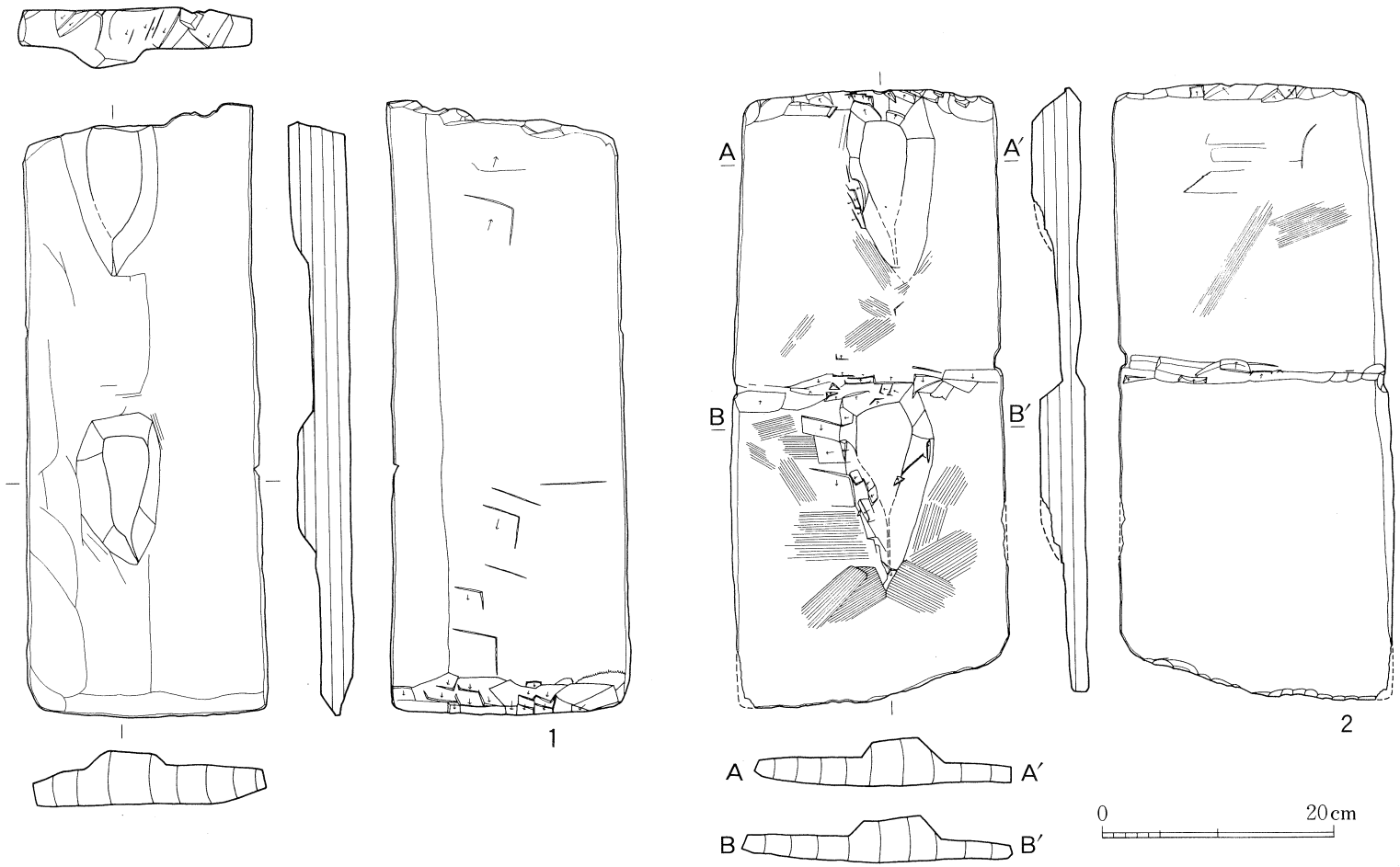
第54図　木製品実測図(2)1：6



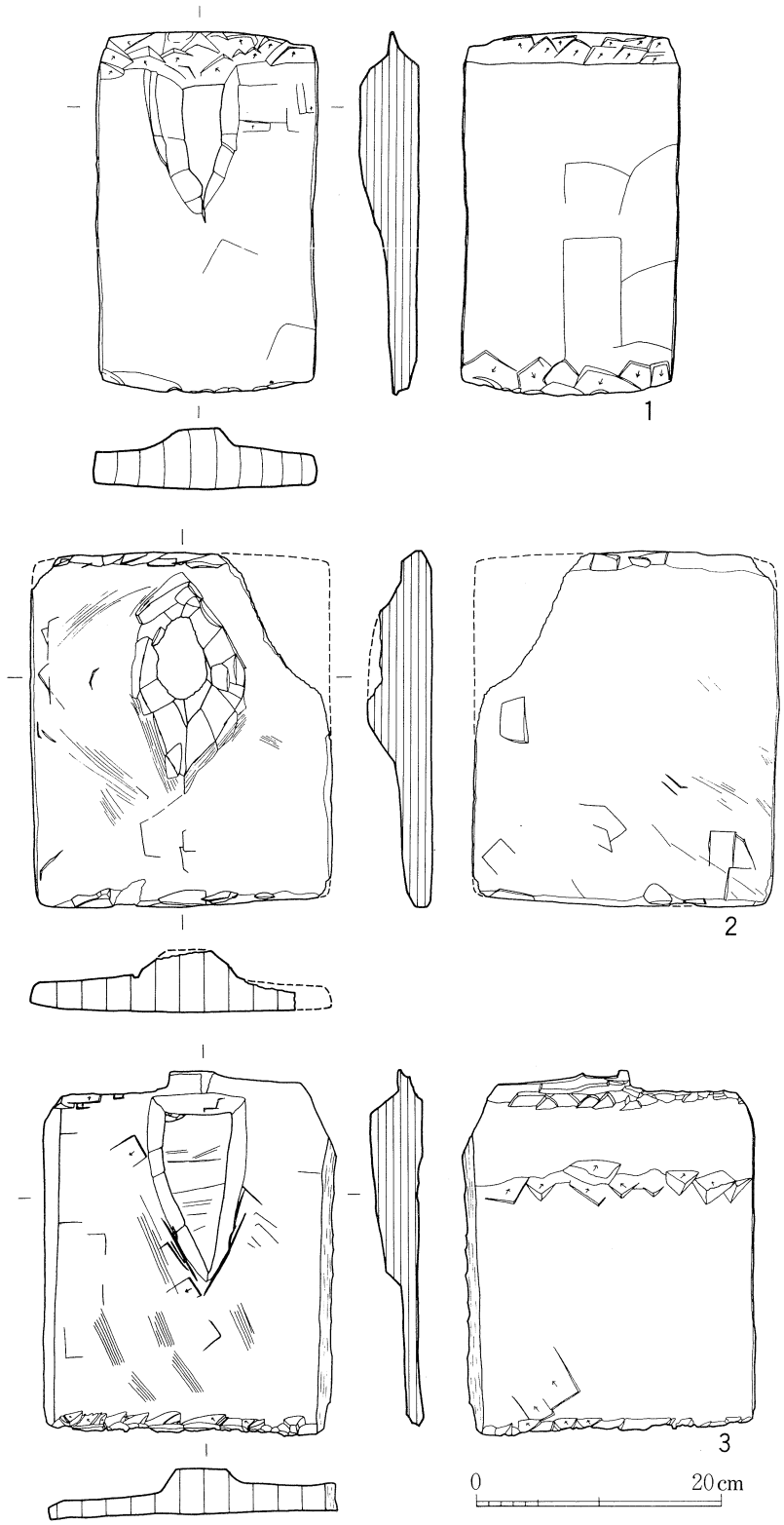
第55図　木製品実測図(3) 1：6



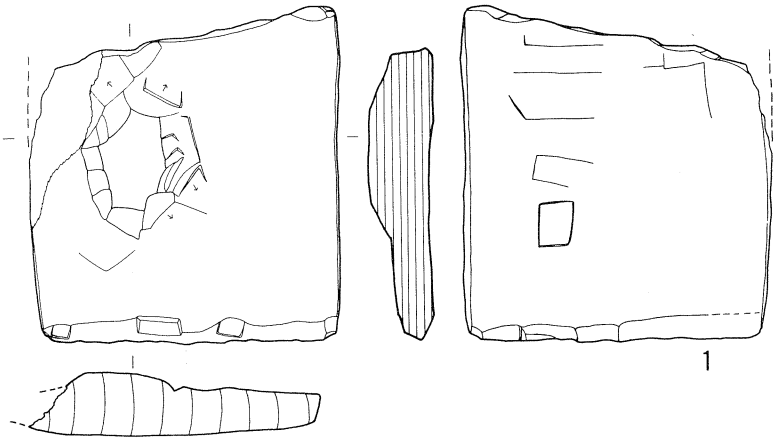
第56図　木製品実測図(4) 1：6

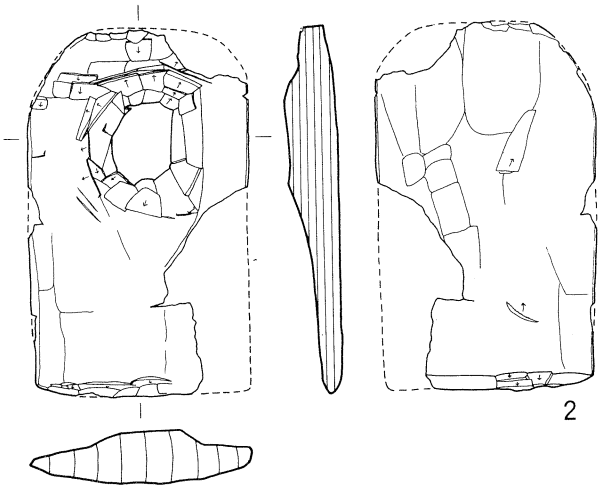


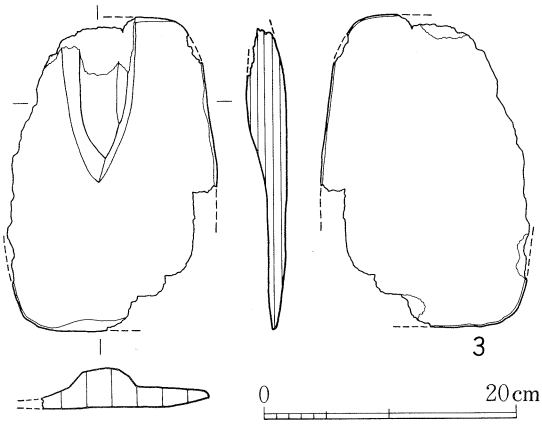
第57図　木製品実測図(5) 1:6



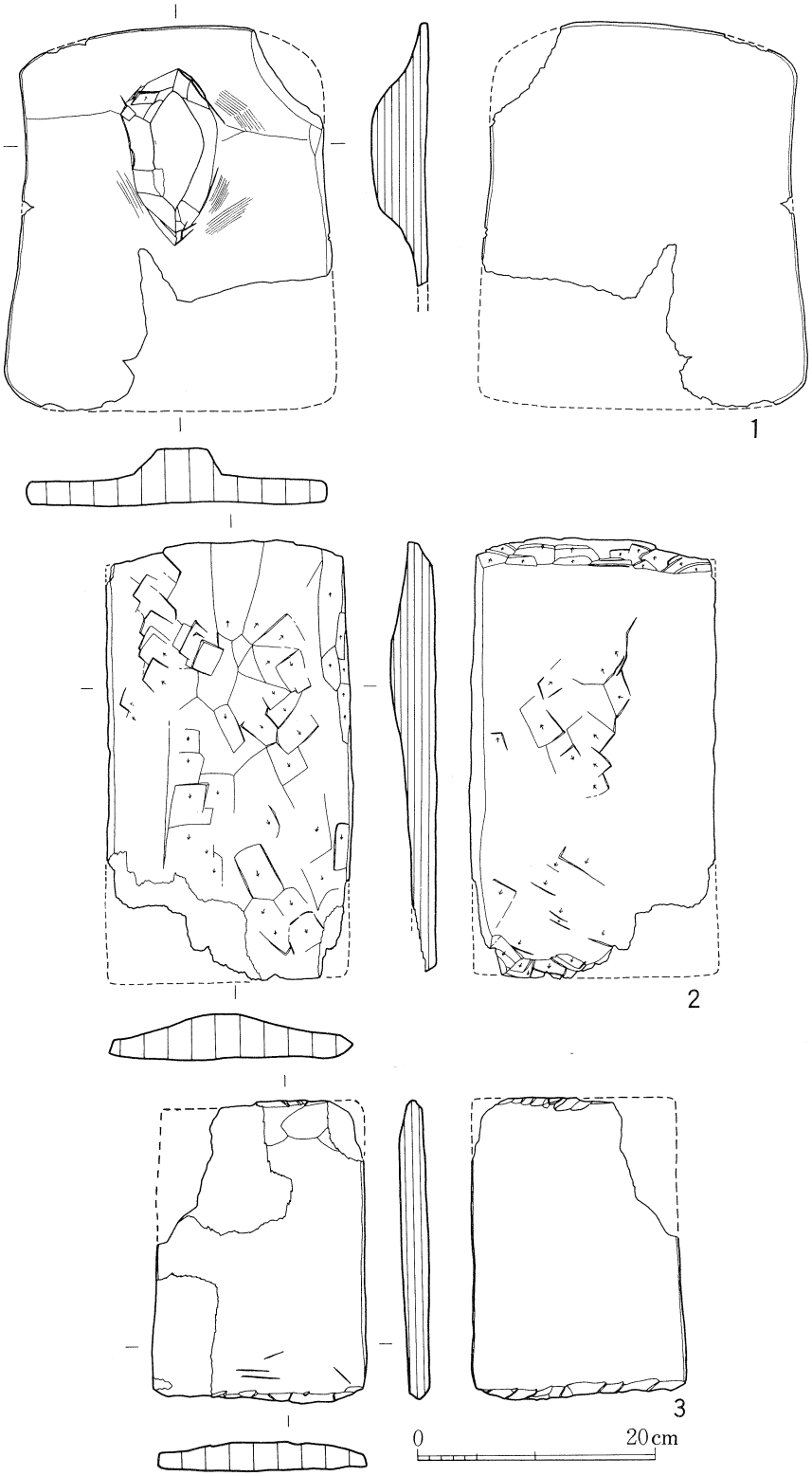
第58図　木製品実測図(6) 1：6



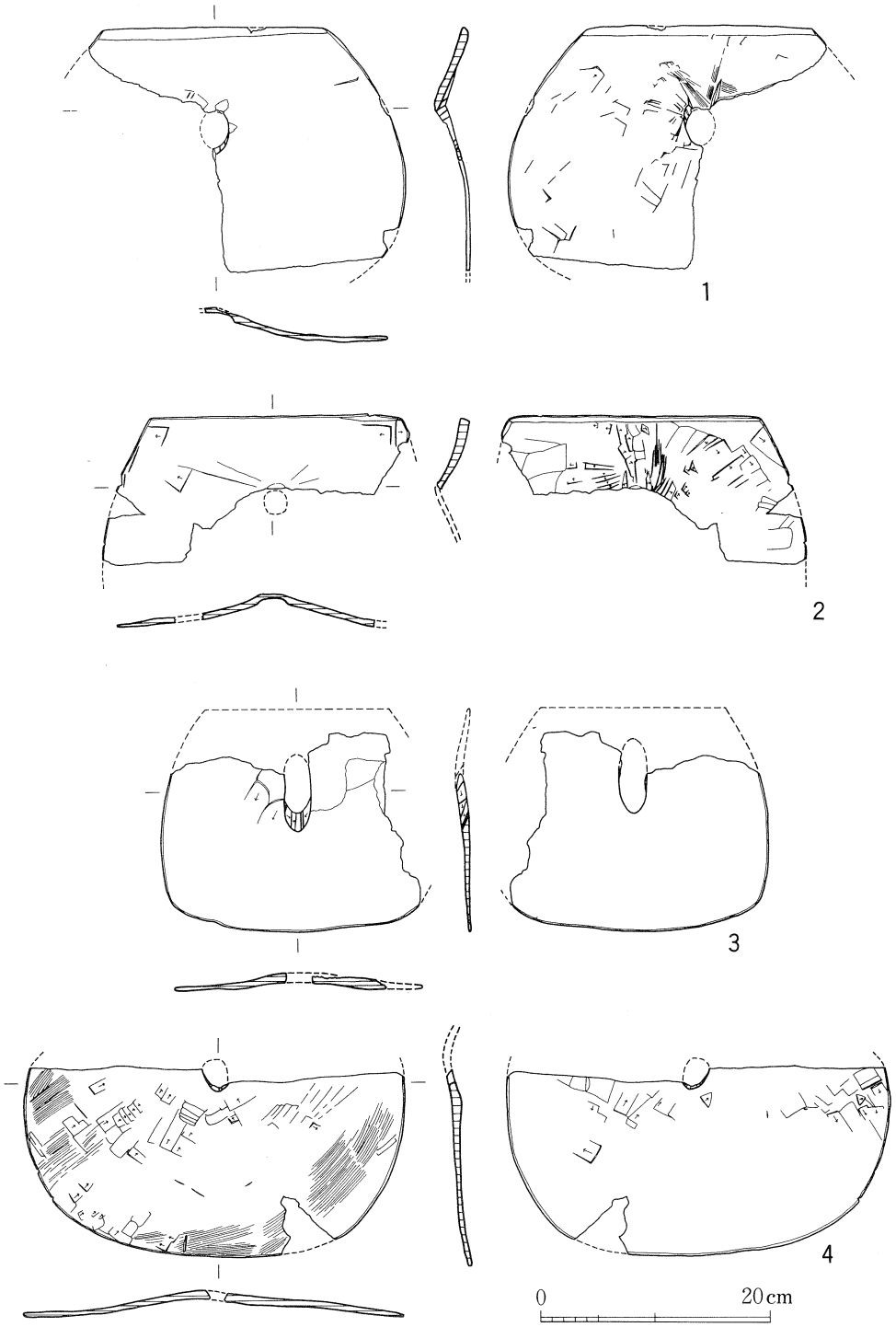




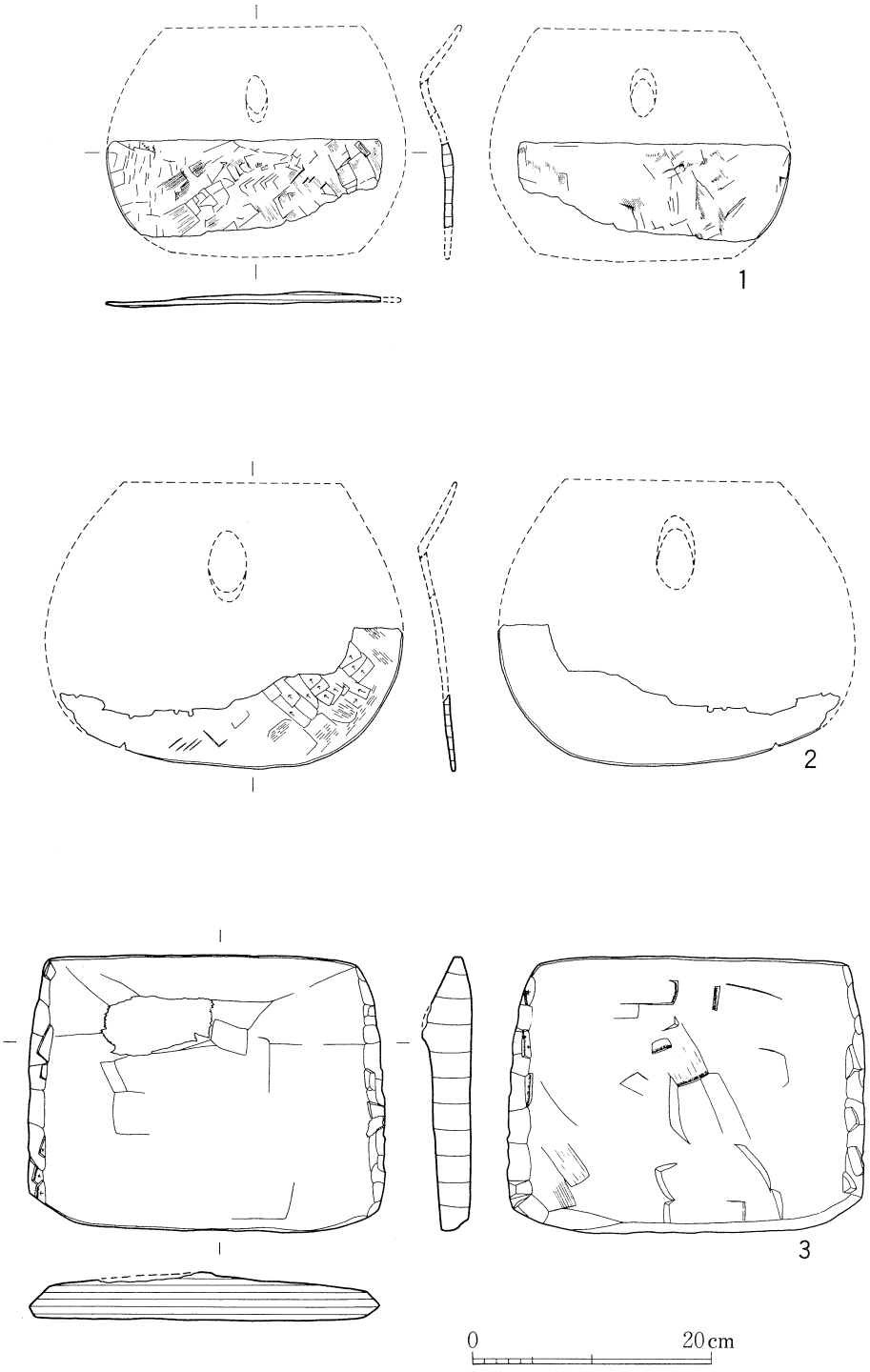
第59図　木製品実測図(7)1：6



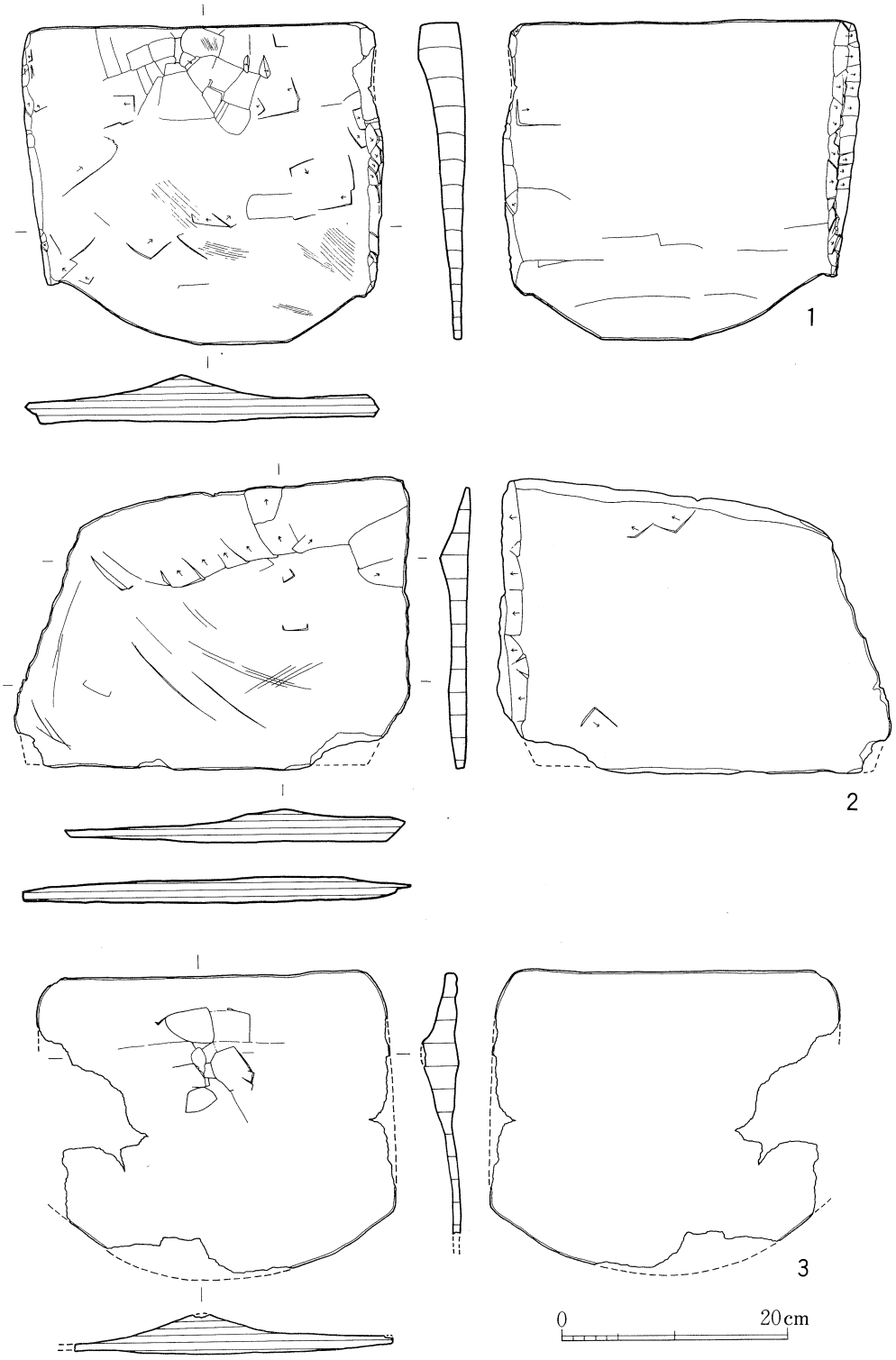
第60図　木製品実測図(8) 1：6



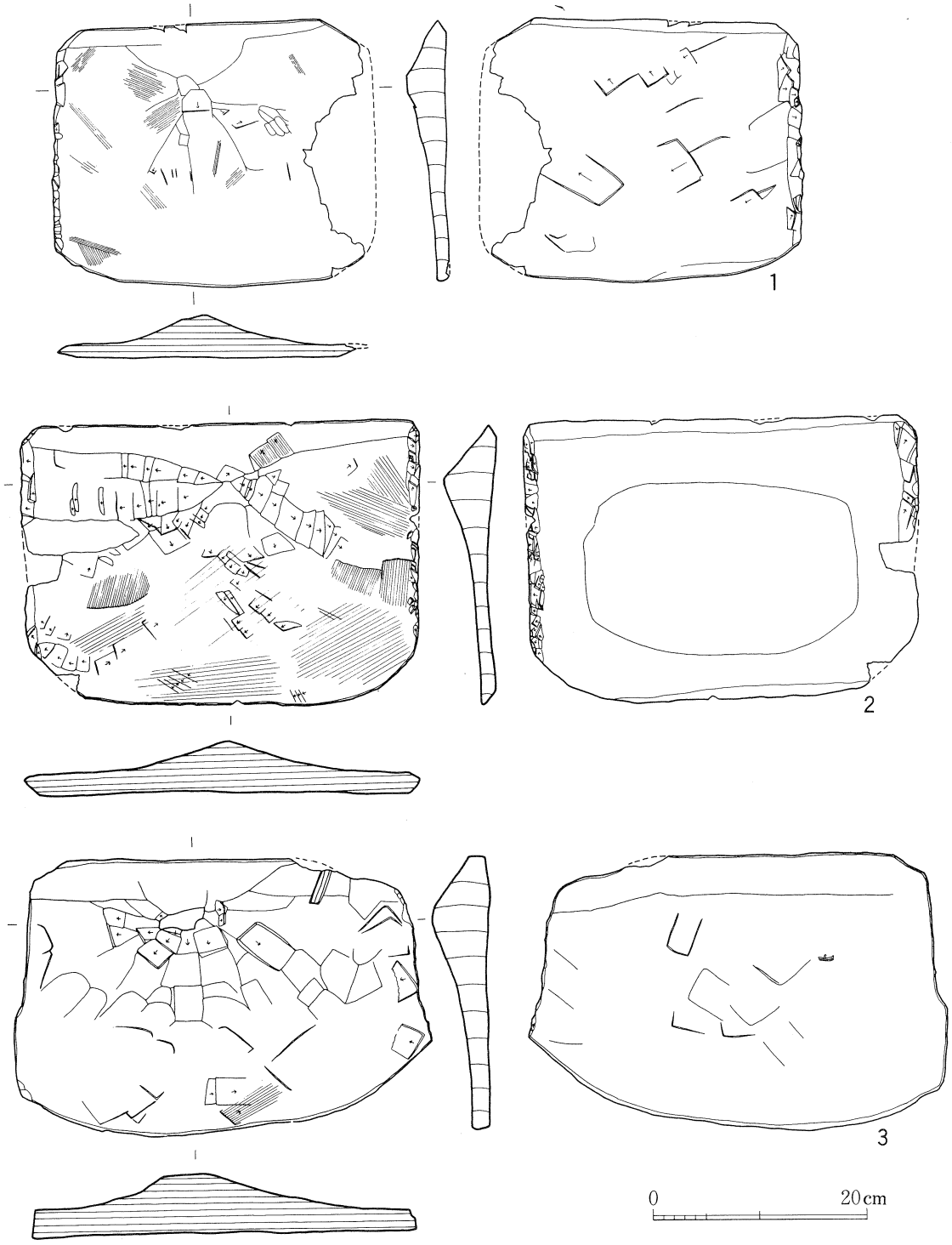
第61図　木製品実測図(9)1：6



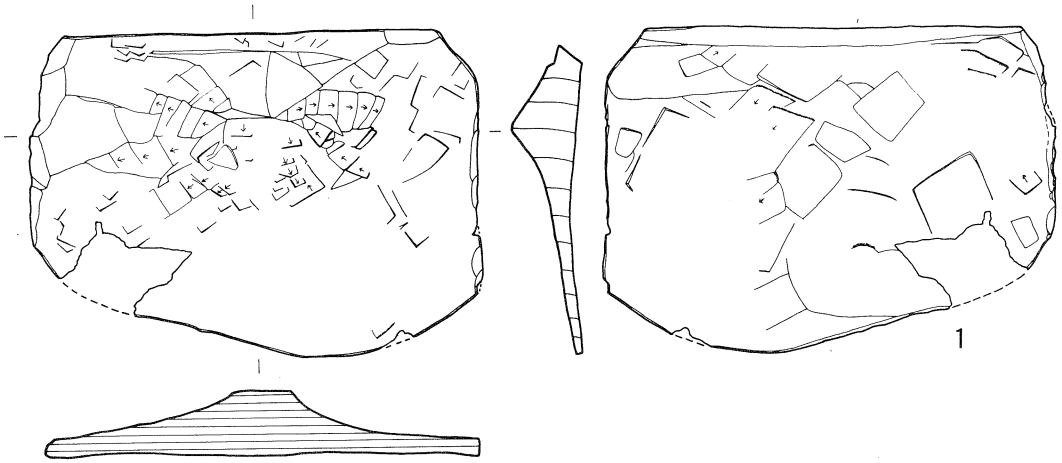
第62図　木製品実測図(10) 1：6

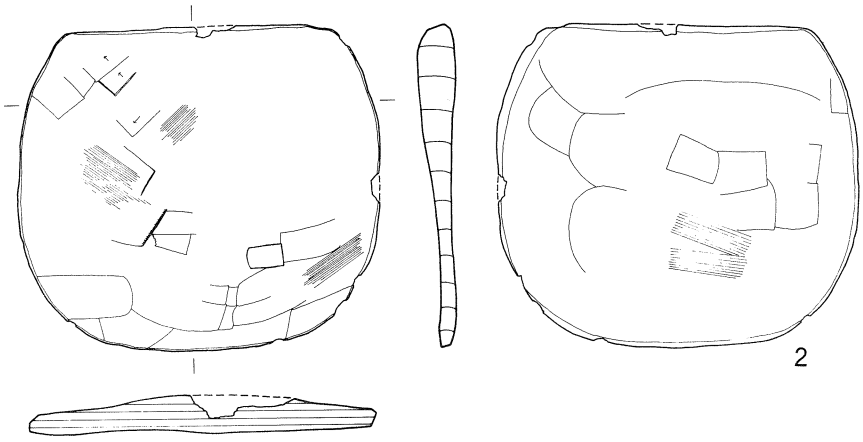


第63図　木製品実測図(11) 1：6



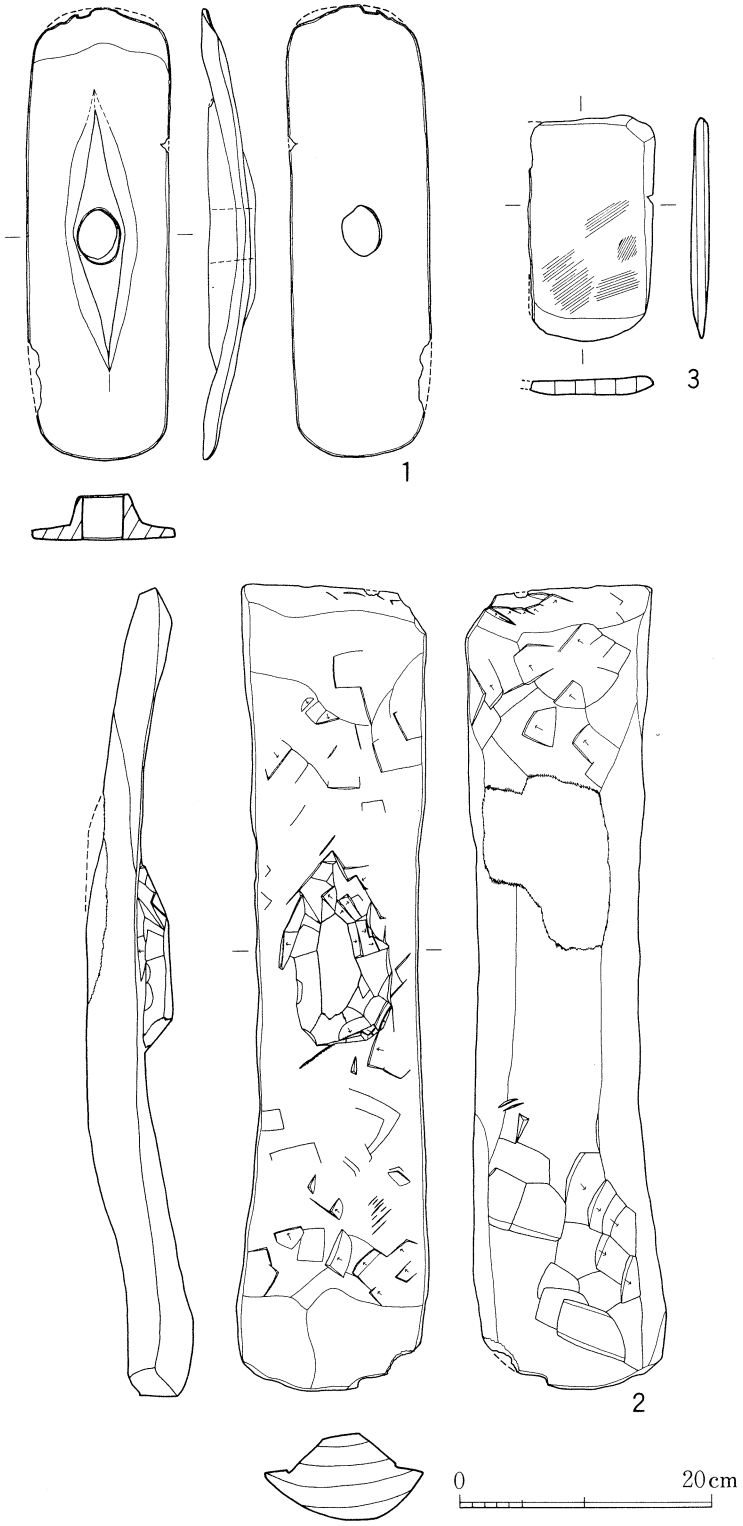
第64図　木製品実測図⑿ 1：6



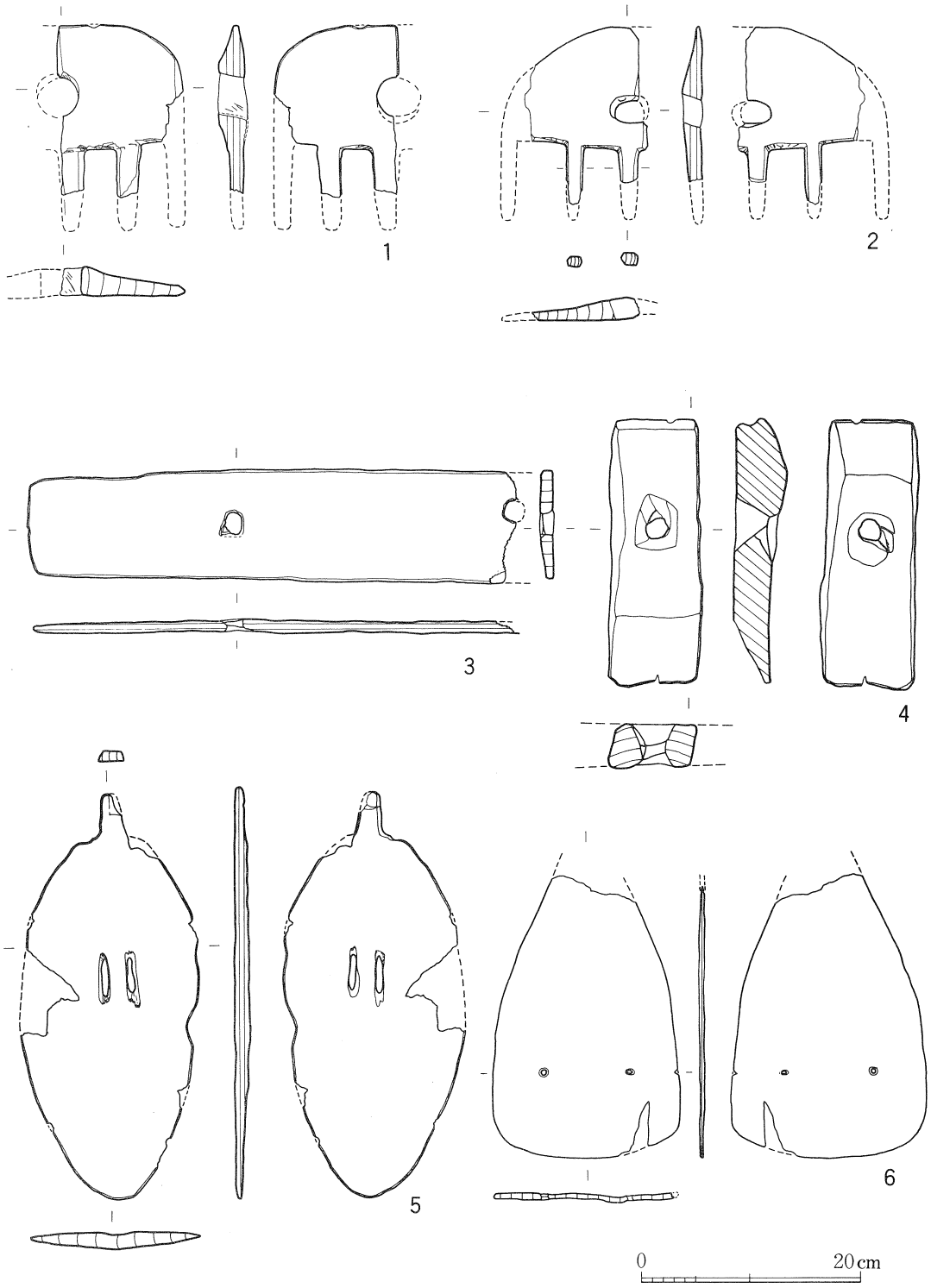


0　20cm

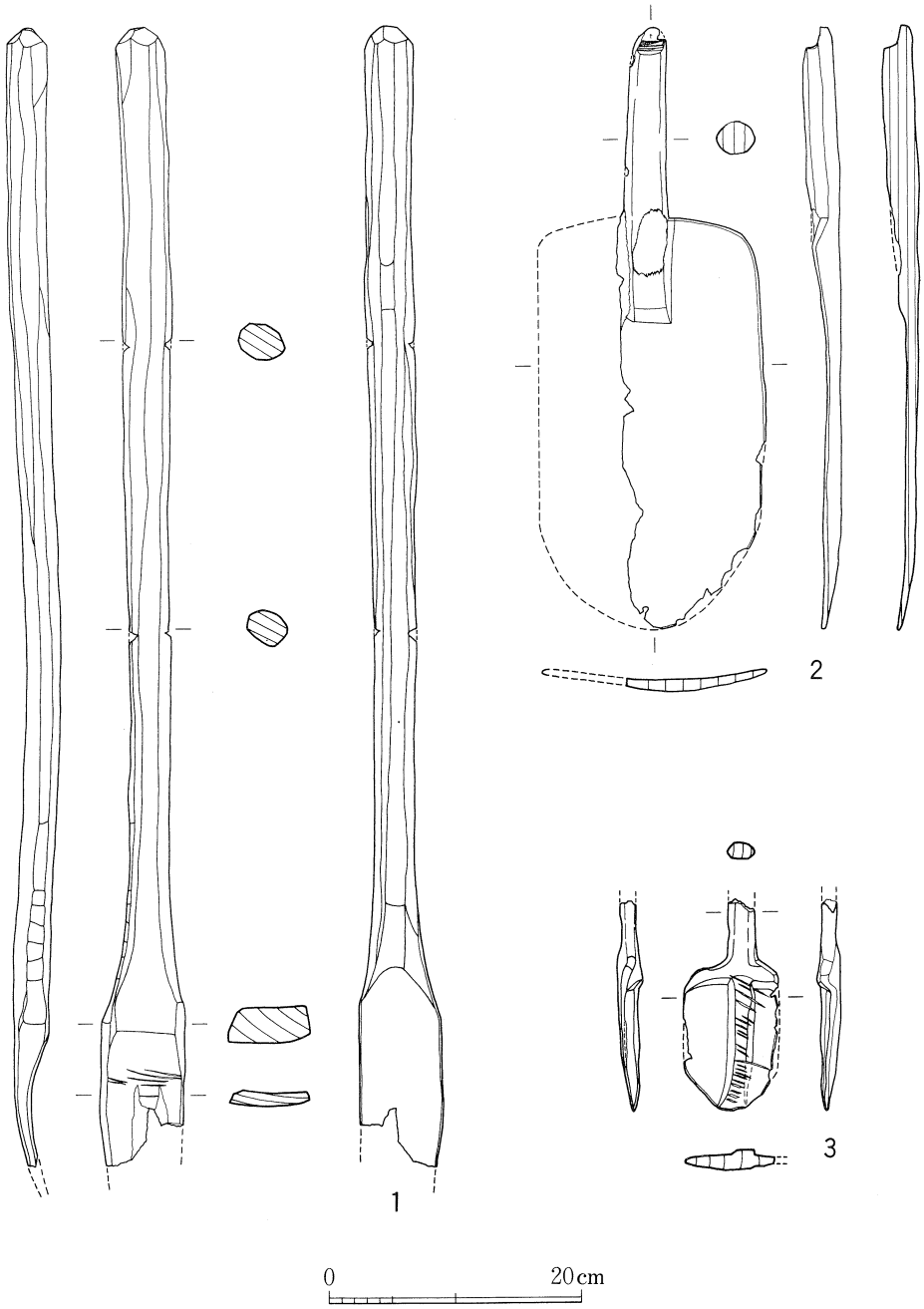
第65図　木製品実測図⑬ 1：6



第66図　木製品実測図⑭1：6



第67図　木製品実測図(15) 1：6



第68図　木製品実測図⑯ 1：6

厚くつくられ，身上部以下は皿状に刳りこまれているが，柄の延長線上は鎬状に隆起した部分が残されている。この部分には大小のキズが認められるが，これが本来の痕跡か後世の痕かは判断できない。

横　　槌（第69図１～５　図版64）　横槌は５点出土している。１～３は非常にていねいな作りをしたものである。１が全長28.9cmの中型，２，３が43cm前後の大型の横槌である。いずれも身部は円柱状を呈すが，１は身部上端が広く下部が狭い。柄部は１が短く，２，３は長い。２の柄尻は単純に丸く終るが，１，３はグリップ状に削り出されている。いずれも身部，柄部とも断面形は正円形に近い。なお，３は全面に焼けた痕跡が認められ，上部は欠失している。

４，５は全長30cm前後の中型の横槌である。ともに比較的雑な作りで加工痕が明瞭に残り，両面とも身部中央には使用痕と思われる窪みが見られる。柄部は棒状で柄尻は単純に終る。身部の断面形は方形を呈しているが，これは使用のために変形していると思われ，本来は円形に近い断面形を呈していたと思われる。

これらの横槌はいずれも芯持材を使用している。

容　　器（第69図６～８・第70図１・第71図１，２，３　図版65～67）　容器は４点出土している。いずれも刳物で平面形が長方形のもの（第69図６～８・第70図１）と筒形のもの（第71図１～３）とがある。木取りは第69図６～８・第70図１は横木取り，第71図１，２は縦木取り，第71図３は芯持ちである。槽形のもののうち第69図６はやや小型の精製品で，非常にていねいな仕上げが施されている。木口両面には１個ずつ小孔が穿たれているが，小孔の位置からみると本来は木口一面に２個の小孔が穿たれていた可能性がある。第69図７，８は粗製品で，７は非常に浅いものである。７の木口の口縁部内外面は加工が粗雑で粗い加工痕が残っている。８は幅に比して長さが長く，やや深身のものである。木口内面の口縁部と底部の境には加工時のものと考えられる溝状の窪みがある。第70図１はやや深みのものだが，底部から口縁部にかけてささくれていることや，全体の調整が非常に粗雑であることなどから未成品と考えられる。

筒形のもののうち第71図１・２は精製で口縁部は直立する。口縁端部は第71図１が内湾，同図２が肥厚する。同図３は底部である。やや丸身を持ち，胴部は外反すると思われる。内面の胴部と底部の境界は不明瞭である。

杓　　子（第70図２　図版66）　縦木取りの杓子の未成品である。身部中程は刃物痕が明瞭で加工途中の段階のものと思われる。身の断面形は楕円形で底部は平坦である。身部上半から柄部はていねいに仕上げられており，柄部上端はふくらみを持たせている。柄部内側は平坦面で，柄部断面はかまぼこ形を呈す。身底部内面は凹レンズ状に凹んでおり，小さな加工痕が多く残っている。

本例は，身部を刳り抜き身部外面と柄部を調整して仕上げているにもかかわらず，身部下半には

不用な部分が残されている。この部分を削り取ろうとした痕跡がみられることから，柄部および身部を完成させた後に不用部分を除去しようとしたと考えられる。

匙状木製品（第71図４　図版67）　精製品が１点出土している。平面形は卵形を呈し，茎部には環状の継ぎ手がみられる。内面の刳りは比較的深く凹レンズ状を呈している。内面中央には刳り残したと思われる突線上の隆起がみられる。木取りは板目材の縦木取りである。

蓋　（第71図５・６　図版68）　径12.0cm前後のものが２点出土している。これらは組み合わせの容器の底の可能性もあるか本稿では蓋として扱った。第71図５は刳物で天井部周縁に直立する短かい口縁部をつける。口縁部の一方には片口状に刳り込みが穿たれ，その近辺に小孔が２孔，約80度の角度で穿たれている。３分の１が欠損しているため，この孔が一対のものか否かは不明である。同図２は円盤状を呈すものである。周辺が面取りされる以外特別な細工は施されていない。

把　手（第71図７～11　図版68）　棒状のもの（７～10）と半環状のもの（11）とがある。棒状のものはいずれも長さ9.0cm～12.0cmのもので，中央に長方形の孔が穿たれている。これらの孔は貫通しているものが多いが，８は貫通していない。７，10は柾目材，８，９は芯持材である。

11は半環状の把手である。握部，脚部とも断面は方形を呈す。柾目材を使用しているが，横木取りであるため鋤などの農耕具の柄把手とは考えられない。容器など日常用具の一部であろうか。

栓状木製品（第71図12　図版68）　上端径に比して下端径の小さいコルク状の木製品である。柾目材を使用している。

弓　（第71図13　図版68）　丸木弓の弓筈部分である。弓筈は両側面を削って偏平な突起を作り出している。

鉤手状木製品（第70図３～５　図版66・67）　中ほどに上外方に伸びる突起部を作りつけたもので，いずれも二股の枝を利用している。３は精製品で，上端に２箇所の抉りが入る。４も精製品であるが，断面が方形を呈すように加工されている。上部には突起と同方向に長方形の小孔が穿たれている。５は上下を簡単に加工した粗製品で，下部は断面方形に加工されているが上部は樹皮を剝いだままの状態である。

これらは形態が若干違うものの，いずれも突起部の反対の面が平坦であることを考えると，この面を壁などに密着させる壁掛けのような機能を持ったものであろうか。また孔や抉りは本体を固定するためのものと思われる[4]。

棒状木製品（第70図６・第72図１～３　図版66・69）　第70図６は断面方形にていねいに整形された精製品である。上部には抉りが入れられている。

第72図１は両端に刳り込みを入れて円頭形にしたもので中央から下半に３ヶ所の抉りが入っている。全面調整が施され断面方形を呈すが，全体にくねっており調整は粗雑である。下端が若干欠損

するが完形に近いものである。

同図2は両端を切断し，側面をわずかに加工しただけのものである。全体にくねっており調整も非常に粗雑である。

同図3は両端を円錘状に削り出すものである。

有　頭　棒（第73図　図版69～71）　端部を木偶頭状に削り出すものである。完形品を見ると両端を木偶頭状にするもの（1）と一端を尖頭状にするもの（2，3）とがあるが，破片ではどちらの類に属するかは不明である。

1は両端を木偶頭状に削りだたすもので，全長73.6cmを測る。樹枝を利用したもので，両端部以外には加工は見られない。凹部には使用痕と思われる摩滅が見られる。これは機織の経巻具あるいは布巻具と思われる(5)。しかし機織の他の部材がほとんど出土していないことから，漁網を固定する開口具(6)であるとの指摘もある。

2，3は上端を木偶頭状に，下端は尖頭状に削り出すものである。2が全長53.8cm，3が32.5cmを測る。2はていねいな作りだが3は粗いつくりである。ともに下端は使用痕と思われる摩滅が見られることから，これらは刺突具の機能を備えたものと思われる。民俗例を見ると同様な木製品は，田植綱を固定する「網ドメ」，畑作の播種時に使う「種蒔棒」などがあるといわれる(7)。

8，9は上端を丸く削り出したものであるが，ともに径約1.6～2.5cmの小枝を使用した細長いものである。8の上部にはわずかに凹みが廻っており，紐などを結んだ痕跡と思われる。これらは，機織具，布巻具の可能性もあるが欠損する部分が多いため1とは別に扱った。

4～6も上部を木偶頭状に削り出したものだが，大半は欠損しており全体を復元することはできない。5，6は頭部を全周縁から削り出しているのに対し，4は3方向から削り出し一面は樹皮を剝いだままの状態である。

7も大半は欠損している。上部はやはり木偶頭状に削り出されているが，上端部木口面は欠損しており上部には同様な頭部がさらにもう一つ付設されていたと思われる。

9は，上部は他と同様木偶頭状に削り出されているが，そのやや下方に抉りが入れられている。建築部材と思われる(8)。

中筒状木製品（第74図1～2　図版71）　厚さ1.5cm前後の板材の両端に，側面から抉りを入れたものである。2は欠損するが，1は完形で全長44.5cmを測る。ともに凹部には使用痕と思われる摩滅が見られる。これらは機織の中筒に似た形をしている。ともに柾目材である。

用途不明木製品（第74図3　図版72）　一端を尾鰭状に作り，一側縁を弧状に加工したものである。中央には小孔が2穴粗く穿たれており，表面の調整はあまりていねいではない。柾目材である。

台形木製品（第74図4）　厚さ2.5cmとやや厚手で，下底長12.6cmの小形のものである。ほぼ完

形で平面形は台形を呈す。柾目材である。

櫂状木製品（第74図５　図版71）　上部が狭く，下部が広がる形態を呈す。上部はやや厚く断面は杏仁形をし，下部は偏平で薄手である。下部の一側縁には若干加工痕が見られる。全面平滑に調整されている。柾目材である。

板状木製品（第74図６～11・第75図・第76図１，２　図版71～73）　孔が穿たれているものを中心に実測した。第74図６は平面形が鉈状を呈するものである。柾目材を使用している。

第74図７は平面形が隅丸のもので，方形の孔が２孔穿たれている。柾目材である。

第74図８～11は幅が広くやや厚手の大形のもので，平面形は方形を呈するようである。縁辺には８，９に２孔，10，11に３孔の円形の孔が穿たれている。９が板目材以外は柾目材である。これらは田下駄の可能性もあるが，孔の配置など全形を窺うことができないため断定はできない。

第75図１は平面形が楕円形を呈すもので，下部に円形の孔が２孔穿たれている。柾目材である。

第75図２～６は平面形が長方形の細長い板で，一端に方形あるいは円形の孔が穿たれている。何らかの部材と思われるが何の部材であるかは不明である。いずれも柾目材である。

第75図７，８は平面形が長方形で側縁に台形の抉りを入れたものである。抉りは７に３ヶ所，８に２ヶ所に見られる。ともに柾目材である。堰の一部に似るが，用途を断定することはできない。

第76図１，２は方形の板で，下端以外はほとんど加工されていない。おそらく割り裂いた素材を切断しただけのものと思われる。１が板目材，２が柾目材である。

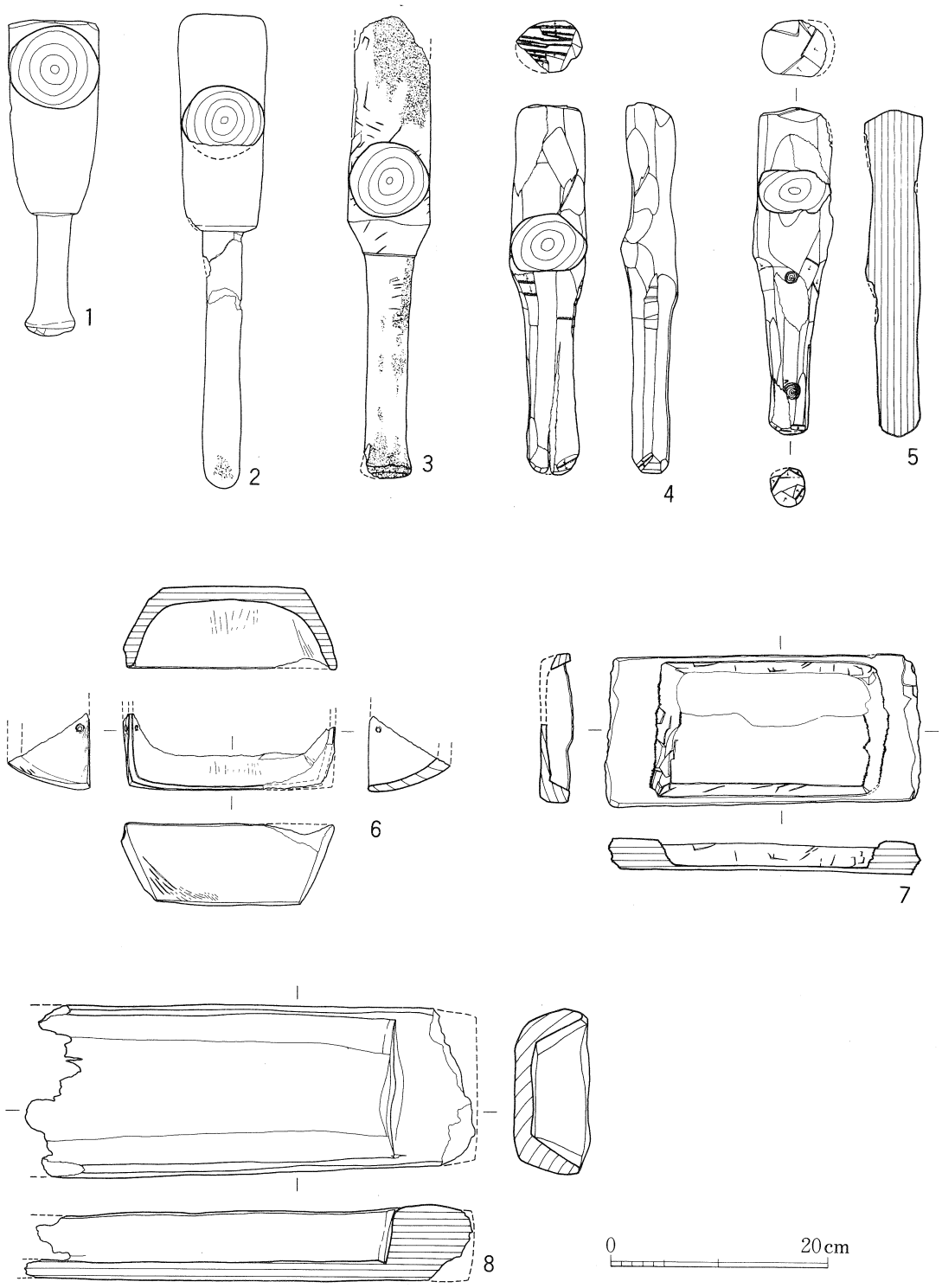
台状木製品（第76図３　図版74）　樹皮に近い部分を割り裂き一端に加工を施しただけのものである。小枝，節の部分は未調整のままである。外面中央には無数の刃物痕が雑然と残っている。この面を作業台として使用したのであろうか。木取りは柾目材である。

木錘状木製品（第76図４～６・第77図１～３　図版74）　第76図４は上部を円錘状に削り出すものである。上端が欠損しているため，上端は錘状になるか否か不明である。上部の形態は不明であるがツチノコの可能性がある。

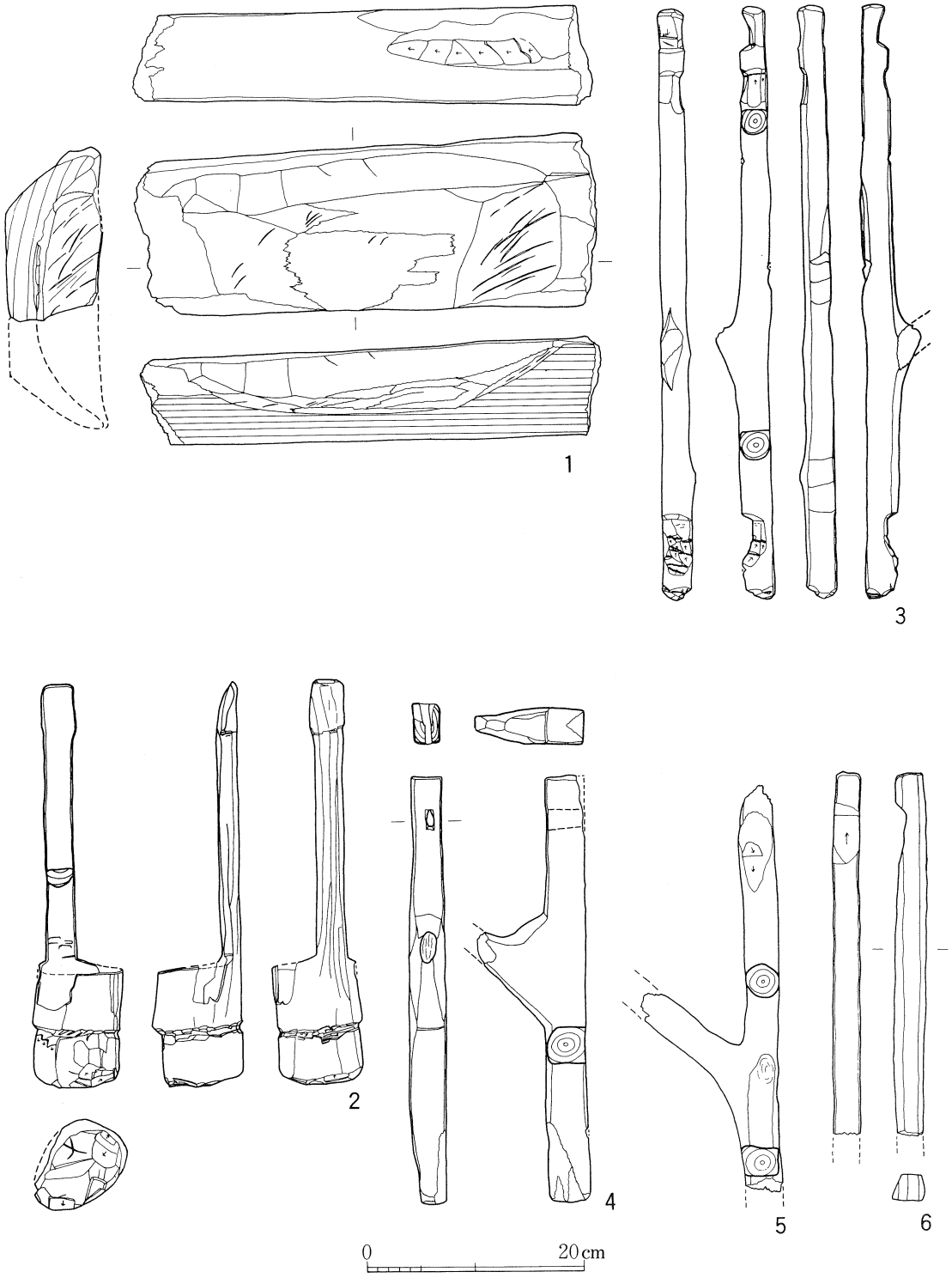
第76図５，６・第75図１～３は芯持の素材の両端を切断したものである。木口面には切断時の加工が明瞭に残る。第76図５，６は長さ11～46cmの小形で，第77図１～３は長さ約40～76cmとやや大形である。第77図２は切断後割り裂いたものである。第75図３は切断面が平坦で，下半はやや細く加工している。

これらはほとんどが用途不明品で第77図３がわずかに横槌未成品と想像される程度である。第７５図３は下半を削り込むと横槌になるが，その未成品とは断定できないため，この類として扱った。

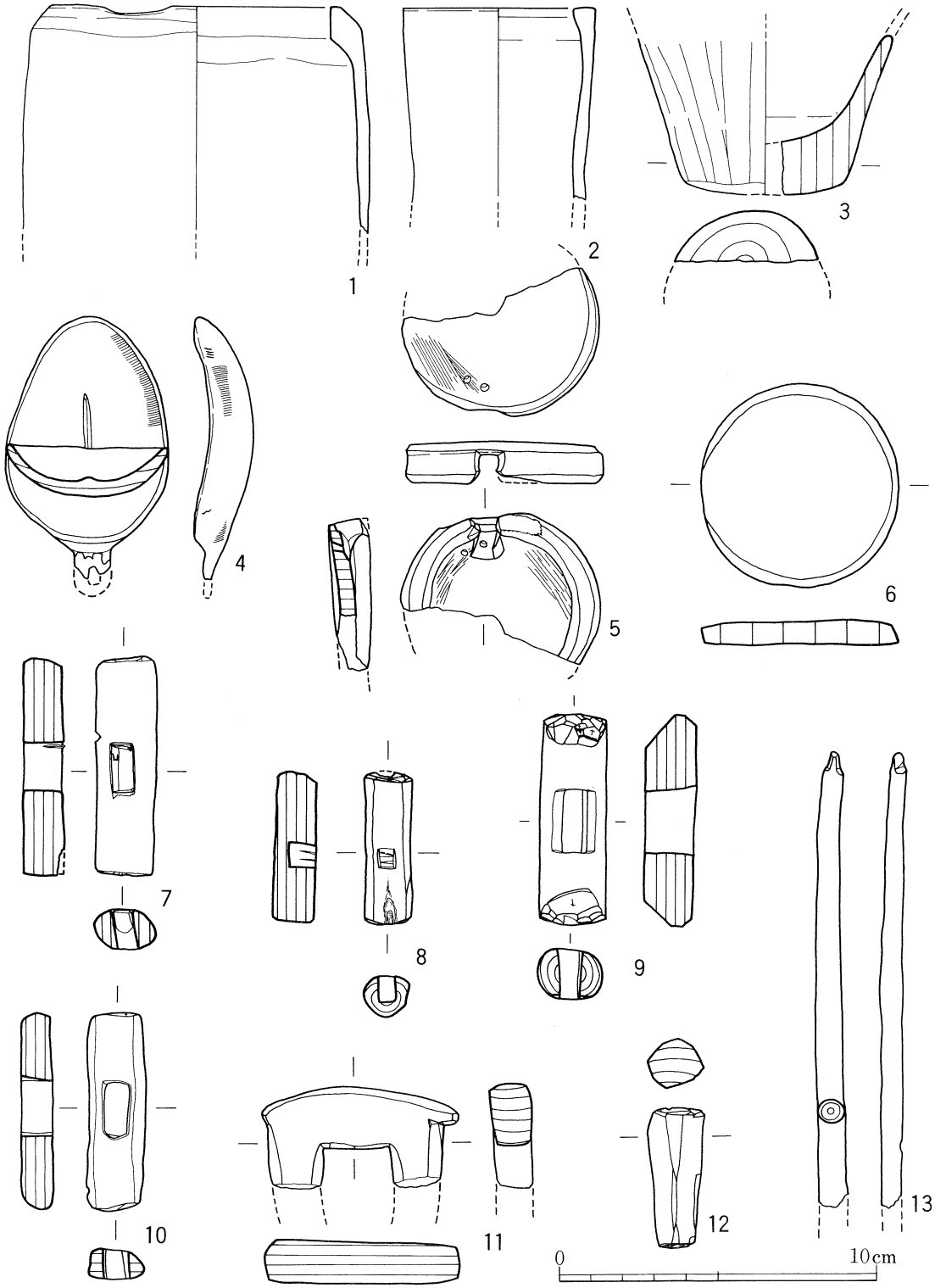
楔形木製品（第77図４・５）　杭の先端を切断転用したと思われるもので，４が長15.9cm，５が長25.8cmを測る。ともに３方向から加工されており，一面は樹皮をはいだままの状態である。



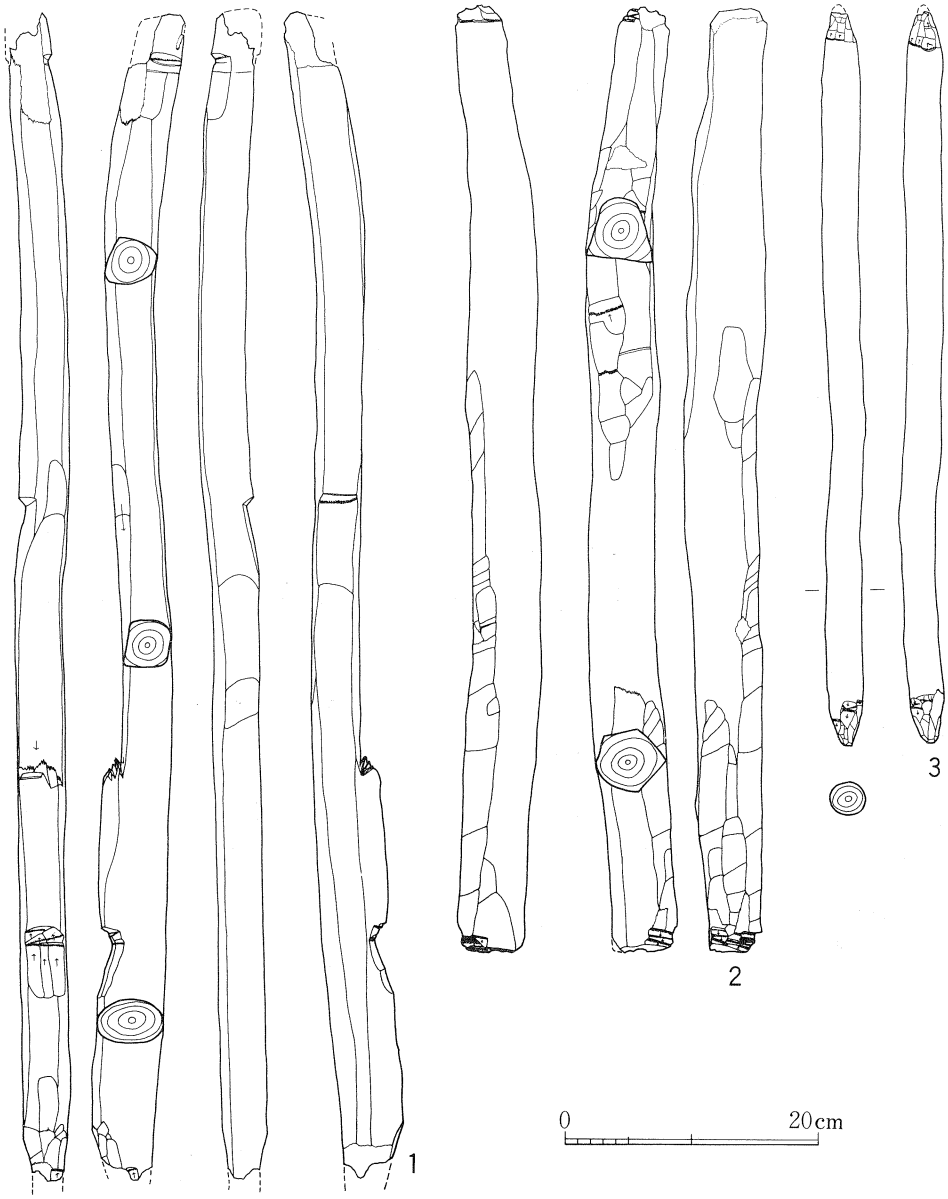
第69図　木製品実測図(17) 1：6



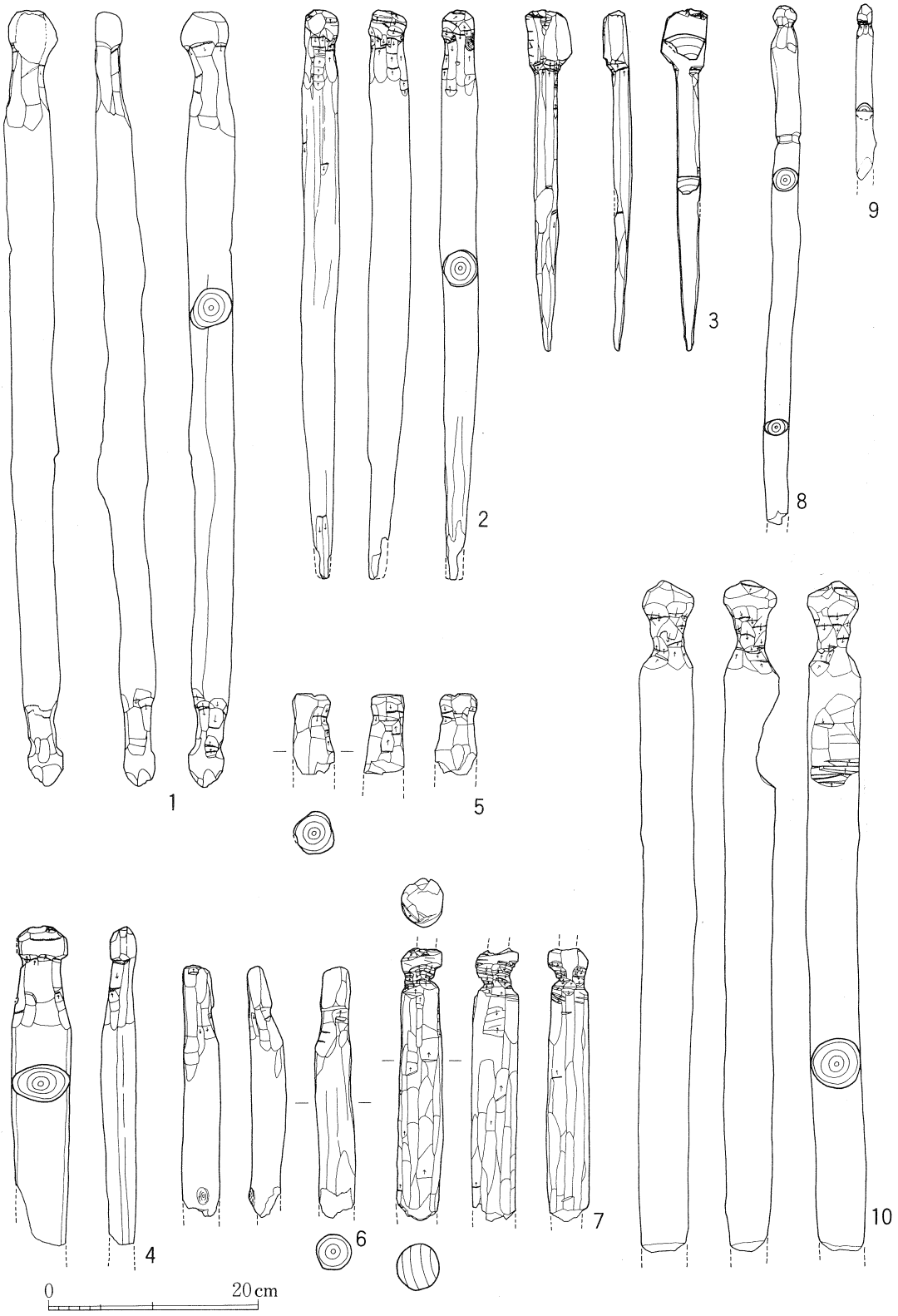
第70図　木製品実測図(18) 1：6



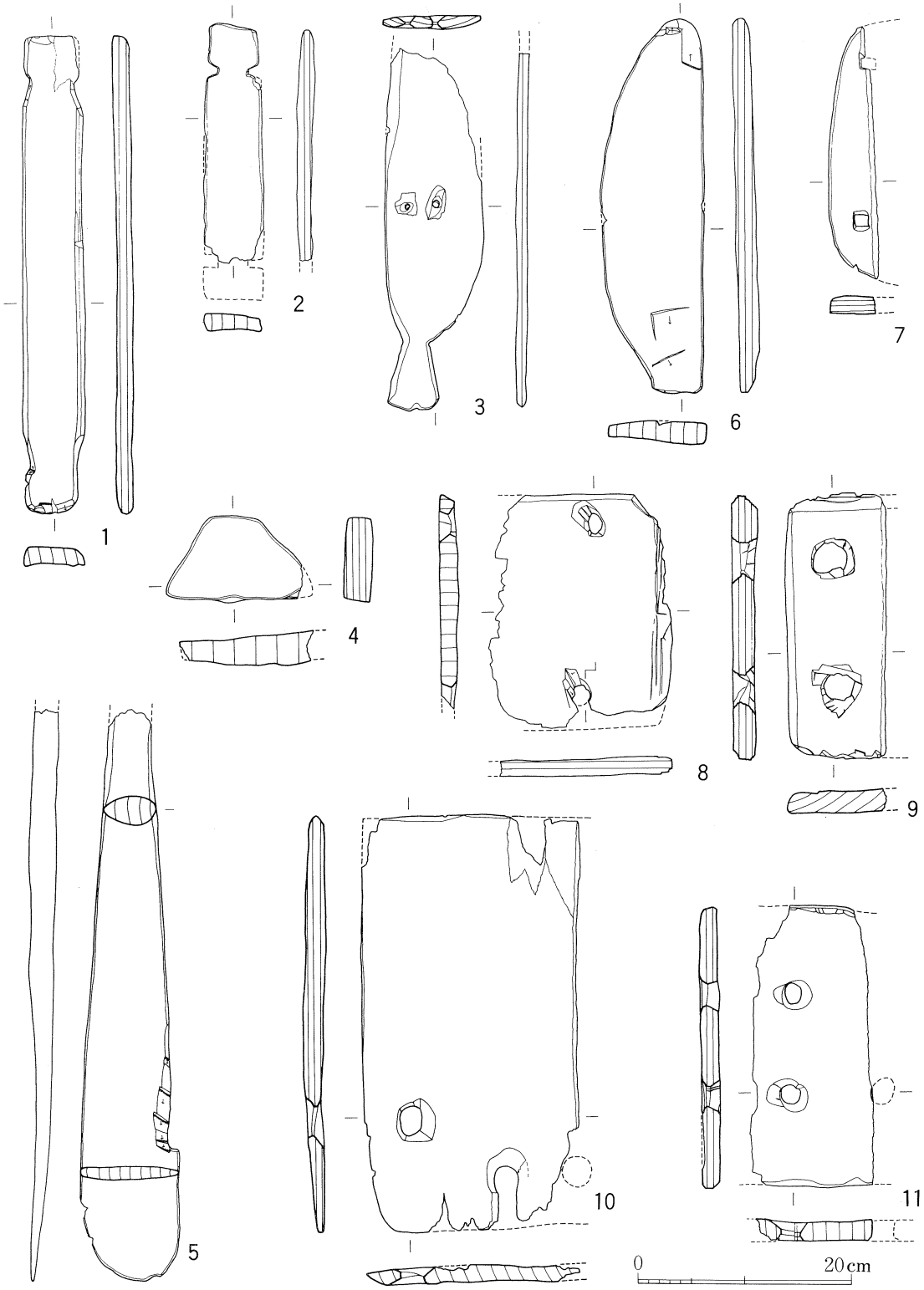
第71図　木製品実測図⑲ 1：2



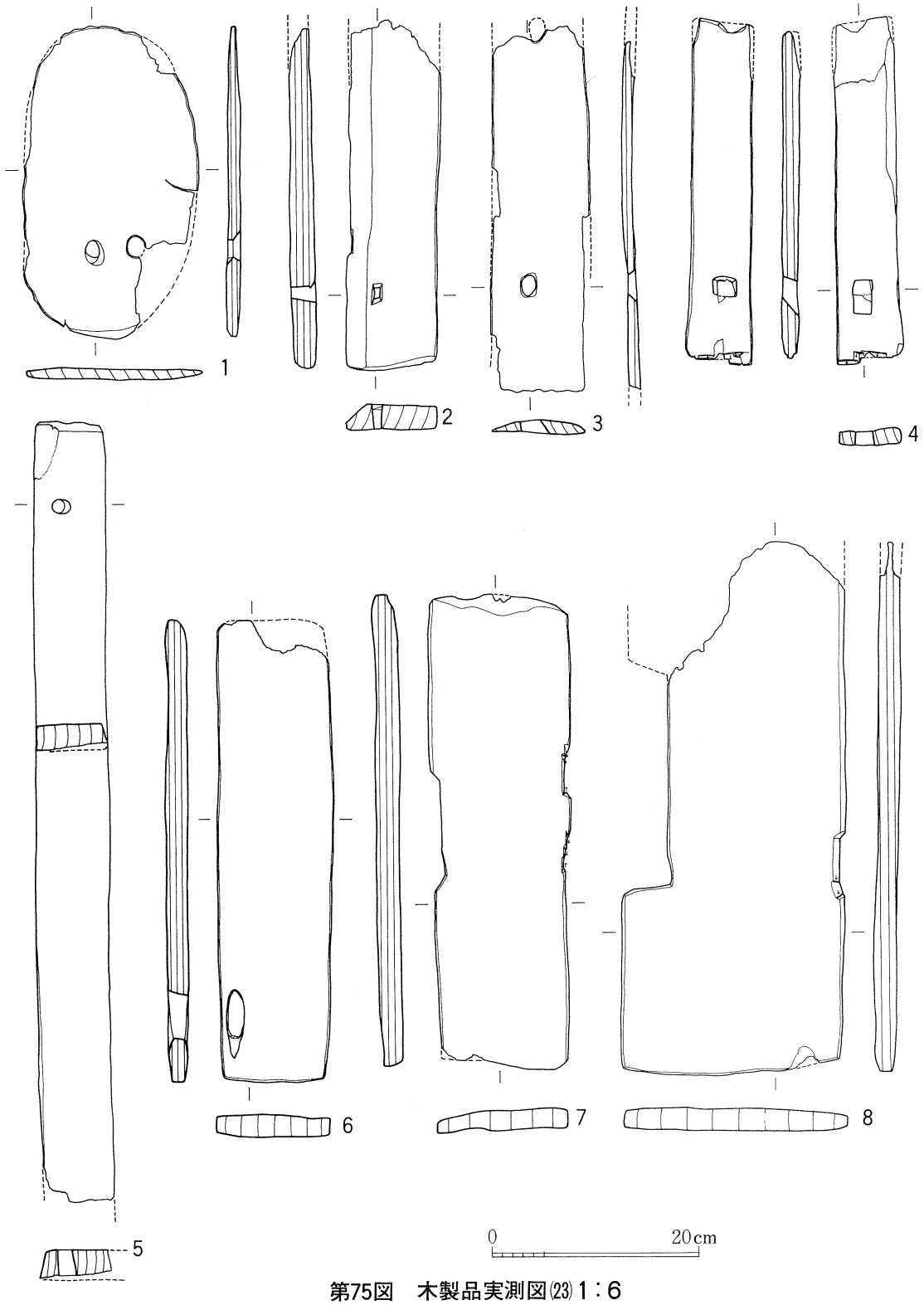
第72図　木製品実測図⑳ 1：6



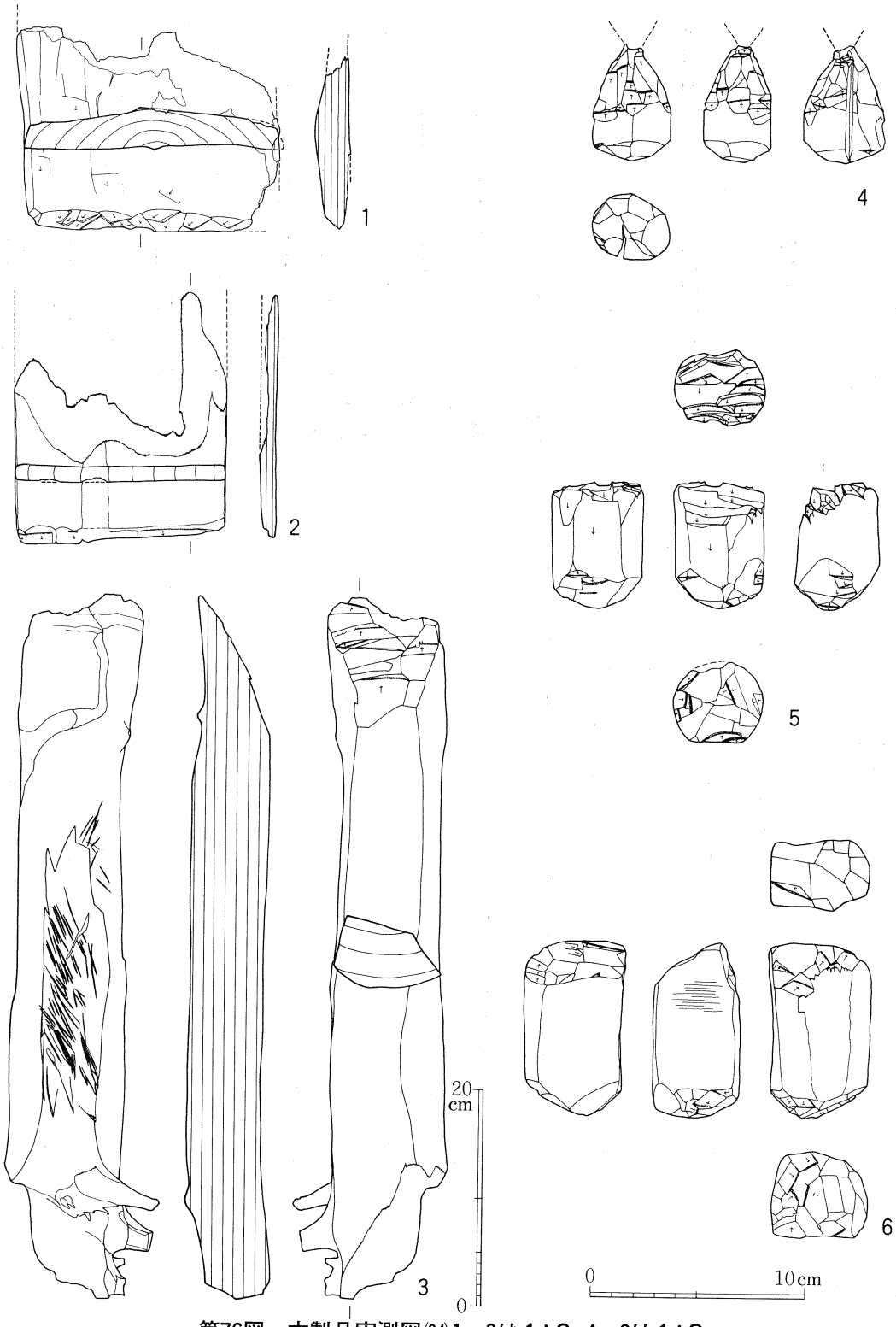
第73図　木製品実測図(21) 1：6



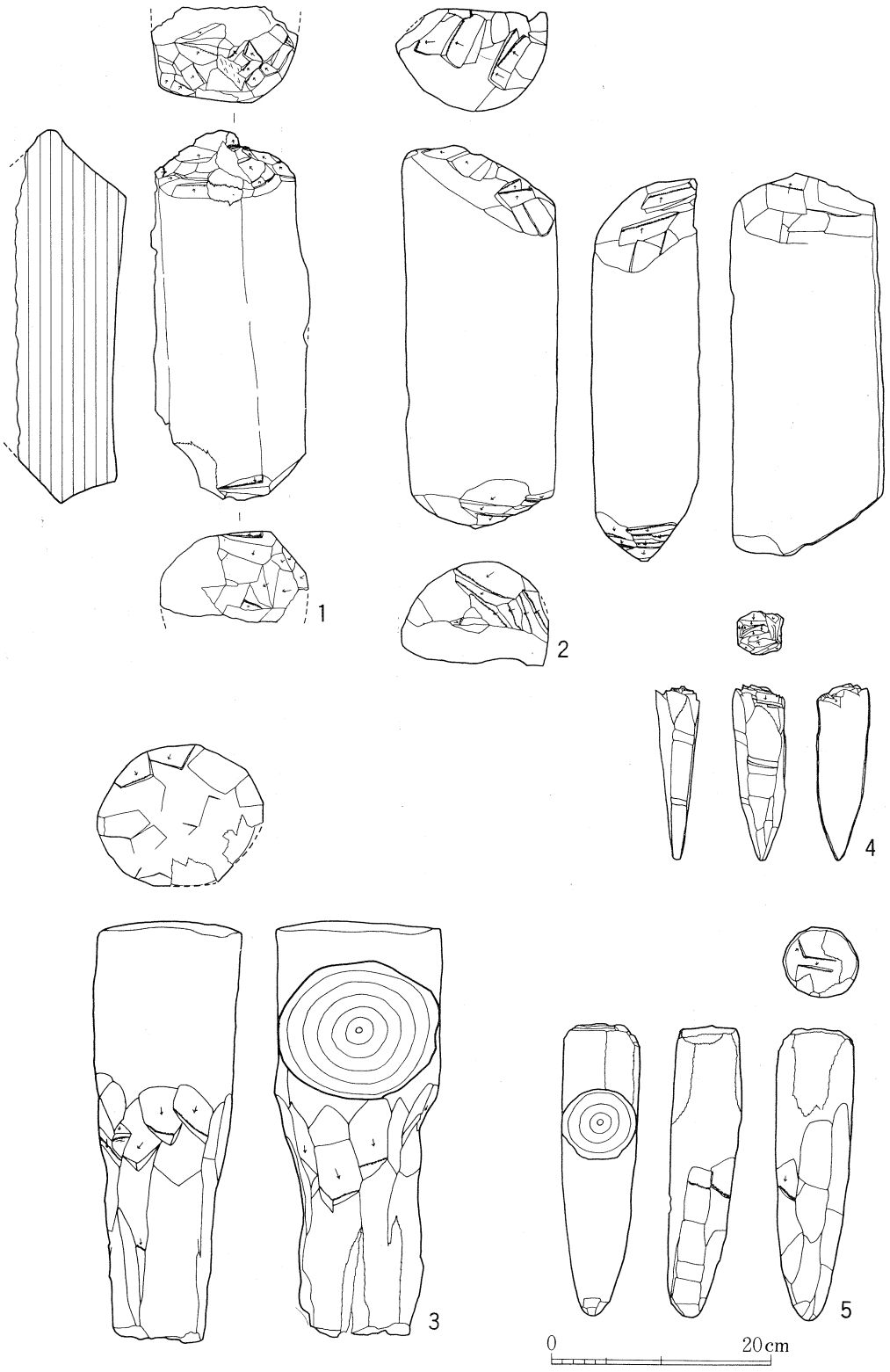
第74図　木製品実測図(22) 1：6



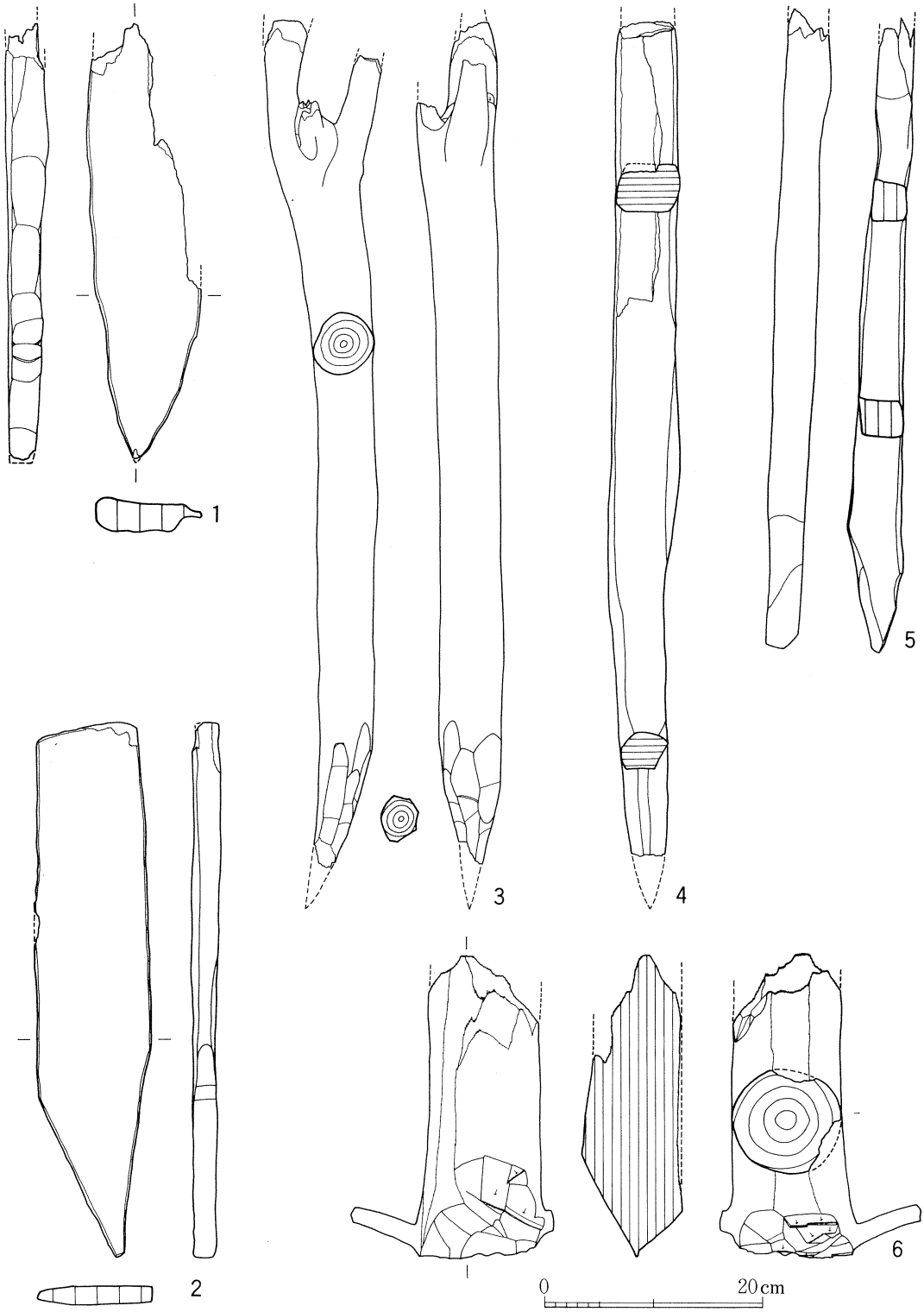
第75図　木製品実測図(23) 1：6



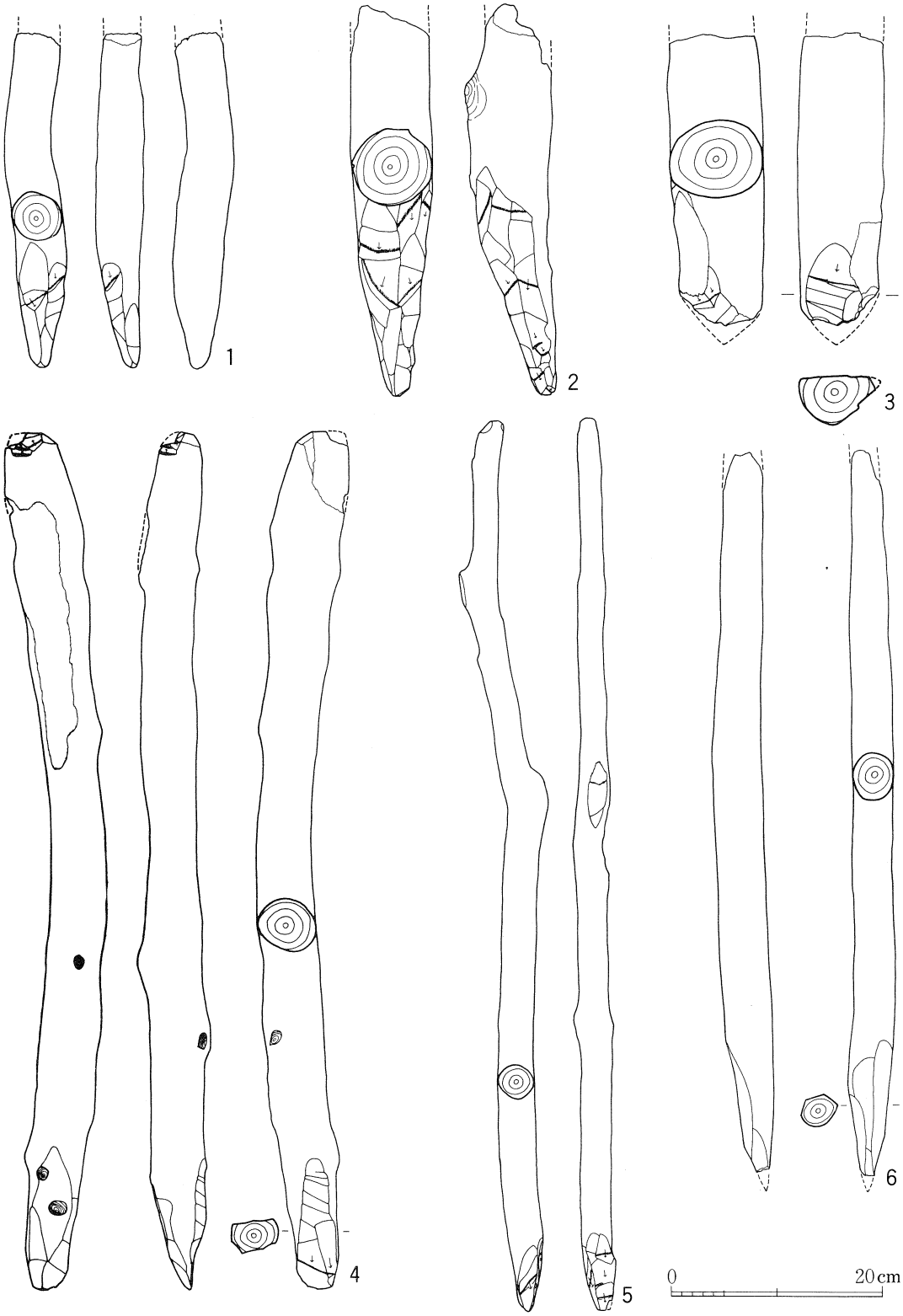
第76図　木製品実測図㉔1～3は1：6　4～6は1：3



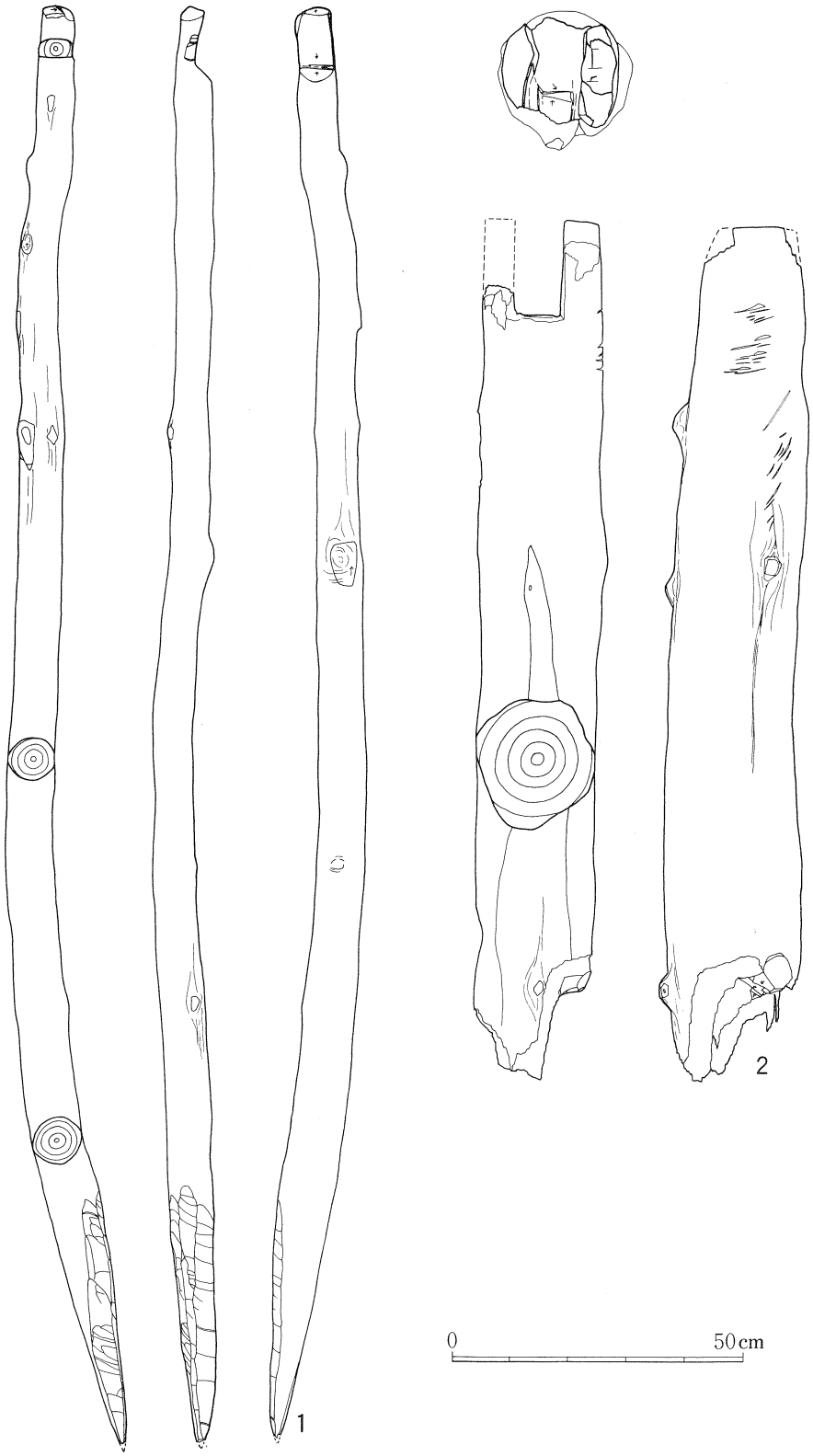
第77図　木製品実測図(25) 1：6



第78図　木製品実測図㉖1：6



第79図　木製品実測図(27) 1：6



第80図　木製品実測図(28) 1：12

杭状木製品（第78・79図・第80図１　図版75，76）　板状のもの（第78図１，２），上部が二股に分かれるもの（同図３），断面方形のもの（同図４，５），先端のみ加工されるもの（その他）など様々である。

第78図１，２は板状の杭で，柾目材の側辺を加工し尖らせたものである。

同図３は二股に枝分かれした枝を利用したもので下端と枝分かれの部分に加工痕が見られる。下端の加工は３方向から行われ，一面は樹皮を剝いだままの状態である。

同図４，５は断面方形の角杭である。ともに柾目材でまたは板目材を使用し，下端の加工は２方向からのみである。

第79図１～６・第80図１は下端を加工痕しただけのものでいずれも芯持である。下端の加工は第79図１，２，５，６・第80図１が２方向から，３，４は１方向からの加工でいずれも樹皮を剝いだままの面が残る。第79図４，５は長さ約80cmの完形品である。第80図１も完形品だが長さ247.8cmと長いもので，上端は段状に抉りが入っている。住居跡の柱を転用したものであろうか。

第78図６は下端に加工がみられるが，この部分の小枝が処理されておらず杭とは考えにくい。用途は不明であるが形態上この類として扱っておく。

建　築　材（第78図２　図版76）　径約20cmの太い芯持材を使用している。上部に深さ16cm程の刳り込みが見られ，この部分で別の部材と組合わせたものと思われる。外面はわずかに加工痕が観察できるものの大部分は樹皮を剝いだままの状態である。

小　　結

本遺跡では多数の木製品が出土し，本書では141点を図示した。

今回出土した木製品のうち農耕具は，広鍬，丸鍬を中心に狭鍬，諸手鍬，又鍬，えぶり，鋤が出土している。量的にみると広鍬29（成品18，未成品11），丸鍬15（成品６，未成品９），狭鍬２（ともに成品），諸手鍬２（成品１，未成品１），又鍬２（ともに成品），えぶり１（成品），鋤５（いずれも成品）である。本遺跡では一部分を調査しただけであり，しかも今回の出土遺物が流入によるものであることを考えると，今回出土した農耕具がタテチョウ遺跡の農耕具の総体を表現してるとは言い難いが，おおよその傾向として広鍬と丸鍬が多いのが注意される。これは広鍬と丸鍬の欠損率が高かったことに起因するのではなかろうか。広鍬および丸鍬の製品を見ると，全てが身の厚さが0.5cm前後の非常に薄いもので，耕起用具として機能を果たし得たか疑問であり，むしろ「引き鍬」としての機能を持っていた可能性がある。これらが耕起用でないとしても，身の厚さが非常に薄いことを考えると欠損率は非常に高かったものと思われる。とくに丸鍬は木取りの特種性から破損しがちであったと想像される。

一方，狭鍬，諸手鍬，鋤は深掘り用あるいは開墾用具として考えられている[9]。本遺跡出土のも

のは，第65図６・第66図３などは身の厚さなどから考えて上記の機能は持ち得ないと思われるが，そのほかのものについては，開墾用または深堀り用として充分耐えうると思われる。本遺跡でこの様な器種があまり出土しないのは，この地では当時深堀りを必要としなかったか，開墾があまり盛んでなかったためではなかろうか。もし，上述の広鍬が耕起用として使われていたと考えるなら，当地は身の薄い広鍬でも比較的用意に耕起できる土壌であったのかもしれない。

鳥取県米子市目久美遺跡[10]，同池ノ内遺跡[11]，島根県松江市神田遺跡[12]などは鍬類より鋤類の出土が多く本遺跡の木製農耕具のありかたとは様相が異なっている。この違いはあるいは土壌の違いによるのかもしれない。各遺跡の土質を科学的に分析，比較していないため想像にすぎないが，各遺跡の土質が木製農耕具の器種構成に影響を与えた可能性は否定できないように思われる。

本遺跡では広鍬，丸鍬を中心に未成品も多く出土している。鍬類の製作については原材段階→祖形段階→原形段階→整形段階→調整段階の５段階の製作工程が確認されている[13]。今回出土した未成品には広鍬は原形段階と整形段階，丸鍬は整形段階のものがあるが，原形段階の未成品は広鍬が２点出土したにすぎず（第55図１，２），大部分は整形段階のものである。これらは一口に整形段階の未成品といってもそれぞれに若干の差が認められる。広鍬についてみると，第56図３のＡ面は第56図１，２・第57図１とよく似ているが，Ｂ面上部のゲタの位置には加工痕がみられ，ゲタを造り出そうとしているのがわかる。第56図１，２などのＢ面にはこのような痕跡はなく，第56図３は同図１，２などより工程上新しい段階の未成品かとみられる。これらの資料をみると，平面形や舟形隆起の形などは原形段階で一応の形が整形されるが，ゲタは一個体に切断された後に付設されたようである。このゲタを付設する段階ではまだ第53図１～４などにみられる頭部の抉りはつけられていない。また米子市目久美遺跡の資料を参考にすると頭部の抉りは柄孔穿孔以前につけられたことがわかる[14]。以上のことから整形段階での広鍬細部の製作工程について復元すると，①原形段階から一個体ずつ切断する（第65図１，２など）→②ゲタを付設する（第56図３）→③頭部に抉りを入れる（目久美Ｗ－19　この段階ではかなり器面の調整は進んでいると思われる）→④柄孔を穿孔（調整段階）の手順で製作されたと考えられる。①から③の工程は，従来の整形段階に相当するが，これが短期間に連続して行なわれたのか，一定の期間を置いて行なわれたのかは不明である。もし短期間のうちに行なわれたとしたら②と③の工程は逆転する場合も考えられる。①～④の作業工程が一般的なものか，本遺跡のみの製作上の癖であるのかは今後の検討課題であろう。

丸鍬の未成品はすべて整形段階のものである。そのうち第65図１～３などは，Ｂ面が平坦で原形段階から切断された状態と考えられ，Ｂ面が若干窪む第62図１～３・第63図１などより原形段階に近い未成品と思われる。以上から丸鍬は整形段階で①整形段階から一個体ずつ切断したもの，②①のＢ面を若干窪ませたものの２者があり①→②と製作されたものと思われる。②と成品とはかなり

違いがあることから②を成品にするためには以後かなりの作業量が必要であったと思われる。しかし本遺跡での資料では②以降の工程を知る資料は出土していないため，成品に至る細かい作業工程を知ることはできない。

今回出土した未成品について広鏃を3類に，丸鏃を2類に分類した。これらは完成時が同一の形態をするとは考えられず，数種類の成品の製作を目標としていたのは明らかである。タテチョウ遺跡の資料は良好な資料とは言えないが，未成品の各種の完成時の姿を想定し，成品各種との対比を試みたい。

広鏃は形態から成品を大きくⅠ，Ⅱ類に，未成品をⅠ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ類に分類した。未成品Ⅰ類（第55図1・第56図・第57図1）と成品Ⅰ類（第51～第53図・第54図2）はともに平面形が長方形を呈し舟形隆起を有するもので，成品，未成品の違いはあるもののよく似た形態と言えよう。また第56図3はB面にゲタの製作途中と思われる加工痕が認められ，ゲタを有すると言う点でも成品Ⅰ類と類似する。未成品はさらに細部の加工痕が施されるため，できあがりは他類となる可能性も全くは否定できないが，上記の如く未成品Ⅰ類は成品Ⅰ類と類似する点が多いことから，未成品Ⅰ類は成品Ⅰ類の製作過程にあるものと考えたい。

未成品Ⅱ類（第57図2，3）は頭部が曲線を描くように作り出され，柄孔部の隆起は明瞭に突出している。この未成品Ⅱ類の頭部の形態は成品Ⅱ類（第54図3～5）に似るが，柄孔部の隆起が比較的明瞭であることを考えるなら第54図4が未成品Ⅱ類に最も似たものである。しかし他の未成品を見ると柄孔部の隆起はかなり早い段階で一応の整形を行なっており，未成品Ⅱ類の柄孔部の隆起をさらに加工して異った形の隆起を作ることは考えにくい。このことから今回の調査では未成品Ⅱ類から作られた成品は出土していないと思われる。

未成品Ⅲ類（第58図1）は未成品Ⅰ類，成品Ⅰ類に似るが，側縁が湾曲し刃部が広がると言う特徴を持つ。側縁をさらに加工し，成品Ⅰ類をつくることも不可能ではないが，本例が成品にかなり近い状態のものと思われることや，平面形はかなり早い段階で決定されていることを考えると[15]，成品Ⅰ類は未成品Ⅲ類の成品段階とは考えられない。本遺跡では未成品Ⅲ類の成品段階のものは出土していないと考えられる。

未成品Ⅳ類（第58図2，3）は柄孔部がなだらかな山形に隆起しているのが特徴である。これは成品Ⅱ類（第54図3～5）と頭部の形態は若干違うものの，柄孔部はよく似た形態を呈している。このことから未成品Ⅳ類は成品Ⅱ類に近い形態の広鏃の未成品と思われる。とくに第54図5は頭部の形態もよく似ており，未成品Ⅳ類から作られた可能性は強い。

丸鏃は成品6，未成品9が出土しており，未成品をⅠ類（第60図3・第61～63図1）とⅡ類（第63図2）に分けた。成品は全て断面形が山形を呈すもので，これらは未成品Ⅰ類を細部加工して作

られたものと思われる。未成品Ⅱ類は柄孔部の隆起は著しくなく，これから作られたと思われる成品は今回の調査では出土していない。

以上をまとめると，広鍬は(1)未成品Ⅰ類→成品Ⅰ類，(2)未成品Ⅳ類→成品Ⅱ類（特に第54図５）と比定することができる。丸鍬は今回出土した成品はすべて未成品Ⅰ類から作られている。広鍬未成品Ⅱ，Ⅲ類，丸鍬未成品Ⅱ類については今後の資料の増加を待って検討すべきであろう。

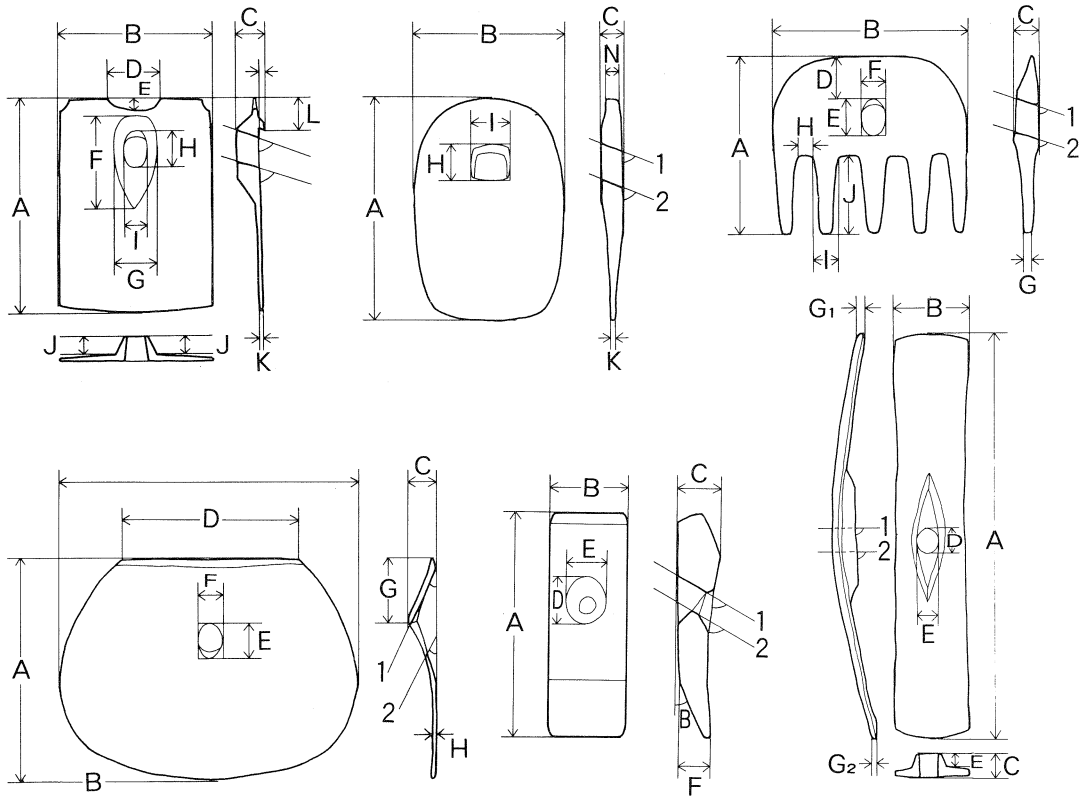
本遺跡では，以上の農耕具の他に生活用具が出土しているが，それらの機能，用途について推し量ることのできるものは少ない。特に棒状木製品（第68図３～５），有頭棒（第71図），板状木製品（第72，73図）などは組み合わせ木製品の部材の可能性があり，原形を推定することは困難で，これらの機能についての考察は将来の研究に委ねるほかはない。

本遺跡での木製品の組成を見ると，農耕具に比して生活用具の出土が少なく工具に至っては全く出土していないのが特徴である。生活用具は種類が多いにもかかわらず，一器種につき１点のみ出土しているものが大部分である。これは農耕具類と違って欠損率が低かったためであろうか。しかし，工具類は木製品を加工する上で欠くべからざるものであり，１点も出土していないのは奇異な感を受けている。昭和52年度の調査[16]でも石斧用柄が１点出土しただけでやはり工具類は過少といえる。この状況が単にタテチョウ遺跡の範囲が広く，しかも２回にわたる調査地点が遺跡の縁辺部であることに起因するのか，それともタテチョウ遺跡の本質的な特徴であるのかは，やはり遺跡の中心部－住居部分－の発掘調査を待つ以外にない。

以上，農耕具を中心にタテチョウ遺跡出土の木製品について若干の検討を試みた。本遺跡の性格上，個々の遺物については年代を与えることができず，方法論的にはかなりの誤りを認めざるを得ない。また，本遺跡では大量の木製品を包含していると予想されるが，今回はそのほんの一部の資料を検討したにすぎない。本来なら個々に年代を与えた上で，本遺跡出土の木製品を総体的に検討すべきであろう。将来，このような操作に耐えうる資料が検出されることを期待したい。

註１　根木修　「木製品農耕具の意義－弥生時代を中心に－」『考古学研究』第22巻第４号　1976
２　註１に同じ
３　勝部正郊氏より，穀類かき集め等に使用出来る鍬，との御教示を得た。
４　勝部正郊氏の御教示による。
５　竹内晶子　「織機」『弥生文化の研究』５　1986　雄山閣
６　渡部誠，勝部正郊氏の御教示による。
７　註４に同じ
８　宮本長二郎，勝部正郊，三宅博氏の御教示による。
９　註１に同じ
10　『加茂町川改良工事に伴なう埋蔵文化財発掘調査報告書　目久美遺跡』米子市教育委員会・鳥取県河川課　1986
12　三宅博，広江耕史氏の御教示による。

13　註1に同じ
14　註8に同じ
15　大中の湖南遺跡出土の原形段階の鍬未成品は3連の未成品であるが，個々の鍬は側縁の刳り込みなどが既につけられており，この段階で大体の形が整えられているのがわかる(註1)。
16　島根県教育委員会　『朝酌川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書』－Ⅰ－　1980



広鍬, 丸鍬, 諸手鍬, 又鍬他　広鍬, 丸鍬, 諸手鍬, 又鍬, 他計測位置模式図

広鍬〔成品〕Ⅰ類

挿図番号	図版番号	分類	出土地点	層位	木取り	法量（cm） 着柄角度 1	着柄角度 2	A 最大長	B 最大幅	C 最大厚	D 頭部抉り幅	E 頭部抉り長	F 舟形隆起長	G 舟形隆起幅	H 柄孔長	I 柄孔幅	J 舟形隆起高さ	K 刃部厚	L	M ゲタの高さ	N	備考
53－1	47	I_1	N9E4	9	柾目	77.0	84.0	27.0	22.2	4.2	－	－	16.4	7.8	4.1	3.5	2.4	0.7	5.4	1.0	－	
53－2	47	I_1	N8E4	9	柾目	65.0	72.0	24.4	21.9	(3.8)	－	－	16.0	6.0	4.2	2.9	1.5	(0.5)	3.3	0.9	－	
53－3	47	I_1	N6E4	12	柾目	76.0	52.0	23.8	(14.1)	2.4	－	－	14.4	6.0	4.0	3.0	1.2	0.5	2.6	1.0	－	
54－1	48	I_1	N8E3	12	柾目	71.0	71.0	(12.0)	(15.3)	3.2	－	－	(10.3)	5.4	3.8	3.4	1.9	(2.0)	3.0	0.3	－	頭部が焼けコゲている
54－2	47	I_1	N7E5	12	柾目	(67.0)	(63.0)	23.4	(12.4)	(2.0)	－	－	(10.1)	(3.5)	(4.0)	(2.6)	(0.2)	0.6	3.3	1.0	－	
54－3	48	I_1	N7E5	11下	柾目	(63.0)	(67.0)	(20.2)	(11.4)	(1.5)	－	－	(9.2)	(3.2)	(3.4)	(2.3)	－	(0.7)	2.8	0.8	－	
54－4		I_1	N5E3	11下	柾目	－	－	23.5	(11.1)	(1.3)	－	－	(5.6)	(1.4)	(2.2)	(0.4)	(0.1)	(0.3)	(3.0)	(0.6)	－	
54－5	48	I_1	N4E3	11上	柾目	－	－	(22.3)	(9.1)	(1.1)	－	－	－	－	－	－	－	(0.3)	(2.2)	(0.8)	－	
54－6		I_1	N8E5	12	柾目	－	－	24.3	(6.6)	(1.4)	－	－	－	－	－	－	－	(0.5)	(2.9)	(0.6)	－	
55－1	48	I_2	N7E4	12	柾目	71.0	78.0	24.4	22.0	3.5	8.0	1.4	11.9	5.3	(4.3)	(3.1)	1.7	0.6	4.1	1.3	－	
55－2	49	I_2	N8E4	12	柾目	73.0	75.0	23.7	17.5	(3.9)	3.9	1.4	10.2	4.9	3.9	(3.0)	2.4	0.4	3.1	0.7	－	
55－3	49	I_2	N5E3	11下	柾目	－	(75.0)	24.2	(13.4)	(1.3)	－	(1.0)	(8.5)	(4.6)	(2.2)	(2.7)	－	(0.3)	(3.0)	(0.5)	－	
55－4	49	I_2	N6E4	11下	柾目	－	(79.0)	25.0	(12.7)	(1.3)	(1.1)	(1.3)	(6.4)	(4.9)	(3.0)	(2.9)	－	(0.4)	(4.1)	(0.4)	－	
56－1		I_2	N7E4	11下	柾目	－	－	(20.4)	(7.8)	(1.4)	(0.3)	(0.6)	－	－	－	－	－	(0.4)	(2.5)	(0.9)	－	頭部が焼けコゲている
56－2		Ⅰ	N6E4	12	柾目	66.0	58.0	－	－	(2.1)	－	－	(9.5)	5.3	4.1	2.9	－	－	－	－	－	
56－3		Ⅱ	N9E4	12	柾目	67.0	70.0	24.3	(16.6)	2.4	－	－	－	－	4.2	4.2	－	－	－	－	1.3	
56－4	49	Ⅱ	N5E4	10	柾目	56.0	65.0	(18.9)	(18.6)	2.5	－	－	－	－	3.0	2.4	－	(0.9)	－	－	0.4	
56－5	49	Ⅱ	N5E5	11	柾目	75.0	74.0	(21.0)	(13.9)	2.5	－	－	－	－	3.0	3.0	－	(1.3)	－	－	0.3	B面の下2/3が焼けコゲている

狭鍬

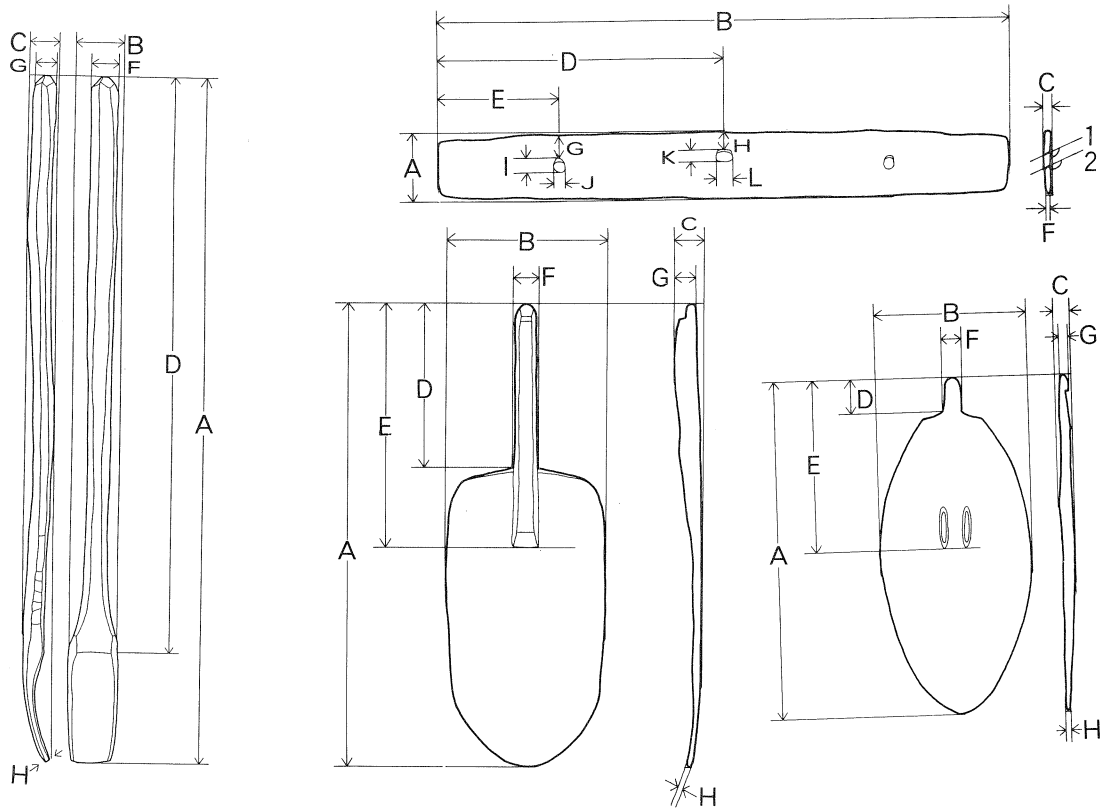
挿図番号	図版番号	分類	出土地点	層位	木取り	法量（cm） 着柄角度 1	着柄角度 2	A 最大長	B 最大幅	C 最大厚	D 頭部抉り幅	E 頭部抉り長	F 舟形隆起長	G 舟形隆起幅	H 柄孔長	I 柄孔幅	J 舟形隆起高さ	K 刃部厚	L	M ゲタの高さ	N	備考
56－6	49	Ⅱ	N2E4	12	柾目	72.0	76.0	27.6	7.1	3.9	－	－	(16.1)	6.6	3.5	2.7	2.1	0.6	5.8	0.9	－	
56－7	49	Ⅱ		11下	柾目	－	－	24.4	7.8	1.7	－	－	－	－	－	－	－	0.7	3.9	0.5	－	

広鏃〔未成品〕

挿図番号	図版番号	分類	出土地点	層位	木取り	法量（cm） 着柄角度 1	2	A 最大長	B 最大幅	C 最大厚	D 頭部抉り幅	E 頭部抉り長	F 舟形隆起長	G 舟形隆起幅	H 柄孔長	I 柄孔幅	J 舟形隆起高さ	K 刃部厚	L	M ゲタの高さ	N	備考
57－1	52	Ⅰ	N7E4	12	柾目	－	－	52.8	20.5	4.8	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	
a						－	－	26.6	20.0	4.7	－	－	13.1	8.3	－	－	1.6	3.2	－	－	－	
b						－	－	26.2	20.5	4.8	－	－	13.1	7.2	－	－	1.7	2.7	－	－	－	
57－2	53	Ⅰ	N5E4	12	柾目	－	－	53.2	23.5	4.2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	
a						－	－	25.3	22.9	4.2	－	－	16.0	7.4	－	－	2.4	1.5	－	－	－	
b						－	－	27.8	23.5	3.8	－	－	16.0	8.0	－	－	2.0	1.5	－	－	－	
58－1	52	Ⅰ	N4E3	12	柾目	－	－	29.1	17.7	4.9	－	－	13.5	7.7	－	－	1.9	2.0	－	－	－	
58－2	53	Ⅰ	N3E3	11下	柾目	－	－	28.5	24.8	(5.2)	－	－	15.6	8.8	－	－	(2.4)	2.0	－	－	－	
58－3	54	Ⅰ	N8E4	12	柾目	－	－	29.3	23.9	4.3	－	－	15.2	8.1	－	－	1.8	1.4	7.1	－	－	樹皮が残っている
59－1	54	Ⅰ	N7E5	12	柾目	－	－	26.6	24.4	5.3	－	－	14.5	9.4	－	－	15.5	3.0	－	－	－	
59－2	54	Ⅱ	N7E3	12	柾目	－	－	28.8	17.4	4.2	－	－	15.3	9.0	－	－	1.8	1.5	－	－	－	
59－3	54	Ⅱ	N9E3	11	柾目	－	－	24.5	(16.7)	(3.1)	－	－	(12.9)	(5.8)	－	－	1.5	0.2	－	－	－	
60－1	55	Ⅲ	N7E3	11上	柾目	－	－	(31.7)	(27.4)	4.7	－	－	14.6	8.1	－	－	2.1	(0.9)	－	－	－	
60－2	55	Ⅳ	N4E3	12	柾目	－	－	36.4	20.6	3.8	－	－	－	－	－	－	－	(0.8)	－	－	0.9	
60－3		Ⅳ	N7E4	11下	柾目	－	－	24.9	17.9	2.5	－	－	－	－	－	－	－	1.7	－	－	1.4	

丸　　鏃

挿図番号	図版番号	分類	出土地点	層位	木取り	法量（cm）																備考
								A	B	C	D	E	F	G	H							
						1	2	最大長	最大幅	最大厚	頭部幅	柄孔長	柄孔幅		刃部厚							
61－1	56		N6E4	11下	柾目	24.0	12.0	(20.8)	(27.2)	3.1	18.9	(3.4)	(1.3)	(7.1)	(0.3)							
61－2	56		N8E6	12	柾目	(31.0)	－	(12.8)	(26.5)	(2.8)	22.0	－	－	(5.6)	－							
61－3	56		N6E3	12	柾目	－	23.0	(17.0)	(22.1)	(1.4)	－	(5.4)	2.4	－	0.2							
61－4	56		N6E4	12	柾目	－	58.0	(16.3)	(32.9)	(2.2)	－	(1.9)	(2.2)	－	0.2							
62－1	56		N3E3	12	柾目	－	－	(8.0)	(23.2)	(0.9)	－	－	－	－	(0.5)							
62－2			N3E3	12	柾目	－	－	(11.6)	(28.6)	(1.0)	－	－	－	－	(0.1)							
62－3	56	未成品Ⅰ	N3E4	12	柾目	－	－	22.7	29.5	(4.0)	－	－	－	(6.0)	－							未成品
63－1	57	Ⅰ	N8E5	12	柾目	－	－	27.8	31.5	4.0	－	－	－	3.1	－							同　上
63－2	57	Ⅰ	N8E3	12	柾目	－	－	25.6	35.5	2.6	－	－	－	6.0	－							同　上
63－3	57	Ⅰ	N7E4	12	柾目	－	－	(25.9)	(31.4)	(3.2)	－	－	－	(7.0)	－							同　上
64－1	58	Ⅰ	N8E4	12	柾目	－	－	24.5	(29.0)	3.9	22.3	－	－	5.1	－							同　上
64－2	58	Ⅰ	N4E4	12	柾目	－	－	26.4	37.3	5.0	－	－	－	5.2	－							同　上
64－3	58	Ⅰ	N5E3	10	柾目	－	－	25.5	39.0	5.5	－	－	－	5.7	－							同　上
65－1	59	Ⅰ	N7E4	12	柾目	－	－	25.6	36.0	5.6	－	－	－	6.4	－							同　上
65－2	59	Ⅱ	N8E4	9	柾目	－	－	25.5	28.6	3.1	20.9	－	－	2.0	－							同　上



鋤，えぶり計量位置模式図

諸　手　鍬

挿図番号	図版番号	分類	出土地点	層位	木取り	法量（cm） 着柄角度 1	着柄角度 2	A 最大長	B 最大幅	C 最大厚	D 柄孔長	E 柄孔幅	F 舟形隆起高	G_1 刃部厚	G_2 刃部厚							備考
66－1	60			12	柾目	88.8	83.0	35.4	11.5	3.6	3.4	3.3	2.25	0.6	1.3							
66－2	61		N５E４	11下	板目	－	－	64.1	15.4	6.6	－	－	2.65	2.5	3.0							未成品

鍬　？

66－3			N３E４	12	柾目	－	－	(17.7)	(10.0)	1.4	－	－	－	－	0.9							諸手鍬の刃部

又　鍬

挿図番号	図版番号	分類	出土地点	層位	木取り	法量（cm） 着柄角度 1	着柄角度 2	A 最大長	B 最大幅	C 最大厚	D	E 柄孔長	F 柄孔幅	G 刃部厚	H 歯間幅	I 歯幅	J 歯長					備考
67－1	60		N２E４	12	柾目	75.0	－	(15.8)	(11.4)	2.9	(4.2)	(4.0)	(1.8)	(1.2)	2.7	2.2	(4.9)					５本歯
67－2	60		N５E３	11下	柾目	70.0	76.0	(16.0)	(11.5)	1.9	(5.7)	2.5	(3.0)	(1.3)	3.2	1.8	(5.4)					５本歯

えぶり状木製品

挿図番号	図版番号	分類	出土地点	層位	木取り	法量（cm） 着柄角度 a 1	着柄角度 a 2	着柄角度 b 1	着柄角度 b 2	A 最大長	B 最大幅	C 最大厚	D	E	F 刃部厚	G	H	I 柄孔長	J 柄孔幅	K 柄孔長	L 柄孔幅	備考
67－3	61			11下	柾目	98.0	90.0	－	－	(10.5)	(45.1)	1.1	45.0	25.7	0.5	3.6	(1.7)	2.4	2.2	1.9	(1.0)	

鍬状木製品

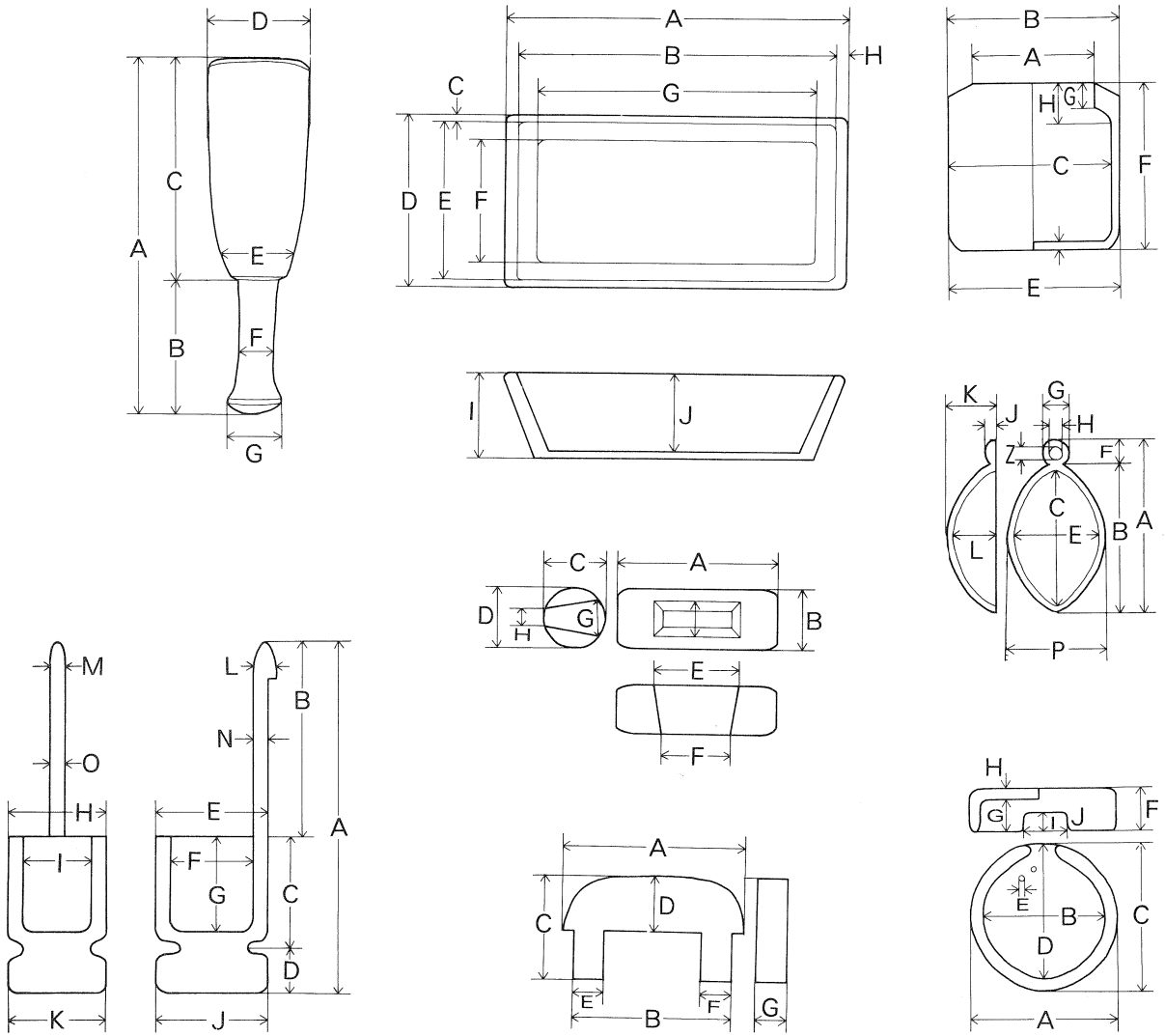
挿図番号	図版番号	分類	出土地点	層位	木取り	法量（cm）																備考
						着柄	角度	刃角度	A	B	C	D	E	F								
						1	2	3	最大長	最大幅	最大厚	柄孔長	柄孔幅	刃部厚								
67－4	62		N3E3	11下	板目	60.0	53.0	27.0	24.2	8.9	4.8	5.1	4.0	3.4								臼の転用か

鋤 Ⅰ 類

挿図番号	図版番号	分類	出土地点	層位	木取り	法量（cm）																備考
						A	B	C	D	E	F	G	H									
						最大長	最大幅	最大高	柄長				刃部厚									
67－5	60	Ⅰ	N6E5	11下	柾目	36.8	(16.7)	1.5	3.9	19.3	2.6	1.0	0.2									A面の右側辺がわずかに焼けコゲている
67－6	60	Ⅰ	N3E3	10	柾目	(25.9)	17.6	0.8	－	(18.3)	－	－	0.3									
68－2	62	Ⅰ	N8E4	9	柾目	48.1	11.8	(2.8)	15.2	－	(2.5)	2.0	(0.2)									着柄軸の全長は23.7cmB面は若干焼けコゲている

鋤 Ⅱ 類

挿図番号	図版番号	分類	出土地点	層位	木取り	法量（cm）																備考
						A	B	C	D	E	F	G	H									
						最大長	最大幅	最大高	柄長				刃部厚									
68－1	62	Ⅱ	N9E3	10	板目	(90.2)	(6.7)	3.7	79.6	－	3.7	3.0	0.8									定形
68－3	64	Ⅱ	N7E5	11下	柾目	(16.6)	(7.6)	(1.9)	(4.7)	16.6	(2.1)	(1.7)	0.3									


D
C
A
E
B
F
G
A
B
H
C
G
D
E
F
I
J
B
A
H
G
C
F
E
K
J
G
H
Z
F
C
E
B
A
L
P
C
A
D
H
G
B
E
F
M
O
H
I
L
N
B
E
F
G
C
D
A
K
J
A
C
D
E
B
F
G
H
G
I
J
F
E
B
C
D
A

横槌，容器，把手模式図

横　　槌

挿図番号	図版番号	出土地点	層位	法量（cm） a	b	c	d	e	f	g				木取	備考
69－1	64	N4E3	10	28.9	10.9	18.0	7.6	4.1	2.8	4.5				芯持	非常にていねいなつくり
69－2	64	N4E4	10	43.4	23.5	19.9	8.0 5.5＋α	6.5	3.2×3	3.4				芯持	ていねいなつくり 一部に焼痕
69－3	64	N4E3	12	4.2＋α	40.3	22＋α	－	7.5×6.8	3.2×3.5	4.3＋α ×4.3				芯持	非常にていねいなつくり 全面に焼痕
69－4	64	N8E4	11下	34.0	15.3	18.7	6.0×4.6	6.8×5.2	4.2×3.5	4.2×3.4				芯持	表裏とも中央凹む 使用痕と思われる。
69－5	65	N7E4	11上	29.9	13.9	16.0	6.0×5.2	6.8×5.0	3.7×3.7	3.3×3.4				芯持	表裏とも中央凹む、使用痕と思われる

槽

挿図番号	図版番号	出土地点	層位	法量（cm） a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	木取	備考
69－6	65			19.4	17.9	0.4	6.9＋α	?	?	12.0	1.3	7.9	6.2	板目材	短辺に径5～7㎜の孔あり。 全面ていねいに調整
69－7	65			28.8	21.0	0.7	13.5	12.1	9.9	17.0	2.0	3.0	2.0	板目材	
69－8	65	N6E5	11上	41.4＋α	33.5＋α	0.4	15.0	13.8	8.2	39.0＋α	8.0＋α	6.8	4.4	板目材	木口面、外面かなり荒れた状態
70－1	65	N9E3	9	42.3＋α	36.5＋α	1.0	15.5＋α	13.8＋α	10.5＋α	16.5	3.2＋α	8.4＋α	6.0	板目材	未成品

容　　器

挿図番号	図版番号	出土地点	層位	法量（cm） a	b	c	d	e	f	g	h			木取	備考
71－1	67	N6E3	11下	17.0	20.8	21.8	3.6	－	14.0＋α	1.8				板目材	
71－2				9.2	12.0	－	2.0	－	12.1＋α	－					
71－3	67	N8E6	11下	－	－	16.0＋α	－	10.0	10.0＋α	－	3.3			芯持材	

杓　　子

挿図番号	図版番号	出土地点	層位	法量（cm） a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	木取	備考
70－2	66	N8E5	11	36.9	25.0	7.0	4.9	7.8	6.0	4.9	7.8	7.1			3.2	1.9	2.6	1.7		

スプーン状木製品

挿図番号	図版番号	出土地点	層位	法量（cm） a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l				木取	備考
71－4	67		9	16.7＋α	14.6	13.4	10.1	9.7	1.6＋α	2.3	0.7	0.7＋α	0.7	3.0	1.5					

蓋状木製品

挿図番号	図版番号	出土地点	層位	法量（cm） a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	木取	備考
71－5	68			12.3	8.8	9.4＋α	7.5＋α	0.4	2.6	1.2	1.4	2.1	1.1	柾目材	
71－6	68	N８E４	11	12.5	12.0	12.5	11.4	－	1.5	－	－	－	－	柾目材	周辺を面取り

把手A

挿図番号	図版番号	出土地点	層位	法量（cm） a	b	c	d	e	f	g	h			木取	備考
71－10	68	N８E４	9	12.4	3.3	1.9	3.5	3.6	3.4	1.6	1.5			板目材	
71－7		N４E３	10	13.5	3.5	2.4	3.8	3.0	3.0	1.2	1.2			板目材	断面形「L」字形で厚さ２㎜のクサビ残る
71－9	68	N３E３	11上	13.1	4.3	3.1	4.2	4.3	3.9	1.6	1.3			芯持材	
71－8	68	N６E６	8	9.5	3.0	2.6	2.9	1.3	1.6	1.1	1.0			芯持材	孔は貫通せず

把手B

挿図番号	図版番号	出土地点	層位	法量（cm） a	b	c	d	e	f	g				木取	備考
72－11	68	N３E３	12	12.4	11.0	6.3＋α	3.8	3.4	3.1	2.4				柾目材	柾目横木取りで、鋤の柄とは考えられない

挿図番号	図版番号	出土地点	層位	器種	法量（cm） 全長	幅（径）	厚さ	木取	備考
70－3	66	N７E３	10	鉤状木製品	54.5	2.4	2.3	芯持材	２面を平坦に削る 上部は３面から削り出して円頭上に、下部は一面から削り出す 中央に鉤手状の突起
70－4	66	N６E３	9	同上	39.1	3.5	2.7	芯持材	全面ていねいに加工し断面形方形をなす 上部に1.8cm×0.7cmの方形の孔 中程に上方に向って鉤手状の突起
70－5	67	N５E４	9	同上	37＋α	3.5	2.9	芯持材	上部は丸木、下部は断面形に削り出す
70－6	67	N８E５	10	棒状木製品	33.2＋α	2.9	2.4	柾目材	上部から３cmの位置で一方向からの抉り
71－12	68	N８E４	11	栓状木製品	8.7	上部　3.6×３ 下部　2.2×2.2	－	板目材	
71－13	68	N６E３	10	弓	28.2	1.8×1.5	－	芯持材	弓筈は２面から削る
72－1	69	N３E４	9	棒状木製品	91.9＋α	3.7	3.8	芯持材	上部・下部を削り出す ３箇所に抉り
72－2	69	N４E３	11	棒状木製品	75.0	5.5×５	－	芯持材	両端は平坦。１～３面を加工
72－3	69		9	棒状木製品	57.6	2.9×2.8	－	芯持材	両端加工
73－1	69	N４E３	10	有頭棒	73.6	4.5	4.0	芯持材	上下部を円頭状に削り出す 凹部に結び痕と思われる摩滅
73－2	70	N４E３	10	有頭棒	53.8	3.4×3.2	－	芯持材	上部を円頭状に下部を刺突状に削り出す 上部に結び痕、下部に刺突痕と思われる摩滅
73－3	70	N８E５	12	同上	32.5	4.2	2.3	板目材	上部を木偶頭に下部を刺突状に削り出す 下部に刺突痕と思われる摩滅 一面は非常に滑らか
73－4	70	N４E３	11	同上	30.2＋α	5.5×3.3	－	芯持材	上部を３面から削って円頭状にする
73－5		N８E５	10	同上	7.7＋α	3.9×3.9	－	芯持材	上部を円頭状に削り出す
73－6	70	N９E３	9	同上	23.7＋α	3.4×3.4	－	芯持材	上部を一面から削り出す 凹部に結び痕と思われる摩滅
73－7	70	N４E３	10	同上	25.7＋α	3.9×4.3	－	芯持材	上部を円頭状に削り出す。その上にさらに円頭部ありか
73－8	69	N９E３	11下	同上	49.0＋α	2.5×1.6	－	芯持材	上部を円頭状に削り出す 上部から約12cmの位置に結び痕と思われる凹み

挿図番号	図版番号	出土地点	層位	器種	法量（cm） 全長	幅（径）	厚さ	木取	備考
73－9		N３E４	12	有頭棒	16.5＋α	1.6	0.8＋α	芯持材	下端焼痕
73－10	70			同上	63.1＋α	4.7×4.5	－	芯持材	上部を円頭状に削り出す 上部から約15cmの位置に一面から抉り。建築材か
74－1	71	N６E３	11上	中筒状木製品	44.5	5.7	1.5	柾目材	上下部とも両側縁に抉り 凹部に結び痕と思われる摩滅
74－2	71	N９E３	9	同上	22.5	5.4	1.4	柾目材	上下部とも両側縁に抉り
74－3	72	N３E４	12	不明木製品	34.1＋α	9.4	1.1	板目材	下部を尾鰭状に削り出す 中央に0.5×0.5cmの孔２
74－4		N７E４	8	台形木製品	12.6＋α	8.0	2.8	柾目材	
74－5	71	N８E３	10	櫂状木製品	48.9＋α	9.5	2.5	柾目材	下端から約15cmの位置に側縁に加工痕
74－6	71	N９E３	9	板状木製品	35.1	9.7	2.1	柾目材	
74－7		N４E３	11下	同上	23.6＋α	4.5＋α	1.7	板目材	両端に２×1.5cmの方形の孔２
74－8	72	N５E３	11	同上	21.7＋α	17.8＋α	1.8	柾目材	２箇所に径２～３cmの孔
74－9	72	N９E３	11下	同上	24.9	9.3＋α	2.0	柾目材	２箇所に径3.8～４cmの孔
74－10	72	N４E４	12	同上	39.5	20.2＋α	1.6	柾目材	下部に４～3.5cmの円形の孔２
74－11	72	N７E３	11下	同上	26.4	10.9＋α	1.0	柾目材	３箇所に径2.1～3.7cmの孔 一部に焼痕
75－1	72	N５E３	11下	同上	29.4	16.6	1.2	柾目材	下部に円形の孔２
75－2	73	N９E３	9	同上	33.5＋α	8.7	2.5	柾目材	下部左寄りに2.1×１cmの方形の孔
75－3		N６E５	11上	同上	34.6	9.3	1.3	柾目材	1.9×1.4cmの孔２ 一面は平坦だが反対面は丸い
75－4	73	N８E３	7	同上	32.2	5.8	1.5	柾目材	下部に3.3×1.7cmの方形の孔 上部に焼けた痕跡

挿図番号	図版番号	出土地点	層位	器種	法量（cm）			木取	備考
					全長	幅（径）	厚さ		
75－5		N4E4	11	板状木製品	73.7＋α	6.9	1.9	柾目材	上部に1.4×1.7cmの円形の孔
75－6	73		9	同上	44.0	11.0	2.0	柾目材	下部左寄りに6×1.2cmの孔
75－7	73	N9E3	9	同上	45.2	12.5	2.2	柾目材	中央に抉り
75－8	73	N7E6	11	同上	50＋α	21.4	2.1	柾目材	
76－1	73	N8E4	11下	同上	18.8＋α	23.7	3.2	板目材	
76－2		N7E5	11上	同上	22.4＋α	19.5	1.5	柾目材	
76－3	74	N9E4	11上	台状木製品	65.3＋α	9.5	6.7	芯持材	半截後上部を一面から加工 中程に刃物痕多い。作業台か
76－4	74	N0E3	10	木錘状木製品	10.7＋α	7.3	6.3	芯持材	上部は下部より小さいか
76－5	74	N6E3	10	同上	11.8	8.4	7.4	芯持材	両端加工
76－6	74	N8E3	10	同上	16.0	8.9	8.1	芯持材	両端加工
77－1	74	N3E3	11	同上	33.5	13.9	9.9＋α	芯持材	両端加工
77－2	74	N9E3		同上	34.9	13.9	9.7	芯持材	両端加工
77－3	74	N7E4	10	同上	38.1	上部12.7×14.8 下部 9.0×8.3	－	芯持材	下半を削る。横槌未成品か
77－4		N4E3	10	楔形木製品	15.9	4.7	3.8	板目材	一面は加工なし。杭を転用か
77－5		N8E5	10	同上	25.8	6.8×6.2	－	芯持材	上部を平坦に加工。杭を転用か
78－1	75	N8E4	9	杭状木製品	39.9	9.5	3.2	柾目材	板材の下部を加工
78－2	75	N8E3	10	同上	49.0	10.3	1.6	柾目材	板材の下部を加工

挿図番号	図版番号	出土地点	層位	器種	法量（cm）			木取	備考
					全長	幅（径）	厚さ		
78－3	76		10	杭状木製品	76.8＋α	5.5×5.3	－	芯持材	上部は枝分岐部分を加工 下部は3面から加工
78－4				同上	58.6＋α	5.0	3.5	柾目材	断面方形。先端は2方向から削る
78－5	76	N4E3	10	同上	27.4＋α	10.2 ×(9.2＋α)	－	芯持材	下部は2方向から削って杭状にする
78－6	75		10	同上	31.6＋α	4.5×0.6	－	芯持材	下端は3方向からの加工
79－1		N9E3	9	同上	27.1＋α	9.0×7.0	－	芯持材	下端は2面から加工
79－2		N7E3	8	同上	36.4＋α	7.6×7.1	－	芯持材	下端は3方向から加工
79－3				同上	36.4＋α	7.6×7.1	－	芯持材	下端は3方向から加工
79－4	76	N7E5	11下	同上	80.6	5.4×4.9	－	芯持材	下端は二面から加工
79－5		N8E3	10	同上	84.5	2.7×2.5	－	芯持材	下端を加工。一面は加工なし
79－6		N7E6	8	同上	67.4＋α	4.5×3.7	－	芯持材	下部を一面から加工
80－1	76	N9E3	10	同上	247.8	7.1×8.2	－	芯持材	下部を三面から加工。建築材を再加工か
80－2	76	N9E3	11下	建築材	146.7＋α	22.4×20.5	－	芯持材	上部に深16.1cm、幅8.2cmの刳り込み

Ⅵ. タテチョウ第2次調査出土動物遺存体

金 子 浩 昌

1977，78年の発掘につづく，1984，85年の第2次の朝酌川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡調査の際に出土した脊椎動物についての報告である。前回[1]の場合に比べて，層位の把握も可能となっているので，それに基いた整理を行なったが，これらはこの地域の弥生期より古墳期にわたる狩猟活動を知る好資料である[2]。報告に当って，資料の送付その他についてお世話いただいた島根県教育文化財団の柳浦俊一氏に厚く御礼を申し上げたい。また整理に当り早稲田大学考古学研究室野崎哲会君が分類カード，図表の作製に当られ，また千葉県市原市埋蔵文化財センターの近藤敏氏に実測等についてお世話になった，上記の方々にも併せて御礼を申し上げる次第である。

脊椎動物遺体種名表

脊椎動物門	Phylum Vertebrata
Ⅰ. 硬骨魚綱	Class Osteichthyes
スズキ目	Order Perciformes
タイ科	Family Sparidae
マダイ	*Pagrus major*
Ⅱ. 鳥　綱	Class Aves
フクロウ目	Order Strigiformes
フクロウ	*Strix uralensis*
スズメ目	Order Passeriformes
カラス科	Family Corvidae
カラス	*Corvus sp*
Ⅲ. 哺乳綱	Class Mammalia
クジラ目	Order Cetacea
科属不明	Family et Ge. indet.
食肉目	Order Canivora
イヌ科	Family Canidae
イヌ	Canis famirialis
キツネ	*Vulpes vulpes*
タヌキ	*Nyctereutes procyonoides*

イタチ科　　Family Mustelidae

アナグマ　*Meles meles*

偶蹄目　　Order Artiodactyla

イノシシ科　Family Suidae

イノシシ　*Sus scrofa*

シカ科　　Family Cervidae

シカ　　*Cervus nippon*

硬骨魚綱

マダイ

上後頭骨　　N6E5　11層下層

この部分のみがはずれたものである。厚さ17.4もある大きなものである。表面にたたき傷らしい痕がのこる。

鳥　綱

フクロウ

左大腿骨　　N4E3C　10層　No.20

全長67.0±（近・遠両端を少しく欠損）。雌位の大きさである。フクロウの出土はまだ類例も少ない。夜行性であるが何か身近さを感ずる鳥である。

カラス

左脛骨　　N0E3　12層

大腿骨は現存全長66.4と長い。形態的に疑問がのこったが，一応カラスのものとしておく。脛骨は全長（骨幹）93.3でややきゃしゃな骨である。ハシブトカラス，ハシボソカラスの区別を明瞭にみることができなかった。

哺乳綱

クジラ目，N

N4E4　11層下層

115×50程の小片と採集したのみである。

イヌ

胸椎　1　　N8E6　12層

頸椎　1　　N5E4　11層下層

腰椎　1　　N8E6　11層上層

頭骨　1　　N8E6　11層

肩甲骨1	N8E4	11層下層
上腕骨4	N5E4	11層上層
	N6E5	11層上層
	N8E5	11層下層
	N8E6	12層
橈骨　1	N7E4	11層下層
骨盤	N7E4	11層4層
	N1E4	12層
大腿骨	N2E4	11層
	N3E4	12層
	N4E3C	10層
	N7E4	12層
	N8E7	11層
脛骨	N8E6	

イヌの遺骸はイノシシ，シカに次いで多く上記の17点があった。すべてばらばらとなった骨であったが，ほぼ完全な頭骨が1点あり，他の骨もほぼ原形を保つものであった。特に左右のそろった骨盤が出土していることは，骨が埋没してからあまり移動することがなかったことを示すのであろう。

頭骨：保存のよい骨で，年令の進んだ固体のものであったために良く保存に耐えたのであろう。頭頂の矢状隆起がよく発達し雄のものと思われる。

頭骨最大長153.6で，長谷部（1952）のごく小さい方に属し，西日本に多い小さいタイプの系統を引くイヌであったと考えられる。また，頬骨弓幅広く，頭骨示数63.93と大きい。口蓋もやや広いタイプである。側面観にみられる額のストップは浅く，縄文犬のような顔付きになる。

四肢骨：上腕骨に全長105.8という非常に小さい例があるが，縄文犬にも稀にはあったらしい。脛骨の最大長125.2というのも小さい。それらを除くと中小から中型のものまで含み，かなり大きさにバラツキのあったことがわかる。一般に骨はきゃしゃで，長さの割に細い。

タテチョウ遺跡で出土したイヌは，四肢骨では数が多く，小型から中型までふくんでいた。また幼獣骨や骨折による変形骨があった。縄文犬的な顔付きであるがやや丸味のある顔が特徴であったが，四肢骨はきゃしゃで，縄文犬との違いが目立つのである。

イ ヌ 頭 骨 計 測 表

	項　　目	計 測 値	計 測 点	斎 藤
1	頭 骨 最 大 長	153.6	i－Pr	1
2	基 底 全 長	146.4	Pr－㉕	－
3	頭 骨 基 底 長	139.4	Pr－ba	3
4	硬 口 蓋 長	74.7	Pr－Sta	86
5	硬 口 蓋 最 大 幅	56.0	(骨で計測)	－
6	頭 蓋 幅 (1)	50.4	eu－eu	35
7	頬 骨 弓 幅	98.2	zy－zy	8
8	両 耳 幅	58.0	au－au	36
9	脳 頭 蓋 長	82.6	n－i	9
10	頭 蓋 高 (1)		ho－br	152
11	バジオン・ブレグマ高	52.4	ba－br	61
12	最 小 前 頭 幅	32.0	fs－fs	40
13	前頭頬骨突起端幅	47.3	ect－ect	41
14	後 頭 最 大 高	41.5	i－ba	148
15	後 頭 三 角 幅	57.7	ot－ot	144
16	最 小 眼 窩 間 幅	31.0		42
17	顔 長	74.0	Pr－n	33
18	吻 長 (1)	66.9	Pr.－O.o.	64
19	吻 長 (2)	50.3	Pr－if	65
20	吻 幅 (犬 歯 部)	31.7	⑦－⑦	46
21	吻 高		n－162	
22	鼻 骨 凹 陥 深	4.8		73

歯 牙 計 測

	右		左	
	近 遠 心 径	頬 舌 径	近 遠 心 径	頬 舌 径
C				
P4	16.0 (外側)	7.8	15.8 (外側)	7.5

イヌ四肢骨計測値

肩甲骨

左　N８E４　11層下層

2．関節窩幅	21.4
3．関節窩長	15.0
4．頸部最少幅	23.2

上腕骨

	左.N５E４	左.N６E５	右.N８E５	右.N８E６
	11層上層	11層上層	11層下層	12層
1.全長	140.5	129.0±	105.8	127.0
2.上端最大幅	—	—	19.8	21.0
3.骨幹最小幅	10.0±	11.0	9.6	11.0
4.下端最大幅	—	24.0±	—	26.5

橈骨

左.N７E４　11層下層

1.最大長	127.5
2.上端最大幅	16.0
3.中央最小幅	11.4
4.下端最大幅	20.1

骨盤

	右.左.N７E４	右.左.N１E４
	11層上層	12層
1.寛骨長	129.5	128.5
2.腸骨最小幅	17.0	17.0
3.寛骨臼最大長	20.5	18.9

大腿骨

	左.N２E４	左.N３E４*	左.N４E３C**	左.N７E４***	右.N８E７
	第11層	12層	10層№19	12層	11層
1.全長	155.0	—	—	—	145.6
2.最小横径	12.2	11.3	9.3	9.7	11.3
3.下端最大幅	26.4	—	—	—	24.0

＊　　奇形骨

＊＊　幼体：全長　103.7

＊＊＊　幼体：全長　108.2

脛骨

右　Ｎ８Ｅ６

1.最大長　125.2

2.上端最大幅　25.0±

3.下端最大幅　8.3

タヌキ

左寛骨　Ｎ５Ｅ４　12層

タヌキとして確認できたのはこの１点のみである。

キツネ

頭骨　Ｎ５Ｅ６　11層下層

鼻骨がはずれて失われている点，左右の頬骨を欠く点を除くとほぼ完存する頭骨である。頭骨全長142.0と大きな頭骨である。このような骨がほぼ完存する状態で出土するのも低地性の遺跡であるからであろう。

アナグマ

右上腕骨　Ｎ５Ｅ４　10層

近・遠位の両端を欠く。小さくまだ若い個体のものであったらしい。欠損しているのもそのためであったらしい。

イノシシ

シカより僅かに出土量が少ないかとは思われるが，さほど大差はない出土であった。

頭骨：完存する頭骨はないが，上顎・前頭部から後頭にかけてのこる標本が３点あり，上顎部のみのこる標本が１点，その他断片な標本10点を数える。脳頭蓋の部分をのこすのは先にあげた３点のみである。

最も大きくのこる標本は前頭骨と後頭鰓までのこるものでＮ７Ｅ３　11層下層の出土である（図版80）。老成した個体の骨であったので，こわれ易い前頭から頭頂にかけてがのこったのであろう。しかし，この頭骨の底面部は無く，当初この頭骨を前頭から頭頂にかけてのびる面に平行するような形で割ったのではないかと思われる。これはやはり脳髄の摘出のためであって，その後この割られた面が腐蝕して現在みるような状態になったと思われる。これに対して，頭蓋を正中線を中心に左右に分断する方法もしばしば行われており，その例がＮ６Ｅ４　11層上層出土の左頭頂～側頭骨

片である（図版81－２）。　割れ口は骨の腐蝕のために明瞭でなくなっているが，おそらく特別な加工があったのであろう。

今一つの例に脳頭蓋部のほぼのこる標本がある。同地点より左上頬骨が出土していて同一個体の可能性がある（図版81－１）。前記２例のように頭蓋を割ることは行われていない。現存する標本では頭蓋腔に通ずる孔がみえるが，原形は篩骨でふさがれている。従って，この場合は脳髄は後の大後頭孔から摘出されたものと思われる。この作業のために，このイノシシの後頭につく後頭顆のうち左側が削り取られ，後頭孔が大きくなっている。

以上の他に後頭底部，側頭骨の一部などが知られるが，それらは上記したような頭蓋の破壊によって生じた断片なのであろう。

下顎骨：僅か２点が得られているだけである。他に下顎歯も得られていないので下顎骨は無かったのであろう。歯はM_3まで萌出したものとM_3未萌出のものである。

四肢骨

肩甲骨　右側の肩甲骨３点があり，１例のみ若い個体で，関節骨端がかじられてない。

上腕骨　珍しく近位端をのこす標本がある。遠位骨端３例中，骨端を欠く例が１。

橈骨・尺骨　この２つがゆ着した状態で出土している例が１点ある。尺骨は２例あったが，いずれも近位端（遠位不明）のみか，両端の骨端を失っていた。

寛骨　１例だけがあった。

大腿骨　６点と出土例は多かった。ただしすべて骨端を欠くとか骨端のみという標本である。

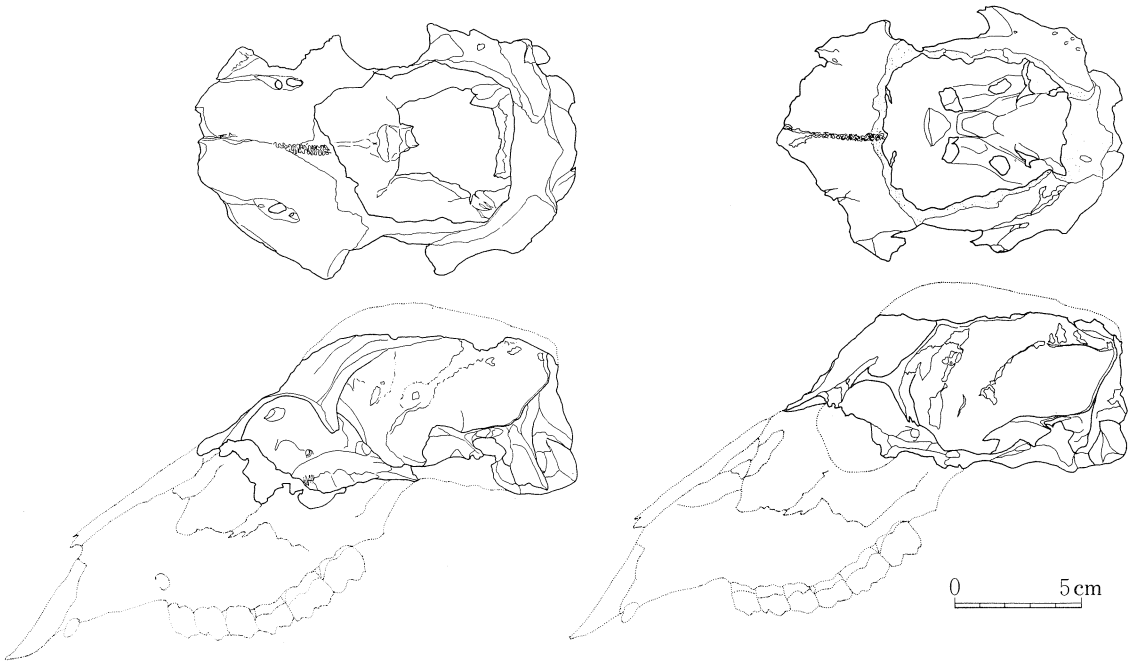
脛骨　４点ある。近端骨端を欠く例が１点。

距骨・踵骨　距骨が３点，踵骨１点で出土地点，大きさ，層位から多分別個体のものであろう。

ニホンジカ

イノシシとともに多くの骨を出土した。その中には，かなり保存の良い頭骨や四肢骨が含まれていた。以下それらについて概要をのべる。

頭骨：断片となった骨を含めて10点が出土している。そのうちＮ７Ｅ６　11層下層，北壁際11層下層からは脳頭蓋部分をよくのこす標本が出土している。その二つはいずれも雌獣のもので同じように上顎部・頬骨を欠損したものであるが，頭頂に径60～70㎜前後の孔があけられている。この孔は不規則な形をしているが，意図的にあけられたもので，穿孔周壁には骨を割った細かい打欠きの痕跡をみることができる。脳頭蓋の完存したのは二例のみであるが，他に前頭部分の断片，後頭底部断片などがいずれも11，12層より出土していて，同様の加工を施したのではないかと推測される。これらの加工が脳髄を抽出するためのものであったことはもちろんである。そして，この形の穿孔は雌獣のように頭蓋が半球状を呈している場合には可能であるが，雄獣のように前頭部に角坐の突



第１図　脳髄を摘出するために頭頂部に穿孔された，シカ♀の頭骨ａ：上面観，ｂ：側面観
全く同じ様に頭部に穴をあけている例が２点ある。こうした方法が一搬的であろうが上顎部分は当初はあったのであろうが後に失ったと思われる。

起がある場合は，角を角坐骨から切断する方法がとられるために普通は前頭部と頭頂・後頭部が分断される形となる。幾つか出土している角坐をもつ角あるいは前頭骨片はその破片であり，また前回の発掘の際の出土品で報告した後頭部の標本もその好例である（第１次報告図版Ｔ３．４ａ・ｂ）。

顎骨：上顎・下顎骨ともに数は少ない。ほぼ完存する下顎骨は１点を得ているのみである。

右鹿角：角冠の部分を少欠し，第１枝の先を失う他は形をのこす。落角である。角坐径41.0×46.4，角幹（第１～２枝間）中央径24.0×22.0。小さい角である。

以上の他に鹿角片とされるものの出土は少なかった。

椎体と肋骨：頸椎14，胸椎１，腰椎９点と肋骨１点が出土している。椎体は頸椎と腰椎に集中する傾向がみられるが，肋骨があまり発見されないところから，胸部の骨は別に早く処理されていたのかも知れない。

肋骨は確認されたものは右第４肋骨である。近位端から10cm程，そして10cm位の間に骨の異常な増殖を認める。元は現存する増殖よりもさらに大きくふくらんでいたものなのであろう。増殖は外表面よりも内側の方に増殖している。内側に何か病的な疾患があったのであろう。

四肢骨

肩甲骨　肩甲骨の関節窩をのこす標本が７点ある。11・12層の出土である。すべて骨端の化骨したものであるが，雄成獣と思われるＮ３Ｅ４　11層上層，Ｎ４Ｅ３　12層，西壁際12層上層出土の

大型のものと，若いか雌ではないかと思われるものである。このうちＮ２Ｅ３　第11層下層出土の右肩甲骨は若い個体で骨も充分に発達していない標本である。特に頸部から関節窩にかけて海面体が露呈し一部骨も腐蝕している程である。この肩甲骨の頸部には骨の腐蝕痕があり，その部分に何かを巻きつけたような浅い溝が２～３条にわたってみられる。骨体部の方に特別の加工を認めることはできないが，何らかの目的でこの肩甲骨が使われていたのではないかということを想像させる。

上腕骨：遠位骨端部分の出土が11点と大部分を占める。遠位骨端は不明のもの１を除いてすべて完存する。大形の雄と思われるもの３例とやや小さい骨端をもつものがある。すべて10～12層の出土である。近位骨端をもつ標本は僅かに３点である。

橈骨：完存する標本２点，他に近・遠位のいずれかの骨端をのこす標本が２点づつである。橈骨は両骨端を比較的検出し易い。しかし，大きさ，近・遠位と左，右と層位が一致するものはなかった。

尺骨：断片的な標本を得たにすぎなかった。

骨盤：左右分離した寛骨を５点得ている。近・遠位の両端を欠くが寛骨臼部付近はよくのこされていた。11，12層の出土である。層位，左右，大きさで一致する標本はなかった。

大腿骨：近・遠位の骨端を欠くか，もしくは脱れたものなど４点を得ているのみである。近・遠位骨端のはずれたもの２例があり，３才未満の個体であろう。大腿骨は最も破壊され易い骨である。

脛骨：保存され易い骨であったが，遠位骨端左右各１点を得たのみであった。同層位，同時の出土で，大きさはかなり似るが完全一致とはいえなかった。

距骨・踵骨：３点づつ同数の出土をみたが，そのうち同層位，同地点出土の距骨と踵骨があったが，全く大きさの違うものであった。

中手骨及び指骨：この種の骨の出土は少なかった。中手骨は中足骨とともに骨器の素材となることが考えられるので破壊が予測されるが，完存している標本もある。この標本は遠位骨端がはずれていた。

ヒ　ト

頭頂骨右　Ｎ５Ｅ５　11層下層

脛　骨　　Ｎ６Ｅ３　№18

２点の人骨が出土している。いずれも水磨破損を一部にみる。頭頂骨，脛骨とも骨質薄く若い人の骨のように思われる。第１次調査の際にも人骨が出土しており，同様に水磨損傷を受けている骨であった。

タテチョウ遺跡出土の動物遺体にみる特徴

今回の調査で検出された動物骨は以上にのべた通りであるが，その多くが10層以下13層に至る間

で出土し，特に11～12層で多かった。この間の時期との対応はほぼ次のようになると考えられている。

12層　　弥生時代前期～中期中葉

11層　　弥生時代中期

9・10層　古墳時代中頃

資料的に充分とはいえないが，弥生時代の中期を主体として堆積したものと考えられる。その大部分はイノシシ及びシカであって，両種の間に大差はなかったようである。また，およそ成獣あるいは亜成獣の個体が対象となっており，特に若い個体が多いということは認められなかった。

イノシシとシカを除くと，その他の獣で遺体の多かったのはイヌであった。弥生期のイヌの頭骨など貴重な資料を得たが，それらがまた縄文期のイヌとやや形質を異にしている点に注目されるのである。例えば大きさにおいて，西日本の縄文期ではみられない中形になる個体が認められ，これは近畿大阪方面の弥生期の遺跡で知られてきている中形犬と共通することかも知れない。しかし，一方その四肢骨はきゃしゃで細く，縄文犬とは似つかわしくない形質である。頭蓋もまたそうであって，やや丸味の強い顔付きになっていた。こうした変化を具体的に説明するには資料的に不足しているが，この時代の狩猟活動の上に何らかの違いの生じていることを予測させるのである。

獣骨以外では僅な鳥骨と魚骨１点があったのみである。魚はマダイ１点で，前回ではスズキ１点である。しかし，同時に出土しているヤス先，前回の釣針のことを考えれば，積極的な漁撈の活動のあったことを予測しないわけにはいかない。むしろ，遺体はその片鱗をうかがうものといえるのであろう。

骨角加工品

(1)　鹿角加工品

左鹿角角坐部　Ｎ７Ｅ３　10層（第２図１　図版88）

角坐部から第１枝の分出する基部に当る部分である。分岐部の角幹と枝の部分にはたたき切りの痕跡がのこり，角坐部の直下にやはり切断したと思われる痕跡をみる。しかし，この部分は摩滅して明瞭ではない。これ自体角器であったのではなく，角幹を使うために切り棄てられた部分なのであろう。

(2)　鹿角坐部分　Ｎ７Ｅ３　11層下層（第２図２　図版88）

同じ左側の鹿角の角坐付近である。角幹部はさらに高い位置で切られており，第１枝も少しく出たところで切られている。のこされているのは外側であって内側は腐蝕し，鹿角の1/2は失われている。角坐骨が殆んどみられないので落角ではなかったかと思われる。

(3) ヤス状刺突具

全長　54.2　　最大径　7.0×6.0

素材：シカ，中足骨

完存・細幅で鋭く尖る製品である。シカの中足骨後面の側方部を利用したもので，製品の基部に近い最も幅広くなった部分の一面に骨の髄腔部分を僅かにみることができる。先端は細く尖り研磨され平滑となる。最大径部は殆んど基部に近いところに位置している。この最大径部の周囲に斜行する擦痕がみられる。そして，さらにその最後端の16㎜程は再び研磨された平滑部分となる。この部分に黒色の付着物がのこり，さらにやや白ぽい色となって，他の部分と区別できる。おそらくこの部分に柄となるものが装着されていたのではないかと思われる。とすると，この装着部はかなり末端に近いものとなるが，さらにその上からひもなどで緊縛したのではないかということは，先にのべた基部近い部分の擦痕からも推測される。

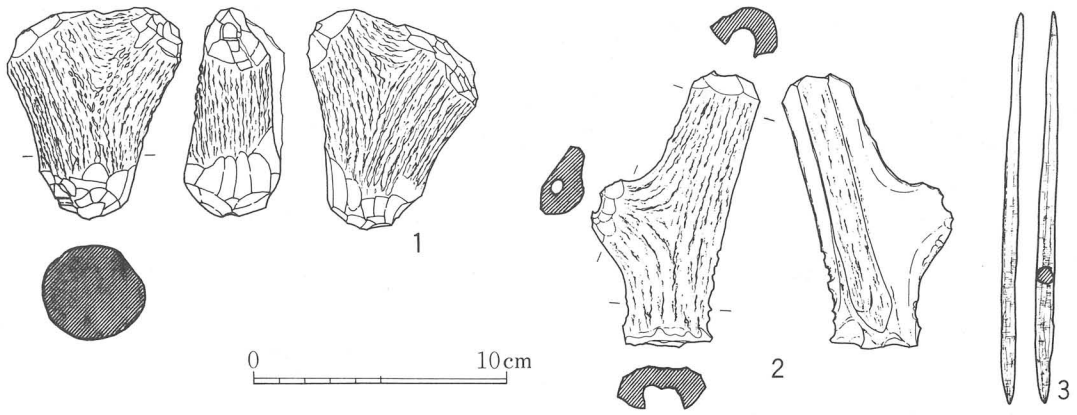
(4) 小　　結

タテチョウ遺跡から出土した骨角製品は前回の分を併せても多くない。前回は興味あるイノシシ犬歯製の組合釣針の鈎先部と加工痕をもつ鹿角片が出土している。イノシシ犬歯製の鈎先については，当時現物が失われ，筆者のみたのは片面からの写真のみであったので，加工鹿角片との関連から鹿角製も考え得るとしたものである。

今回は釣針関係はなく，保存良好のヤス状刺突具が１点あった。これまで弥生時代遺跡から発見されているこの種のヤス状刺突具には，この種の細型のものが少なくない。特に大阪湾周辺域での出土例がそのようで，木製品もある。タテチョウ遺跡から出土したヤス先は，その製法においてこの大阪湾沿岸域のものと関連があると考えてよいであろう。こうした形態の製品がどの程度発見されるか，西の方との関連の深い組合せ式の釣針とともに今後興味深い問題である。

註(1) 金子浩昌：脊椎動物遺体「朝酌川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告１」P.194
昭和54年３月30日　島根県教育委員会

(2) 金子浩昌，牛沢百合子　「亀井遺跡出土の動物遺存体」
宮沢泰史，「亀井遺跡のイヌについて」
「亀井遺跡」，『寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造
工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅱ，p.183，p.205，大阪文化財センター，1982
金子浩昌：「土橋遺跡弥生期土壙（ＳＫ80）内出土のイヌの遺体」
『土橋遺跡』　袋井市教育委員会，1985



第2図　骨角加工品（1：3）

イノシシ遺存体出土量表

層位	出土地点		cra 頭蓋骨 *1	md 下顎骨	vert rib 脊椎骨 肋骨 *2	scap 肩甲骨 *3 p Ⓢ d	hum 上腕骨 p Ⓢ d	rad 橈骨 p Ⓢ d	ul 尺骨 p Ⓢ d	mc 中手骨 p Ⓢ d	pel 寛骨 p Ⓢ d	fe 大腿骨 p Ⓢ d	tib 脛骨 p Ⓢ d	fib 腓骨 p Ⓢ d	ca 踵骨	ta 距骨	mt 中足骨 p Ⓢ d	dig 指骨 I II III	fr. (一括して記入)
10層	N3	E3	r l									①							
	N4	E3	r par l 後頭顆				1						1						1 (rib)
	N5	E3	r tem l 上顎骨片					1											
		E4	r l		Cer														
	N6	E3	r l					1											
	N7	E3	r l										1						
		E4	r tem l		S														
	N8	E3	r l			1													
		E4	r l				1								1				
	N9	E3	r l				(一部欠)1												
		E4	r l										①(下部)						
11層	N0	E3	r l											①(下層)					
	N1	E3	r l			(下層) 1	1 (上層)												
	N2	E4	r l		At														
	N4	E3	r 上顎骨 l)cra (下層)	1 1															
	N5	E3	r (上層) 後頭顆 l tem (下層)		Cer.L. (下層)							1 (下層) fr2 (下層)							2 (下層)
		E4	r l		S(fr) or シカ? (上層)			1 (下層)											1 (Vert) (下層)
	N6	E3	r l		Vert (下層)								(上層) (骨端部欠)1						1 (rib) (下層)
		E4	r l cra		At (下層)		(上層) 1												
		E6	r (下層) Cra (fr) l zygo (fr) (下層)																
	N7	E3	r l)cra (下層)																1 (scap) (上層)
		E4	r l		Cer.														
		E5	r l																
		E6	r l	下顎枝(上層) 1*															

層位	出土	地点	cra 頭蓋骨 *1	md 下顎骨	vert rib 脊椎骨 肋骨*2	scap 肩甲骨 *3 p Ⓢ d	hum 上腕骨 p Ⓢ d	rad 橈骨 p Ⓢ d	ul 尺骨 p Ⓢ d	mc 中手骨 p Ⓢ d	pel 寛骨 p Ⓢ d	fe 大腿骨 p Ⓢ d	tib 脛骨 p Ⓢ d	fib 腓骨 p Ⓢ d	ca 踵骨	ta 距骨	mt 中足骨 p Ⓢ d	dig 指骨 I II III	fr. (一括して記入)
11層	N8	E3	r l		At (下層)														
		E4	r l					1←接合→1 (上層)											
		E5	r l			1 (下層)							①(下層)						1 (上層)
	N9	E3	r l (後頭顆 上層)		Cer.2 (上下層)														1 (上層)
	北排	水溝	r l									(骨端部のみ) 1 (下層)	1 (下層)						
12層	N4	E3	r l												1				
	N5	E4	r l													1			
		E6	r l									(骨端部欠) 1							
	N7	E4	r l									(骨端部のみ) 1				1			
		E5	r l				1												
	N8	E3	r l						1										
		E6	r l		T (No4or5)														
	N9	E3	r l		L														
13層	N5	E4	r l																1
		E6	r l								1								1
	N6	E6	r l	par (fr.幼)															
	N7	E5	r l		Vert														
	N9	E3	r l																1

*1 occ 後頭骨, par 頭頂骨, tem 側頭骨, fro 前頭骨, inc 切歯骨, zygo 頬骨, hyo 舌骨

*2 At 第一頸椎, Ax 第2頸椎, Cer 頸椎, T 胸椎, L 腰椎, S 仙椎, Cau 尾椎, R 肋骨

*3 cora 烏口骨, clav 鎖骨

* mdと同一

イノシシ歯牙出土量表

	出土点	L	R
		前頭骨他＊1 / 前頭部切断 / 前頭骨落角 / 前頭骨角 / 前頭骨 / 前頭骨 / 前頭骨

層位	出土	地点	cra 頭蓋骨 *1	md 下顎骨	vert rib 脊椎骨 肋骨 *2	scap 肩甲骨 *3 pⓢd	hum 上腕骨 pⓢd	rad 橈骨 pⓢd	ul 尺骨 pⓢd	mc 中手骨 pⓢd	pel 寛骨 pⓢd	fe 大腿骨 pⓢd	tib 脛骨 pⓢd	fib 腓骨 pⓢd	ca 踵骨	ta 距骨	mt 中足骨 pⓢd	dig 指骨 IⅡⅢ	fr. (一括して記入)
11層	N5	E4	r l							1(上層)									
		E5	r l			(下層)1 1(かじり痕)下層													
		E6	r l		Cer (No.5) (上層)							1(遠位端欠)							
	N6	E3	r l												1(上層)				
		E4	r tem l 後頭顆																
		E5	r l				(骨端部欠)1 (下層)												
		E6	r l					1(上層)				1(骨端部のみ) (上層)							
	N7	E3	r l					(上層)1											
		E4	r l		L							1						基節骨 (上層)	
		E5	r l fro (下層)		L														
		E6	r l)cra (下層)		Ax (下層)														
	N8	E3	r l		At (下層) Cer (No.5) 2 (うち1つ下層)	1	(骨端部欠)1 (骨端部欠)1	下層	1(骨端部のみ) (上層)						1(上層)	1(上層)			
		E4	r l		Cer2 (No.5L.2) (上層)														
		E7	r l		At (下層)														
	N9	E3	r l ant (fr) fro (下層)			(骨端部のみ)	1(上層)1					①(上層)							
	北排	水溝	r l Cra (下層)		T	(下層)1	(下層)2								1(下層)				
	西排	水溝	r l		L														
12層	N0	E3	r l		Ax														
	N1	E3	r l		Cer (No.3)														
	N3	E4	r l		rib (No.4)														
	N4	E3	r fro l (付角座ant)			1													
	N5	E4	r l								ℓ 1								
	N6	E3	r l					1											
		E4	r l													1			
	N7	E4	r l					1											

層位	出土地点		cra 頭蓋骨 *1	md 下顎骨	vert rib 脊椎骨 肋骨 *2	scap 肩甲骨 *3 p Ⓢ d	hum 上腕骨 p Ⓢ d	rad 橈骨 p Ⓢ d	ul 尺骨 p Ⓢ d	mc 中手骨 p Ⓢ d	pel 寛骨 p Ⓢ d	fe 大腿骨 p Ⓢ d	tib 脛骨 p Ⓢ d	fib 腓骨 p Ⓢ d	ca 踵骨	ta 距骨	mt 中足骨 p Ⓢ d	dig 指骨 I Ⅱ Ⅲ	fr. (一括して記入)
12層	N8	E4	r 後頭顆		Cer ③		1												
			l																
		E6	r cra		L														
			l																
	N9	E3	r				1												
			l																
	西排	水溝	r			1													
			l																
13層	N2	E4	r		At														
			l																
	N5	E4	r ant (fr)																
			l																
	N7	E3	r										1						
			l																
	N8	E6	r									1							
			l																
11層	S1	N3	r					1											
			l																

*1 occ 後頭骨, par 頭頂骨, tem 側頭骨, fro 前頭骨, inc 切歯骨, zygo 頬骨, hyo 舌骨 ant 角
*2 At 第一頸椎, Ax 第2頸椎, Cer 頸椎, T 胸椎, L 腰椎, S 仙椎, Cau 尾椎, R 肋骨
*3 cora 烏口骨, clav 鎖骨

シカ歯牙出土量表

	出土地点	L	R
		前頭骨 前頭角 落坐骨 $I^1 I^2 I^3 \underline{C}$ $P^2 P^3 P^4$ $m^1 m^2 m^3$ $M^1 M^2 M^3$ 頬骨 頬骨弓 側頭骨 頭頂骨 後頭骨 後頭骨鱗 頸骨 *1 切断 落角 角	前頭骨 前頭角 落坐骨 $I^1 I^2 I^3 \underline{C}$ $P^2 P^3 P^4$ $m^1 m^2 m^3$ $M^1 M^2 M^3$ 頬骨 頬骨弓 側頭骨 頭頂骨 後頭骨 後頭骨鱗 頸骨 *1 切断 落角 角
12層	N 8 E 6		$(P^3 P^4) M^1$ M^3

*1 inci 切り歯骨, max 上顎骨, pala 口蓋骨

	出土地点	L	R
		$I_1 I_2 I_3 \overline{C}$ $P_2 P_3 P_4$ $m_1 m_2 m_3$ $M_1 M_2 M_3$ 下顎角 関節突起 筋突起	$I_1 I_2 I_3 \overline{C}$ $P_2 P_3 P_4$ $m_1 m_2 m_3$ $M_1 M_2 M_3$ 下顎角 関節突起 筋突起
10層	N 8 E 4	$(P_3 P_4 M_1 M_2 M_3)$	

イノシシ・ニホンジカ遺存体出土量集計表

種類	出土位	cra 頭蓋骨 *1	md 下顎骨	vert rib 脊椎骨 肋骨 *2	scap 肩甲骨 *3 p Ⓢ d	hum 上腕骨 p Ⓢ d	rad 橈骨 p Ⓢ d	ul 尺骨 p Ⓢ d	mc 中手骨 p Ⓢ d	pel 寛骨 p Ⓢ d	fe 大腿骨 p Ⓢ d	tib 脛骨 p Ⓢ d	fib 腓骨 p Ⓢ d	ca 踵骨	ta 距骨	mt 中足骨 p Ⓢ d	dig 指骨 I ⑪ III	fr. (一括して記入)
イノシシ	10 層	r partem2 l 後頭顆 上顎骨片			1	1 1 1	1 1				① ①	1 1		1				1
	11層 上層	r 後頭顆 l 後頭顆				1 1	1	1			1							3
	11層 下層	r Cra3 l tem zygo			1 1		1				1 1 fr 2	②						4
	11層 上下不明	r 上顎骨 1, 下顎枝 l 2																
	12 層	r l		T (No.4or5)		1		1			1 1			1	2			
	13 層	r l par								1								3
	total	r { par tem max 下顎枝 1 後頭顆 2 l { tem zygo 後頭顆 2		T (No.4or5)	1•1•1	2 1 3	2 1•1 1•1	1•1		1	1 ① 2 fr 2 2	1 1 ② 1		1 1	2			11
ニホンジカ	10 層	r ant l ant (fr) 1		At, Cer2	1 ① 2 1 1				1		①							
	11層 上層	r l		Cer (No.5)	1	1 1	1 1	1	1		1			1 1	1		基節骨	
	11層 下層	r cra2 l fro2		At2, Ax Cer (No.5)	1 1 1 1	4 1	1			1 1				1	1			
	11層 上下不明	r tem l ant 後頭顆		Cer (No.5)	1		1											
	12 層	r cra l fro 後頭顆		Ax Cer (No.3) rib (No.4)	2	2	1 1			1					1			
	13 層	r l ant (fr)		At							1	1						
	total	r ant, tem cra l fro ant3 r cra2 後頭顆 l fro2 後頭顆	1	At4 Ax2 Cer4 (No.3,1 No.5,3) rib (No.4)	3①•5 1•1•3	4 1 2	2•1 2 1	1	1 1	2 1	1•1 ①	1		2 1	1 2		基節骨	
	10 層	r l									1							
	11層 上層	r l				2				1 1								
	11層 下層	r l			fr	1	1											
	11層 上下不明	r l cra									1 1							
	12 層	r l				1				1 1	1							
	13 層	r l										1						
	total	r l cra			fr	2 2	1			2 2	1 3	1						

*1 occ 後頭骨, par 頭頂骨, tem 側頭骨, fro 前頭骨, inc 切歯骨, zygo 頬骨, hyo 舌骨 ant 角
*2 At 第一頸椎, Ax 第2頸椎, Cer 頸椎, T 胸椎, L 腰椎, S 仙椎, Cau 尾椎, R 肋骨
*3 cora 烏口骨, clav 鎖骨

イヌ遺存体出土量表

層位	出土	地点	cra 頭蓋骨 *1	md 下顎骨	vert rib 脊椎骨 肋骨 *2	scap 肩甲骨 *3 p Ⓢ d	hum 上腕骨 p Ⓢ d	rad 橈骨 p Ⓢ d	ul 尺骨 p Ⓢ d	mc 中手骨 p Ⓢ d	pel 寛骨 p Ⓢ d	fe 大腿骨 p Ⓢ d	tib 脛骨 p Ⓢ d	fib 腓骨 p Ⓢ d	ca 踵骨	ta 距骨	mt 中足骨 p Ⓢ d	dig 指骨 I II III	fr. (一括して記入)
10層	N4	E3	r / l									1							
11層	N2	E4	r / l									1							
	N5	E4	r / l				1(上層)												
	N6	E5	r / l				1(上層)												
	N7	E4	r / l					1(下層)			1 / 1(上層)								
	N8	E4	r / l			fr (下層)													
		E5	r / l				1(下層)												
		E6	r / l) cra																
		E7	r / l									1							
12層	N1	E4	r / l								1 / 1								
	N7	E4	r / l									1(遠位端 骨端部欠)							
	N8	E6	r / l				1												
13層	N8	E6	r / l										1						

*1 occ 後頭骨, par 頭頂骨, tem 側頭骨, fro 前頭骨, inc 切歯骨, zygo 頬骨, hyo 舌骨
*2 At 第一頸椎, Ax 第2頸椎, Cer 頸椎, T 胸椎, L 腰椎, S 仙椎, Cau 尾椎, R 肋骨
*3 cora 烏口骨, clav 鎖骨

Ⅶ. タテチョウ遺跡(85)の花粉分析

大西郁夫・渡辺正巳

1. はじめに

タテチョウ遺跡は松江市西川津町の朝酌川中流域の水田下に広がる縄文・弥生時代の土器などの遺物を含む低湿地遺跡であり，道路計画や河川改修計画にともなう発掘調査がなされてきた（島根県教育委員会，1979）。大西（1979）はすでに，この遺跡の第2・第3調査区の発掘現場において試料を採取し，花粉分析を行い，その結果から，花粉組成にもとづく時代区分を提唱した。この時代区分は，その後に行われた，完新世末期の花粉分帯の基礎となった。

今回は，この遺跡のなかで最も下流にあたるタテチョウ遺跡第1調査区における花粉分析結果を報告する。

なお，試料採取にあたっては，島根県教育委員会の各位には様々の便宜をはかっていただいた。心から感謝します。

2. 分析結果と花粉組成に基づく区分

朝酌川東岸の発掘現場から採取した8試料を花粉分析した。試料番号1の上位には礫まじり砂層があり，その中には縄文式土器・弥生式土器・土師器・須恵器などの土器と石器・木器などが多量に含まれていた（島根県教育委員会，1979）。

分析の結果，木本花粉25種類，草本花粉9種類を同定した。そのうち主要な木本花粉について第2図に，その他は第1表に示した。

第1図　タテチョウ遺跡の地点図

木本花粉では，カシ類が多く，ほとんどの試料で15%をこえる。層準によっては，スギ属，二葉マツ類。イヌマキ属，ニレ属－ケヤキ属などがかなり多くなる。各花粉種属の消長によって下位より次の5区分に分けられる。

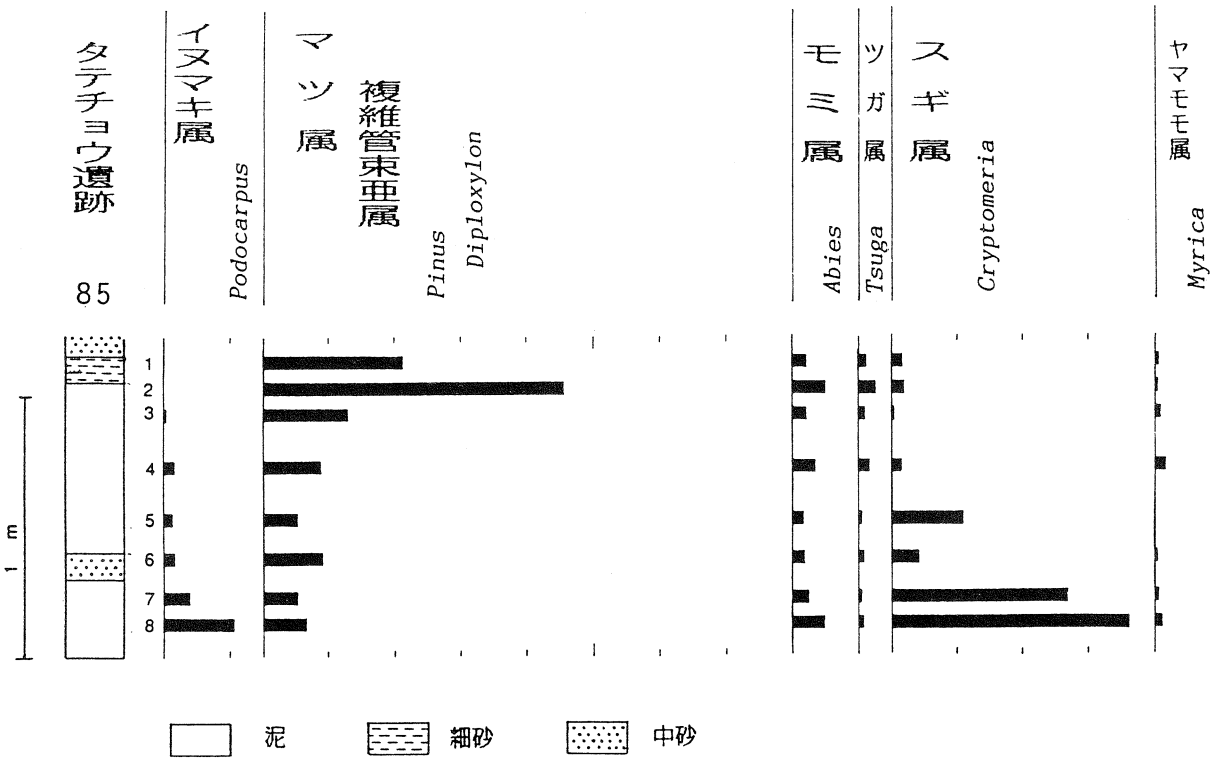
区分A（試料番号8・7）スギ属が多く（25～35%），ニレ属－ケヤキ属カシ類，クマシデ類，イヌマキ属を伴う。

区分B（試料番号6・5）カシ属が多く（45%以上），ナラ類，スギ属，シイ類を伴う。

区分C（試料番号4・3）カシ類は，下位に比べてやや減少するけれども，まだ多く（25～35%），二葉マツ類，ニレ属－ケヤキ属などを伴う。

区分D（試料番号2）二葉マツ類が多くなり（45%以上），カシ類は10%以下に減少する。二葉マツ類だけでなく，ニレ属－ケヤキ属，ブナ属，モミ属，ツガ属，スギ属なども，下位に比べて増加する。また，カシ類のほかに，クリーシイ類，ムクノキ属－エノキ属も下位に比べて減少する。常緑広葉樹やムクノキ属－エノキ属が減少し，冷温帯林や中間温帯林要素が増加することから一時的な気温低下が想定される。

区分E（試料番号1）カシ類や二葉マツ類が多く，ニレ属－ケヤキ属，クマシデ属などを伴う。



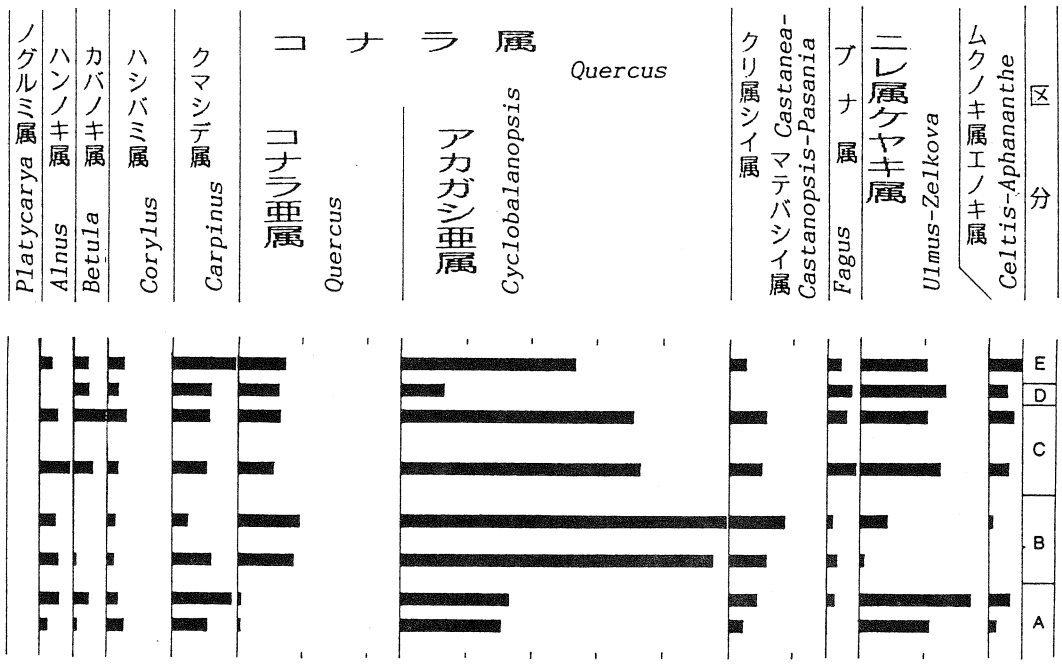
第2図　タテチョウ遺跡(85)

3．考　　察

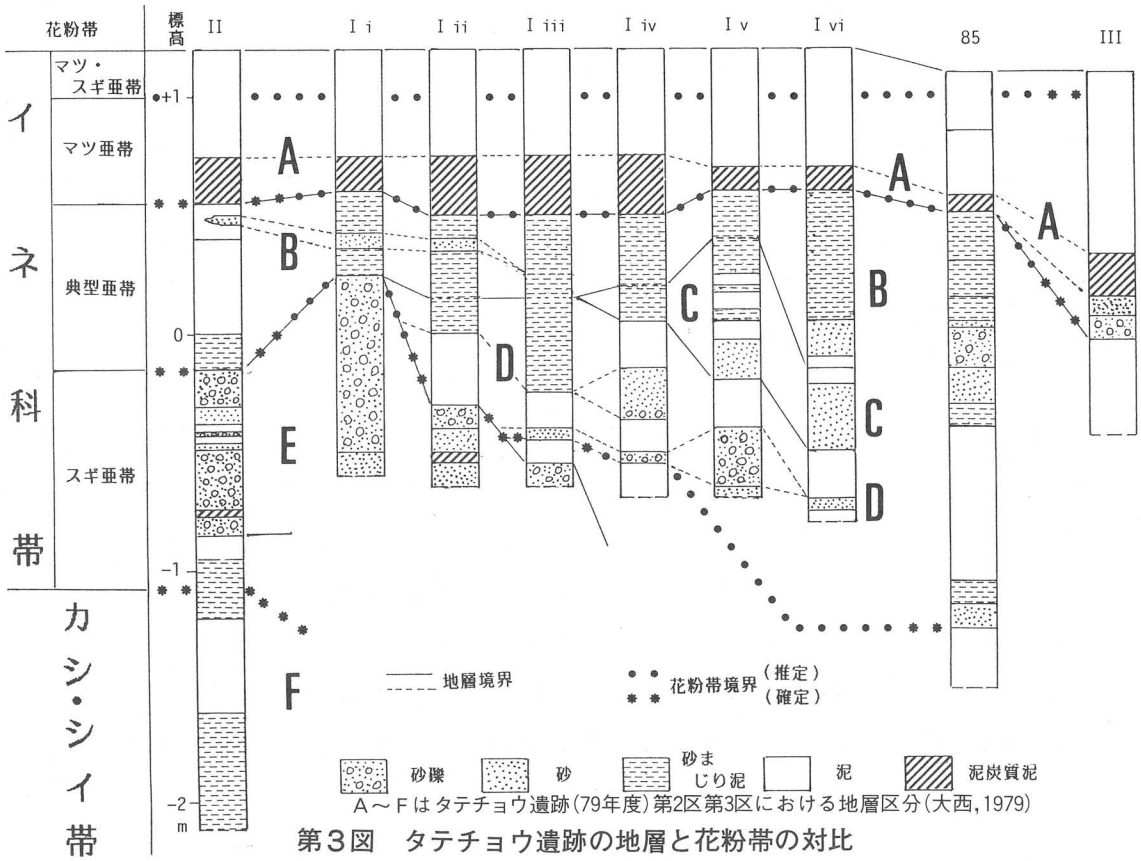
大西（1979）は，本遺跡の第2調査区（タテチョウ遺跡Ⅱ）および第3調査区（タテチョウ遺跡Ⅰ）の花粉分析結果に基づいて，完新世末期を，古いほうから，①イヌマキーモミ時代，②スギーシイ時代，③シイーイネ科時代および④マツーイネ科時代に分けるという時代区分を提唱した。この時代区分はその後の中海・宍道湖とその周辺地域のコアや遺跡の研究により，①に対応するカシ・シイ帯，②～④に対応するイネ科帯に分帯され，イネ科帯はさらに，②に対応するスギ亜帯，③と④の前半に対応する典型亜帯，④の後半に対応するマツ亜帯と，それよりも新期のマツ・スギ亜帯に分けられ，それぞれの亜帯の始まりは，弥生時代前期の初頭，古墳時代の中頃，A.D.1500年頃，A.D.1900年以降と推定されている（大西，1985，大西・渡辺，1986）。

今回の花粉ダイアグラムからみて，区分Aはスギ属が優勢なことからスギ亜帯に，区分B～Eは一般的にカシ類やクリーシイ類が優勢であることから典型亜帯に対応するものと考えられる。

これまで，タテチョウ遺跡の「基本的な堆積土層は，上位より厚さ0.5mの粘土層，砂層，粘質土層，砂礫層と連なり，以下ヤマトシジミの死貝を含む砂混粘土層が灰色の最下層の無遺物層へと続く。このうち遺物を含むのは粘質土層の下に堆積する砂礫層で・・」あるとされている（島根県



の花粉ダイアグラム



A～Fはタテチョウ遺跡(79年度)第2区第3区における地層区分(大西,1979)

第3図　タテチョウ遺跡の地層と花粉帯の対比

教育委員会，1979）。そして，第2・第3調査区では，この遺物を含む砂礫層（E層）はスギーシイ時代(後のスギ亜帯に相当する)に堆積したものとされている(大西，1979)。しかし，今回の結果では，遺物を含む砂礫層よりも下位に，典型亜帯に属する泥層がみられ，さらにその下位の泥層はスギ亜帯に属すことが明らかになった。すなわち，第2・第3調査区と第1調査区では，遺物包含層の層準が異なっているということである。同様のことはタテチョウ遺跡Ⅲにおいても認められる。そこでの遺物包含層はマツ亜帯に属している(大西・渡辺，1986)。ここでタテチョウ遺跡の花粉分析を行った柱状図を第3図に示す。この図から，第1調査区の遺物を含む砂礫層は，第2・第3調査区のE層の上位で，A層の下位に位置していることがわかる。第1調査区の遺物は，第2・第3調査区に比べて，完形品が少なく，ほとんどが縁が摩耗した小破片である(島根県教育委員会,1979)という。第1調査区の遺物包含層は上流のE層が浸蝕され，再堆積したものである可能性が強い。

◆ 文　献

大西郁夫："花粉の分析"朝酌川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書 －1－ 188－193（1979）

大西郁夫："中海・宍道湖湖底およびその周辺地域の最上部完新統の花粉分析"島根大学地質学研究報告，4号，115－126（1985）

大西郁夫・渡辺正巳："松江市西川津町，タテチョウ遺跡の花粉分析"山陰地域研究（自然環境），第3号，109－120　（1987）

第1表　タテチョウ遺跡（85）の花粉胞子類

試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8
トウヒ属			0.3			0.3		
クルミ属－サワグルミ属	0.9	0.3			0.3	0.5		
ヤナギ属	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3		
バラ科	0.3	0.3						
ツタ属			1.2	0.3				
シナノキ属	0.3	0.3				0.8	0.3	
アオキ属		0.3						
ツツジ科	0.3							
モクセイ科		0.3						
タデ属								
サナエタデ節－								
ウナギツカミ節	0.3	0.6	0.3	0.5	1.3	0.5	0.6	0.5
ナデシコ科	0.6	0.3	0.9	0.5		0.3		0.5
セリ科	0.6			0.8	0.6	0.3	1.0	0.5
キク科								
キク亜科	0.9	0.3		0.3				
ヨモギ属	10.8	2.5	4.9	3.5	2.6	2.5	0.6	2.7
イネ科	35.6	17.4	23.1	15.5	10.0	6.8	3.9	6.1
ガマ属				0.3				
カナツリグサ科	2.7	1.6	0.9	0.3	1.6	0.5	1.6	
木本花粉	57.1	73.3	63.5	61.0	66.2	83.0	39.4	29.0
草本花粉	29.4	16.6	18.8	13.3	10.7	9.1	3.1	3.0
胞子	13.5	10.1	17.7	25.7	23.1	7.9	57.5	68.0

Ⅷ. タテチョウ遺跡のテフラと遺物包含層の年代

林　正久*・三浦　清**

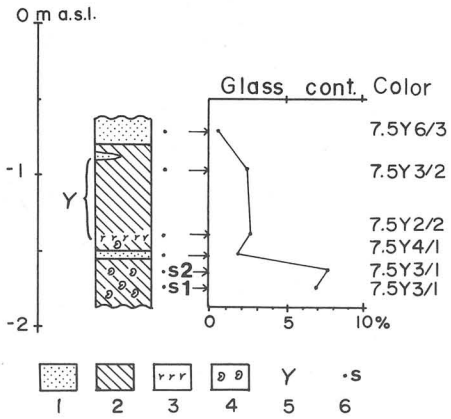
1. はじめに

タテチョウ遺跡は松江市街地の北東，朝酌川の左岸にあり，松江平野の縁辺部にあたる。遺跡は水田面下の沖積層におおわれるように分布しており，泥層中から弥生時代の木製農具や漁具，石器等が発見されている。

松江平野の沖積層は，縄文時代の海進期に堆積した粘土・シルト等の泥層が主体で，最終氷期の砂礫層や埋没段丘を覆って広く分布する。本地域でも沖積層の厚さは10m以上あると考えられ，三角州を構成する海成泥層とそれを覆う朝酌川の氾濫原堆積物がみられる。

本報告では，遺物包含層を中心に，泥層に含まれる火山噴出物（テフラ）を分析し，テフラの同定とそれによる遺跡の年代について考察を行いたい。

山陰地域の遺跡とテフラとの関係について，成瀬他（1982），林・成瀬（1983）などの研究があり，九州起源の広域火山灰，姶良Tn火山灰（AT）（町田・新井，1976）とアカホヤ火山灰（Ah）（町田・新井，1978）の二層が重要な鍵層となっていることが知られている。姶良，アカホヤの火山ガラスについては，三浦・林（1985，1986）による詳細な分析結果が行われており，本報告でもその分析結果を比較検討した。また，タテチョウ遺跡の北東約1.5km上流には，縄文・弥生遺跡のみられる西川津遺跡が存在しており，層序の考察の参考とした。



第1図　タテチョウ遺跡の柱状図と試料のガラス含有量

凡例　1－砂　2－シルト・粘土　3－泥炭・木片　4－貝化石　5－弥生遺物　6－試料採取地点
（ガラスの含有量は数比）

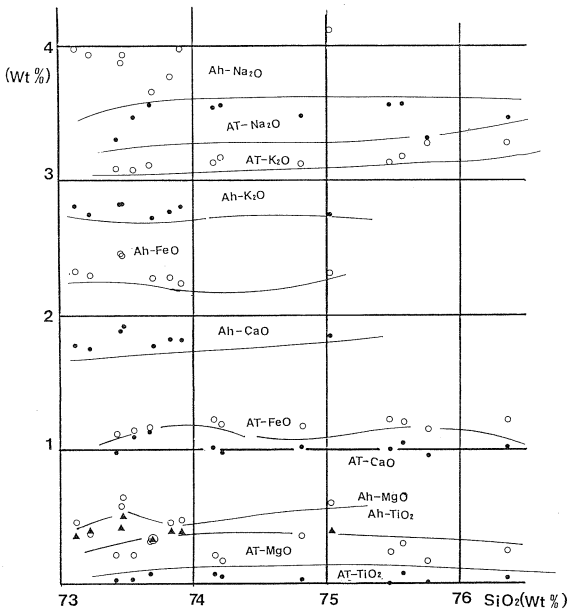
2. 調査地域の層序

タテチョウ遺跡は海抜0m地帯にあたり，海水準以下に遺物が散布する。発掘断面は，水田耕土下に約20cmのオリーブ黒の中砂～細砂層がみられ，その下に約70cmの厚さのシルト分を主体とするオリーブ黒色の泥層がみられる。泥層中には厚さ数cmの細砂のレンズ状にみられることもある。泥層中には植物片が点在し，泥層の下から約10cmに大量の流木片，泥炭を含む層があり，弥生遺物はこの泥炭層より上から出土する。泥層最下部には，貝

化石が点々と含まれるようになる。

泥層より下に厚さ5cmの灰色の粗砂がみられ，さらにその下に，シジミ等の貝化石を大量に含む泥層が存在する。

遺跡の断面の各層から，数点の試料を採取し，細砂分（径0.125～0.088mm）を選別した後，その鉱物組成を分析した。全体として，石英，長石粒が90%以上で重鉱物は乏しい。特筆すべきは，火山ガラスが少量含まれていることで，灰色の粗砂層より下部の泥層で7～8%と比較的多くなる。これら，断面の層序とガラス含有量，色調などは第1図にまとめてある。

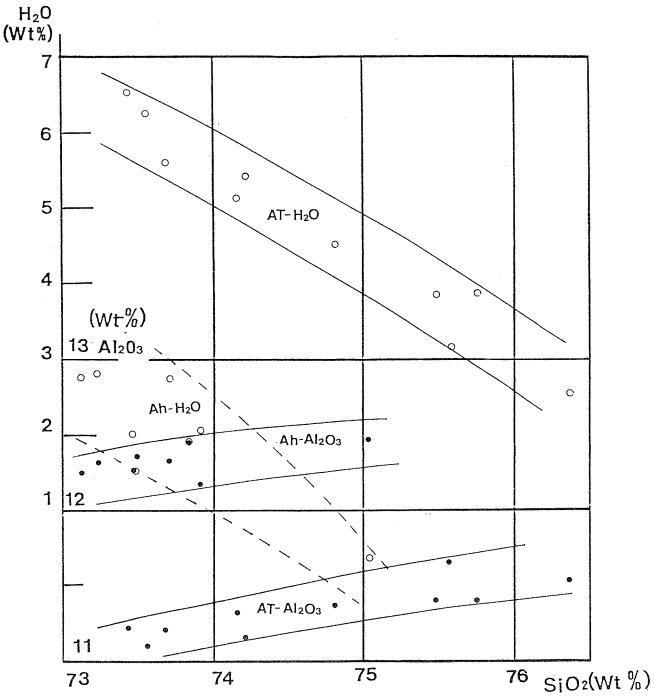


第2図　タテチョウ遺跡泥層中の火山ガラスの化学成分変化(S.1地点)
(Na_2O, K_2O, FeO, CaO, MgO, TiO_2)
AT:姶良Tn火山灰　Ah:アカホヤ火山灰

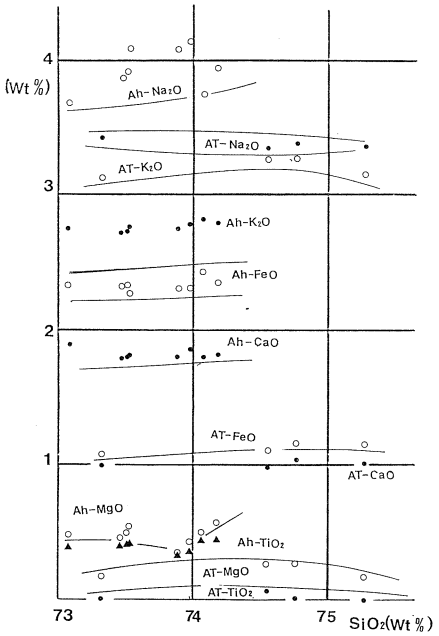
3．火山ガラスの科学的特性

灰色の粗砂層より下の泥層中から得られた試料（第1図S1，S2）から，火山ガラスを抜きだし，エネルギー分散型X線マイクロアナライザ（EPME）によって，科学的特性を分析した。

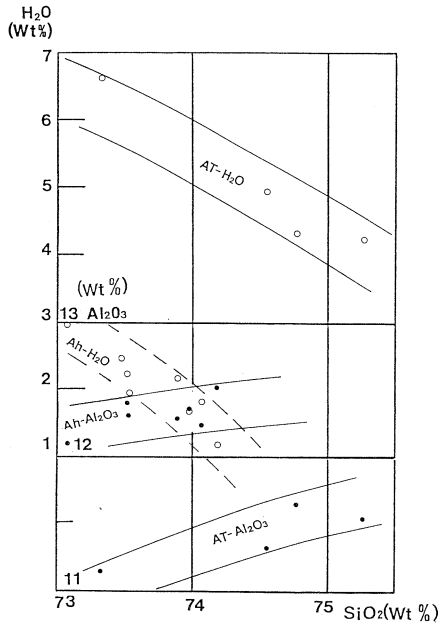
第2図に地点1（S1）の火山ガラスの成分変化（$Na_2\bar{O}$，$K_2\bar{O}$，$Fe\bar{O}$，$Ca\bar{O}$，$Mg\bar{O}$，$Ti\bar{O}_2$）を示す。火山ガラス粒約20点についてみると2つのタイプに大別できる。すなわち，$Na_2\bar{O}$が2%ラインよりやや下で，$K_2\bar{O}$が3%ラインよりやや下，$Fe\bar{O}$が2%ラインよりやや上，$Ca\bar{O}$が2%ラインよりやや下，$Mg\bar{O}$が約0.5%，$Ti\bar{O}_2$が約0.5%を示すタイプと，$Na_2\bar{O}$が3.5%前後で，$K_2\bar{O}$が3%ラインよりやや上，



第3図　タテチョウ遺跡泥層中の火山ガラスの化学成分変化(S.1地点)
(Al_2O_3, H_2O)
AT:姶良Tn火山灰　Ah:アカホヤ火山灰



第4図　タテチョウ遺跡泥層中の火山ガラスの化学成分変化(S.2地点)
($Na_2O, K_2O, FeO, CaO, MgO, TiO_2$)
AT:姶良Tn火山灰　Ah:アカホヤ火山灰



第5図　タテチョウ遺跡泥層中の火山ガラスの化学成分変化(S.2地点)
(Al_2O_3, H_2O)
AT:姶良Tn火山灰　Ah:アカホヤ火山灰

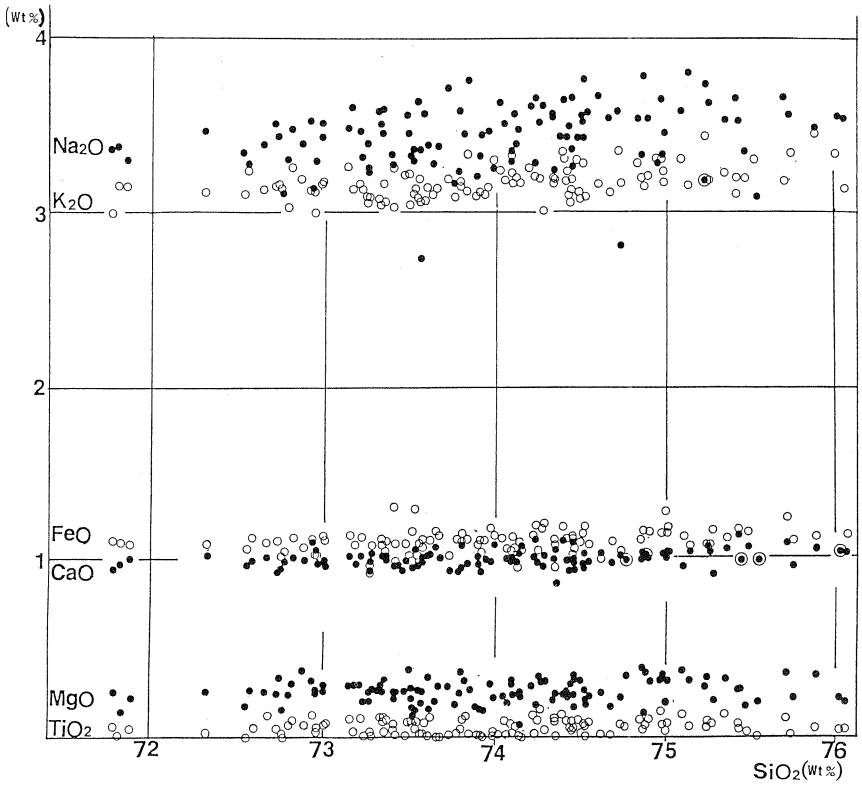
FeOが1％ラインよりやや上，CaOが1％ライン上，MgOが約0.4％，TiO_2が0％に近いもの，の二つのタイプである。三浦・林(1985)の報告した，姶良Tn火山灰(AT)とアカホヤ火山灰(Ah)の火山ガラスの分析結果と一致しており，前者がアカホヤ(Ah)，後者が姶良(AT)に対比される。

第3図にAl_2O_3とH_2Oの成分変化を示す。これも，二つのタイプに分けられ，AT，Ahにそれぞれ対比される。

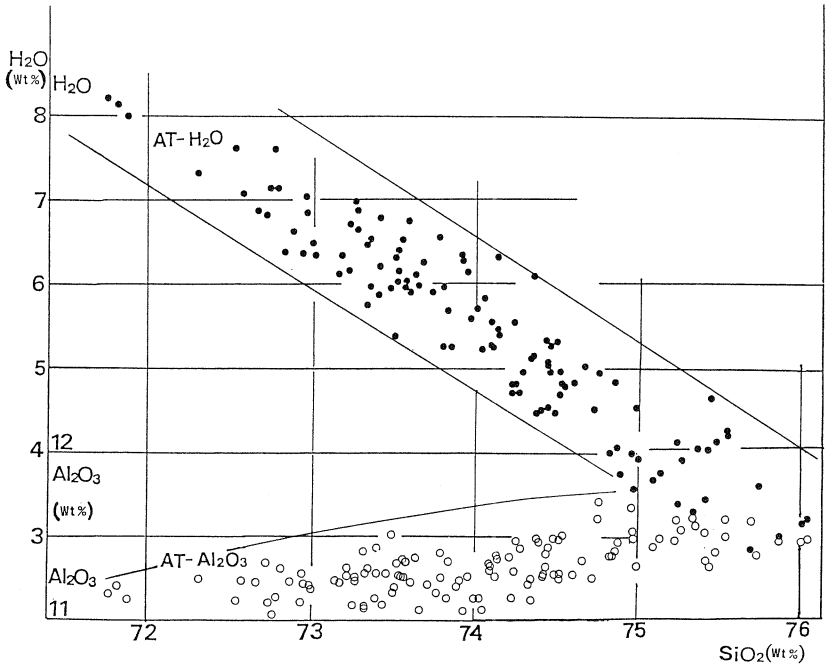
第4図，第5図に，地点2（S 2）の火山ガラスの成分変化を示す。これらも同様に，二つのタイプに分けられ，それぞれ，AT，Ahに対比される。

第6図，第7図に参考として，山陰周辺で得られた姶良（AT）の火山ガラスの成分変化，第8図，第9図にアカホヤ（Ah）の成分変化を示す。タテチョウ遺跡のものとほぼ完全に一致していることがわかる。

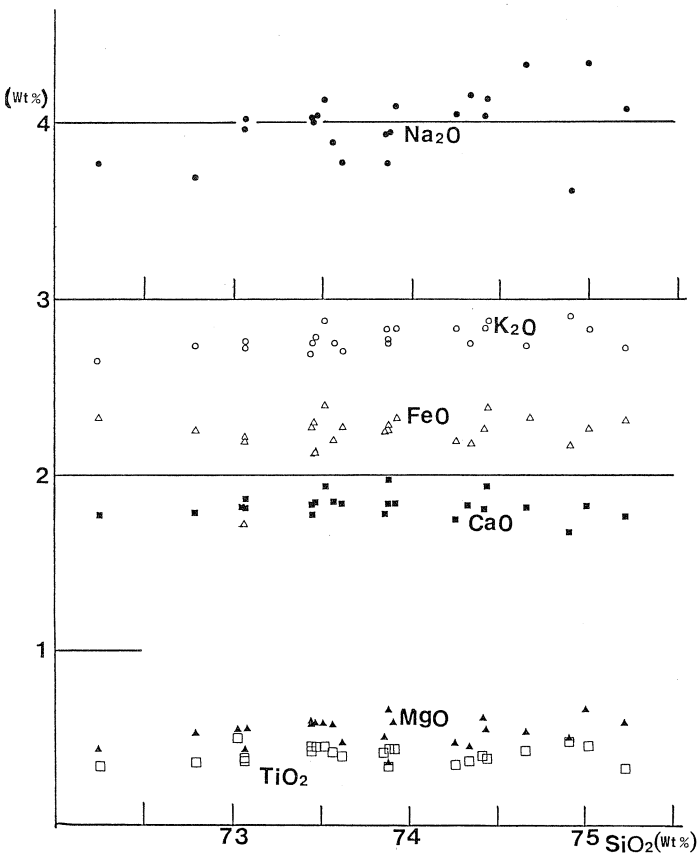
したがって，タテチョウ遺跡では弥生遺物包含層の直下に，ATとAhの火山ガラスを大量に含む層がみられることが明らかになった。なお，ATは鹿児島の姶良カルデラ起源で，約21,000～22,000年前に噴出，Ahは九州南方の鬼界カルデラ起源で，6,000～6,500年前と考えられている。



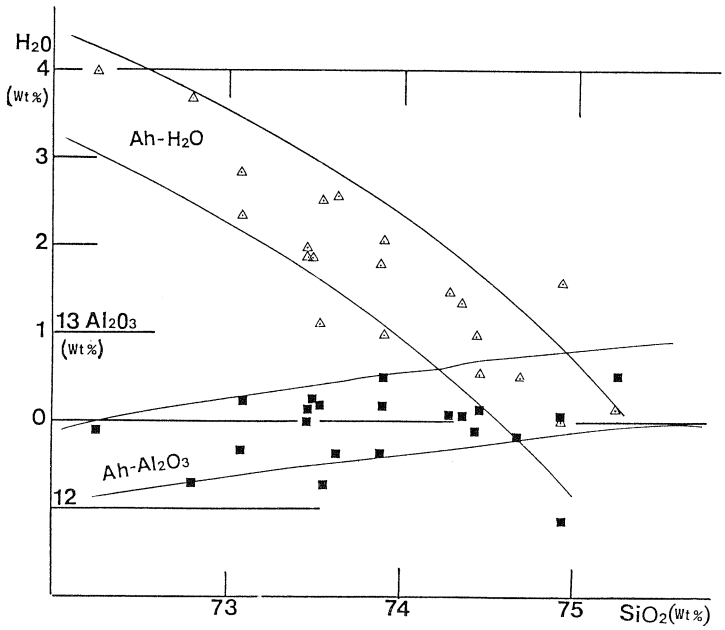
第６図　山陰周辺でみられる姶良Tn火山灰(AT)の火山ガラスの化学成分変化
(Na_2O, K_2O, FeO, CaO, MgO, TiO_2)



第７図　山陰周辺でみられる姶良Tn火山灰(AT)の火山ガラスの化学成分変化
(Al_2O_3, H_2O)



第８図　山陰周辺でみられるアカホヤ火山灰(Ah)の火山ガラスの化学成分変化
(Na_2O, K_2O, FeO, CaO, MgO, TiO_2)



第９図　山陰周辺でみられるアカホヤ火山灰(Ah)の火山ガラスの化学成分変化
(Al_2O_3, H_2O)

4．ま　と　め　　－遺物の年代と古環境－

タテチョウ遺跡周辺のトレンチの断面の層序をまとめたものを第10図に示す。タテチョウ遺跡にみられる地層は，アカホヤ火山灰の存在から，約6,000年前のものより新しい時代のものである。貝化石，泥炭などの直接的な絶対年代は測定していないが，宍道湖・中海周辺における泥炭層の年代を考察すると，意宇平野では，出雲国庁跡の遺構下に厚い泥炭層があり，その年代は2,860±80年前と報告されており（成瀬・1974），出雲平野では，地表下４ｍ（標高０ｍ）の泥炭層の年代が2,740±90年前という結果が得られている（林・1983）。

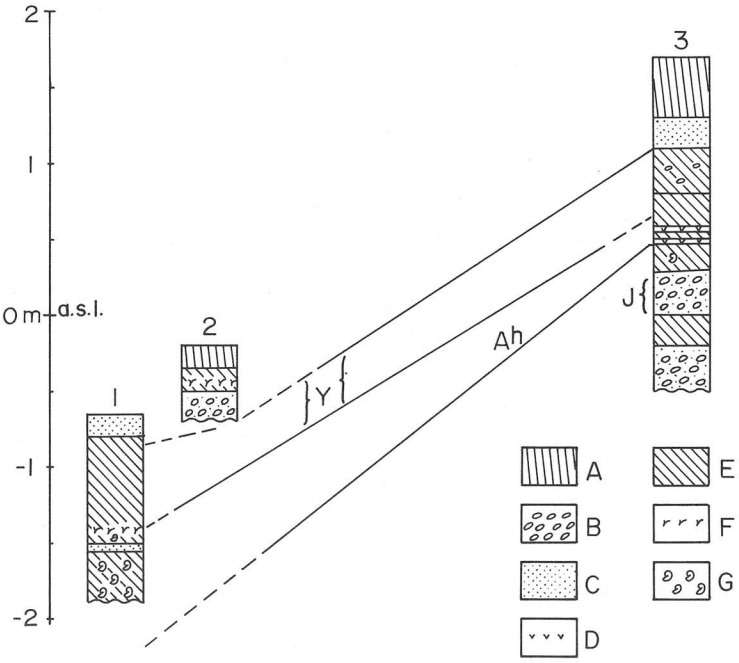
これらのことから，タテチョウ遺跡の泥層中の木片，泥炭を大量に含む部分は，出雲平野，意宇平野の泥炭層に対比される可能性が強く，約3,000年前と考えてよいであろう。

また，タテチョウ遺跡の北東約200ｍの地点でのトレンチ（第10図の柱状図２）では，耕土の直下に厚さ数10㎝の泥炭層がみられる。これは，米子市東山町の沖積地のグライ層下にみられる泥炭層（厚さ約50㎝，Ｃ14年代は1,180±70年B.P.－Ｎ－4355）に対比される可能性が強い。

したがって，タテチョウの遺物包含層の時代は，3,000年前より新しく，1,000年前よりも古いものといってよいであろう。

最後に，後氷期以降の本地域の環境変化について述べてみたい。

後氷期の最大海進（縄文海進－約5,000～7,000年前）によって，本地域でも海面が上昇し，宍道湖は大社湾とつながる潟湖となった。西川津付近はその古宍道湾ともいうべき潟湖の最も湾奥部にあたり，水深はそれほど深くはなかったようではあるが，塩分は現在より多く含まれていたと考えられる。こうした湖底に泥が堆積し，貝類が生息している。この時期の堆積物の一部



第10図　遺物含有層とテフラの関係
1－タテチョウ遺跡　2－その北東200ｍ地点　3－西川津遺跡
Ａ－耕土・腐植　Ｂ－礫　Ｃ－砂　Ｄ－火山灰　Ｅ－シルト・粘土
Ｆ－泥炭・木片　Ｇ－貝化石　Ｙ－弥生遺物含有層:アカホヤ火山灰
Ｊ－縄文遺物含有層

が，タテチョウ遺跡の断面下部にみられる。貝化石を大量に含む泥層である。

約3,000年前に宍道湖は大社湾から分離して（林・1983），湖にそそぐ河川が，湖を堆積するようになり，湖岸線は急速に後退するようになる。タテチョウ付近でも，湖面の堆積が進み，低湿地となったようで，泥炭の堆積がみられるようになる。もちろん，朝酌川の氾濫によって砂礫なども運搬されてきたことであろう。おそらく，湖にそそぐ朝酌川の河口部付近に位置し，葦などの水草の繁る低湿地をなし，塩分の影響は少ないが，洪水時には永く水に浸っているような状態だったと考えられる。タテチョウの遺物はこうした湿地に，上流から運ばれて堆積したものと考えられる。

この時期以降も湖岸線は後退をつづけ，本地域は朝酌川河口部とかなり隔ってしまったが，現在も朝酌川の氾濫時には堪水する。

◆ 文　献

林　正久（1983）：鉄穴流し。『現代地理学』村上　誠編，朝倉書店，PP.99－122

林　正久・成瀬敏郎（1983）：横道遺跡の火山灰と遺物包含層の年代。
『横道遺跡－詳細分布報告－』PP.21－26，瑞穂町教育委員会

町田　洋・新井房夫（1976）：広域に分布する火山灰－姶良Ｔｎ火山灰の発見とその意義。
『科学』46，PP.339－347

町田　洋・新井房夫（1976）：南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ－アカホヤ火山灰。
『第四紀研究』17，PP.143－163

三浦　清・林　正久（1985）：山陰ならびにその周辺地域にみられるアイラ火山灰（ＡＴ）およびアカホヤ火山灰（Ａｈ）の火山ガラスの化学的特性。
『山陰地域研究（自然環境）』１，PP,71－80

三浦　清・林　正久（1986）：島根県下にみられる二，三の縄文遺跡とテフラの産状。
『山陰地域研究（自然環境）』２，PP.　－

成瀬敏郎（1974）：島根県東部にみられる過去六千年以降の海水準変化。
『史学研究』，124，PP.58－68

成瀬敏郎・紫田喜太郎・川瀬正利（1982）：中国地方の遺跡の火山灰による編年。
『山陽放送学術文化財団リポート』26，PP.21－26

*　島根大学教育学部地理学研究室

**　島根大学教育学部地学研究室

Ⅸ. 総　　括

タテチョウ遺跡の発掘は昭和52年度に本格的に行なわれ，島根県における低湿地遺跡の実態を明らかにする端緒となった。今回の調査は前回の調査に継ぐものであるが，前回の調査同様遺構は検出されず本遺跡の性格を明らかにするには至らなかった。

出土遺物は縄文時代から古墳時代にかけての土器，石器，土製品，木製品，骨角器，獣骨などである。土器の総数は前回調査で得られた数に比べて少なく，特に弥生土器の完形品が少ない。これは今回の調査地点が遺跡の南端に当るためと思われる。今回の調査で得られた最大の成果は，前回の調査で無遺物層とされた砂礫層（今回第９層とした層）以下にも包含層が認められたことである（第10層～第12層）。これらの層から出土した遺物は各時期の遺物が混在しており決して単純層とは言えないが，各層出土土器のうちもっとも新しい時期のものを目安とするなら第10層，第11層上層が古墳時代中期，第11層下層が弥生時代中期，第12層が弥生時代前期から中期前葉に堆積したものと想像される。このことから本遺跡の土層は遺物出土状況が再堆積とはいえ数度にわたって堆積したことがわかる。また，自然地理学的検討によっても遺物包含層が約3,000年前から約1,000年前までに堆積したものとされており（第Ⅷ章　三浦，林），各層の具体的な堆積時期についてはふれられていないがこの方面からの検討によっても前述の各層堆積時期について否定する結果は得られなかった。一方，花粉分析によれば本遺跡の遺物包含層はイネ科帯の典型亜帯に属すという（第Ⅶ章　大西，渡辺）。典型亜帯は古墳時代中ごろからＡＤ1,500年ごろに位置づけられているが，これは上述の判定と異った結果である。これらの年代のうち，いずれが妥当かを判断するのは現状では困難であり，各分野のデータの整合は重要な検討課題といわざるを得ない。各包含層の堆積時期は，当地の古環境を知る上で重要であるため，今後の調査でさらに検証する必要があろう。

本遺跡から出土した遺物は第９層出土遺物以外は比較的残存状態がよく，完形に近い土器も多くみられる。このことから考えると，本遺跡第10～12層出土遺物は原位置を保っていないとはいえさほど遠くから（例えば西川津遺跡などから）流入してきたとは思えない。今回の調査地点に近い部分に弥生時代，古墳時代の集落跡が存在することは充分予想される。自然地理学からの見地では，約3,000年前から宍道湖々岸線が急速に後退して低湿地となり，当地は湖にそそぐ朝酌川河口付近であったとされる（第Ⅷ章　三浦，林）。この地形復元を参考に空想するなら，朝酌川河口付近に立地する弥生時代および古墳時代の集落がイメージできる。いずれにしても本遺跡の性格を明らかにするためにも遺構の確認は不可欠であり，今後の調査を期待したい。

今回の調査では前回同様，各時代にわたる豊富な遺物が出土した。とりわけ低湿地遺跡の特徴的

な遺物である木製品は約160点と，前回出土数を大きく上回った。今回出土した木製品は前述したように広鍬・丸鍬がある程度まとまって出土しており，山陰地方の弥生時代の農業形態の一端を示すものと言える。本書では，タテチョウ遺跡は農耕具，とくに広鍬Ⅰ類，丸鍬Ⅰ類の出土が多く，鋤などの開墾具が少ないことを指摘した。広鍬・丸鍬はともにⅠ類が圧倒的に多く，未成品も多数出土していることから考えると，この類は松江市東部地域の地域色のようにも思われる。木製農耕具の組成については，神田遺跡のように本遺跡と比較的近い距離に位置する遺跡でも組成が違うという事実は，遺跡の性格を考える上で注意すべきであろう。また今回の調査では広鍬・丸鍬の未成品が多く出土し，木製品の生産活動の一端を窺うことができる。その一方で米子市目久美遺跡のように未成品が出土しない遺跡も知られている。このことは当地方の弥生時代の生産と流通，または集落間の交流を考える上で重要な資料となりえよう。しかし，これらの諸問題を解明するには山陰地方ではやはり資料が不足していると言わざるをえない。資料の増加を待って比較検討すべき問題であろう。

次に注目すべきものとして獣骨があげられる。島根県で獣骨が出土した例は少なく，八束郡美保関町崎ケ鼻洞窟，同権現山洞窟，平田市猪目洞窟などから出土しているが，詳細な報告がされているのは崎ケ鼻洞窟の報告とタテチョウ遺跡（前回調査）の報告があるにすぎず，この分野の研究は著しく遅れていると言わざるをえない。今回の調査では約100点の獣骨が出土しており，ニホンジカ，イノシシに次いでイヌの個体が多いといわれる（第Ⅵ章　金子）。これらは概ね弥生時代に属すると思われるが，当地方でも弥生時代にイヌの飼育がかなり一般的であったことを示す好資料といえる。ただ本遺跡ではすべて再堆積の状態で出土しているためこれらが縄文時代犬によくみられるように埋葬されたものかどうかは不明である。イノシシ，ニホンジカは最も出土量が多く，前回の調査と合わせると約70個体にのぼる。この中には解体痕のみられる頭骨もあり，生産経済の社会とはいえ狩猟も重要な生業の一つであったことを窺わせる。このほか本州以南で出土例の少ないといわれるキツネなど注目すべきものもみられる。獣骨については前述のとおり島根県の研究は著しく遅れているが，弥生時代の生活をより具体的に復元するために重要であり，今後充分検討されるべきであろう。

土器については今回は縄文土器，弥生土器，土師器いずれも前回調査出土土器に比べ質・量とも劣っていた。しかし弥生土器では従来全形を窺うことができなかった中期初頭の壺（Ⅰ・Ⅱ類），甕（Ⅰ・Ⅱ類）が出土したのが注目される。この２つの形態の土器は前期後葉から存在するとされている。このうち壺Ⅰ類は前期前葉から続く壺の系譜をひくと思われるが，壺Ⅱ類，甕Ⅱ類は前期後葉に出現するようである。当地方の弥生土器を網羅的に検討したわけではないが，当地方では前期後葉ごろから壺形土器にバラエティーがみられるようになるのではなかろうか。中期中葉には器

形だけでなく文様も多様化するが，器形については前期後葉ごろからすでにこのような傾向が認められるのである。ところで一般にヘラ描き文と櫛描文の違いは大きな画期とし前期と中期を区別するメルクマールと考えられているが，本遺跡の壺，甕に限っていえば前期の壺と中期前葉の壺とは形態的に大きな差異は認められない。これは前期から中期にかけての土器の変化が極めて漸移的であったためではないか。一方中期前葉から中葉にかけての変化は著しいものがあり，前葉の土器と同一の型式組列と考えにくいものも多い。これが，中期前葉と中期中葉を埋めるべく資料の欠如とみるか，ここに大きな変画を求めるかはやはり良好な状態での一括資料の出現を待つほかはない。

土師器は前回同様，布留式土器の影響を受けた土器が出土しており，また1点であるが山陽地方の亀川上層式土器と同様の形態の土器が出土している。これらは山陰地方と他地方の土器編年を整合する上で重要であるが，いずれも再堆積であったため編年の整合作業は不可能であったことが惜しまれる。しかし，本遺跡のような集落跡に関係すると考えられる遺跡からある程度まとまって出土したことは近畿地方との関係を示すものであろう。ところで島根県では集落跡の調査が少ないこともあって，土師器の研究は専ら古墳出土土器によっていたため，生活用具としての土器の実態が不明であった。今回出土した資料は生活跡の土器としてその実態の一部を表わしている。山陰地方で盛行する代表的な土師器とされる複合口縁の土器は小谷式以後斉一性が崩れ，様々な形態の土器が導入されるようである。上述の布留式，亀川上層式に類似した土器の出現はこの変化の一環としてとらえることもできよう。タテチョウ遺跡の土師器は多種多様な形態を呈しているが，その中には鍵尾式以来の複合口縁の系譜をひくとは考えられないものがある。それらの出自を求めることは資料が不足している現段階では困難であり，周辺地域の状況をみながら，今後検討すべき問題である。今一つの問題は小谷式と大東式の関係についてであろう。標識遺跡である大東高校グランド遺跡の資料がすべて公表されていないため大東式の実態が不明瞭であるが，本遺跡では小谷式より新しい要素を持つものの大東式より古い要素を持つ土器が存在する。公表されたものを見ても小谷式と大東式の形態的な差は非常に大きいことから，両者は連続する型式でない可能性も考えられる。両者を埋める型式を設定できるか否かは古墳時代を研究する上で重要な問題であろう。

最後に，本遺跡の北方約1.5kmに位置する西川津遺跡との関係について触れておきたい。西川津遺跡は昭和55年以来4年間にわたって発掘調査が行なわれ，膨大な量の遺物が出土している。現在整理中であるため全貌は不明だが縄文土器，弥生土器，木製品，骨角器，石器，獣骨のいずれも質・量ともにタテチョウ遺跡を凌駕しており，完全に整理されれば本稿で述べた問題のうちかなりの部分が解明されるものと思われる。西川津遺跡は量はともかく，内容的には本遺跡と非常に似かよった遺跡であり，もし本遺跡が西川津遺跡とは別個の集落であるなら，同一時期に同じ内容を持つ別の集落がごく近くに存在することになる。これが，主村・分村の関係であるのか，同等の力を持つ

集落同志であるか，または無関係で個々が自己完結した遺跡であるのかは現段階では不明である。この2つの遺跡の関係を明らかにすることができるなら，当地方の弥生時代社会の輪郭を浮かび上がらせることができよう。そのためにも西川津遺跡のより精緻な報告を期待したい。

CONTENTS

Chapter Ⅰ Circumstances to Open Investigation into Tatecho Site

Chapter Ⅱ Site Location and Historical Environment

Chapter Ⅲ Progress of Investigation

Chapter Ⅳ General Discription

Chapter Ⅴ Archaeological Remains from Tatecho Site

(1) Jomon Pottery

(2) Yayoi Pottery

(3) Haji Pottery

(4) Stone Tools

(5) Earthen Objects

(6) Wooden Implements

Chapter Ⅵ Bone and Antler Implements & Animal Bones

Chapter Ⅶ Tephra & Strata

Chapter Ⅷ Pollen

Chapter Ⅸ Conclusion

Report of Tatecho Site Excavation Survey

In 1977 , the Shimane Board of Education carried out its First Excavation Survey at the site of Tatecho in Nishikawatsu - cho , Matsue - shi , Shimane - Ken. The Tatecho site , located in the northwest corner of Matsue - shi , is low damp ground along the Asakumi River. Following the First Excavation Survey , the Second was carried out in 1985 , and the Third was in 1986 . This is the report of the Second and the Third Excavation Surveys of the Tatecho site.

From the results of the excavation surveys at the Tatecho site carried out between 1985 and 1986 , archaeological artifacts and other remains exist , such as earthenware , stone tools, wooden implements , bone and antler implements , and animal bones. The earliest remains were from the Jomon Period , followed by relics from up to the Kofun Period , but none of

them were discovered in their original places because of inundation of the Asakumi River. Since they had been piled up again and again after the inundation , the absolute dates of remains couldn' t be determined by stratigraphy.

Artifacts from the Jomon Period were mainly the Jomon pottery. There were a few of the Jomon pottery found in the Tatecho site , and we counted approximately 100 of them. There was pottery from the five stages of the Jomon culture ; Earliest , Early , Middle , Late , and Latest , and mostly from the Latest Phase. There were also some pottery from the Early Phase , but we couldn' t find any from the Middle Phase. Moreover , we unearthed pottery from the latest of the Earliest Phase and the latest of the Latest Phase , but there were very few of them.

It was artifacts from the Yayoi Period that we found most abundnt from the Tatecho site. From each Period from the Early Phase through the Late Phase , various pottery were found. But the pottery of the Late Phase were considerably fewer than those of the Early Phase and the Middle Phase.

From the Yayoi Period , earthenware , stone tolls , wooden implements and earthen objects were excavated. A great number of *Kame*(earthen pots) and *Tsubo*(jars)were found , and even some of them were perfectly preserved in their original shapes. One remarkable fact was that pottery which had been covered with *Urushi*(Japanese lacquer) was discovered , and it can be thought that the Urushi was often used in that area in the Yayoi Period. Unearthed wooden implements were of two types;agricultural implements and artifacts for daily use. Among those , the majority were the agricultural implements. In the full collection of them, there were some distinct kinds of hoes ; *Hiro - kuwa*(middle - sized , wide - rectangle - shaped hoes used for plowing) , *Maru - kuwa*(middle - sized , ellipse - shaped ones used for smoothing the ground) , *Sema - guwa*(small , narrow - rectangle - shaped ones used for deep plowing and clearing the land) , and *Morote - guwa*(big wide rectangle - shaped hoes used as same as Sema - guwa). *Suki*(spades) were less aboundnt than hoes , and they were of two types ; *Ichiboku - suki*(fashioned from a single piece of wood) , and *Kumiawase - suki*(fashioned with two or more pieces joined together). *Yokozuchi*(club handles) were also discovered , but very few. In the group of the artifacts for daily use , we could only recognize various types of containers. The containers consisted of three types ; *So*(rectangle - bottomed shallow container), cyrindrical deep one , spoon - shaped one , and *Shakushi* (ladle) . We couldn' t qualify the usage of other

wooden implements. There were not very many ground stones related with the Asian Continent, especially implements. The remains, classified as clay artifacts, were *Dosui* (earthen plumments), *Enbanjo Doseihin* (discoidal earthen objects), *Fundogata Doseihin* (weight shaped earthen objects), etc. It must be paid attention to that one Fundogata Doseihin which had been often found in the Sanyo districts was excavated from the Tatecho site. That was a very rare case in our prefecture.

Haji pottery was the only one which we could define from the Kofun Period. Among the Haji pottery, there were *Tsubo* (jars), *Kame* (earthen pots), *Takatsuki* (pedestalled dishes), small round bottomed jars, etc. Though they were fewer than the Yayoi pottery, their conditions were remarkably good. It was lucky that we could discovered comparatively many pottery from the Middle phase because they were not well known very much in our prefecture. And there were many pottery which had been influenced by the style in the Kinki districts. It was a noticeable fact that not a few small round bottomed jars were unearthed.

We also excavated many animal bones. It was too hard to limit what periods they were from, but it could be thought that most of them might be from the Yayoi Period. Bones of deer and wild boars were found most abundnt, and among those, there were skulls which showed that brains had been taken out somehow. Bones of dogs were discovered next abundnt. They seemed different from dogs in the Yayoi Period, so they might be the ones in the Jomon Period. In addition to the above, we found three more types of animal bones; one was Class Osteichtheyes, another Class Aves, and the other Class Mammalia. There were some bones and antlers which had been processed by the human.

Besides all those archaeological investigations, we analyzed strata and pollen. By analyzing strata using the method of natural science, it could be surmised that the Tatecho Site had been formed from approximately 3,000 years ago to approximately 1,000 years ago. And it was ascertained that there was low damp ground, thick of water grass, at the mouth of the Asakumi River flowed into Lake Shinji.

Based on analyzing pollen, the Strata of the Tatecho Site had been formed in the Kofun Period.

(Translation by *MATSUURA Kayoko*)

図　　版

遺跡遠景（北から　矢印は調査地点）

遺跡近景（南から）

第10層発掘後の状況（南から）

完掘後の状況（南から）

土層堆積状況（第１～第９層）

土層堆積状況（第10～12層）

第10層流木群検出状況

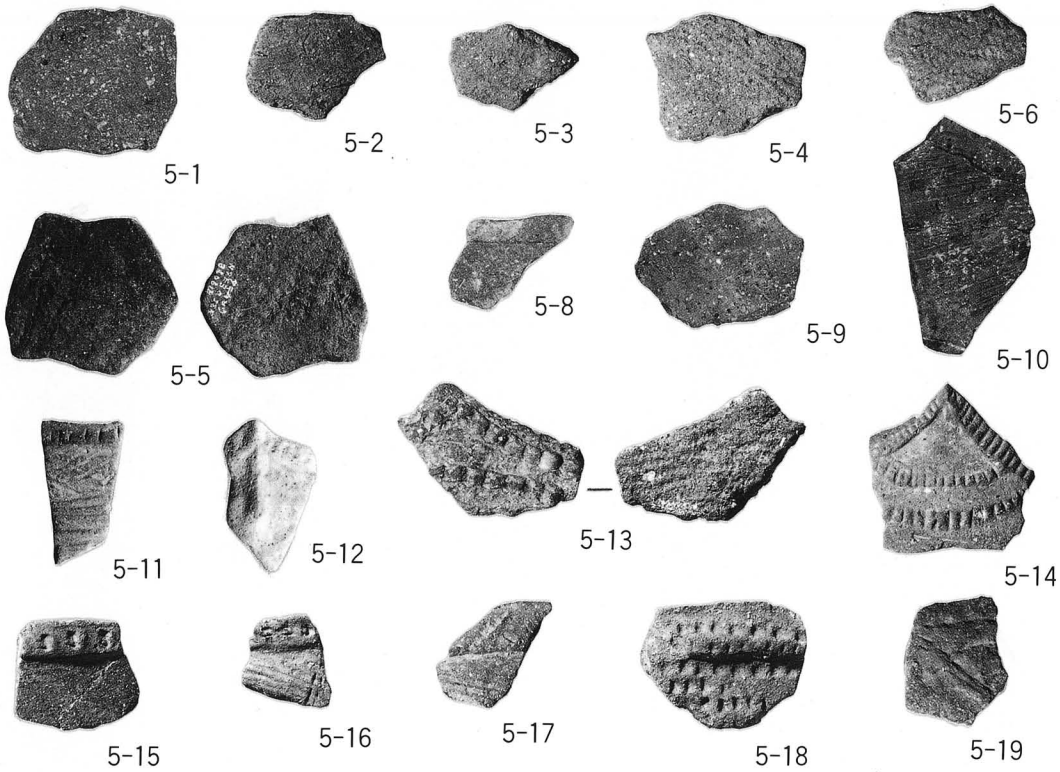
弥生土器出土状況（第10層）

土師器出土状況（第10層）

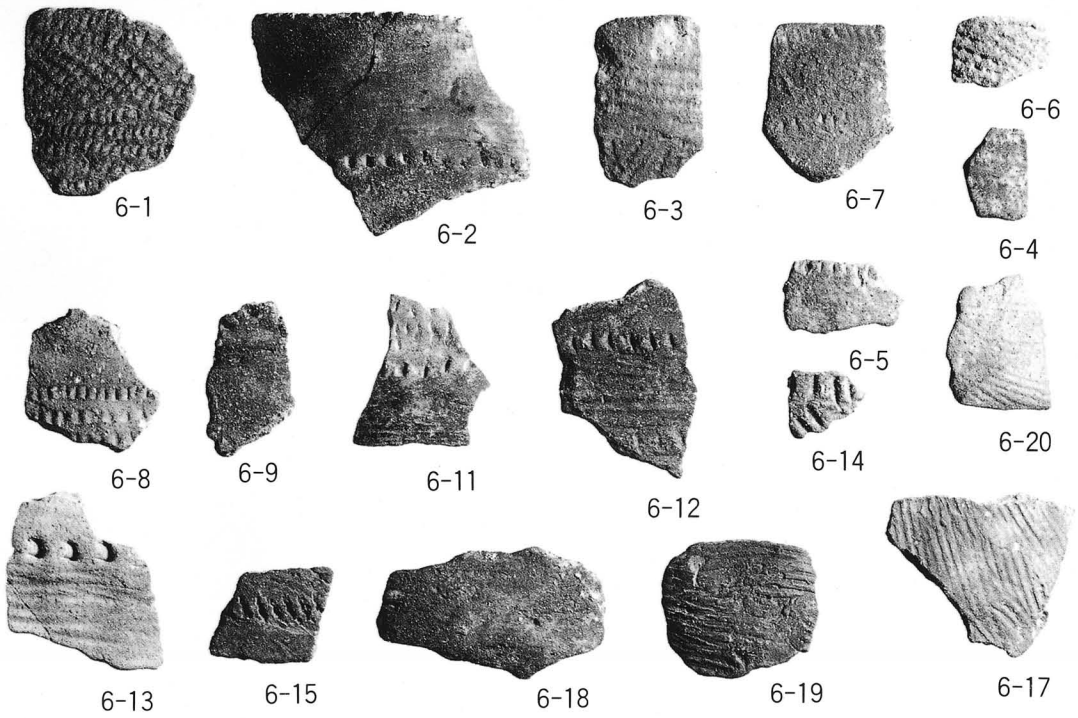
木製品出土状況（第12層）

獣骨出土状況（イノシシ　第11層）

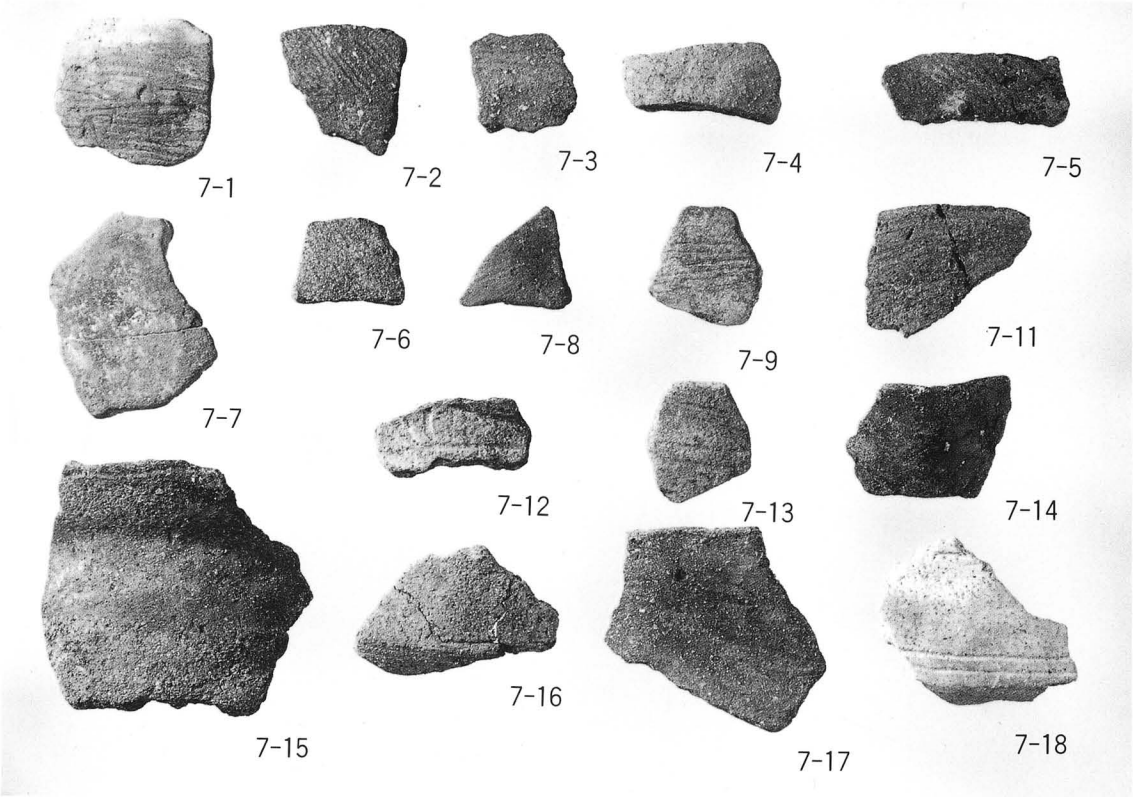
発掘調査風景



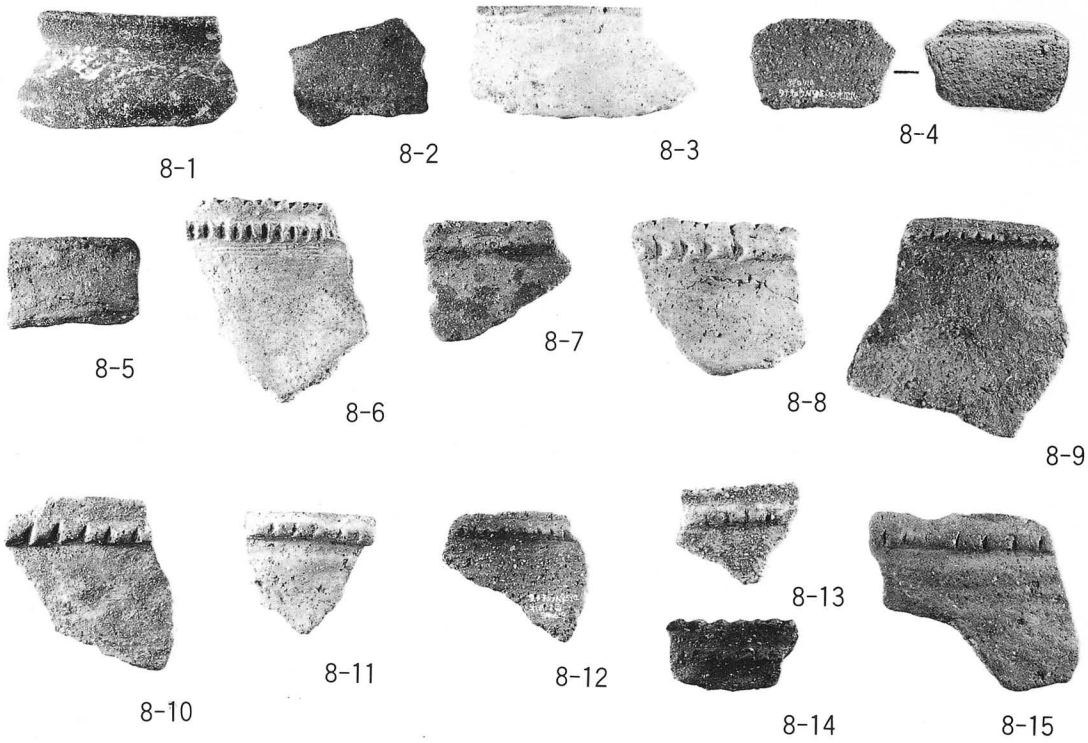
縄文土器（1：3）



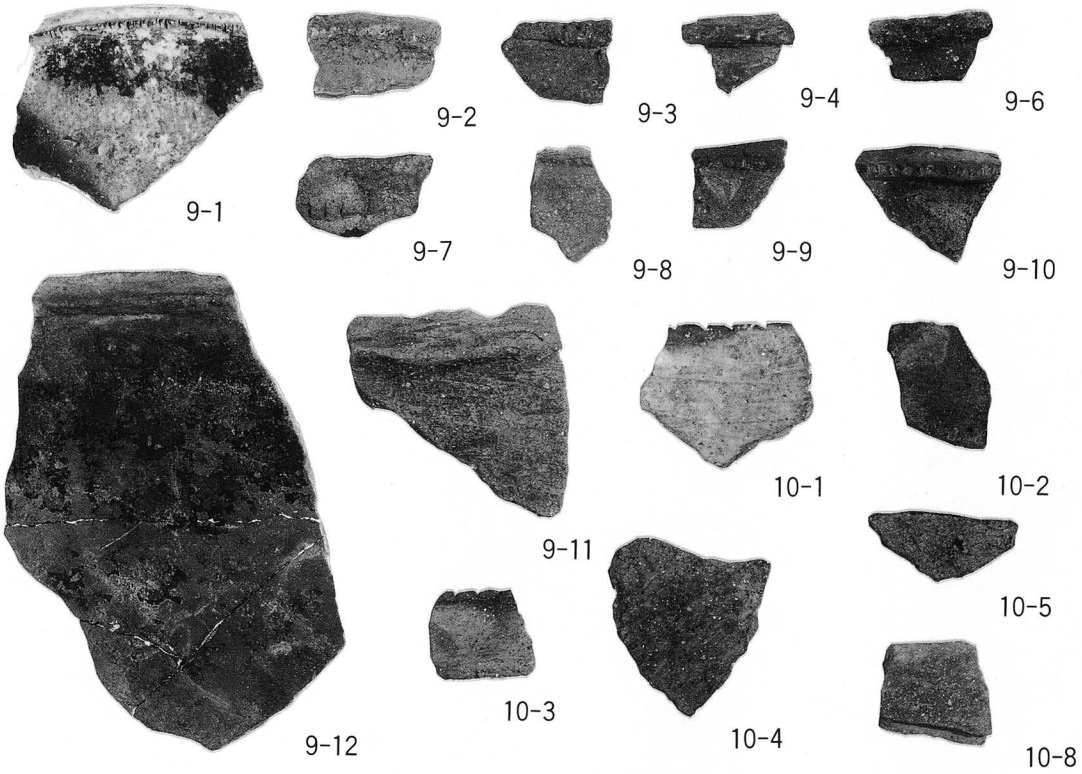
縄文土器（1：3）



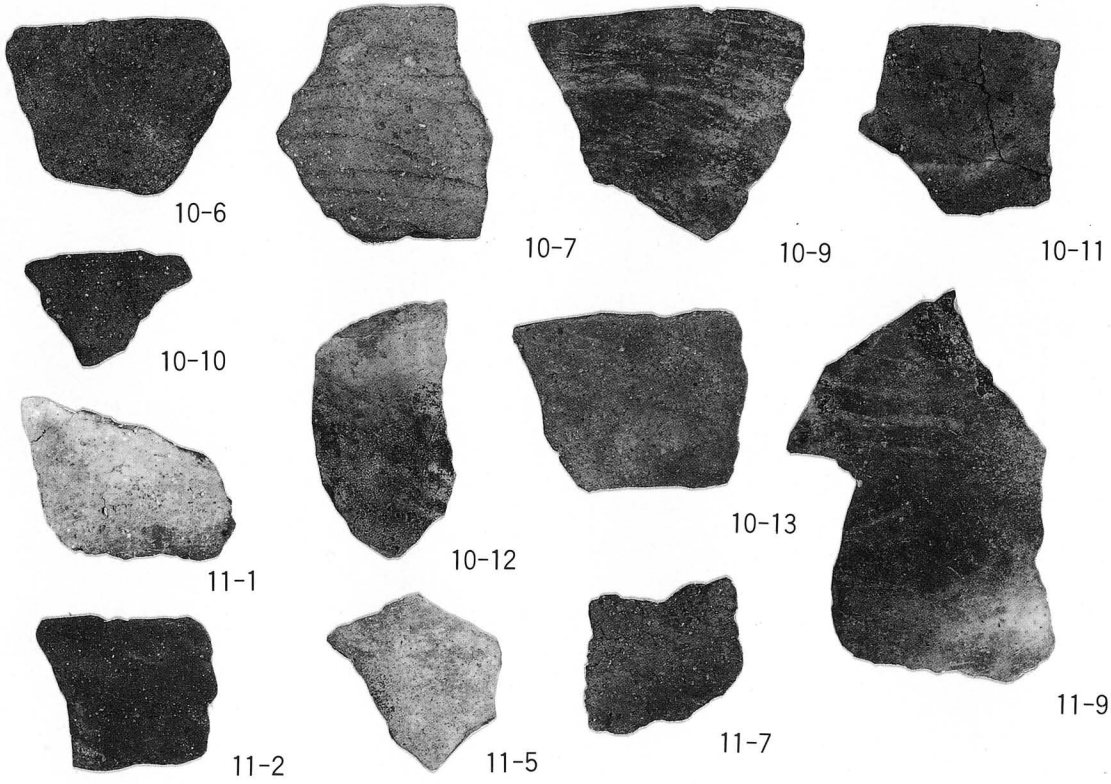
縄文土器（1：3）



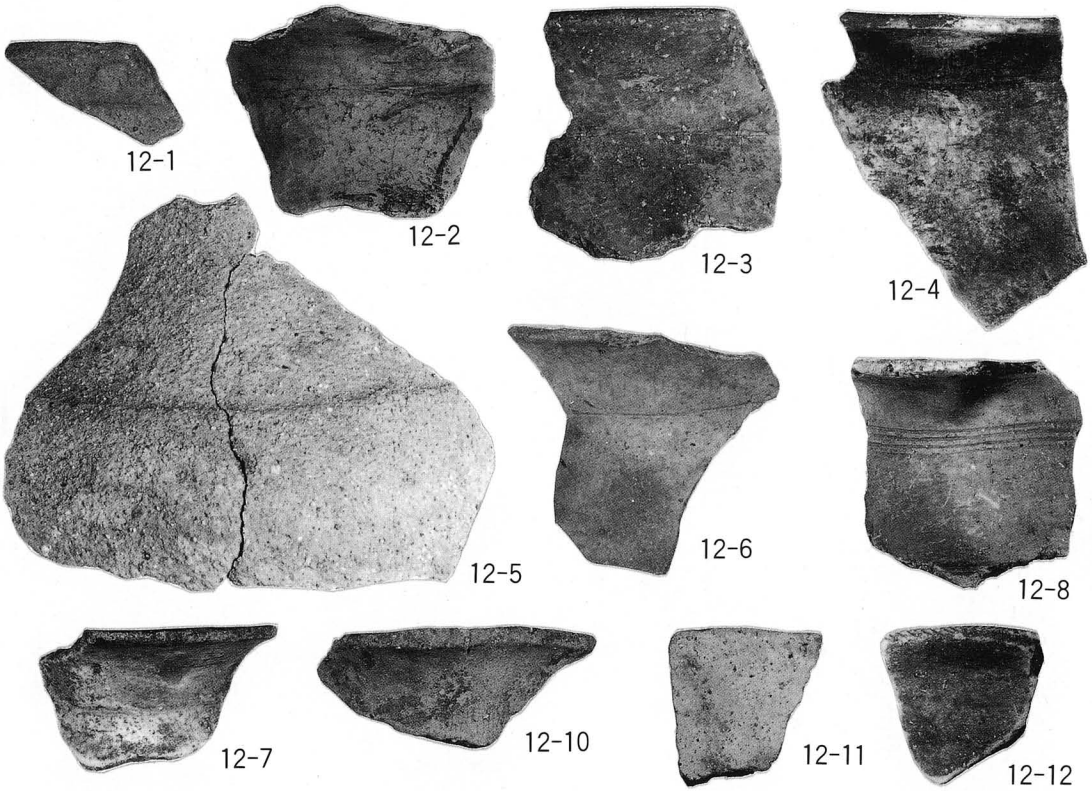
縄文土器（1：3）



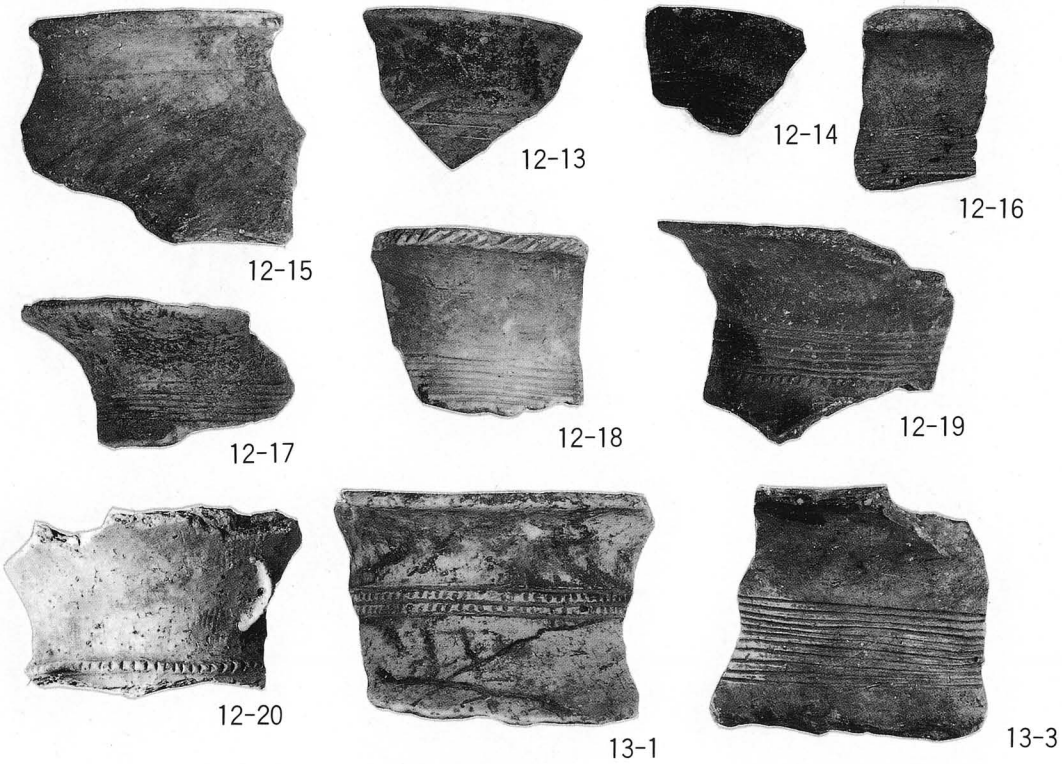
縄文土器（1：3）



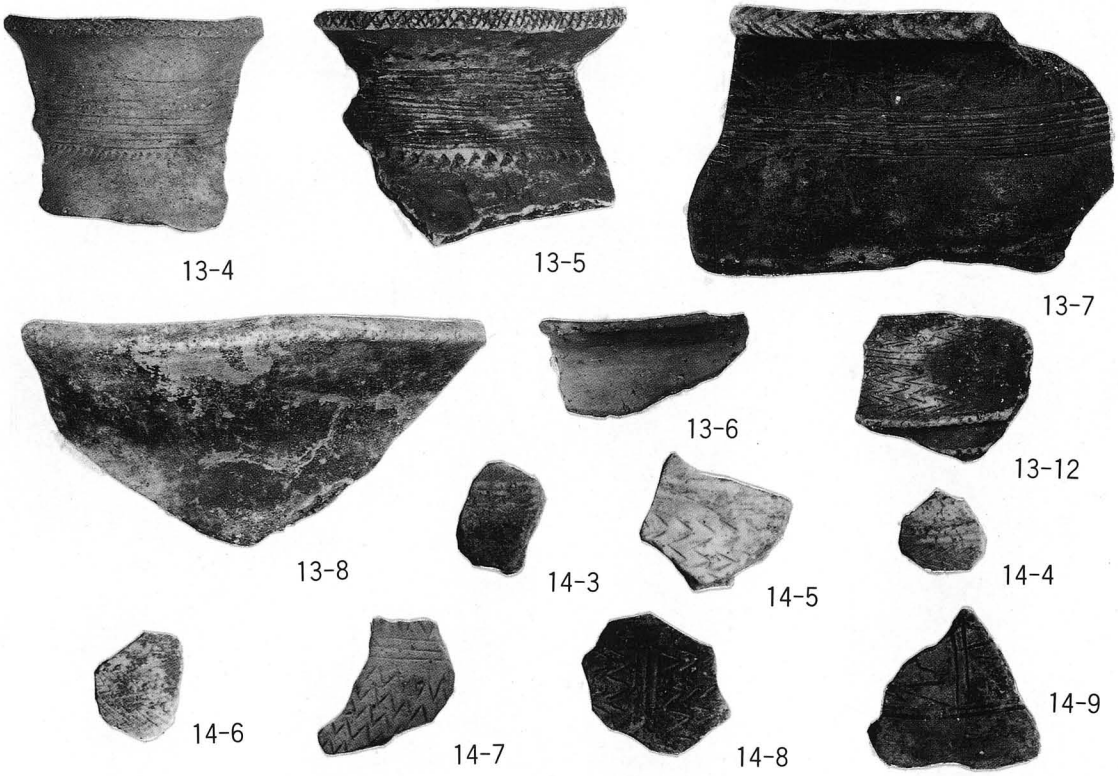
縄文土器（1：3）



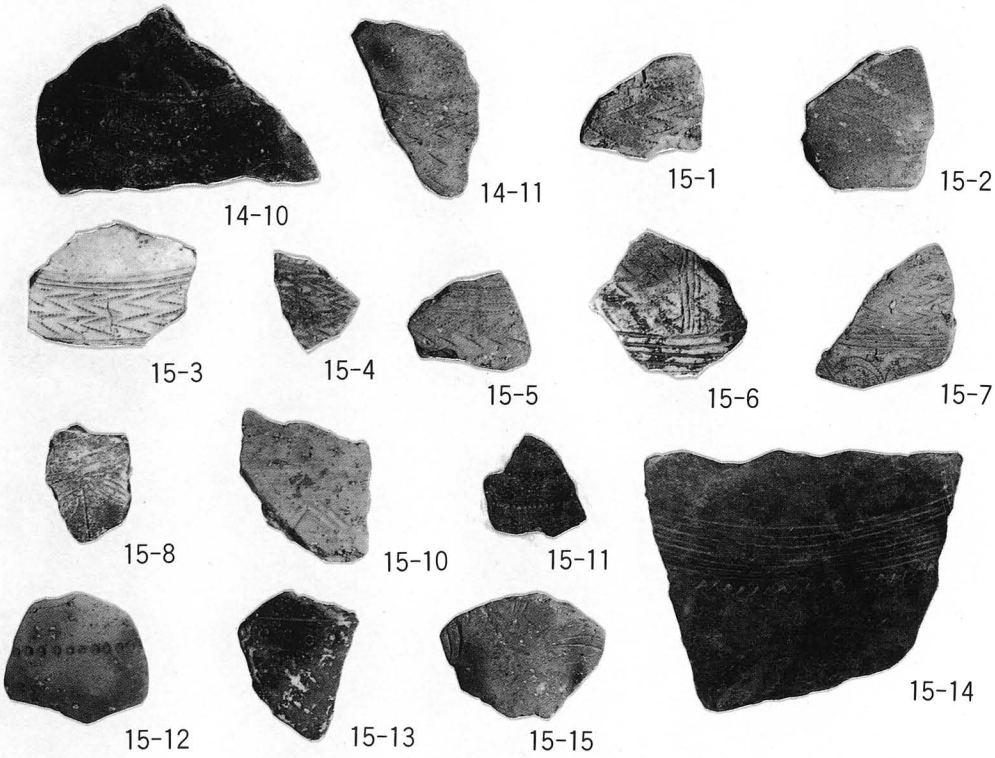
弥生土器（1：3）



弥生土器（1：3）



弥生土器(1:3)



弥生土器(1:3)